

東南アジア世界の構造と変容

石井米雄 編

は し が き

京都大学東南アジア研究センターでは、昭和50年以来、5年をめどに、所員の論文集を編集し、これを「東南アジア研究叢書」の一冊として出版してきた。本書はその3冊目にあたる。昭和40年に創立されたセンターは、本年度に20周年を迎えた。したがって、本論文集は、ようやく成人の年齢に達した東南アジア研究センターを記念する出版でもある。

過去5年間、東南アジア研究センターでは、「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」という学際的共同研究をおこなってきた。人文・社会・自然の各系に所属する研究者たちが、それぞれ専門を異にする同僚たちとともにフィールドにでかけ、はげしい議論を戦わせながら進めてきたこうした知的営為のなかからいくつもの仮説が生まれた。その仮説のいくつかは、本書に収録された論文のあちこちに示されている。

20年前、センターを生みおとしてくれた諸先輩が期待したことは、外国人の書いた文献のみをよりどころにしていた当時の研究状況を、フィールドワークという方法の導入によって克服し、自らの手で一次資料を掘りおこし、自らの目でこれを分析してみせる力量を備えた研究者の誕生であった。初期のセンターの業績のなかに、すぐれて事実主義的な傾向が見出されるのは、センターをめぐるこうした初期の事情が反映しているといえるだろう。そうしたセンターの学風を予想する読者は、本論文集に含まれたいくつかの論文のもつ仮説性の強さに、いささかのとまどいを覚えられるかもしれない。これは20年の研究史を背景に、新たな飛躍を試みようとする東南アジア研究センターの、助走の響きとお読みいただければ幸甚である。

当時の所長として前2巻の論文集を編集された市村真一、渡部忠世両教授は、「はしがき」のなかで、読者のなかから、アジア研究を志す若き学究が輩出することを切望されている。過去20年の間に、たしかに、日本の東南アジア研

究の状況は大きく変化し、すぐれた人材が、かつては見向きもされなかった東南アジア研究に参入し、東南アジアをそのフィールドとする学問研究に若い情熱をたぎらせるようになったことはうれしいかぎりである。しかし、学問はたゆむことなく前進を続けて止まることを知らない。この書物が、新しい東南アジア研究者の出現にいささかなりとも貢献することができるならば、編者の喜びこれに過ぐるものはないのである。

おわりに、過去 20 年にわたって、センターの成長を暖かく見守り、その研究活動を支えて下さった諸先輩と、かつての同僚諸氏に深い感謝を捧げるとともに、つぎの 20 年に向ってあらたなる飛躍を目差そうとしているセンターを、さらに御支援を下さるようこころよりお願いする次第である。

1985 年 12 月

京都大学東南アジア
研究センター 所長

石 井 米 雄

目 次

は し が き	石井米雄.....	1
---------------	-----------	---

第Ⅰ部 生態環境と生活空間

東南アジアの生態史的枠組	高谷好一.....	5
東南アジア島嶼部の環境と農業適応	田中耕司.....	31
——開拓地入植者にみる適応のかたち——		
潮汐湿地の人と生業	古川久雄.....	61
東北タイの開拓空間の形成	海田能宏.....	88

第Ⅱ部 社会単位の形成

むらとまち	坪内良博.....	119
——生活の意味空間——		
世帯と親族	前田成文.....	141
都市のなかの「むら」	加藤剛.....	175
——ジャカルタにみる婚姻形態——		

第Ⅲ部 歴史と国家

東南アジア前近代国家の類型的考察	桜井由躬雄.....	207
東南アジアにおける「国家」と「支配」：試論	矢野暢.....	233
「ジャワ」から「インドネシア」へ	土屋健治.....	247
——インドネシア・ナショナリズム再論——		

第Ⅳ部 地域経済と発展

民族資本の形成	吉原久仁夫.....	283
——フィリピンの事例を中心にして——		

アジア経済発展の特色	市村 真 一.....	306
農村の変容	福井 捷 朗.....	331
——東北タイの一農村の事例——		
解 説	矢 野 暢.....	355

第 I 部 生態環境と生活空間

東南アジアの生態史的枠組

まえがき

巻頭を与えられたのであるから、なるだけ東南アジア全体を包含するものにし、以下に続く諸論文のための下敷きのようなものにしたいと思う。以下、この小論で、私がとり扱いたいのは次の4点である。①東南アジアの生態的地域区分、②生活基盤として見た時の東南アジア、③交易の場として見た時の東南アジア、④東南アジアの社会。

I 生態的地域区分

1 地形、地質に立脚した地域区分

結論から先にいうと、私は、東南アジアは隆起山地、平原、デルタ、火山島、非火山島、島嶼低湿地に分けられると考えている。前三者は大陸部東南アジアにあり、他は島嶼部東南アジアにある。その分布は次頁の図1に示すとおりである。

山地と平原の生成 漂流して来たインドの亜大陸が中国の大陸に衝突した時、その衝撃で、めくれ上がったのがヒマラヤとその周辺の山地である。東南アジアに関するかぎり、この衝突の影響はビルマの大部分、北タイ、ラオス、ベトナム北部に見られる。この隆起帯がここでいう隆起山地である。この山地は多くの所で、高度500mを越え、一部では2000mを越す山脈をなしている。

一方、衝突の影響がなく、比較的平坦な原地表面を残す部分が平原である。平原には、ゆるい波状の地形が続く。隆起山地を除いた大陸部東南アジアの大部分がこれに属すると考えてよい。

大河河口のデルタ 隆起山地に発した河川は、平原をたち割るようなかたち

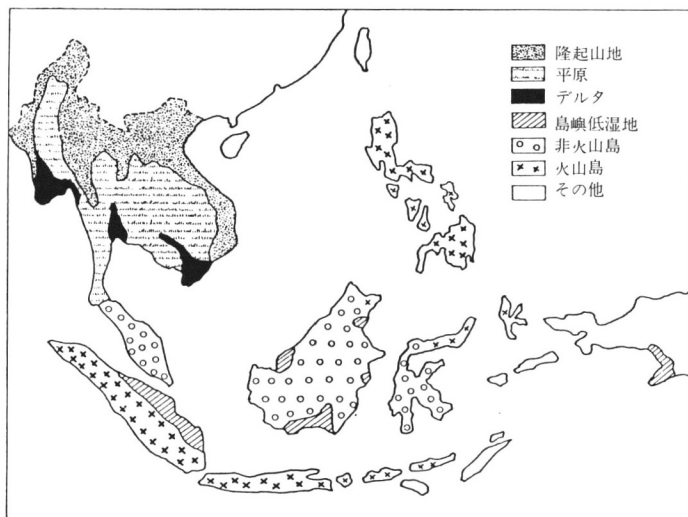


図1 東南アジアの地形・地質区分図(高谷, 1985『東南アジアの自然と土地利用』p. 6より転載)

で流れ、海までの長い距離の間に巨大河川に育つ。そして、河口部に巨大な沖積低地、すなわちデルタを作る。これは海面すれすれのところにできた軟泥からなる一大低平地である。イラワジ、チャオプラヤー、メコンの3河川は特に雄大なデルタを形成する。

火山列島 極めて特殊な例外を除くと、大陸部には火山はない。東南アジアの火山は島嶼部の縁辺にだけあり、それは、スマトラからジャワ、ヌサトゥンガラに至り、そこから北上して、マルク、フィリピンに至っている。この火山列は、実際には、これから更に北に延び、琉球列島から本州、そして、カムチャツカに延びている。実は、アジア大陸地塊の縁辺部には一種の亀裂帯があり、そこに地下の岩漿が噴き上げ、火山列を作っているのである。東南アジア島嶼部の火山もその一メンバーであり、多くは活火山で、しばしば 3000m を越す高峰から噴煙を上げている。

火山地帯の特徴のひとつは、その土壌が極めて肥沃なことである。中部ジャワ以東の火山は特にこの性質が顕著である。

島嶼部海岸湿地の有害土壌 沈水した大陸部であるスンダ陸棚周辺には広大な海岸低湿地が広がっている。最も典型的なものは、スマトラ東岸やボルネオの海岸低湿地である。こうした島嶼部海岸湿地は大陸部のデルタとはその性質を全く異にする。ここには大陸部のような巨大河川がないから、旺盛な土砂供給がない。しかし、多湿であるから植物の成育は旺盛であり、それがピートの堆積を生む。島嶼部海岸湿地の特徴のひとつは、泥の欠如であり、ピートの発達である。

海岸低地の一部は、かつてのマングローブ帯が陸化したものである。そうした所には、強酸性の酸性硫酸塩土壌が含まれている。ピートにしる酸性硫酸塩土壌にしる、それらはいずれも、農業的土地利用にとっては有害な要素である。かくして、島嶼部海岸湿地は、見かけの平坦さとは裏はらに、農地としての利用には、問題の多い所である。

2 気候、水理、植生

気候極相としての森林 大陸部東南アジアがモンスーン気候を持ち、島嶼部東南アジアが通年湿潤気候を持つことは、よく知られた事実である。それを反映して、東南アジアの原初の森林はきれいな帯状構造をなしていた。次頁の図2はそれを模式的に示したものである。同図には山地モンスーン林、サバンナ林、熱帯多雨林、島嶼モンスーン林の四つが識別されている。

山地モンスーン林は地形・地質区でいう隆起山地にほぼ一致している。ここには常緑樹が多い。標高の高い所のものは、いわゆる照葉樹林に酷似したものになっている。サバンナ林は平原にほぼ一致している。これは、ほとんどが落葉樹からなる。熱帯多雨林は何万種という多種類の木を含み、密閉した厚い常緑の樹冠を持っている。熱帯多雨林は島嶼部が中心であるが、詳細に見ると、大陸部にも多湿な海岸部には、狭い帯状をなして這い上っている。中部ジャワからヌサトゥンガラにかけては再び、落葉樹の多いモンスーン林が現れる。ここはオーストラリアの風下に当り、島嶼部では珍しく、乾季の卓越する特殊地帯である。

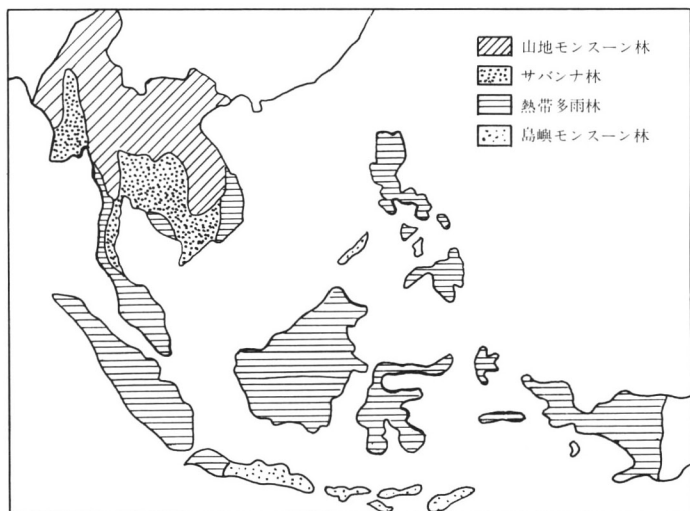


図2 気候極相としての森林

平原，デルタ，島嶼低湿地の水文 水文という観点からして，特記しておかねばならないのは，標記の3地区である。

平原では，雨季が終るとすぐに地表部から水が消える。せっきくの降雨は砂質の地盤に吸い込まれ，砂岩の割れ目に落ち込んでしまうからである。おまけに，平原には河川というものがほとんどないから，乾季の水不足は激烈である。しかし，うまく掘り当てれば，先にしみ込んだ地下水を得ることができる。実際，平原では人々は，長い乾季を地下水で生きのびてゆく。

雨季のデルタには大洪水が起る。デルタはふつう，8月から11月にかけては，その全域が平均1m 弱の深さに湛水する。雨季の数カ月間，デルタはしたがって，巨大な湖によく似た格好になる。一方，この大湛水は，乾季になると全部消え，全面が干からびる。

島嶼低湿地は，その多くの部分が通年の常湛地である。浅くたまったその水は腐植をいっぱい含んでいて，コーヒーのように黒い。長時間これに触れていると，体が痒くなってくる。酸性硫酸塩土壌の上にたまった水は，飲むと，ひ

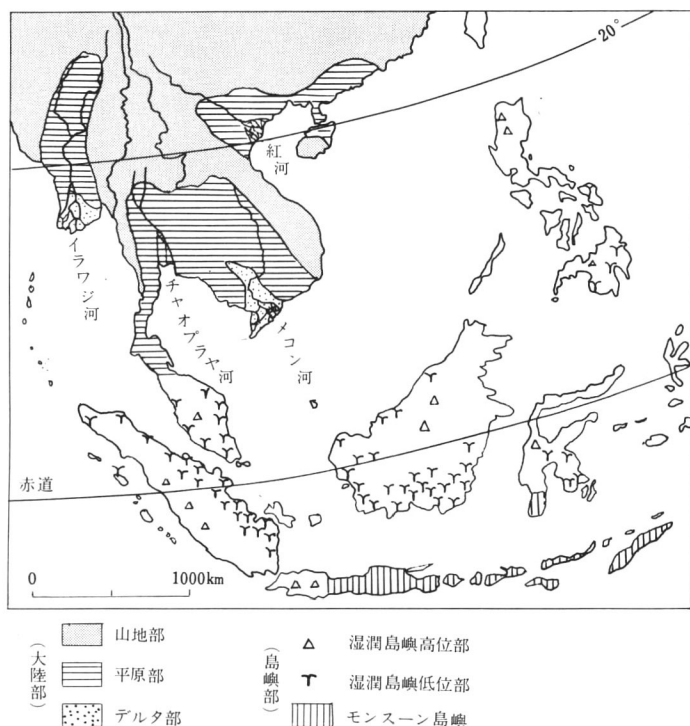


図3 東南アジアの六つの生態区

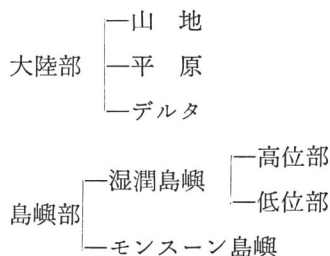
どいえぐさを覚えさせられる。こうして、この島嶼低湿地は、常湛地でありながら、利用価値のある淡水が極めて得にくい所である。

高冷地 高温多湿な赤道直下でも、高度を上げると常春の地となる。標高 1500m の所だと、気温は年中、20°C ぐらいになる。もっとも山の頂に近くなると、常春というよりは、年中霧をかぶった雲霧帯となる。

高標高で温度の低下することは、もちろん大陸部でも同じである。かつてはケシが盛んに作られた、標高 1000m 以上になると、冬期には凍結を見るようになる。

3 生態区

先に設定した地形・地質区に、今述べた気候・水理・植生の要素を加味して、東南アジアを再区分すると前頁図 3 のようになる。そこには次の 6 区が示してある。



結果的には、大陸部では地形・地質区がそのまま採用されている。一方、島嶼部では、気候・水理条件がより重要視されている。

島嶼部は、まず通年の湿潤区とモンスーン区に二分し、前者をさらに、高位部と低位部に細分している。高位部と低位部の境は、別に明瞭な線を考えているわけではない。おおよそ、標高数百 m から 1000 m ぐらいの間に広い漸移帯をもうけ、それ以上は典型的な高位部、それ以下は典型的な低位部といった格好である。

モンスーン島嶼は、偶然ではあるが、中ジャワ以東の肥沃な火山地帯と一致している。ちなみにいうと、スマトラと西ジャワの火山は、シラス系統の酸性の噴出物を伴うものであり、土壤栄養の点からすると、いわゆる肥沃な火山火帯には入れられない。

II 生活基盤としてみた生態区

ここでは、先に設定した六つの生態区、山地、平原、デルタ、湿潤島嶼高位部、同低位部、モンスーン島嶼のそれぞれについて、住み易さと食糧生産適地という視点からみてみたい。

1 住み易さ

住みにくい生態区 デルタと湿潤島嶼低位部は住みにくい二つの地区と考えてよい。

デルタは先に述べたように、毎年、数カ月間は、ほぼその全域が水没する。一方、乾季になると、飲み水がなくなる。こうして、デルタの水文環境は人間の生活に対して、極めて拒絶的である。現に、チャオプラヤー・デルタやメコン・デルタは、19世紀後半になって、運河網建設という一大水理改造事業があって、はじめて人間の居住空間に組み入れられた。自然堤防の発達するイラワジ・デルタは、チャオプラヤーやメコンの場合に比べると、いくぶん条件は良いが、それでも、快適な生活環境というのには程遠い。

湿潤島嶼の海岸低湿地は、第一そこを歩きまわることさえ困難である。巨大な板根が地表を這いまわり、その間に、水びたしのピートがたまっている。人間は板根の上を伝って移動するが、一步踏み外して、ピートの上に足を置くと、一気に腰まで沈む。ここでは、歩きまわろうとすれば、尾瀬沼に見られるような木道を作ることが必要である。これでは、実際問題として、生活は極めて困難である。それに、先に述べた黒水の問題がある。

デルタにしる湿潤島嶼低位部にしろ、水面の多いこれらの地区が、マラリヤの危険が大きかったことは古くから指摘されてきたところである。

主要な居住の型 山地、平原、モンスーン島嶼、湿潤島嶼高位部が住み易い場所ということになるが、それらの地区では、人々は次のような住み方をして

いる。

山地には無数の尾根筋と無数の谷川がある。この山地には二つの型の生活がある。第一は尾根筋の比較的衛生環境の良い所に居を構え、そこで畑を耕し、飲料用の水は谷筋から汲み上げてくるというものである。この型のものは、それほど大人口になることは期待できない。しかし、古くは、かなり普遍的なものであったようである。第二は、谷筋そのものに居住と生産の場を置くものである。この型の生活を持つグループは、11世紀以降、南中国から東南アジア山地に拡散して来たようである。おそらく、マラリヤに対する防備を固めた人

達のように思われる。

平原は衛生環境という点からすると、かなり良い。乾季の強烈な乾燥がこのことと関係している。しかし、この平原で生活するためには特別な知識を持たねばならない。先に述べた地下水を利用する知識である。この知識を持った時、平原は一気に住み易くなる。東南アジアで最初の大規模な平原居住は 6 世紀頃に始まっている。東北タイに数百個の数で存在するドゥヴァラヴァティの環濠集落遺跡はその証拠である。平原は、しかし、その生活が井戸や池という人工物に頼っているだけに、一度人災が起ると、その生活基盤が一挙に崩壊する性質を持っている。

モンスーン島嶼は火山群島でもある。火山の水理模型は極めて特徴的である。火山の頂は、たいていいつも雲にかくれていて、そこでは雨が降っている。その雨は降るとすぐに火山岩や巨礫の間に入り込んで地下水となり、そのままゆっくり降下して来て、中腹の傾斜変換点に達し、そこで泉として湧出する。いわば、一つの火山は頂上部に巨大な水槽を持ち、中腹部にいくつもの蛇口を持ったような格好になっている。山が高ければ高いほど、水槽の容量は大きく、安定した水供給が可能になる。モンスーン島嶼の最初の生活の場は、この蛇口の位置にある。中腹部は標高も適当に高く、マラリヤの危険も少ない。東南アジア中で、最も生活に適した所と考えてよい。

常春の湿潤島嶼高位部はたしかに快適な居住環境である。しかし、この難点はその厳しい孤立性である。四周を深い熱帯多雨林にとり囲まれた高山の頂では、外界と接触をとることは至難である。

2 食糧生産

東南アジアで考えられる自給食糧は米、雑穀、イモ、サゴである。それらが各地でどういう生産のされ方をするかを見てみたい。

米 山地の灌漑稲作——米は山腹斜面の焼畑でも作られるが、圧倒的大部分は谷筋で水稻として作られる。山地では、谷川に井堰をかけ、そこから水路で田に水を運ぶ、いわゆる灌漑移植稲が中心である。その様子は日本の稲作に

酷似している。こうした手のこんだ稲作だから、反当収量は高い。東南アジアで、これ程安定した高い収量を持つ所は、モンスーン島嶼の火山地帯を別にすると、他に類を見ない。

井堰灌漑には関係農民の共同労働や、配水に関する協議が必要である。こうしたことのために、山地の稲作農村は水利慣行を持った地縁社会が育つ。大きな本流ぞいや、特に谷の広がる盆地では、村落レベルを越えた、より大きな権力、例えば、土侯が直接統御する灌漑施設の作られたことも多い。土侯はこうした水利田から貢租を取り立てた。山地ではこうして、高度に組織された稲作が社会や経済の基盤になる。

平原の天水稲作——流水のない平原では、稲作は雨だけに頼った天水稲作にならざるをえない。井戸や池のまわりにかたまった集落の周辺に広大に広がる水不足の水田で、降雨まかせの稲が作られる。もちろん、こうした水田の収量は年較差が極めて大きい。5～6年に1度襲う旱魃年には、収量はほとんどゼロになってしまう。

水田にならないような高みの疎林は、多くの場合、水牛や牛の放牧地になる。例えば、第二次大戦前の東北タイの場合だと、たいていの家は5～6頭以上の水牛か牛を飼い、それを売って現金を得ていた。水田にあまり頼れないこの環境下で、農民はこの動物飼育に大きな精力をさいた。平原は本来、水牛や牛飼いを主とし、稲作はむしろ従の地区であるといってもよい。

デルタの氾濫稲作——数カ月間は1m近くに湛水し、その後は乾き上るというデルタの水理は、熱帯稲の生育のためには理想的である。湛水直前に種子を蒔いておけば、その初雨で発芽し、湛水の進行とともに背を伸ばし、花を咲かせ、やがて水がひくと結実する。デルタはしたがって、人間が住めるようになりさえすれば、そこは一挙に大水田地帯になる条件を備えていた。

しかし、巨大すぎる洪水のやって来るデルタでは、その稲作を改良しようなどするとこれは大変である。例えば、水深を調節して高収量をあげようとか、稲に加えて畑作物を混じ、多毛作化を計ろうなどとすると、もうこれは不可能に近い。要するに、与えられた大洪水をそのままの形で受け入れ、そこで野生

的な熱帯稲を作るかぎりにおいてのみ、有利な空間なのである。

湿潤島嶼の焼畑稲作——湿潤島嶼では焼畑が圧倒的に多い。焼畑では多種類の作物に混じて、稲もいっしょに作られる。また一つの畑は一年耕作すると、そこを放棄して他に移る。再びそこに帰って来るのは10年ぐらい後である。こういう次第だから、まとまりのある大きな稲作地を作るということは不可能である。

ミナンカバウやトラジャのような典型的な常春地では一種の水田が作られる。しかし、それらの多くは、森や焼畑の谷尻の凹地で、こじんまりと箱庭的に作られるものである。しかも用いる農具には焼畑の痕跡をしのばせるものが多い。これらの水田は、焼畑地域の一局部で起った特殊発展型としておいて、大きな間違いはない。

モンスーン火山島の湧水稲作——火山中腹から噴き出る無数の泉から水を引いて灌漑稲作を行っている。稲作環境としては、これ以上の所は無いという程に恵まれている。しかし、ここの灌漑稲作は、水利慣行に支えられた山地のそれとはかなり違う。ここでの灌漑は各自ばらばらに行われていて、まとまった組織はない。

火山島稲作における水利組織の欠如は、おそらく二つのことと関係している。第一は、この急斜面上では適当な貯水個所がなく、したがって、まとまった規模の灌漑システムを作ることが技術的に難しいということである。逆にいえば、無数の泉に恵まれていて、そんな大規模施設の必要がない。第二は、ここには畑作の伝統があり、人々は水稻耕作にはそれほど固執していないということである。このことは次項でもう一度触れる。

火山山麓の水稻耕作はジャワからロンボクにまで認められる。それより東のヌサトゥンガラには、まだ水稻耕作文化は入っていない。

雑穀 ここで雑穀といっているのは米以外の各種穀類のことである。現在ではトウモロコシが圧倒的に多いが、以前はアワが多かったと考えている。

雑穀は大陸部の山地や湿潤島嶼の焼畑でも作られる。しかし、それが食糧として非常に重要な位置を占めるのは、モンスーン島嶼東部すなわちヌサトゥン

ガラである。そこでは雑穀はいわゆる短期休閑畑で作られる。すなわち、ひとつの畑は2～3年連続して耕作すると、2～3年は休耕させるという方法である。この方法は焼畑耕作に似ているが、それとは二つの点で違う。第一は火入れの後に耕起を行なう。第二には、耕地には個人の専用品権が確立している。

ヌサトゥンガラに見られるこの特異な雑穀・短期休閑畑システムは肥沃な火山土壌と関係している。非火山の貧栄養土壌の上では1年の耕作で10年の休閑を与えなければ地力の回復はないが、この肥沃な火山土壌の上では、2年の耕作に対して2年の休閑で事足りている。こうして、ここでは焼畑よりもより土地生産性の高い短期休閑畑耕作が成り立ち得ているのである。先にジャワの農民が水稻耕作に必ずしも拘泥していなかったが、その理由はこのことと関係している。実は、ジャワにもこの短期休閑畑の伝統がひとつのシステムとして存在し続けてきたのである。ついでながら、フィリピンも基本的にはこのシステムをかなり濃厚に持っている。

イモとサゴ 現在、穀類を欠きイモとサゴのみに頼っているのはイリアンジャヤだけである。イリアンジャヤのイモ栽培は日本のそれとは比べものにならないくらい丁寧であり、そこには完全なイモ農耕システムができ上っている。イリアンジャヤほどではないにしても、イモやサゴがかなり重要な位置を占める地域は、マルクからスラウェシやボルネオにも広がっている。15世紀の『島夷志略』によると、こうしたイモ・サゴ圏は以前はもっと西にまで広がっていたようである。¹⁾

イモ・サゴについて詳述する余裕はないが、ひとつだけ指摘したいことがある。それは、これらは保存がきかず原始的な社会の食糧だと思われがちだが、ことサゴに関しては、このことはかならずしも事実ではない。サゴパールと呼ばれ、真珠状に丸めて煎られたサゴは、2～3年の保存にも容易に耐え、しかも調理なしでも食べられるということのために重要な戦略的食糧になっている。サゴパールを主歳入源とした王国というのは聞いたことはないが、サゴパールが南海の航海者達の不可欠の携行食糧であったというのは有名な話である。サゴが香料貿易に関連して重要な位置を占めていたことはまず間違いない。

Ⅲ 交易の視点から見た東南アジア

最初にどんな特産物がどこにあるかということ概観したい。そして、次に交易ルートについて見てみたい。

1 特産物

東南アジアの特産物を、香料、その他の天然産物、プランテーション作物と区分して、その産出状況を見る。

香料　今では、東南アジアの産物のなかで、香料の地位はずいぶん低くなってしまった。しかし、プランテーション作物の出現前には、香料は圧倒的に重要な意味を持っていた。『南海香葉譜』は「一二二五年に編された趙汝适の『諸蕃志』は「志物」で当時南海から輸入されたる主要物品、四七品をあげ、この内三―品目は香葉である」²⁾としている。すくなくとも南宋時代には、南海物産の中で香料の重要性は完全に確立していたようである。同書はさらに続けて、香葉の中でも圧倒的に重要であったのが沈香であったとしている。

沈香は古くはインド人によって、アッサムあたりで集められていたようである。それが後には、テナセリム、マレー、さらにスマトラやボルネオからも集められるようになった。³⁾ 中国の唐・宋代の漢籍に現れる沈香産地は海南島から安南山脈が中心で、島嶼部東南アジアにも至っている。沈香は大陸部沿岸山脈の多雨林から湿潤島嶼にかけて広く産出があったと考えてよい。

沈香が焚香の王者なら、丁香(丁子)はスパイスの王者である。後漢の頃には既に口臭を消す妙薬として使用されていたという。しかし、丁香が極めて多量に求められるようになるのは14～15世紀からだという。⁴⁾ 当時秋になるときまって多量の牛や羊を殺して塩漬けにしていたフランドルや北ドイツの人達が、肉の腐臭防除のために大量の丁香を使うようになったのである。この膨大な丁香需要は、サイロの発明で冬期の飼料確保が可能になるまで続いたという。

丁香はマルクにしか産しない。このために、マルクは列強の争奪の的となっ

た。16世紀初頭、ポルトガルが東南アジアに進撃するのは、まさにこのマルク獲得が目的であった。出発に一步遅れたスペインは、太平洋まわりでマルク接近を計ったが、果せず、フィリピンに到達した。

沈香、丁香について重要なものに、肉桂、肉荳蔻、竜腦、安息香等がある。これらの産地も沈香のそれに似ている。南海物産の中心をなす香料は、こうして、その主産地が湿潤島嶼から、その延長である大陸部沿岸山脈の多雨地帯ということになる。

その他の天然産物 香料以外の東南アジアの産物には次のものがある。

島嶼部で最も重要なものは金である。これはスマトラやボルネオから出て、古くから極めて有名である。同じような地域から錫も出る。西インドネシアの金や錫に対して、東インドネシアの海域では、中国人による真珠や亀甲やナマコ、燕巢の採取が活発であった。チモールやフローレスからは白檀を多く産した。

大陸部では紫鉱と黄臘が重要である。紫鉱はラックのことで、これはカイガラムンからとり、ワニスの原料にする。黄臘は大陸部に限るわけではないが、花の多い平原や山地に特に多い。山地からは麝香が出る。時代がぐっと下って、タイではアユタヤ期以降になると、平原からの皮革輸出が大きな品目になった。こうして、大陸からも、いくつかの産物が出る。しかし、この分野でも大陸からの産物は島嶼部のより高価な物産には及ばない。

プランテーション作物 プランテーション作物が本格的に伸び出すのは産業革命以後である。しかし、プランテーション作物を商品用栽培作物という意味にとると、その歴史は極めて古くなる。

コショウは紀元1世紀には西方世界ですでに重要な輸入品になっていた。この頃は多く、インドから西方に輸出されている。コショウはその原産地がマラバールともスマトラともいわれるが、これは遅くとも『諸蕃志』の時代には原産地から広がって、本来なら適地でない中東部ジャワにまで大々的に広がっている。⁵⁾ コショウが本格的なプランテーション作物になるのは、12～13世紀からのようである。

マルコポーロによると宋代の杭州は同時代のヨーロッパ全体の消費量の100倍のコショウを輸入していたという。マルコポーロの誇張を差し引いたとしても、13世紀の南中国が、極めて大量のコショウを輸入していたことは確かである。そして、14世紀に入ると、先に述べたフランドル地方からの需要が急増する。さらに下って、オランダ時代になっても、これは重要な栽培作物である。オランダ東インド会社は、強制供出制度を適用して、コショウの集荷に力を入れた。

歴史的に見ると、コショウの次に現れるのがコーヒーである。コーヒーは17世紀最末期、アラビヤからジャワに導入され、西ジャワで栽培されるが、1840年代にはスマトラにも広がる。しかし、1870年には病気が広がり、折しも、南米産コーヒーという競争相手の出現で大打撃を受けた。

コーヒーを置き換えるかたちで、しかし、それより少し低標高に広がるのがゴムである。これは20世紀の初頭、マレー半島、スマトラ、ボルネオに急速に広がった。マレー半島にいたっては、1920年には、その全耕地の65%をゴムが占めるという状態に至っている。

コーヒーにしろゴムにしろ、これらの作物の導入は、それまでの湿潤島嶼の焼畑社会を根本的に変えてしまった。以前は森の中を移動していた焼畑集落が、コーヒー園やゴム園を作り、その中に定着した。いわゆる商品作物栽培集落に変わってゆくのである。

プランテーションの今ひとつの典型はジャワの砂糖キビ栽培である。ジャワでは19世紀中葉より、既存の水田が次々と砂糖キビ畑に変えられていった。砂糖キビ栽培は古くから華僑によって行われてきたものであるが、それが大規模に組織的に行われるようになったのは19世紀中葉以降である。オランダ人達は、ジャワ人達が持っていた旧来の水田用灌漑設備を、砂糖キビ用のより大規模な施設に変えていった。さらに、軌道を敷設し、道路を整備し、港を新設した。要するに、豊富なジャワ人労働力を徴発することによって、ジャワの国土改善を強力に押し進め、もって糖業経営のより高い効率を追求したのである。ジャワ糖業は、この結果、驚異的な発展を示した。しかし、一方では、犠牲を

強いられた稲作は悪条件に悩みながら生きねばならないことになった。

ジャワと同じような糖業の発展はフィリピンにも見られる。マニラ湾岸北のパンパンガには18世紀初め、中国人の糖業が始まり、それに少し遅れて、ネグロス島にも糖業が始まった。ネグロスには、その後、20世紀初頭アメリカ資本の導入があり、この島の大半を砂糖キビ畑に変えてしまった。ジャワにしるフィリピンにしる、肥沃な火山性土壌とモンスーン気候という二つの利点を最大限に利用した草本プランテーション作物の栽培が、そこで行われたのである。

こうしてみると、プランテーション作物の栽培は、大陸部にはほぼ完全に欠落していたように見える。しかし、実際にはそうではない。19世紀後半に登場して来るデルタ米は商品米であり、プランテーション作物以外の何物でもない。こういう観点からすると、19世紀後半以降の東南アジアは、その全域がプランテーション作物で席捲されたといっても過言ではない。

2 交易路と港

東南アジアの交易を考える時には、二つのものを区別しておいたほうがよい。東西交易と域内交易である。

東西交易 最も古くは中国の絹と西方の宝石やガラス製品が交換され、やがて、中国の陶器やインドの綿がそれに加わった。この東西交易には二つのルートがあったと考えられる。

それは海路と陸路である。海路の場合、紅海を出た船は南インドをまわり、マラッカ海峡地域を通過し、広東に入っている。このルートの開設は早い。例えば紀元1世紀の『エリュトラー海案内記』⁶⁾には、航海者達がインド南端の港で中国の絹を得ているのが見えている。また東南アジアそのものでは、紀元1～2世紀に比定されるメコン・デルタのオケオ遺跡からローマの貨幣やサンسكريットで書かれた荷札が出土している。

もっとも、この頃の航海者達がマラッカ海峡そのものを通過したか否かはわからない。何故なら、このルートぞいで、はっきりした遺物の出土があるのはメコン・デルタであり、あるいはタイ湾の最奥部であるからである。沿岸航海

に頼っていた時代には、南シナ海とベンガル湾は、マレー半島横断で結ばれていたのかも知れない。このことも含めて、マラッカ海峡地域経由ということにしておこう。ちなみにいうと、はっきりとしたマラッカ海峡国家スリヴィジャヤが出現するのは7世紀である。

一方、陸路はアジアの地形図を広げると、極めて明瞭なものが浮び上がってくる。それはチベット高原東縁を画する断層崖直下を、直線状に北北東・南南西に伸びる線である。北の終点は長安であり、そこから成都、雲南に下り、さらにメコン、サルウィンの上流を横切り、イラワジ河ぞいにベンガル湾に出ている。この直線にそって中国有数の大都市が連なっている。いうまでもなく、これは中国とインドを結ぶ最短距離でもある。こうした所が交易路になるのはごく自然なことであろう。

南詔史の研究家、藤沢義美は、「後漢・三国・晋代頃に、今の雲南省西部地方へビルマ人や印度商人が入り込んでいた形跡は、さきの史料中に“僞越”や“身毒之民”とみえることから認められるのであって、この頃すでにビルマ・ルートを通じて東西文化の交流や物資の交易が相当行なわれていたらしい⁷⁾とし、漢代末にビルマ産宝石や梧桐木（カポックか）が中国に輸入されていたことを示している。藤沢によると、こうした雲南が独自の王国、南詔として栄えるのは7世紀中葉から9世紀初頭である。

域内交易 域内交易が極めて活発になるのは、中国の重心が揚子江の南にうつる宋代になってからである。この頃発生する華中や華南の巨大都市が南海物産を大量に求めたからだといわれる。東南アジアへの華僑の進出が始まるのも、まさにこの時だといわれている。しかし、ここではむしろ、それに続く元から明代のことを問題にしたい。その時、東南アジアに極めて重要な変化が起ると考えるからである。

南宋が滅び元になっても巨大都市での需要は減びない。しかし、南宋ほどの交易のにない手はいなくなる。ここで始めて、その空隙を埋めるようにして現れるのが東南アジアの在地勢力である。結論的にいえば、それはアユタヤとマジャパヒトの勃興であると私は考えている。この間の様子をいま少し詳しく見

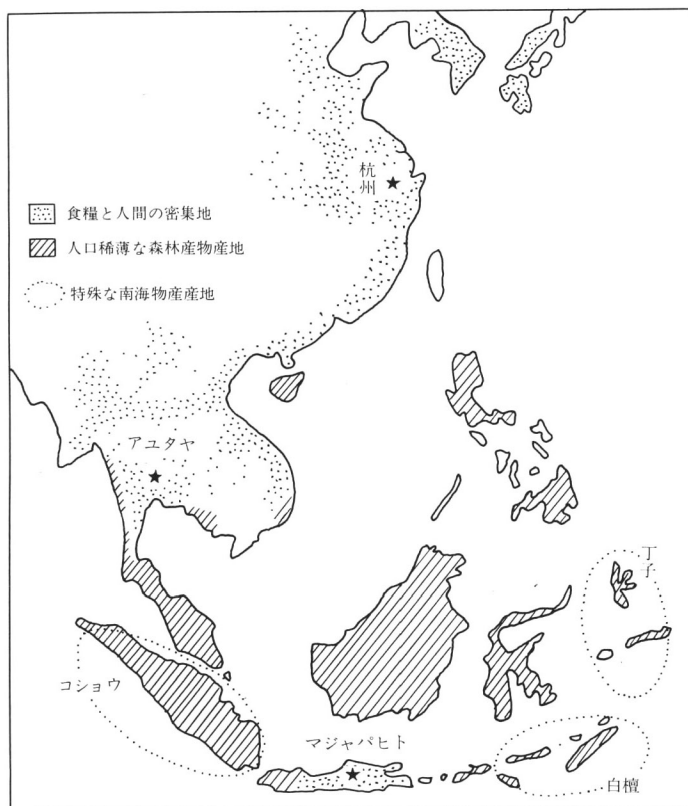


図4 12～14世紀の東南アジアと南中国

てみよう。

図4で斜線をほどこした所は森林産物の主要産出地である。ここには高価な特産品はあるが食糧がない。逆に、点の模様をつけた所は食糧があり人間は多いが特産品はない。ところで、12世紀段階では、この森林・南海物産の集荷はもっぱら杭州が行っていた。しかし、やがて、そのシステムが崩壊する。すると杭州にとって替るようなかたちで、アユタヤとマジャパヒトとが登場して来る。アユタヤもマジャパヒトもともに食糧と人間を多く持つモンスーン地域にあり、しかも、そのすぐ前面には特産物を産する多雨林地帯をひかえている。

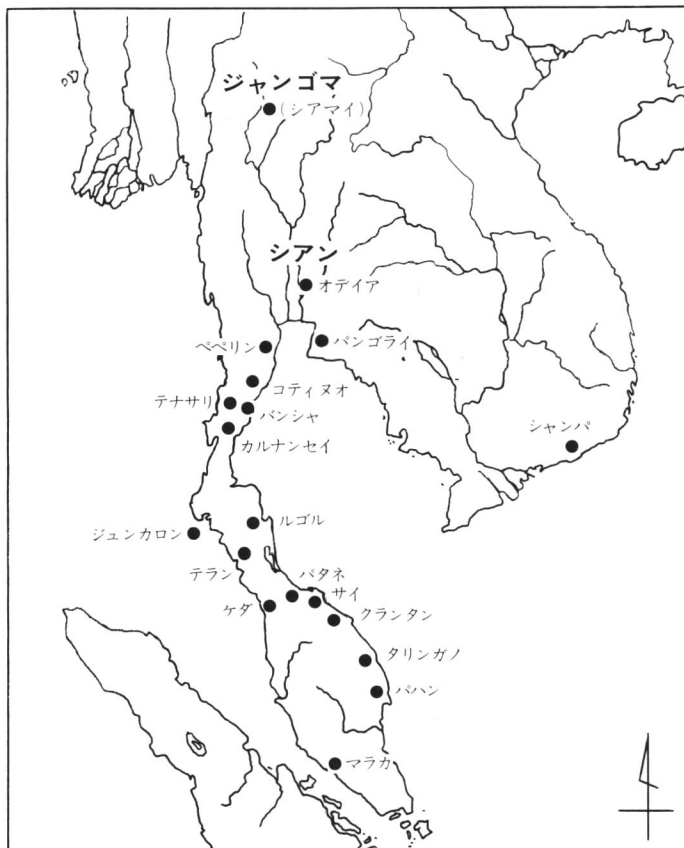


図5 16世紀初頭のシャム湾ぞいの港（生田ら訳『東方諸国記』p. 219 の図を簡略化したもの）

この関係をより詳しく見てみよう。トメ・ピレスの『東方諸国記』にはアユタヤに関して次のような記事がある。

「第二はロゴルの副王でポヨヤと呼ばれる。彼はパハンからオデア〔アユタヤのこと〕に至るまでの支配者である。パハン、タリンガノ〔中略〕、パンゴライその他の港にはそれぞれに王のような領主がいる。かれらのあるものはイスラム教徒であり、あるものは異教徒である。〔中略〕そしてこれらの場所からパ

タネまでの地域では毎年七八百バールに及ぶ胡椒を産する」。⁸⁾

この様子は図5に示されている。上の記録で見ると、多雨林のマレー半島にはコショウを出す港が多く出来ている。そして、その港の領主は時にイスラムである。南宋の崩壊と時を同じくして、イスラムの進出が見られる。そして南宋時代以降ひき続く華僑の港もある。ところで、アユタヤやマジャパヒトの役目はこういう群小積出港に対する軍事的統率者であり、同時に食糧補給者であったと私は考えている。アユタヤやジャワが大きな人口を有し、豊かな米産地をひかえていたことは、彼等をしてこのことを可能ならしめた。

くわしく見ると、アユタヤとマジャパヒトの間には差がある。時代の流れはアユタヤにより幸していたかのようである。アユタヤにはタイ湾岸の群小積出港の総元締という以外に、今ひとつ、全く新しい要素が加わってきたのである。それはかつて、長安、四川、雲南、ベンガル湾と連らなっていた内陸ルートへの連絡が可能になったことである。

南詔の崩壊後も雲南の人口は膨張し、その分布域は南に膨れ上っていた。いわゆるタイ族の南下が起っていた。そして、遅くとも12世紀にはその集団はチャオプラヤー河源流地帯に広がって来る。こうして、12世紀にはこのあたりは南中国の人口稠密地帯の南縁という格好になる。遡行可能なチャオプラヤー水系はこの時点で交易の一大幹線ルートになった。源流地帯自体が市場になったし、さらにそこから中国への直通ルートが開設されることになったからである。『東方諸国記』はチェンマイ（図5のジャンゴマ）について次のように言っている。

「麝香はジャンゴマ王国や〔原文空白〕王国から〔アユタヤへ〕来る。また麝香は同地からシナへも行く。人々は銀と白檀がペグーとシャンを経由して、陸路でシナの内陸部に行くと断言しているが、これには根拠があるように思われる」。⁹⁾

実際、このチャオプラヤー・ルートの開通はアユタヤ期より早く、13世紀末のスコタイ期には始まっているらしい。スコタイが南タイのナコンシタマラートをその領域に収めていたと豪語するのは、そのことを意味しているに違いな

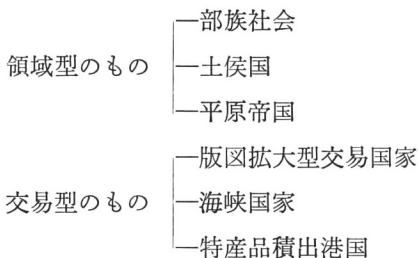
い。

ジャワの場合、内陸に居を構えた王は北海岸にやって来る商人達を歓迎したようである。この傾向はすでにシンゴサリ期に始まっているが、最も顕著に典型的に現れるのはマジャパヒト期のようなものである。すくなくとも、マジャパヒト期に入ると、こうした港への販売を目的とした米生産を王が意欲的に始めた節がある。¹⁰⁾

このようにして、12～13世紀以後、域内交易はぐっと盛んになる。そして、特に14世紀以降になると、人間と米を持った領域国家が交易の前面に出てくる。これは東南アジア史における一大画期であるといってもよからう。もっとも、この時期に至ってもいわゆる仲継港型のものが消滅したわけではない。13世紀スマトラの三仏齊がそれだろうし、15世紀に現れるマラッカ王国がそれである。

IV 社会・国

おそらく専門家の間では、社会や国に関しては厳格な定義があるに違いない。私はそれに関しては全く無知であるが、自分なりに植民地支配以前の東南アジアの中には、財の集積に関していくつか性格を異にする社会や国があったと思っている。私のイメージからすると、それらは次の六つに分けられる。



部族社会 今日北タイの山地民などのことを考えている。例えば、アカやミャオやホーをとってみよう。彼等はふつう同族を中心にまとまっていて、きまった生活、活動領域を持っている。彼等の一部はケン等を作ったりして経

済的に豊かであったり、又、高い文化を持ったりしている。しかし、その集団が国家を形成するほどには至っていない。また多くの場合、特定の国への忠誠心をもあまり持っていない。こういう集団をここでは仮に部族社会としている。大陸の山地だけでなく、島嶼にもこの類の社会は多い。焼畑のような粗放な生産形態と関係あるようにも見える。

土侯国 典型的には、12～13 世紀以降の山間盆地に現れたタイ系土侯国のようなものを考えている。地域の水稲生産性を上げるために、灌漑水利の充実に軸に人々は協力する。集落は一旦成立すると長期に安定して存続することが多く、しばしば高度に発達した地方文化をはぐくむ。

やや似た状況は、古代のジャワにもあったのではなかろうかと考えている。ジャワでは一つの主権のセンターは、基本的には一つの火山からなっている。一つの火山は農業水利の一単位であると同時に、その山頂は古代ジャワ人の宇宙の中心でもあった。

もっとも、これをあまりに閉鎖的に考えるのは間違いである。チェンマイは中国貿易の通過点になっていたし、古代ジャワもいたる所で海に露出していた。交易の要素は否定しないが、あくまで地域経済の基盤が農業であり、しかも地理的にディスクリートの境界を持つ地域、そんなものを、ここでは土侯国と呼んでいる。

平原帝国 アンコール期のクメールを典型例だと考えている。ビルマのパガン王国もこの類であろう。強力な国王を持っていたこと、東南アジアでは他に例を見ない広大な版図を持っていたこと、そして、その版図が強力な軍隊によって維持されていたこと、などから帝国という言葉を用いている。

私は、帝国の発生は平原の生態と関係していると思っている。平原の“見渡せる”という性格が帝国成立の生態的基盤をなしているといいたいのである。平原のあの広大な緩起伏地の高みに立って、周りの 360 度を見渡し、そこに小都市や村の散らばりを見る時、少し覇気のある者なら必ず征服欲にかられる。そこを征服すると、更にその先に同じような景観が広がり、又それも征服しなければおさまらなくなる。こうして、平原全体を征服した時、始めて征服は止

む。しかし、その時はすでに広大な版図が出来上ってしまっている。これが平原なのである。

版図拡大型交易国家 このなじまない言葉で、私が言わんとしているのは、先に少し議論したアユタヤやマジャパヒトの類である。輩下の港に自らの食糧を供給し、自らの軍備や時に傭兵で周辺の治安の維持を計り、かくして、交易の庇護者兼支配者であるような国家をいっている。同時期のベグーも似たようなものだろうと考えている。

この類の国家は、もしその後のヨーロッパ植民地勢力の干渉がなければ、かなり大きく発展したに違いない。しかし、実際には植民地勢力の干渉でそれは挫折した。アユタヤはその後チャオプラヤー・デルタに進出し、バンコクを都とするが、四周を押さえ込まれ、単なる米プランテーションの中心になってしまった。ビルマのイラワジ・デルタの場合は、19世紀中葉、国土そのものがイギリスの手に渡り、イギリスの経営する米プランテーションの場になった。かつてのマジャパヒトもイスラム化した港湾勢力の反撃を受けて分断された後、結局はオランダの手に移り、急速に砂糖キビプランテーションに変えられてしまった。

モンスーン熱帯と湿潤熱帯の接合点に位置し、モンスーン域の領域性と湿潤熱帯域の交易性の両方を生かして、版図拡大型交易国家として成長しだしたいくつかの国は、こうして、植民地勢力の到来とともに、その発展の芽をつまれてしまった。

海峡国家 ここで海峡国家としているものは、マラッカ海峡ぞいに発生する強力な港市国家という意味である。たとえば、スリヴィジャヤや三仏斉である。

こうした海峡国家は帝国とはおよそ対極にある。これ程戦略的に重要な位置を占めた国であるにもかかわらず、その主都の位置は未だに確実に比定されていない。スリヴィジャヤは一応パレンバンに、三仏斉はジャンビに比定されているが、異論も多い。どうやら実状は、その時々的情勢によって、その拠点を転々と変え、あるいは、複数の拠点を持っていたようである。おまけに拠点

を形成していた人も、その多くは筏の上などに住んでいたらしい。巨大な石造建築のモニュメントを築いた帝国とはずいぶん違う。

この海峡国家は15世紀にはマラッカ王国として生きている。しかし、16世紀には早くも植民地勢力のおさえる所となり、以後、植民地勢力の戦略拠点としてのシンガポールやジャカルタへとひきつがれてゆく。

特産品積出港国 湿潤島嶼には、前記の海峡国家の外に多くの中小の南海物産積出港がある。それらの多くはマングローブの中の河口部に位置している。この位置は大切である。何故なら、このみが飲料用の淡水の確保ができ、またその川筋を伝って内陸の森林へ入り込めるからである。

もっとも、こうした河口集落も単独で存在していることはほとんどない。ふつうは散在する十数個から数十個の河口集落が一つのまとまりをなし、そのグループの要として王宮のある港町が一つある。こうした積出港は、時に内陸高地の集落とも連絡している。私の知る南スラウェシのパロポの例だと、数十個の海岸ぞいの集落をしたがえ、背後のトラジャの山地とも連絡をとっている。海岸の集落はサゴを食して生活し、ダンマールや籐などの森林物産をパロポに出している。海岸集落のあるものはまた塩干魚を作り、湿地林で水牛を飼っている。そしてこれらをトラジャの高地に持って上る。トラジャからは、山地産の米をパロポに持って降り、そこで日用雑貨にかえて、それを村に持って帰る。パロポの王は大船を持っていて、集まった森林物産をジャワや中国に売り、インドの布や中国の陶器、雑貨を購入している。時にタイの米が入って来る。こうした森林物産の積出港は、13~14世紀には出来上り、第二次大戦前まで続いた。¹¹⁾

パロポはほんの一例である。島嶼部にはフィリピンを含めて、この種の積出港が無数に出来た。なかでもボルネオのブルネイやミンダナオのザンボアンガ等は長い歴史を持っていて有名なものである。

表1 東南アジアの六つの生態区の自然環境, 居住性, 主要生産物, 社会の一覧表

生態区	自然環境	生活の難易	食糧生産	特産物	植民地支配以前の社会と国
山地	谷筋には通年の流水あり	谷川にそえば易	灌漑移植稲(と焼畑)		土侯国(と部族社会)
平原	見通しのきく乾燥地	地下水利用法を知れば易	水牛・牛飼育と天水稲作	水牛・牛	平原帝国
デルタ	雨季の大湛水と乾季の完全乾燥の季節的交代	住み場所なし難	人造空間における氾濫稲作	19世紀中期以降商品米	平原との接点に版図拡大型交易国家
湿润島嶼高位部	高冷地	孤立をいとわねば易	焼畑と畑		部族社会
湿润島嶼低位部	通年の高温・多湿・有害土壌あり	瘴癘の地で難	イモとサゴ	各種森林産物, コショウ, コーヒー, ゴム	特産品積出港と海峡国家
モンスーン島嶼	肥沃な火山灰土と豊富な湧水	易ときに快適	稲と雑穀	19世紀以降砂糖 プランテーション	土侯国から版図拡大型交易国家へ

V ま と め

以上の議論を表1にまとめてみた。それは生態環境の上に生活と交易がいかに行われているかを概観している。

ところで、この表に加えて、その歴史について、私がおぼろげながら持っているイメージについて、最後に一言つけ加えておきたい。私は上の六つの生態区の上に展開した東南アジア史を次の如く考えている。

まず最初、10世紀までは交易の時代である。これはどうやら二亜期に分けたほうがよい。第一亜期は沿岸航海の時代であり、航海者達はマレー半島を陸路で横断している。第二亜期に入ると、東西交易の船はマラッカ海峡そのものを通っている。典型的な海峡国家スリヴィジャヤが隆盛を極める。もっともこの交易時代には海路だけでなく、ビルマ・雲南ルートのこととも忘れてはならない。このルートには南詔王国が栄え、それは次に来る、山間盆地の土侯国時代の前

史を作っている。

10～13世紀を内陸帝国の時代と呼ぼう。平原にはアンコールやパガンの王朝が栄えた。ジャワにはシャイレンドラ、クディリ、シンガサリという火山山麓の王朝が続いた。この時期、東南アジアに交易がなかったわけではない、南海物産の積出しは、実のところ、この頃から飛躍的に増大する。ただ、私はこうした南海物産は南宋という東南アジアの外にある交易国家の主導によって行われていたと想像している。

13～17世紀は、いわゆる版図拡大型交易国家の時代である。前二時代の交易性と領域性を合せ持った国家が生れる。典型的にはアユタヤとマジャパヒトである。山間の土侯国チェンマイ等も多少はこの性格を持っている。

18世紀以降、東南アジアは植民地勢力の干渉で混乱の時代に入る。19世紀後半になると、植民地経済の中で生きる巨大都市、ラングーン、バンコク、サイゴン、ジャカルタ、マニラ等が大膨張してくる。

以上が私のイメージする東南アジア生態史である。

あとがき

ここに書いたもののうち歴史に関する部分は多く、「漢籍を読む会」（石井米雄、桜井由躬雄主宰）から学んだものである。このことは明記しておきたい。しかし、だからといって、この会が今私が書いた所と同意見であるというわけではない。むしろ多くの点で両者の間には考えの隔たりがある。しかし、それにもかかわらず、この会から教えられた所は絶大である。考えてみると、歴史学者の友人からだけでなく、人類学者、社会学者、政治学者達からも、折にふれいろいろのことを教えてもらった。社会、国について記したところはそうした人達から得た耳学問に頼っている。ここに記して、こうした友人に感謝の意を表したい。

注

- 1) 高谷好一, 1985『東南アジアの自然と土地利用』, 勁草書房, p. 231.
- 2) 山田憲太郎, 1982『南海香薬譜』法政大学出版局, p. 5.
- 3) Burkell, I. H., 1966, A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula, pp. 199~200.
- 4) 山田憲太郎, 前掲書, pp. 334~336.
- 5) 趙汝适, 『諸蕃志』.
- 6) 村川堅太郎訳, 昭 21, 『エリュトラー海案内記』第 56 節, 生活社, p. 119.
- 7) 藤沢義美, 1969, 『西南中国民族史の研究』大安, pp. 525~526.
- 8) トメ・ピレス, 『東方諸国記』(生田滋ら訳), 1966, 『大航海時代叢書 V』岩波書店, p. 219.
- 9) トメ・ピレス, 上掲書, p. 222.
- 10) 高谷好一, 前掲書, pp. 238~239.
- 11) 高谷好一, 1984, 「サゴヤシ湿地の生活」『グリーン・パワー』No 12, 森林文化協会, pp. 38~41.

(高谷 好一)

東南アジア島嶼部の環境と農業適応

——開拓地入植者にみる適応のかたち——

はじめに

東南アジア島嶼部の地形を高谷 [1985 : 6] はおおまかに三つの地形に区分している。スマトラの脊梁山脈から小スンダ列島、マルク諸島を経てフィリピンに至る火山島、そしてマレー半島、ボルネオ、スラウェシなどの非火山島、およびスンダ陸棚を囲むスマトラ東部やボルネオ南部の島嶼低湿地である。この地形区分は、これから述べようとする島嶼部の農業の特徴を考えるうえで有効な枠組みを提供してくれる。島嶼部の農業には、自給的色彩の強い農民農業と商業的色彩の濃厚なプランテーション農業の併存や、主食となる作物の違い、栽培方法における技術的集約度の違いなど、多様な地域の変異がみられる。島嶼部農業におけるこのような多様性を、高谷の地形区分に依拠しながら、とくにインドネシアにおける開拓空間と移住者の適応という側面から捉えてみようとするのが本稿の目的である。

1980年から1985年にかけて実施された「熱帯島嶼域における人の移動と環境形成過程の研究」(研究代表者：前田成文)と題する共同調査のなかで、筆者には南スラウェシ州で3度、スマトラのリアウ州で1度現地調査を行う機会が与えられた。いずれの州でも、外部からの移住者が未利用地に入植している地域があり、彼らによって今も盛んに開墾が進められていた。南スラウェシ州へは、同州内からトラジャ族やブギス族、外からはジャワ族が移住し、一方、リアウ州へもジャワ族やブギス族が大量に移住していた。どの入植地も移住者がもとも居住していた環境とは大きく異なっている。この環境の相違を克服して、新しい環境にどのように適応していくのか、そして彼らの間で適応のかたちがどのように異なるのか、このような点を調査では明らかにしようとした。本稿

の大部分の資料はこの調査によって得られたものである。

I 成熟した農業空間と開拓空間

1 東南アジア島嶼部の農業環境

「はじめに」で述べた三つの地形区分のうち、土壌の肥沃性においてもっとも恵まれているのは火山島である。スマトラの脊梁山脈やジャワ島にある火山麓は栄養分に富む中性・塩基性火山噴出物に由来する肥沃な土壌を形成している。一方、もっとも問題のあるのは島嶼低湿地である。海側に位置する汽水湿地林に覆われた土地は、陸化に伴って酸性硫酸塩土壌と呼ばれる強酸性土壌となる。また、その内陸側にひろがる淡水湿地林には厚い泥炭層が分布し、この土壌も貧栄養と酸性条件のため農業的には恵まれていない。いわゆる問題土壌に覆われる島嶼低湿地は、従って、島嶼部のなかではもっとも農業に不適な土地となっている。非火山島の土壌の肥沃性はこれら両者の中間に位置し、その程度は地域によりかなり異なる。強いポドソル化をうけた丘陵地の赤黄色土は、塩基の溶脱のために栄養分に乏しく、栽培管理を誤ると森林を伐採した跡地での永続的な作物栽培は困難である。一方、石灰岩地域や山間の盆地、河川沿いの沖積地には比較的栄養分に恵まれた土壌が分布する。

この三つの地形区の肥沃度の差異は、そこで行われる農業の技術的な集約度にも影響する。もっとも肥沃な火山島では、水田と畑の高度な土地利用体系が成立し、作付の多毛作化を実現している所が多い。典型的な例はジャワ島やスマトラ島の西スマトラ州高地にみることができる。一方、島嶼低湿地では、汽水性、淡水性低地ともに大部分は森林で覆われている。もともと農業的には湿地焼畑によるイネ栽培やサゴヤシの採取が行われていたにすぎず、むしろ森林産物の採集を主な生業とする人々が多かった。非火山島では、山地は深い森林に覆われており、いまでも焼畑耕作が行われている。一方、肥沃な盆地や河川沿いの低地では古くから水田耕作が営まれ、火山島と同じく集約的な稲作が行われる。非火山島では、従って、その立地に応じて様々な段階の農業が展開して

いる。

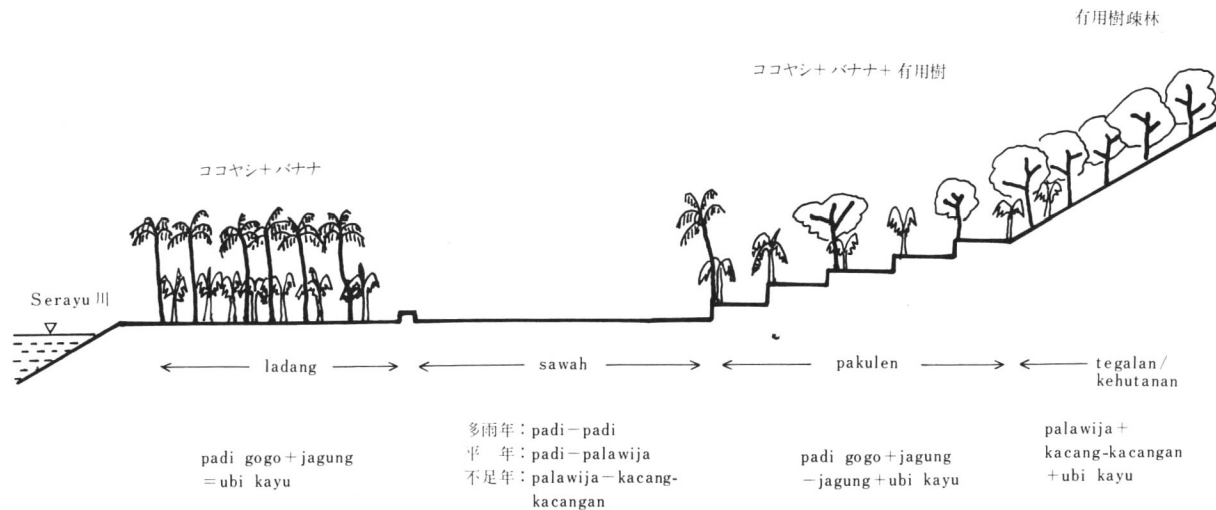
2 成熟した農業空間：移住者を生みだす空間

ここで成熟した農業空間というのは、集落とそれを取りまく耕地や林地の複合された景観が安定した趣きをかもしだしている地域である。古くから人々が住みつき、よく手入れされた耕地、園地、屋敷地が一定のまとまりと安定を感じさせるような落ち着いた眺めをもつ地域である。こういった景観は、火山麓や非火山島の山間盆地でよくみられる。成熟した農業空間が農業技術や環境への適応の面でどのような特徴をもつのか、ジャワ島の中ジャワ州、および非火山島であるスラウェシ島の南スラウェシ州を事例にみてみよう。

まず中ジャワ州の事例として、同州西部プルウォクルト (Purwokerto) 郊外の天水田と畑の混淆地における耕地と作付体系の様子をみてみよう。次頁図1の概念図で示すように、スラユ (Serayu) 川に沿った河岸段丘と丘陵地からなるこの地域では、耕地は次のように立地している。川岸に近く、ときに洪水に見舞われる耕地がラダン (ladang) で、ここにはココヤシとバナナが河川に直角方向に列上に栽植されている。続いて天水田があり、さらにその上の丘陵地山脚部は緩い傾斜の段畑 (pakulen) となっている。ラダンと同様、段畑にもバナナやココヤシが畦に植えられている。段畑のさらに上は丘陵地で、バナナや様々な有用樹からなる疎林となっている。

以上の耕地における年間の作付順序は図1の下部に示したとおりである。ラダンや段畑では混作ならびに間作様式 (tumpangsari) が広く行われる。丘陵地斜面の有用樹の疎林にまで作物が栽培され、ここでも永年生樹木と短年生作物が混栽される。キャッサバの栽培は、雨季の終りから乾季が主体である。降雨の減少に対応して、比較的耐旱性のあるキャッサバを間作し、耕地の集約的利用をはかっている。この例にみられるような、畑作物の混作、永年性作物(樹木)と畑作物の混栽は、ジャワ島内で広くみられる作付様式である。

一方、水田では、降雨の変動に対応した作付順序がみられる。降雨の十分な年には水稻の二期作が行われ、不足年には水稻を栽培せず、水田はいわば畑と



注) padi; 水稻, padi gogo; 陸稻, jagung; トウモロコシ, ubi kayu; キャッサバ, kacang-kacangan; マメ類, palawija ; 普通畑作物。
-は前後作の, +は混作の, =は間作の関係を示す。

図1 中ジャワ州 Purwokerto 郊外の耕地利用と作付体系

して利用される。水稻の栽培様式だけをみても、降雨の条件、とくに雨季開始時期や雨季期間中の降水量の多寡によって、様々な様式が採用される。雨季が遅れた場合には、padi gogo rancah と呼ばれる乾田穴播き栽培が行われる。また、二期作目の水供給が十分に期待できない場合には、一期作の刈取り後直ちに不耕起移植する栽培法 (padi walik jerami) が採られる。また、水不足年には水田で陸稲を栽培 (padi gowah) することもあり、水田の利用法は多岐にわたっている。以上のように水の供給 (降水量や灌漑) によって規制されながらも、水田の作付強度をできるだけ高め、それを高度に利用しようとするところにジャワの水田農業の特徴をみることができる。

水田や畑の他に、屋敷地 (pekarangan) においても作物が栽培される。集落を取り囲む屋敷地は多数の果樹や有用樹で覆われている。その樹木類の下には日常の食料や薬料、あるいは家内工業の原料となる多種類の野菜や有用植物が栽培される。「生きている茶店」(warung hidup)、または「緑の薬局」(apotik hijau) [LBN 1979:11] とも呼称される屋敷地は、それ自体が有機的な生態系をもち、農家の自給経済に大きく貢献している。

次に、南スラウェシ州各地の水田や畑における作付体系 (次頁図2参照) をみてみよう。中ジャワ州の場合と同様に、水田、畑ともに多毛作化されている所が多く、とくにトウモロコシの占める比重が高くなっているのが特徴的である。水田では、プレモンスーン期やポストモンスーン期のトウモロコシ作が盛んである。畑ではトウモロコシが基幹作物の位置を占め、他の作物と混作される。南スラウェシ州の東南部は伝統的にトウモロコシを主食とする食文化圏にあり、同州全体をみても、トウモロコシ基幹の作付体系が広く行われる [渡部; 田中 1984: 115]。

図2には含まれていないが、同州北部のタナ・トラジャ県の水田の作付も非常に労働集約的なものである。とりわけ、水田農業を生業の主体とする同県のマカレ、ランテパオなどでは、盆地の谷底水田や斜面の棚田が一体となって集約的な水稻栽培が行われている。例えば、マカレの南、メンケンデック郡で調査を行った山下 [1982: 383-388] は、雨季の始まる12月からの田起こし、2月

地 域	地形	耕地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
西 岸 地 域														
Bantimurung	山 地	天水田	===== padi sawah ===== kedele =====											
"	"	畑 I	===== kedele ===== jagung ===== jagung ===== ===== padi gogo =====											
"	"	畑 II	===== padi gogo ===== jagung =====											
中 央 低 地														
Sidrap	盆 地	灌漑田	===== padi sawah ===== palawija ===== padi sawah =====											
南 岸 地 域														
Tamalatea	丘 陵 地	灌漑田	===== padi sawah ===== palawija =====											
"	"	畑	===== jagung ===== jagung ===== ===== ubi kayu =====											
東 岸 地 域														
Sinjai	海岸段丘	天水田	kacang tanah ===== padi sawah =====											

注) 作物名は図1を参照。図中2行にわたるのは混作を示す。

図2 南スラウェシ州における作付体系（順序）の事例

の田植え、そして8、9月の収穫に至るまでの周到な稲作作業とそれに伴う農業儀礼を報告している。広い谷底平野に水田の広がるマカレやランテパオでも同様な作業が行われている。谷底の大区画の水田では直播栽培されることも多い [Takaya & Tanaka 1982]。また、近年、水稻の二期作も導入され始めている。

成熟した農業空間の例としてあげたこれらの地域に共通してみられる技術的な特徴は、まず第一に、安定した耕地利用が実現されている点である。そして第二には、その耕地において周到な栽培管理を可能にする栽培技術が成立していることである。それは気候の変動、とくに降雨の変動に対処して様々な作物と栽培法を選択するだけの技術的対応が可能な条件を備えていることでもある。

ところで、環境の農業的利用において、耕作可能な土地を余すところなく利用しようとする技術的基盤を持つがゆえに、安定した農業空間は、一面では、もはや余剰の土地を持ちえない、常に過剰な人口を生み出す空間でもある。ジャワ島における人口の稠密さとジャワ族の島外への移住はすでによく知られている [McNicol 1968 : 51-60] が、南スラウェシ州にも同様な条件を内包している地域が多い。表1は、南スラウェシ州各地の人口密度と耕作面積の規模別にみた農家戸数を示したものである。同州でも比較的人口の稠密な地域を列記したもので、比較のために中ジャワ州の数字も示されている。南スラウェシ州で比較的人口の稠密な地域は、都市部を除けばいずれも山間の盆地や沖積地、そして同州南部の火山麓である。こういった地域では、耕作面積の小さい農家が多く、経営規模においてジャワ的な状態にある地域が多いといえよう。ブギス族の島外への移住、出稼ぎはすでに17世紀から始まる彼らの伝統 [Lineton 1975:174-177] であるが、その基盤には、環境に対するこのような人口圧があったことも見逃がせないであろう。島嶼部において、成熟した農業空間は、すなわちそれ自身によって支えてきた人口を常に排出する空間でもあったといえよう。その排出された人口が行きつくところ、すなわち開拓空間の農業環境について次にみることにしよう。

表 1 南スラウェシ州各地の人口密度と耕作面積別の農家戸数

県 名 郡 名	農業賃労働者 戸数 (%)	農 家 戸 数 (%)	耕 作 面 積 (ha) 別 農 家 戸 数 割 合 (%)			人口密度 (人/km ²)
			0.25未満	0.25～0.5	0.5 以上	
南スラウェシ州	36,845 (3.3)	734,753 (65.8)	19.9	28.6	51.6	83
<u>Bulukumba</u>						
Hero Lange-Lange	154 (3.4)	3,768 (84.2)	25.5	36.6	37.8	342
<u>Bantaeng</u>						
Bantaeng	333 (4.9)	4,286 (62.9)	17.5	38.6	43.9	547
<u>Jeneponto</u>						
Tamalatea	255 (2.4)	9,420 (89.0)	23.4	38.1	38.5	379
<u>Gowa</u>						
Bontonompo	1,079 (12.2)	5,955 (67.1)	34.5	36.0	29.5	791
Bajeng	1,156 (12.0)	6,958 (72.1)	37.6	34.3	28.0	644
<u>Takalar</u>						
Galesong Selatan	533 (8.4)	3,287 (51.8)	34.5	40.4	25.1	810
<u>Bone</u>						
Pallakka	— (—)	6,355 (—)	45.1	26.5	28.4	219
<u>Maros</u>						
Camba	114 (1.6)	6,773 (96.0)	33.5	39.7	26.8	79
Maros Baru	584 (4.0)	8,448 (57.9)	26.9	35.9	37.2	190
<u>Pangkep</u>						
Bungoro	461 (9.3)	3,663 (73.8)	28.8	40.8	30.5	245
Labakkan	304 (4.7)	4,646 (72.2)	27.4	30.5	42.1	347
<u>Wajo</u>						
Tempe	242 (3.1)	1,163 (15.0)	29.2	39.6	31.2	1,197
<u>Tana Toraja</u>						
Makale	— (—)	6,319 (88.6)	50.3	31.8	17.9	321
Rantepao	843 (18.6)	2,166 (49.4)	40.4	40.4	19.2	768
Sanggalangi	11 (0.1)	9,117 (84.9)	52.3	27.4	20.4	183
中ジャワ州	1,736,629 (32.9)	3,145,968 (59.5)	39.9	32.1	28.0	742

出所：Biro Pusat Statistik (1981) Penduduk Indonesia Menurut Propinsi: Seri L, No. 3, Hasil Pencacahan Lengkap Sensus Penduduk 1980.

Kantor Statistik Propinsi Sulawesi Selatan (1981) Penduduk Propinsi Sulawesi Selatan 1980: Hasil Pencacahan Lengkap.

注 1) 農業賃労働者戸数および農家戸数の () 内の数字は、ともに全戸数に対する百分比。

2) 耕作面積別農家戸数割合の百分比は、全農家戸数に対する百分比。

3 開拓空間：移住者を受け入れる空間

前述したように、島嶼低湿地は、その問題土壌のゆえに農業には不適な土地となっている。また、海岸に近く、低標高に位置するため、逆水の貫入や洪水の滞水など水文的にも問題をかかえている地域である。すでに述べたスマトラ島東部やボルネオ島南部の低湿地のみならず、その他の島々の海岸部にも小規模ながら同様な低湿地が分布している。

このような低湿地はかつては森林産物採集民と漁撈民の活動の場であった。もっとも海岸に近いマングローブ林は、用材や薪炭材あるいはタンニン原料の採集に利用され、その内陸側に分布する淡水湿地林や泥炭湿地林も用材の伐採や籐の採集に利用されるにすぎなかった。これらの森林のうち比較的早くから農業的に利用されたのは淡水湿地林である。すなわち、湿地林を開いた焼畑移動耕作やサゴヤシ栽培がこの地域での唯一の農業的土地利用であった。そして、外部からの移住者が最初に開拓にとりついたのもこの淡水湿地林からである。彼らは、湿地林を伐採し、水稻や陸稻、トウモロコシを焼畑で栽培し、徐々にその土地を定着農耕の場に変えていった。今では、大部分の淡水湿地林は伐開され、集落や水田として利用されるようになり、移住者による開拓は、これまで農業的には全く利用されてこなかったマングローブ林や泥炭湿地林にまで及んでいる。

こういった開拓空間にオランダ植民地政府によって最初に大量の移民が送りこまれたのは1905年のことである [Pelzer 1945:192, Hardjono 1977:16]。ジャワ島の過剰人口に対する解決策としてスマトラ南部のランボン州グドン・タタアン (Gedong Tataan) への入植に始まったこの政策は、結果的にはジャワの人口過剰には何らの解決とはならなかったものの、ランボン州を中心にスマトラの各地 (南スマトラ、ジャンビ州など) へ、そして1930年代末からは南カリマントンや南スラウェシへ大量の移住民を送りこんだ。Hardjono [1977:20] によると、1940年末には、政府援助を受けずに入植した者、および入植地で出生した者を含めて、各地の入植地の総人口は20万余に達していたという。第二次大戦後、インドネシア政府は新たな移住政策 (Proyek Transmigrasi) を実施し、

表2 出生地別にみた南カリマンタン、リアウ、ジャンビ、南スラウェシ州への移住者総数 (%)

出 生 地	現 住 地							
	南カリマンタン		リアウ		ジャンビ		南スラウェシ	
	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980
スマトラ	3.7	4.1	42.4	49.6	33.6	29.0	6.0	9.9
ジャカルタ	1.1	1.3	1.7	1.6	0.6	0.9	1.2	3.5
西ジャワ	10.8	8.1	2.4	2.7	9.5	4.4	7.2	6.0
中ジャワ	21.0	23.7	12.1	12.4	18.8	34.5	10.3	16.8
東ジャワ	32.9	41.4	21.2	13.3	8.3	11.8	30.0	17.9
カリマンタン	13.4	12.4	2.9	1.3	2.1	1.0	3.7	4.5
スラウェシ	14.4	7.2	9.5	15.4	24.2	16.6	26.9	18.5
その他	1.0	0.9	1.6	0.8	0.3	0.5	18.7	17.6
国外	1.7	0.9	6.2	2.9	2.6	1.3	—	5.3
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100
移住者総数	67,285	143,958	217,100	353,194	160,000	297,054	71,411	114,085

出所：1971年の数字は、Biro Pusat Statistik (1984) Analisa Migrasi Indonesia Berdasarkan Data Sensus Penduduk 1971 dan 1980, 1980年の数字は、Biro Pusat Statistik (1983) Penduduk Indonesia, Hasil Sensus Penduduk 1980: Seri S, Nomor 2 による。

注) 各州とも、同州内からの移住者は含まれていない。ジョクジャカルタ特別区は中ジャワ州に含まれる。その他は、バリ、スサ・トゥングラ、マルク、イリアン・ジャヤなど。

1950年以降、主にスマトラ、カリマンタン、スラウェシへ大量の移住民をジャワ、バリ、ロンボックから送り出しており、今もこの政策は続けられている。

このような政府援助のもとに入植した移住者 (transmigran umum) の他に、それに頼らない自発的な移住者 (transmigran spontan) も開拓空間に多数入植している。なかでも、ジャワ族やブギス族の南カリマンタンや東スマトラへの移住はとりわけよく知られている [Collier 1980: 12-35]。表2は、1971年と1980年人口センサスから、南カリマンタン州と東スマトラのリアウ州、ジャンビ州、および南スラウェシ州へ移住した人口を出生地別にまとめたものである。これらの州へのジャワからの移住者の中には政府援助による移住者の他に相当数の自発的移民も含まれている。スラウェシから南カリマンタンや東スマトラへ移住した移住民の大部分は、南スラウェシ州からのブギス族で、彼らの大部分も自発的移民と判断される。また、表2には州内での移住が集計されていないために、州内から開拓空間へ移住した人口を知ることはできないが、その数も相当数にのぼっている。彼らもまた、政府の移住政策に頼らずに開墾に従事

する自発的移住者である。

以上のように、島嶼低湿地は、島嶼部に残る最後の広大な未利用地として、外部からの移住者を受け入れる開拓空間となっている。移住者の大部分は、成熟した農業空間をあとにして、まったく異った環境下に入植、定着を試みようとする農民である。彼らのなかには、自分の所有する農地を求めて移住する土地入手型移民が多いが、まとまった資本を元手に養魚池造成やプランテーション開園を目差す開発型移民も少なくない。このような移住者がどのような過程を経て開拓空間に定着し、適応していくのか、リアウ州および南スラウェシ州の低湿地の事例を以下にみることにしよう。

II リアウ州東部低湿地の開拓空間

1 調査地の概要

スマトラ島の中央部、バリサン山脈の東麓からマラッカ海峡にかけて位置するリアウ州は、総面積が9万4562 km²で、スマトラ第二の大きな州である。しかし、総人口は約216万8000人(1980年センサス)にすぎず、スマトラではもっとも低い人口密度(23人/km²)となっている。人口の大半は、バリサン山脈からマラッカ海峡へ東流する大河川(Rokan, Siak, Kampar, Kuantan-Indragiriなど)沿いかマラッカ海峡の島々に分布し、その他の地域、とくに同州の東半部には広大な湿地林がひろがって、人口はとくに稀薄である。

筆者が調査した地域は、同州の最東南端部、インドラギリヒリル(Indragiri Hilir)県のガンサル(Gangsals)川下流に位置するルテー(Reteh)郡プラウクチル村(Desa Pulau Kecil)である(図3参照)。ガンサル川下流域では、他の大河川の下流域と同様、河口部にはマングローブに覆われた汽水性低地がひろがり、河口から約20km遡ると川沿いに河成沖積地があらわれる。この沖積地の幅は、兩岸約1~2kmで、その奥には泥炭地がひろがる。プラウクチル村は、河口から約25km上流に位置する。ガンサル川下流は、リアウ州の河川が総てそうであるように、感潮河川で、大潮のときには同村付近で3m

ワ人で、バンジャールが1930年頃、ブギスが1935年頃から入植し始めたという。入植者達はガンサル川から内陸部へ向けてまずパリット（parit：水路）を掘り、水田やココヤシ園を開きつつ、さらにパリットを延長して内陸部の開墾を進めていった。現在、プラウクチル村には32のパリットがあり、そのうち28のパリット沿いにジャワ、ブギスの移住者が定着している（図3参照）。村の中心は、同村のほぼ中央部、ガンサル川の右岸に位置するタンジュンブタパック（Tanjung Petapak）のバサールで、若干の商店、ココヤシの製油工場、精米所などがあり、約160世帯が集住している。

2 移住者による開拓の過程：潮汐灌漑水田とココヤシ園の開墾

筆者が実際に踏査したガンサル川右岸の Parit X から Parit XVII までの地域で得た聞き取り調査にもとづいてこの地域の開拓の過程を再現してみよう。ちなみに、現在、これらのパリットのうち、Parit X, XI, XIII にはジャワ族が、XIV, XV, XVII にはブギス族が、そして Parit XII と XVI には両者が主に居住している。

移住者達が入植する以前、この地域にはムラコ族が居住していた。彼らの生業は、沿岸部での漁撈と河川沿い沖積地での焼畑移動耕作による稲栽培で、他に森林産物の採集や、今世紀初めからはゴムの栽培などを行っていた。移住者が入植したとき、まずとりかかったのはパリットの開削である。例えば、Parit XI の場合、何年か定かではないが、最初はジャワ人とブギス人が共同で開削にとりかかったという。ガンサル川から約1 km 内陸部へは Sungai Bakau と呼ばれる自然の濠筋みおがあったので、その濠筋をそのまま利用して、そこからさらに内陸部へ向けて約1 km を掘削した。パリットを掘削すると、その両側にラダン（ladang）を開き、水稻を栽培した。1942年に現在の水路長（kepala parit）がこのパリットに移住してきたときには、ブギスの家が10戸、ジャワの家が5戸あったという。その後、最初の開削を指揮したジャワ人が中心になり、さらにパリットを1 km 延長した。そして、さらにジャワ人が多数移住してきたため、現在の水路長が組織者となり、1953年以降、内陸部へ徐々にパリットを

延ばしていき、彼のもとでさらに 3.5 km 延長されたという。パリットが内陸部へ延びるにつれて泥炭地となっていく。泥炭地では、パリットが開削されるとココヤシ園が開かれた。まず両側の湿地林が開かれ、火入れされる。その後放置され、その間に生長してきた二次植生を2年目にもう一度伐採、火入れする。火入れの後は小水路 (parit anak) の掘削である。これは、パリットと同じく、排水と運搬のために掘られるもので、パリットに直角に約 30~40 depa (1 depa は約 1.7m) の間隔をおいて掘られる。こうして準備されたところにココヤシの苗が新植される。現在、このパリットは総延長 6.5 km で、いまなお内陸部へ向けて延長されつつあり、ココヤシ園の拡大が進んでいる。当初10戸あったブギス人達は、1950年代から他所へ移り始め、1982年には最後のブギス人もこのパリットを出ていったので、現在このパリットに住む66世帯、374人は総てジャワ人で、完全なジャワ人のパリットとなっている。

隣りの Parit XII は1930年代初めにバンジャール人によってまず開削されたという。このとき、ガンサル川から内陸部へ向けて 900 depa のパリットが掘られた。次に、1950年代にブギス人が組織者となって、さらに 1100 depa 延長された。1960年にはジャワ人が組織者となり、1800 depa、そして1973年と1976年にもジャワ人が組織者となってそれぞれ 150 depa と 750 depa を延長した。パリットを開削した後は、Parit XI と同じく、laut ではラダン (水田) を、darat ではココヤシ園を開いた。最初にこのパリットを開いたバンジャール人達は、その後ガンサル川のさらに上流部へ移住した。また、入植当初、川岸から内陸部へ約 2000 depa のところまでパリット沿いに散在していたブギス人は、入植地の治安が乱れたため1960年代にはココヤシ園内での居住をやめ、laut 側に集住するようになった。いまは、このパリットの下流部にはブギス人が、上流部にはジャワ人が住んでおり、もともとブギス人が住んでいた中流部は、彼らの所有するココヤシ園があるだけで、まったくの非居住地となっている。

次に、ブギス人が開削したパリットの例をみてみよう。Parit XV がいつ最初に開かれたかは定かでない。1950年にいまのパリット長がジョホールからここに移住したときには、すでにブギスの移住者が2戸あったという。先に移住

していたブギス人や、もとからここにいたムラユー人によって約 2 km のパリットが掘られており、その両側には、ココヤシが植えられ、ところどころ昔に植えられたゴムの木が残っていた。その後 1950 年代後半に南スラウェシやマレー半島、その他から多数のブギス人が移住してこのパリット沿いに住みつき、ココヤシ園をラダンに変えて水稻を栽培した。1957 年頃にブギスの入植者がもっとも多くなり、その戸数は 42 戸になったという。ブギス人の入植につれて、パリットが延長され、さらに水田が開かれるとともに、内陸部では、ココヤシ園が造られていった。現在、このパリットの総延長は約 4.5km となっている。これらブギス人はパリットの延長とともにココヤシ園に住むようになったが、1960 年代後半から徐々に laut 側に出てくるようになった。治安の悪化や、交通の便のために内陸部から移り住んだという。また、ココヤシ園を他のブギスに売ったり、あるいはそれを所有したままで、同村のパサルや郡の中心地であるブラウキジャンへ居を移すものもでてきたため、いまこのパリットには 20 戸のブギスが残るだけである。上流部はココヤシ園だけで人は住まず、中流部にはコプラを製造する加工場 (langkau) とその所有者達が住むだけで、大部分は、laut 側のパリット沿いに集まっている。

Parit XVI や XVII も Parit XV とよく似た経過をたどっている。ここでも、かつて内陸部に住んでいたブギス人は、他へ移り住むか、同じパリットの laut 側に家屋を移築して集住するようになっている。Parit XVII の場合は、1982 年にこの村の幹線道路が完成すると一斉にこの道路沿いに居を移し、いまでは整然とした列村を形成している。

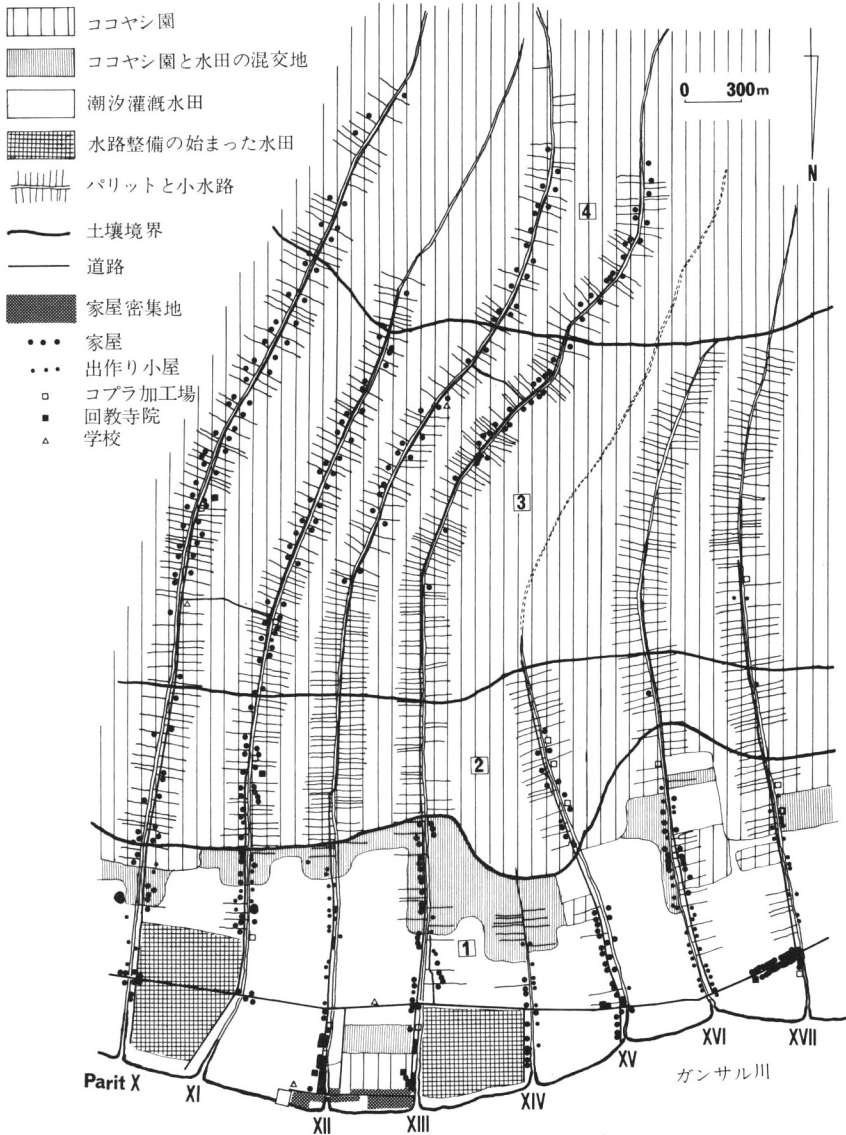
ブギス人の再移住に伴って、水田やココヤシ園の請負いや小作が増えてくるようになった。たいていの場合、ブギス人が自ら開墾した土地を手放すのは稀で、彼らは、ジャワ人に水田の耕作やココヤシの収穫をまかせ、刈り分け小作させるのが一般的である。Parit XVI では、このようなジャワの小作人数が稲作期間中にパリット沿いに出作り小屋を建て一時滞在している。小作人達は、同村のジャワ人のパリットから来ていたり、隣村からも来ている。なかには、そのまま小作人として定住する者もあり、Parit XVI のように、もともと 30 戸あ

ったブギスの家がいまでは10戸に減少したのに対し、ジャワ人の小作人定住者が11戸と、数のうえではすでに先住者を凌駕するほどになっている場合もある。

ジャワ人やブギス人の移住者の開拓の過程は概ね以上のものであった。彼らによって開削されたパリットや開墾された耕地、そして彼らの住居分布などの概況を示したのが図4である。どのパリットでも、川岸から約1km余には水田が、そしてその奥ではココヤシ園が開かれており、土地利用のパターンは、各パリットで共通しているといえよう。すなわち、沖積地 (tanah liat) は水田に、泥炭地 (tanah gambut) はココヤシ園に利用される。

水田耕作の方法は、ジャワ人のものもブギス人のものも同じである。水田は、いわゆる潮汐灌漑水田 (sawah pasangsurut) で、雨季に増水した河川の水を、満潮時の水位の上昇とともにパリットから水田に灌漑する栽培法である。栽培は年1回で、道端や庭先に作られた第1苗代 (samir) で1週間育苗された苗を本田内の第2苗代 (lecek) に移し、それをさらに1カ月後に本田 (ladang) に移植する。本田準備は、密生した雑草を山刀 (parang またはajak) で根元から刈り、刈りとった草を何度か反転させて腐らせるだけである。鋤や犁による耕起はなされず、腐った草をそのままにして、あるいは畦に積みあげて本田の準備が整うと、lecekで50~60cmの丈にまで大きくなった苗が植付棒 (tegal または tanjang) で移植される。本田移植後は水田内の湛水を続けて、雑草の発生を抑えるだけで、除草や施肥などの肥培管理は行われない。

成熟した農業空間で集約的な稲作を行ってきたジャワ人やブギス人にとって、この栽培法はいかにも自然まかせの粗放な稲作と映ったに違いない。鋤や犁で丹念な耕耘を繰り返し、水田ををできるだけ高度に利用しようとしてきた彼らにとって、常に潮位運動によって水田内の水が出入りし、水管理が困難を極めるこの種の水田は、彼らの経験にある水田とは全く異質の耕地として映ったに違いない。泥炭地のココヤシ園にしても、彼らの故地では全くみられないもので、初期の移住者にとっては、この環境に適応することは、総てが新しい試みであったに違いない。このような彼らに、適応の手本を示したのがバンジャール人である。南カリマンタンの低湿地では、古くから、ここで行われているのと同



図中、1は沖積地 (tanah liat), 2は沖積土と泥炭土の混交地, 3は分解の進んだ泥炭地 (tanah gambut hitam), 4は新たに開墾されつつある泥炭地 (tanah gambut merah).

図4 ジャワ人、プギス人入植地の概況 (Parit X~Parit XVII)

様な、潮汐灌漑水田とココヤシ園を組み合わせた低地開発がおこなわれてきた [van Beusechem 1939:2-7]。同地へ移住したジャワ人やブギス人がこの開発法を習い [Collier 1980:25-32]、リアウ州へこの方法を携えて再移住したことであろう。また、初期の移住者が、すでにこの地に移住していたバンジャール人移民から直接この方法を学んだとも推察される。リアウ州東部低地の初期の開拓は、このようなバンジャール人の農業を手本に、成熟した農業空間からの移住者が主たる担い手となって行われたものといえよう。

3 適応のかたち

島嶼低湿地に移住してきたジャワ人やブギス人は、環境の農業的利用においては、いずれも潮汐灌漑水田とココヤシ園を開いて定着したように、その適応の初期には差異がみられなかった。しかし、図4に明らかなように、ジャワ人が主に居住するパリットと、ブギス人が主に居住するパリットでは、居住のパターンが随分異なっている。パリット沿いにどんどん奥地へと延びるジャワ人の集落に対して、ブギス人の集落は、逆に laut 側に集中している。すでに述べたように、ブギス人の場合には治安の乱れが契機になったとはいえ、それが安定してからも darat から laut へという移転が続き、いまでは両者の間で完全な環境の棲みわけが認められるほどになっている。

ジャワ人達は、彼らの居住について、次のようにしばしば語る。すなわち、彼らにとっては水田とクブン (kebun: 園地) を所有し、そのクブンの中に家を建て、屋敷地に様々な果物や花、野菜を植えるのが理想の住み方である。ジャワからこんなに遠くまで移住してきたのも、何にもまして自分自身で耕作のできる土地を手に入れたかったからである。すなわち、彼らは根っからの農民 (petani) である、と。一方、ブギス人達の居住観はこれと異なる。彼らにとっても水田やココヤシ園を持つことは定着するうえでのまず第一の目的である。しかし、いったんそれを手に入れば、そこからあがる収益を利用して、さらに土地を拡げたり、農業以外の部門に進出するのがかしこいやり方である。土地をなにも自分で耕やさなくても、例えばジャワ人やまだ十分な土地を持って

いないブギス人に貸せばよいではないか。お金がたまれば、不便な *darat* に住まず、それを有効に利用できる、もっと交通の便のよいところ、あるいは人の多く住むパサールに移り住むのは当然のことではないか、というのがブギス人の一般的な考えである。そして、このように語るブギス人も自分達は農民であるという。

すでに述べた水田やココヤシ園の小作関係をみても、両者の間には、農業における民族間差異とも呼びうるほどの違いがあるといえよう。また、水田耕作に対する両者の取り組みをみても同じことが指摘できそうである。例えば、前述した粗放な潮汐灌漑水田を、水門と水路の改良によって、安定した水管理の可能な水田に変えようとする計画がいま進行しているが、この計画に対してジャワ人は極めて積極的である。図4に示したように、この計画の実施地域がジャワ人の主に居住するバリットであることからこのことをうかがうことができる。さらに、個人のレベルでも水田の高度利用を図ろうとする者がいて、彼らは、水田内に細かく水路をめぐらして水管理を精緻にし、水稻と乾季の畑作物栽培との二毛作を試みようとしている。耕地に対するジャワ人移住者のこのような強い執着をみていると、たしかに彼らが根っからの農業者であるという印象を強くする。そして、環境は違っても、ジャワの農村と同じような水田を作り、同じ生活をここで続けようとする彼らの意図が、現在の適応のかたちとしてあらわれているように思える。しかし、一方のブギス人をみると、彼らの適応のかたちはジャワ人のものより一層柔軟なようにもみうけられる。彼らは、南スラウェシで行っていた彼ら自身の農業を環境の全く異なるこの低湿地へ移植しようなどとは考えていない。むしろ、この環境にもっとも適した農法をいち早くとりいれて、その上で彼ら自身の理想とする様々な経済活動へと進出している。当初の適応の仕方が両者の間であまり変わらなかったのに、結果的には、これほどまでに適応のかたちが違ってきたことは、環境と開拓者との関係を理解するうえで興味深い点である。この点をもう少し詳しく考えるために、いまひとつの事例として、南スラウェシ州のルウ県の場合を次にみてみよう。

Ⅲ 南スラウェシ州ルウ県低地の開拓空間

1 調査地の概要

南スラウェシ州の北東端、ボネ湾の最奥部に面するルウ県は、1950年から1965年にわたるカハル・ムザカルの内乱により深刻な影響を受けたため、同州ではもっとも開発の遅れた地域となっている。戦前には植民地政府により移住政策の入植地がルウ県の東部に開かれたが [Maurenbrecher 1939:21-25]、この地域の本格的な開発が始まるのは、内乱の終息した 1965 年以降のことである。隣県のタナ・トラジャや同州中南部の諸県からトラジャやブギスの自発的移民がまず入植し始め、1969年からは政府の移住政策による入植者が、ジャワ、バリ、ロンボクから毎年送りこまれるようになった [田中 1982: 65-69]。

筆者が調査したのは、これら移住者が集中しているルウ県の東部、ウォトゥ (Wotu) およびマリリ (Malili) の両郡である。郡統計によると、1983 年のウォトゥ郡の人口は 3 万 4950 人で、うち 7889 人が移住政策による入植者とその家族である。また、マリリ郡では、郡人口 2 万 5443 人の約半数に近い 1 万 1656 人が入植者で、統計にはあらわれてこない自発的移民を含めると相当数の移住者がこの地域に流入している。移住者達が入植する地域は、かつて原住民 (Orang Pamona) によって焼畑耕作が行われていた未利用地で、バンチェ (*Nuclea orientalis*) やスギマナス (*Anthocephalus cadamba*) などの二次林がひろがる低湿地である。この低湿地をはさんで、北側には森林に覆われた山地や丘陵地がひろがり、南側にはマングローブやニッパの生える汽水湿地林がボネ湾まで続いている。

政府の移住政策による入植者は約 500 家族を単位にひとつの入植地に定着する。移住地は政府により前もって開墾されており、1 家族あたり水田 1ha と畑 0.75ha、屋敷地 0.25ha が与えられる。自発的移住者は、移住後、郡長により指定を受けた入植地の開墾に自力でとりかからねばならない。普通は 1 家族 2ha を限度としているが、それ以上の土地を開墾している者も少なくない。入

植地が固定されている移住政策による入植者に対して、自発的移住民の開拓地は、丘陵地から汽水性湿地に至るまで広範囲に分布しており、彼らの定着の過程は地域により、また民族の違いにより変化に富んでいる。

2 移住者による開拓の過程：水田、園地の開墾と養魚池の造成

ウォトゥ、マリリの両郡に自発的移住者が数多く入植し始めるのは1970年代後半に入ってからである。次頁図5に示した、ウォトゥ郡レウォス (Lewonu) 村、マナンガル (Manangalu) に自発的移住者が最初に入植したのは1976年で、木材伐採の労働者としてこの地域に出稼ぎに来ていたブギス人が数家族まず定着したという。マナンガルにはもともと原住民のパモナ人が住み、焼畑耕作やサゴの採取、森林での籐の採集などを生業としていた。最初に入植したブギス人達はパモナ人の集落のさらに奥地の丘陵地を開き、初年目にはトウモロコシ、2年目からはトウモロコシと陸稲を栽培し、同時にバナナや丁子 (cengke) の苗を植え始めた。まず焼畑耕作と同じやり方でラダンを開き、最終的にはそれを丁子園にしようとする開拓法である。当時、丁子の価格が非常に良かったので、ブギス人入植者のほぼ全員が丁子栽培にとりかかったという。最初の入植者達が定着してから、彼らを頼って多数のブギス人がここに移住するようになった。同郷の者を呼び寄せたりして、いまではパモナ人の36戸を上回る45戸のブギス人入植地が形成されている。

ジャワからの自発的移住者がここに入植し始めるのは、1977年以降である。ジャワからの入植者達もまずラダンを開き、トウモロコシや陸稲、キャッサバを栽培した。しかし、彼らの場合丁子を植える者はなく、ラダンでの畑作物栽培を続け、一方で政府入植地の水田へ刈り分け小作に出る者が多かった。投機的な丁子栽培に手を出すよりも、食糧となる普通畑作物の栽培を続け、ラダンの状態の耕地を永続的な常畑へ変えていくのがジャワ人の一般的な開拓法である。なかには、刈り分け小作をする水田のある集落へ再移住する者もあり、最多時で25戸を数えたジャワ人入植者は、いまは19戸に減少している。

マナンガルに入植したブギス人とジャワ人は、どちらもトウモロコシと陸稲

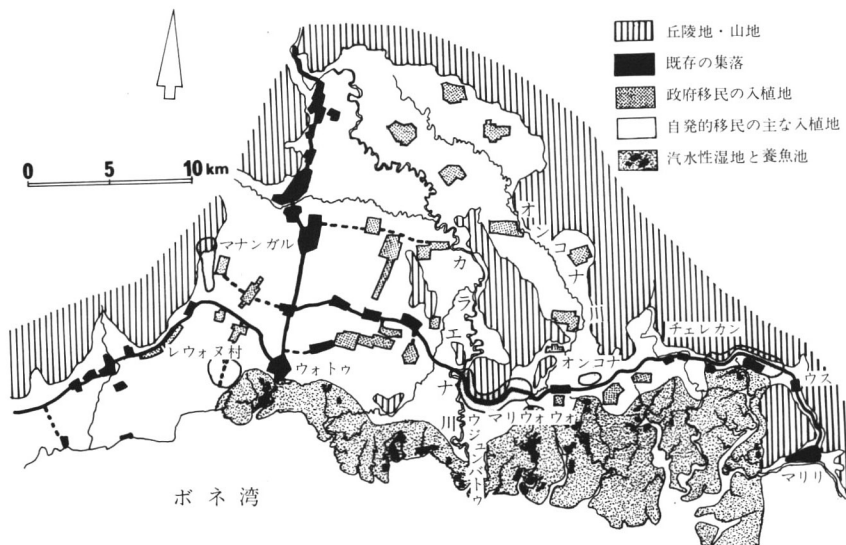


図5 ウォトゥ、マリリ両郡の入植地の概況

などの畑作物をまず栽培するが、ブギス人の場合は、そうして開墾した畑を商品作物の栽培によって収益の上がる耕地に変えていこうとする。一方、ジャワ人は、開墾した畑でまず食糧を確保して、その畑で続けて生産を維持、向上させようとする耕地にするために、営々とその耕地を耕していく。全く同じ環境に入植していても適応の仕方には随分と開きがあるようである。ところで、当初ブギス人が手がけた丁子の栽培は、病害や肥培管理の不手際のためにほとんどが失敗している。そして、筆者が3度目にこの地を訪れた1985年には、ブギスの入植者達はカカオの新植に忙しかたち働いていた。丁子が駄目だったので、今度はカカオだというわけである。こういった商品作物の苗を入植者達におろしているのは、定期的にこの地域を回っているブギスの商人である。彼らからの情報に敏感に反応しながら、ブギス人達はこれからも商品作物の栽培を続けていくに違いない。

次に、ウォトゥ郡とマリリ郡の境界であるカラエナ (Kalaena) 川からオンコ

ナ (Angkona) 川に至る、マリリ郡タンピンナ (Tampinna) 村のウジュンバトゥ (Ujung Batu) とマリウォウォ (Maliwowo) に入植したブギス人とトラジャ人の事例をみてみよう。両河川の間にはウォトゥとマリリを結ぶ道路が通っているが、かつては集落が全くなく、深い森林に覆われていた。カハル・ムザカルの内乱のときには、この道路も寸断され、ほとんど人が寄りつかなかったという。この地域に最初に住みついたのは、もとカラエナやオンコナに住み、反乱軍に入って村を出、内乱の鎮圧後村に戻ってきたルウ土着のブギス人である。この道路沿いに定着した彼らは、まず湿地林を伐開し、サワー・ラダン (sawah ladang, 焼畑水田) と呼ばれる水田を開いた。サワー・ラダンとは、まだ通常の水田の機能を持っていない、一見したところ焼畑とかわらない耕地であるが、水稻を栽培するところからそのように呼ばれている [田中 1982: 87-89]。耕地を開いたときには、草木の根がからまった芝土状のマット層が表層に厚く堆積しており、水稻の植付準備は山刀でその層を切り刻むだけである。こうして毎年水稻の栽培を続け、その耕地を通常の水田に整えていくのが、この地域での低地の開拓法である。

ルウ土着のブギス人がこのようにして開拓を始めたが、1970年代前半までは、この地域に住む土着のブギス人もほんの数える程度であった。他の県から移住者が入植し始めるのは、ここでも 70 年代後半からである。まず入植したのは、ウォトゥやマリリへ行商に来ていたブギス人である。行商の途次、この地域を通過していた彼らが、ここにまだ広い未利用地が手つかずのままで残っているのを知って、低地で水田を、そして山腹で丁子園を開墾するために入植し始めたのが最初である。その後、78年頃から多数のブギス人が入植するようになってきた。ちょうどこの頃、政府によるルウ県東部の開発事業のためにこの地域へも多数の人間が外部から出入りするようになっていた。また、ウォトゥとマリリを結ぶ道路の改良や、カラエナ川やオンコナ川の橋の建設などにより、この地域の交通はこの頃に飛躍的に便利になった。ブギス人移住者の大量の流入は、これら様々な開発事業の進展と軌を一にするものであった。タナ・トラジャからの移住者が入植し始めるのも 1970 年代終りからである。ブギス人とトラジ

ャ人の移住はいまも進行中で、カラエナ川とオンコナ川との間には、ブギス移住者が68戸、トラジャ移住者が同じく68戸入植しており、土着のブギス人は25戸と圧倒的に外部からの移住者が多数を占める地域となっている。

入植したブギスやトラジャの自発的移住者達は、大部分がウォトゥとマリリを結ぶ道路沿いに住居を建て、低地での開田と山腹斜面でのクブンの開墾にとりかかる。ブギス人は低地でも比較的高みの部分の開墾を好み、開墾当初はそこでトゥモロコシや陸稲を栽培する。そして、表層の有機物が分解するにつれて、畦を造成して耕地を区画し、徐々にそれを水田に変えていこうとする。まずラダンを開き次にそれを水田に変える開拓法である。水が十分でないときには、その耕地を畑状態のままで耕作し、トゥモロコシと陸稲の栽培を続けていく。一方、トラジャ移民は、低みの開墾を好み、当初から水稻を栽培して一気に水田を開いていく。土壌はまだ芝土状で、伐木の株跡や焼け残った倒木が耕地一面に散らばっているが、常に滞水しているので、水稻の栽培が可能である。開墾後2,3年すると畦を造って水田を区画し、徐々に普通の水田らしい外見が整えられていく。ブギスの開拓法が二段階であったのに対し、トラジャのものは直ちに開田するところが特色である。

山腹斜面の利用法にも両者の間で違いがある。ブギス移民の場合、前述したマナンガルのブギスと同じく、クブンの開墾は主に商品作物を栽培するためである。1970年代末から80年代初めには、ブームとも呼べるほどの丁子園の造成が彼らによって行われたが、ここでも丁子の栽培はうまくいかず、いまはカカオの新植が盛んである。これに対して、トラジャ移民のクブンは自給のための様々な作物を栽培するために開かれる。果樹類やバナナ、キャッサバ、サツマイモが多く、とりわけバナナがたくさん植えられて、この一部が販売される。彼らのクブンは、すでに述べたジャワ島の屋敷地と同じ役割を担った園地であり、トラジャ人の入植地の背後にはすでに相当大きくなった果樹類やバナナの林がひろがっているのが一般的である。

ところで、この地域に入植したブギス人の多くが木材の伐り出しに従事している。オンコナやカラエナの土着のブギス人集落には仲買人が居て、ブギス入

植者の伐り出した材を買いつけてくれる。また、州都ウジュンパンダンからトラックで直接この地域に買いつけにくる業者もいて、ブギス移民のなかには伐り出しを専業とするものが出てくるほど、伐採が盛んになっている。トラジャ人は伐り出しには従事しない。彼らがこれに関わるのは伐り出された木材をトラックに荷揚げするときだけである。20人ほどがグループを作り、毎日何台となくやってくるトラックへの荷揚げで、タバコ錢程度は稼げるという。トラジャ移民が水田耕作と園地での自給的作物の栽培に力を集中しているのに対して、ブギス移民は彼らのネットワークを利用して様々な分野に進出している。

この地域に入植するブギス人のもうひとつのタイプは、汽水湿地林でエンパン (empang 養魚池) を開こうとする人達である。マリウォウォでは、オンコナ川右岸に、主に南スラウェシ州中部西海岸のピンラン (Pinrang) 県から移住した36戸からなるこの種の入植地があり、彼らはオンコナ川下流でのエンパンの造成 (図5参照) と併行しながら、入植地では水田も開いている。36戸はひとつのグループを作っており、ピンラン県でエンパンを経営していた数人が組織者となって、1981年からこの地に入植始めた。グループの構成員は、エンパンの仕事を経験しているもと所有者や被雇傭労働者、あるいは全く経験のない農民など様々である。汽水性湿地のマングローブ林やニッパ林を伐り開き、土堤で囲った養魚池でイカン・ボル (サバヒイ, *Chanos chanos*) やエビ類を育てるこの養魚法は、南スラウェシ州で古くから行われている伝統的な方法である。南スラウェシ州では、西海岸のパンケップ (Pangkep) 県がもっとも有名なエンパン地帯で、ピンラン県のエンパンは、もともとパンケップ県からの移住者が始めたものであるという。そのピンラン県でもエンパン用地が払底してきたため、新たな適地を求めてこの地域に移住してきたのがこのグループである。

エンパンの造成は耕地の開墾と違って相当な資本力を必要とする。エンパン経営者によると、理想的とされる4haの大きさのエンパンをこの地域で造るのに、人を雇えば約350～400万ルピア (1円が約4ルピア) の経費がかかるという。土堤を造る部分の森林の伐採に50万、土堤 (川に面した大きな土堤と内部

の小さなもの2種がある) 造りに250万、土堤で囲った池の内部の伐採に20万、大小いくつかの水門に20万、そしてその他を合わせると、だいたいこのくらいになるという。入植者のなかには、ピンラン県で持っていたエンパンを売却したり、あるいはそれを入質したりしてある程度の資本を持ち、労働力を雇い入れる者もいれば、全く自力で造成作業をする者もいて、その作業の進め方はまちまちである。いずれにせよ、前述した耕地開墾を目差した自発的移住者とはいささか趣きを異にした、企業家的ともいえる移住者がいるのがエンパンを開こうとするグループの特色である。この地域の他に、隣村のマヌルン村にも同様なエンパン開発型のブギス移民のグループがいくつかあるが、ブギス人以外でエンパンを開く者はない。

3 適応のかたち

ウォトゥヤマリリに入植した自発的移住者の間にも、リアウ州でみられたのと同様な、適応の過程における民族間差異が認められるようである。水田の耕作に強く執着するトラジャやジャワの移住者と商品作物の栽培に意を注ぐブギス人移住者の定着の仕方はその端的な例である。

タナ・トラジャから移住してくるトラジャ人移住者はその総てが故地では土地を持っていない農民達である。彼らは、タナ・トラジャの小さな山間盆地で古くから耕作されてきた水田での水稻栽培に習熟している。この技術を生かして、タナ・トラジャにあるのと同じ水田を入植地に作るのが彼らの移住の基本的な目的である。開墾の当初は、この地域でサワー・ラダンと呼ばれる焼畑のような耕地と全く変わらない水田であるが、数年すれば畦畔を区切り、簡単な水路も作ってもっと水田らしい耕地に変えうることを熟知したうえで、彼らは入植地の選定と開墾を行っている。トラジャ人の入植地は、従って、低湿地を臨む山麓に開かれるのが一般的である。水田に近く、家屋の周りにはクブンを開くことのできるこのような環境がトラジャ人にとってもっとも好ましい立地となる。

同じように水田に執着するものの、ジャワ人移住者の水田に対する取り組み

方は、トラジャのものと異なっている。ジャワ人の場合には自ら水田を開くよりも、すでに出来上がった水田があるならば、そこで耕作するのが自分達にはより適していると考えているようである。ジャワでやっていたのと同じように、水田さえあれば、鋤ひとつで丹念な耕作をするのは簡単なことである。幸いなことに、ウォトゥヤ北隣のモンクタナ郡にはオランダ時代の移民政策によるジャワ人の入植地があって、すでに立派に整えられた水田がひろがっている。また、近年の移住政策による入植地も多数あり、これらは政府計画によるものだけに、灌漑水路などの基盤整備が重点的に実施され、なかにはすでに普通の水田と同じように灌漑を伴った二期作が可能な水田もできている。ジャワの自発的移住者の大部分は、このような先住のジャワ人の入植地の水田へ請負い耕作や賃労働に出かけている。こうしてジャワ人社会との関係を取り結びながら、いずれは自作できる水田を入手しようというのがジャワ人移住者の適応の仕方である。

やり方は異なっていたが、トラジャとジャワの自発的移住者達は彼らの故地と同じような水田耕作を入植地でも続けていこうとする点で共通している。これに対してブギス人移住者のこの地域への適応のかたちは、丘陵地の商品作物栽培から汽水性低地のエンパンの造成に至るまで、前二者にくらべてずっと変化に富むものであった。入植地の環境の利用においてブギス人はこの地域のあらゆる立地に進出しているといえよう [Tanaka 1984 : 67-73]。そして彼らの開拓がブギス人の商業ネットワークに強く結びついてなされている点も、トラジャやジャワの移住者にはみられないブギス人独特の適応の仕方であった。もちろんブギス人移住者の多数が入植地において水田を開いているが、水田を開くことだけがこの地域への適応の仕方ではないことを、彼ら自身の開拓の過程からうかがうことができよう。さらに言うならば、農業だけがここでの生活の糧ではないとでも言いたげなブギス人移住者の定着の仕方のなかに、リアウ州でみられたのと同じような、彼らの柔軟な適応のかたちを認めることができるのである。

Ⅳ 島嶼部の農業と移住民——まとめにかえて

リアウ州と南スラウェシ州の二つの事例でみたように、開拓空間の農業はいまも激しく変化している。リアウ州の低湿地では、潮汐灌漑水田とココヤン園による開拓がなされ、水田の改良、ココヤン園の拡大が進んでいる。南スラウェシ州では、低地の水田開墾、丘陵地の園地や畑の開墾、汽水性低地の養魚池造成など、様々な開拓がいままさに進行中である。このような開拓を担っているのは、いずれも成熟した農業空間から移住してきた農民である。彼らは故地において独自の農業技術に習熟し、それを携えて入植を試みようとしているが、定着、適応の過程には、それぞれの民族間で相違が認められた。入植地において水田の開墾や水稻栽培に強く執着したのは、故地においても集約的な水稻栽培に従事していたジャワ人やトラジャ人である。一方、前二者よりも変化に富む適応のかたちを示していたのはブギス人である。しかし、彼らの場合も、ブギス社会の商業ネットワークと連関した農業を営もうとしていた点を考慮すれば、出身地の伝統とのきずなを強く保持しつつ開拓に取り組んでいたといえよう。同じ環境のもとに移住したとはいえ、適応のかたちには各民族の農業における伝統が色濃く投影されていたわけである。

移住者の流入は、もともと島嶼低湿地で焼畑耕作などを行っていた原住民の農業にも大きな影響を与えている。定着性の乏しかった彼らの農業は、移住者の入植によって従来の可耕地面積の縮小を余儀なくされている。本稿ではふれる余裕がなかったが、例えばルウ県の場合、土着のブギス人やパモナ人のなかで、移住者にならって同じようなやり方で耕地を開き、定着農耕を始めている者も少なくない。焼畑耕作にくらべて除草に多大の労力をつぎこまねばならず、決して有利な農業ではないと考えてはいるが、政府機関による焼畑耕作の禁止や、なおも続く外部からの移住者の流入を前に、定着農耕への移行もやむをえないことと受けとめられているようである。こうして開かれた原住民の農耕地がこれからも彼ら自身によって続けて耕作されるかどうかはいまのところ不明

である。農業以外にも森林産物の採集やサゴヤン栽培、あるいは漁撈などの昔からの生業が彼らにはまだ残されており、つぎこんだ労働に対して十分な収穫が得られないようなら、彼らが開いた耕地を外部からの移住者に売り払ってしまうことも可能だからである。リアウ州の場合は、原住民であったムラユ人の姿はジャワ人やブギス人の入植地から消えてしまっている。同じことがルウ県でも起こるのかどうか、ごく近年の開拓空間であるこの地域では事態はまだ流動的である。

本稿で紹介した開拓空間は、はじめに述べた東南アジア島嶼部の地形区分によると、いずれも島嶼低湿地の区分に入る地域である。南スラウェシ州は全体としては非火山島に区分されるが、事例としてとりあげたルウ県のウォトゥヤマリは、小規模ながら島嶼低湿地の性格を備えた地域である。東南アジア島嶼部の地形区分にたち戻って考えてみると、開拓空間への移住者の流入は、火山島や非火山島の先進的農耕民による島嶼低湿地の農業後進地域への進出であったと言い換えることもできよう。彼らの移住は、集約化された土地利用と作物栽培に関する技術と知識の移転でもある。定着の初期には、それらをそのまま入植地に移植することは困難であるが、時間の経過とともに彼ら独自の農業の型を形成していく。そしてこの形成にあずかるのがそれぞれの民族の伝統的な農業の技術と知識の体系であったととらえることができよう。

自然生態的な枠組みによって規制された伝統的な農業の多様性に加えて、その枠組みを越えて移動する農民によって様々な適応の試みがなされ、その結果、さらに多様な農業を展開してきたのが現在みる東南アジア島嶼部の農業である。本稿では開拓空間における移住者の適応の過程を述べるにすぎなかったが、島嶼部全体を通していても、環境の改変と農業の変形に果した移動する農民の役割は極めて大きいものであった。その意味において、環境と農業技術の相互作用を学ぼうとする者にとって、東南アジア島嶼部の農業は格好の素材を提供しているといえよう。

参考文献

Collier, W. L. 1980. Limapuluh Tahun Transmigrasi Spontan dan Transmigrasi Pemerintah

- di Tanah Berau Kalimantan. *Prisma*. 5 (Mei, 1980): 12-35.
- Hardjono, J. M. 1977. *Transmigration in Indonesia*. Oxford Univ. Press.
- LBN (Lembaga Biologi Nasional). 1979. *Tanaman Pekarangan*. Bogor.
- Lineton, J. 1975. Pasompe' Ugi': Bugis Migrants and Wanderers. *Archipel*. 10:173-201.
- Maurenbrecher, L. L. A. 1939. Kolonisatie in de Palopo-Malilikustvlakte. *Kolonisatie Bulletin*. 4:21-25.
- McNicoll, G. 1968. Internal Migration in Indonesia: Descriptive Notes. *Indonesia*. 5:29-92.
- Pelzer, K. J. 1945. *Pioneer Settlement in The Asiatic Tropics*. American Geographical Society, Special Publication No. 29.
- Takaya, Y. & K. Tanaka. 1982. Selected Field Notes on Agriculture in South Sulawesi. In Mattulada & N. Maeda (eds.) *Villages and The Agricultural Landscape in South Sulawesi*: Appendix. CSEAS, Kyoto Univ.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京：勁草書房.
- 田中耕司. 1982. 「南スラウェシ州ルウ県北部への人の移動と水田農耕の技術変容」『東南アジア研究』20 (1): 60-93.
- Tanaka, K. 1984. Agricultural Adaptation among Bugis Spontaneous Migrants: A Case Study in Northeastern Kabupaten Luwu. In Maeda, N. & Mattulada (eds.) *Transformation of The Agricultural Landscape in Indonesia*: 61-84. CSEAS, Kyoto Univ.
- van Beusechem, D. 1939. De Sawahbouw in de Moerasstreken van de Zuider- en Oost-erfdeeling. *Kolonisatie Bulletin*. 7:2-7.
- 渡部忠世；田中耕司. 1984. 「東南アジア島嶼部における耕地利用と作付体系」文部省科学研究費補助金総合研究（B）成果報告書；角田公正（編）『温・熱帯共通畑作物のクロッピングシステムに関する研究』：94-118.
- 山下晋司. 1982. 「水田ミナンガ——サダン・トラジャの一枚の水田をめぐる社会人類学的覚書き——」『東南アジア研究』20 (3): 373-392.

（田中 耕司）

潮汐湿地の人と生業

I スンダシェルフの潮汐湿地

東南アジア島嶼域の海岸部には、広大な面積の低湿地が存在する。例えば、スマトラ東岸、マレー半島南部、ボルネオ沿岸、ニューギニア南岸などである。この低湿地地帯は、きわめて平坦な、100m 以下の浅い海であるスンダ陸棚周縁部を占めている。スンダ陸棚は、洪積世の海進・海退期に刻まれた多くの段丘面をもち、現在の低湿地も、かつては高い台地として長期間の陸上風化にさらされていた。しかし、後氷期の海面上昇と共に沈水ないし、湿地化したものである。

大陸部のデルタが、集水面積の大きさに比べて堆積盆が小さい為に、埋積が速やかに進むのに対し、島嶼域低湿地では堆積盆の面積が圧倒的に大きく、埋積が進まない。埋積の進まない広大な平坦地は、海水面の上昇と共に湿地化する。その湿地には旺盛に森林が茂る。沿岸の汽水湿地はマングローブが茂り、マングローブ泥が堆積する。淡水湿地には、高さ 60 m にも達する降雨林が茂り、それらの高木が倒れたあとには、また高木が伸びる。水づかりの状態で倒木の分解は抑えられる。結局、土砂は堆積せずに、厚い泥炭が堆積することになる。厚い泥炭湿地が広く分布することは、島嶼域低湿地の著しい特徴で、大陸部デルタには見られない。

この低湿地のもうひとつの特徴は、潮汐の干満差が大きいことである。普通 3m、春の大潮では 3.5m を超える。干潮時には、マングローブ帯の前面に広い干潟が出現し、そこにはマングローブ帯からパイオニアが点々と進出する。満潮になると、このパイオニアは海の中に立つ。また、川水は逆流し、川岸をこえて、あるいは水路を通して、陸地に溢れる。干潮時には、溢れた水が再び

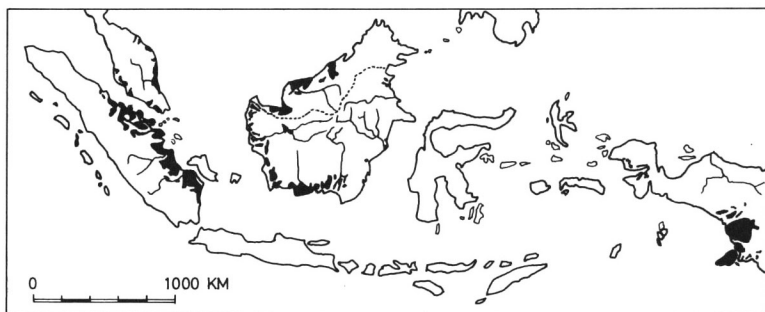


図1 インドネシア・マレーシアの泥炭湿地 (Polak 1975 より引用)

川へ勢いよく排水される。

上流へ向うと、干満差は次第に小さくなるが、他方、乾季、雨季の年間水位変動が大きい。雨季に林に溢れた水は、数カ月間湛水が続ける。このような立地に泥炭が堆積する。

干満が上流のどこまで及ぶか、川筋により異なる。南スマトラのパレンバンは海岸から 100km 内陸で、干満差 3m に達する。他方、距離は同程度でもジャンビでは干満はない。逆水現象に関わる要因は複雑である。

マングローブ泥や泥炭の分布する低湿地を、インドネシアではダエラ・パサン・スルット (daerah pasang surut) とよんでいる。この小文ではそれを潮汐湿地とよぶ。潮汐湿地の分布は泥炭の分布にほぼ重なる。図1は東南アジアにおける潮汐湿地の分布を示していると考えて差し支えない。

潮汐湿地の別の特徴は、ごく最近まで 一面の林に覆われていたことである。移民開拓が進む現在でも、尚、東南アジア最大の森林地帯である。森林で残ったのは、その中に入るのをためらわずにはおれない、恐ろしさをたたえた空間だからである。人々は、むしろまわりの水上や水辺に杭上家屋を建てて住む。川岸には、僅かな焼畑地を開く。

この潮汐湿地に古くから住みついて、漁撈や湿地焼畑を行ない、時には林の中の迷路のような感潮水路から海賊として出撃する人々が居た。オラン・ラウトといわれる。オラン・ラウトは一種の生態型呼称であり、部族的出身は様々

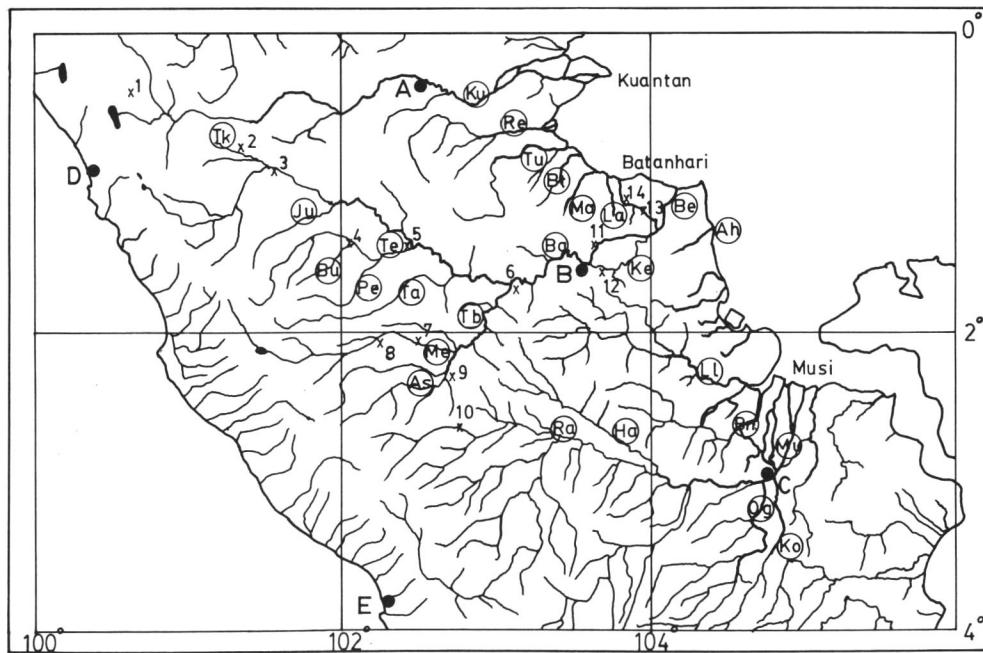
である。ムラユ、ブギス、バンジャール人などが含まれる。彼等は主にマラッカ海峡周辺の潮汐湿地、浅い海、そこに浮かぶ島々を住処としてくらして来た。オラン・ラウト以外に、ジャワ人、ミナンカバウ人も、やはり、この湿地帯に入りこむ。人々をこの潮汐湿地によびよせる動機は何だろうか。

潮汐湿地の中に突き出た陸地の先端には、古くから、シュリヴィジャヤやマラユなどの国があった。これらの国の物質的基盤は、マラッカ海峡という東西交易路を扼している、その地理的位置によりえられたものである。シュリヴィジャヤはその富を背景として、7世紀には既に、南海における仏教研究の中心地を湿地林の中に作り上げていた。きらびやかな文明のおくりものが唐突に輝やく状況があった。文明は見事な田畑を背景にしている、というのは我々の常識的感覚だが、シュリヴィジャヤはそのような形の田畑はもたなかった。諸蕃誌によると、その国の王は穀類を食せず、サグ（沙糊）を食すとある[Hirth & Rockhill 1970:61]。サグは、今もマレー世界では一般的な食料であり、サゴヤシから採取するデンプンである。シュリヴィジャヤの農業は森林産物の抽出が主体なのである。この性格は島嶼域の農業に、今も濃厚に残っている。マレー型農耕は熱帯降雨林と東西交易路の入口、このふたつの生態的・地理的環境の鋳型で作られている。

以下、スマトラ中央部、バタンハリ川流域の潮汐湿地周辺に視点をすえて、マレー世界の環境と生業の一端を述べる。

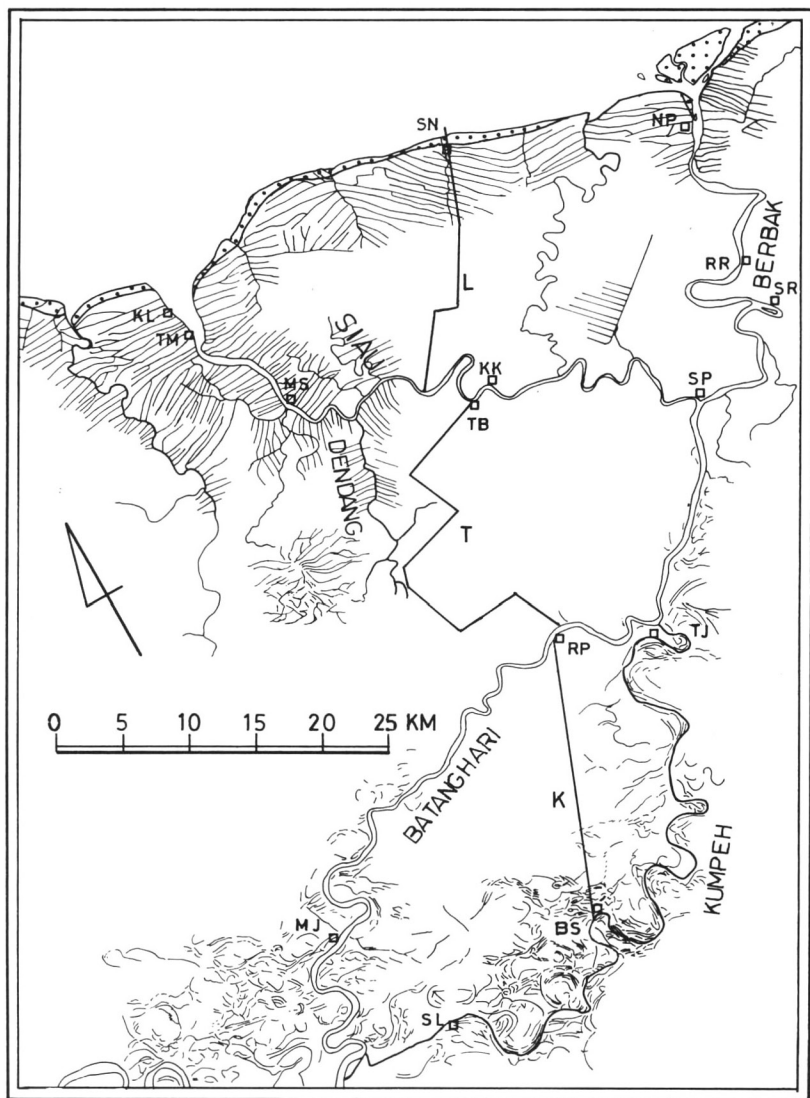
II バタンハリ川流域潮汐湿地の環境と景観

図2はバタンハリ川と近隣の水系を示している。ミナンカバウ高地に始まり、山地から丘陵地域に下る。スンガイ・ダレ＝ムアラ・ブンゴ＝バンコを結ぶ線から西は、流れの小さい支谷域である。丘陵地域を東へ流れ下る間に主要な支流4本が合流する。ジュジュハン川、トゥボ川、タビール川、トゥンブシ川である。ジャンビの町は丘陵の末端に位置している。ここまでは中流部である。ジャンビの町を出はざれると、すぐクンペ川を分かたが、まもなく再び合流す



[都市] A: レンガット B: ジャンビ C: パレンバン D: パダン E: ブンクル [町村] 1: パガルユン 2: スンガイ・ランサット 3: スンガイ・ダレ 4: ムアラ・ブンゴ 5: ムアラ・トッポ 6: ムアラ・トゥンブシ 7: カラン・ブラヒ 8: パンコ 9: サロラングン 10: スルラングン 11: ムアラ・ジャンビ 12: ソロック 13: コタ・カンディス 14: ムアラ・サバック [川] Ah: アイル・ヒタム As: アサイ Ba: バタンハリ Be: ブルバット Bn: バニユ・アシン Bu: ブンゴ Ha: ハリ・ルコ Ju: ジュジュハン Ke: クンベ Ko: コムリン Ku: クアantan La: ラガン Ll: ララン Ma: マンダハラ Me: ムランギレ Og: オガン Pe: プルバット Ra: ラワス Re: ルテ Ta: タビル Tb: トウンブシ Te: トッポ Tk: タクン Tu: トウンカル

図2 バタンハリ川と周辺の水系



〔地名〕 BS: バンソ KK: コタ・カンフィス KL: カンホン・ラオト MJ: ムアラ・ジャンビ MS: ムアラ・サバック NP: ニッパ・パレジャン RP: ランタオ・パンジャン RR: ランタオ・ラサオ・デサ SL: ソロック SN: シンブルナイク SP: シンパン SR: スンガイ・ランブート TB: トウルック・ブアン TJ: タンジュン TM: トウルック・マジュリス

図3 バタンハリ川潮汐湿地の地文 (1972年撮影の10万分の1の航空写真による)

る。分流地点より下流は既に潮汐湿地より成る下流部である。北東流して、シンパンで、西流するバタンハリ本流と、北流するブルバック川に分かれる。両川で抱かれた沿岸低地はブルバック・デルタと呼ぶ。

ここでは、本論の主要テーマである潮汐湿地の生態的環境を述べておく。

潮汐湿地の様子を10万分の1の航空写真(1972年撮影)で見よう(図3)。単調な、じゅうたんのように見える湿地林の中に、いくつかの模様が見える。タンジュンまでのバタンハリ川、クンペ川沿いに、半月状の線が何本も並ぶ。川の蛇行跡の多いこの地域は、①中流部移行帯である。このあたり、川の水位は雨季乾季の年間変動が大きく、変動幅は4.5m程もある。潮汐変動は乾季に見られるが、1m以下である。

この北にひろがる広大な湿地林は、②下流部中央帯とよぼう。水位変動は上記に似る。

沿岸部には、感潮水路から魚骨状に伸びる、農民開拓の排水水路が無数に見られる。1940年代の地図では、これは川口部に僅かに目立つ程度である。30年間で開拓が著しく進行している。この地域を③沿岸帯とよぶ。ここでは水位は毎日3.5m上下する。

海岸線には、薄く④マングローブ帯が張りついている。

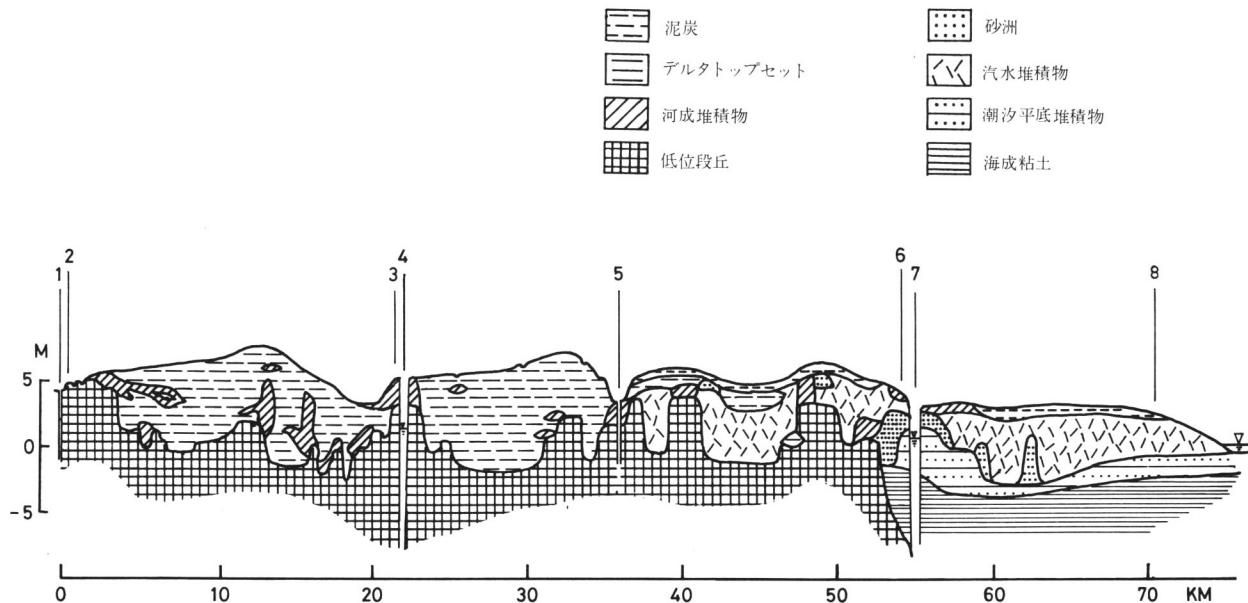
ドンダン川南西部に、放射状模様が見られる。これは中流部からとびはなれた⑤残丘である。

筆者は図3に示したK、T、Lの径路に沿って踏査を行なったが、中央帯の林は、1972年に比べて著しく減少し、径路Tの半分より海岸まで、林は殆んど姿を消していた。

次に、調査径路に沿って、地形断面図と堆積層序を簡単に述べておこう。図4はボーリング調査の結果をまとめたものである。

中流部移行帯では、灰白色の基地中に赤褐色の班紋のある、堅硬な粘土が地表に露出している。これは低位段丘である。川沿いではその上に更に自然堤防が発達している。

低位段丘面は中央帯に向って低下し、地下に没する。一種の後背湿地地形で



1: クンベ川 2: パンソルナイク 3: ランタオ・パンジャン 4: バタンハリ川 5: ドウンダン川源流部 6: トウルック・ブアン 7: バタンハリ川 8: シンブ

図4 潮汐湿地の地形と堆積層序 (高さは平均潮位からの高度, 古川・スビアンディ, 1985)

ある。そして、その上には、厚い泥炭が堆積している。時に7mを超える。泥炭は圧倒的に木本植生の遺体である。組織の見える木片、枝、樹皮、葉、根、それに不定形赤褐色の植物泥の混合物から成る。中央帯中央部に向って、泥炭は凸レンズ状に厚くなり、中央部では、きわめて含水比の高い、未分解木片と水がゆ状植物泥から成る泥炭が分布する。

泥炭層の中には、時々無機質粘土層が挟在する。これは河成堆積作用の影響を示している。湿地に泥炭が堆積する途中で、川筋が流路を変え、川沿いに溢流堆積物が侵入し、泥炭形成を中断したものである。しかし、泥炭の成長につれて地盤が次第に高まり、河成堆積作用は低下し、全体として、雨水函養型の泥炭湿地が広く形成されたものである。

泥炭堆積が始まった時代は C^{14} 年代測定法によると、径路Kの7.5mの泥炭が 5710 ± 130 年 BP、径路Tの4.3mの泥炭が 6830 ± 180 年 BP、径路Tで、マングローブ泥に覆われた3.9mの泥炭が 5890 ± 180 年 BP である。泥炭の見かけの堆積速度は、途中が速く、後で遅い。先述の7.5mの泥炭では、7~4mの間が2.2 mm/年、4~2mが6.3 mm/年、だが2m以上では、0.6 mm/年である。この速度は泥炭の堆積と分解・圧密を含むので、上部の小さな値は、泥炭分解や圧密に由来するのかもしれない。

6800~5700 年 BP という時代は、日本では縄文海進の時代に相当する。それ迄高い台地であり、陸上風化を受けて赤褐色斑紋土の形成された低位段丘は、後氷期のこの海進時代に湿地化し、そこに泥炭が堆積し始めたことが判る。

一方、中央帯から沿岸帯への移行部（図4の5から6までの部分）は堆積層序が異なる。結論を言うと、ここでは低位段丘の上にマングローブ泥が厚く堆積する。海水面の急激な上昇で、台地が一挙に汽水域に覆われたことを示す。

この沿岸移行部の基盤は、図4に見るように、起伏5mに及ぶ高みが処々にあり、これらの高みは、汽水域の中に島状に突出していただろう。この地域は海進海退に伴って、海域と陸域が頻繁に交代したと考えられる。地盤高、海水位、侵蝕・堆積の関係によって、複雑な堆積層序が形成されている。層序から復元すると、表1に示したような堆積環境が推定される。

表1 バタンハリ川下流域の地域区分

地 域 区 分	層 序 類 型	景 観
中流部移行帯	台地面（低位段丘） 蛇行跡低地 自然堤防	ゴム林 短期休閑水田（減水季稲） 村，果樹林
中央部	泥炭被覆台地 自然堤防	湿地林 小村，アレンヤシ
沿岸部移行部	台地面（沖積段丘／低位段丘） 汽水浸入泥炭被覆台地 汽水浸入台地 自然堤防 旧砂洲	湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 湿地林→政府開拓地，陸田（雨季作稲） 小村，水田（雨季作稲）サゴヤシ 湿地林→政府開拓地，竹ヤブ
沿岸部	陸化潮汐平底 旧砂洲	湿地林→農民開拓地，水田（雨季作稲）， ココヤシ，サゴヤシ 湿地林→農民開拓地，水田（雨季作稲）， ココヤシ
マングローブ帯 残丘	マングローブ泥 丘陵斜面 谷底	マングローブ ゴム林，竹ヤブ，果樹林 短期休閑水田（雨季作稲）

図4の7周辺には巨大な砂洲地帯がある。この砂洲の形成は上記の汽水湿地を閉塞したものであろう。縄文海進期，かなり長期にわたって安定した海岸線であったと思われる。沿岸部では，低位段丘面は既に地下深く没している。ここは海進期には完全に海域であった。沿岸部の堆積層序は単純である。地表下6,7mには海成粘土がある。その上には砂—粘土—シルトの薄層が交互に堆積した堆積物がある。これはタイダル・フラット（潮汐平底）の堆積相である。その上にはところどころに砂洲が発達している。更に，これらを覆って，マングローブ泥が厚い。

以上のことから，現在の沿岸部は，縄文海進の頃に，浅海ないし，潮汐平底であったと思われる。海退が進行すると，マングローブ帯に遷移し，次第に海岸線は前進したもので，きわめて若い陸地である。表面は，陸化後の淡水湿地に生じた腐植質のデルタトップセットが覆っている。

以上の結果をまとめると，潮汐湿地帯は6地域に区分され，堆積層序類型は15の型が認められる。これを現景観と合わせて一覧表にして表1にまとめた。景観を簡単に説明しておこう。中流部移行帯には，ムアラ・ジャンビのような，

古い集落がある。低位段丘、自然堤防にゴム林と果樹林が広い。蛇行跡低地は、雨季に深く湛水するので、水のひく乾季に稲を植付ける。

中央帯中央部は泥炭被覆台地で、厚い泥炭湿地を密林が覆う。ロタン、ジュルトン（天然ゴム）、ガハル（沈香の類）、木材の抽出が主な生業である。

沿岸移行帯も最近まで湿地林で覆われていたが、現在はここに政府開拓地が広がりつつある。自然堤防には従来から小集落があり、サゴが多く見られた。政府移民は内陸に入植し、乾きすぎた開拓地の陸田で、雨季に、水稻とも陸稲ともつかぬ稲を植え、乾季、裏作を行う。

沿岸帯は農民開拓が早くから入っており、林は姿を消している。農民は魚骨状に水路を掘削し、湿地を排水して、稲とココヤシを栽培する。一部には潮汐灌漑水田が可能である。川沿いにはサゴヤシが点々と残る。

Ⅲ バタンハリ川流域の人と集落¹⁾

1820年にバタンハリ川をジャンビまで遡航した Crooke の記録によると、この間に見た村は僅かに 12、家 112 戸、住人は全部で 600~700 人、殆んど全面、林に覆われている [Crawford 1856:161]。

20世紀末の今日でも、まだ厚い密林に覆われる潮汐湿地は、しかし、意外に古くから、種々の文明を受け入れ、住民の中には、トルコ、アラブ、インドなど遠国の人の血がまじり合っている。この節では、バタンハリ流域の歴史的変遷を示す資料をひろっておきたい。いわば筆者の備忘録である。

バタンハリ流域に出土する最も古い碑文は、中流域トゥンブシ川支流のムランギン川沿い、バンコの東約 25km にあるカラン・ブラヒ (Karangbrahi) で発見されている。古代マレー語による石碑で、シュリヴィジャヤの統治に対する恭順をよびかけている。この石碑と同文のものがバンカ島のコタ・カプール (Kotakapur) で発見され、それには 686 年 AD に相当する年代が付されている。このシュリヴィジャヤは、パレンバンのブキット・スグンタン (Bukit-seguntang) 出土の石碑によると、682 年に水軍をもって行われた遠征後、その

広い支配域を確立した。他方、シュリヴィジャヤの支配を受け入れたバタンハリ流域は、中国の求法僧義浄の著書中にその名が現われる「モロユ（末羅遊）」（Moloyu）と考えられている。義浄は671年、インドへの途上、シュリヴィジャヤに6カ月滞在し、その後引き続き2カ月「モロユ」に滞在した。シュリヴィジャヤには1000人をこす仏僧がおり、仏教研究の中心地であった。インドからの帰途、685年から695年迄、再びシュリヴィジャヤに滞在したといわれる。

シュリヴィジャヤや「モロユ」は港湾国家として未曾有の繁栄をとげたようである。インドのナールンダで発見されている銅板文書にはスヴァルナドヴィーバ（スマトラ）の国王、バーラプトラ（Bhalaputra）が860年頃、この地に僧院を建立し、その維持の為に村を寄進したことが記されている。

この繁栄は、1275年、クルタナガラ王のスマトラ遠征（Pamalayuといわれる）まで続くのだが、この間の遺跡には次の諸例がある。

バタンハリ川潮汐湿地の自然堤防に、ムアラ・ジャンビがある。ここにはスマトラ最大といわれる仏教寺院遺跡が残っている。4基はレンガ建物が残る。最大のものはチャンディ・ティンギで、周囲150m四方の寺域の中に、レンガ作り3層回廊式の建造物がある。ここから東へ、今は空濠となった10m程の濠で囲まれたアスタナまで300m程の道沿いには、青磁、白磁、赤陶等の陶磁器片が大量に出土する。これらの寺院の年代は、はっきりはしないようだが、発掘したSchnitgerは11～12世紀のものと推定している。石刻のナンディ像と仏陀立像が二つ。それに最近、頭部を欠く石刻婦人像が発見されている。これは全体的なデザイン、ネックレスや玉の模様などから、シンゴサリ出土の般若波羅蜜多像のコピーと推定されている。

ジャンビの町の東、クンペ川沿いのソロクで、大きな石刻の仏陀立像と、四つの大きなマカラが発見されている。マカラのひとつには1064年相当の日付がある。

更に最近だが、沿岸帯に近いコタ・カンディスで、ブロンズ製の女人立像が岸直下の水中から偶然に発見されている（1982年8月13日付Kompasに記事がある由）。岸はマングローブ泥上の沖積段丘である。村人の話では、集落のす

ぐ背後、土中のレンガ積み壇の中にも彫像があるとのことである。

13世紀後半には、シャムの勢力がマレー半島を南下し、そこでのジャワの影響力を低下せしめる。クルタナガラ王 (Kertanagara) は1275年スマトラに兵を進め、「マラユ」＝ジャンビを前進基地とし、シャムを牽制する。この時代の石彫がバタンハリ上流域のラムバハンで発見されている。不空羅索観音を中央に配したもので、1286年、クルタナガラ王の命によりジャワから運ばれ、ジャワとジャンビの結びつきを強める為に「マラユ」の王に寄進された。

1347年、「マラユ」の王、アディティアヴァルマン (Adityavarman) (彼は一時マジャパヒットの廷臣であった) は、この像をスンガイ・ランサットからラムバハンに移した。スンガイ・ランサットでは、アディティアヴァルマン自身を模した巨大なバイラヴァ像も発見されている。

アディティアヴァルマンの「マラユ」国は次第に内陸へ、結局、パガルユン (Pagarruyung) 地域まで移動し、ミナンカバウ王国に変身したと推定されている。

14世紀半ば、ジャワはシュリヴィジャヤを攻める。それ以後、かつての一大交易港パレンバンは旧港とよばれ、交易センターとしての機能と権力を失う。

「マラユ」国の中心が内陸へ移ったことと相まって、ここにスマトラ東岸の港湾都市は、マラッカ、ジョホールにその位置をとって代わられる。

シュリヴィジャヤの興隆とその衰退が何に帰因しているのか、諸説あるわけだが、私の見た文献の中で印象に残ったのは諸蕃誌の次のような文である。英訳ではこうなっている。「この国 (三仏齊) は大洋中、海峡を扼す位置にあり (中略)……昔は他国の海賊を締め出す為に鉄の鎖をはっていた (中略)……商船が入港する時はそれを下げる (中略)……商船が寄港することなく通過しようとする、人々は船を出して決死の勢いで攻撃をする。この国が交易港として大をなす理由である」。当時は海賊が多かったことが判る。それに随分、強引な商法である。船が少ない間はとも角、海峡経由の交易船がふえてくると、この強引な商法は、他の交易国にとって重大な障害になることは容易に推察できる。チョーラや、ジャワのシュリヴィジャヤ攻撃もこのあたりの事情に根ざしているように想像される。

15, 16 世紀のジャンビの歴史は伝承の世界にうずもれてしまうが、次第に現在のジャンビの町を中心とした国が出現する。オランダ時代にまとめられた記録は次のように述べている [Tideman 1938:61-83]。

バタンハリ川河口に近いムアラ・サバックに住む、ミナンカバウの女王プトリ・ピナン・マサク (Putri Pinang Masak) と、漂着したトルコの王ダトゥ・パドゥカ・ブルハラ (Datuk Paduka Berhala) の結婚により生まれた4人の子供の内のひとり、オラン・カヨ・ヒタム (Orang Kayo Hitam) が、「マラユ」＝ジャンビにジャワからの独立をもたらす。16世紀初頭、独立ジャンビの国王即位式に立ち会った9人の王族、及び後に派生した3人の王族から成るドゥアブラス・バンサ (Duabelas Bangsa) の王国が生まれ、ジャンビから、バタンハリ本流沿いに集落が発展していく。12国はジャンビの国王に対する貢納以外に、特定の徭役義務を分担した。それらは、戦士、工兵、運搬、儀礼兵、饗宴、行列護衛、北面、近侍、宮殿護衛、傘もち、である。

他方、バティン (Batin) とよばれる住民がいた。これは12王国の住民よりも古いと考えられている。トゥムブシ川、ブンゴ川、トゥボ川、ジュジュハン川の支谷地域に勢力を張っていた。国王はこれらの集落の首長 (バティン) に称号とその領域を特定する任命勅令を発行する。バティンがこれを受け入れると、国王の支配権を承認したことになり、また逆に、その地域でのバティンの称号と領域を国王が承認したという構造になっている。バティンは2年半に一度、黄金で税金を払う。

国王のこのような懐柔策に同意しなかったバティンもあり、それらは、トゥボ川、ブンゴ川の支谷地域に自治地域として残る。

より新しい集落として、プングル (penghulu) とよばれる移住民がいる。彼等はミナンカバウから、金探しに来た移民で、タビル川上流、ブルパット川上流に見られる。プングルはバティンに対して従属関係にあり、国王とは無関係である。

結論的には、バタンハリ本流の集落は、ミナンカバウと沿岸ムラユの混交した住民が占め、支谷地域は、ミナンカバウ要素のより強い住民が居住していた

といえよう。ところで、ミナンカバウは元来、内陸部に入った「マラユ」の謂であるとする、ミナンカバウと「マラユ」の混交とは意味をなさないわけだが、アディティアヴァルマンが、パガルユンに移って作られた碑文には南インドのグランタ文字や、タミル語で刻まれたものがあり、南インド移民の多かった状況が指摘されている。ミナンカバウ高地へ移った「マラユ」勢力は、インド的要素の強い集団に吸収されたと推定される。オランカヨ・ヒタム以降のジャンビ王国の住民は、したがって、ミナンカバウ、つまり「マラユ」をとりこんだインド勢力と沿岸ムラユの再混交過程にあると想像している。

IV 潮汐湿地の生業

ジャンビ州の人口はスマトラ各州同様、最近急速に増加している。中でも著しいのは沿岸帯で、そこは米とココヤシの一大産地である。沿岸帯の人口は、1930年に3万3400人、ジャンビ州全体の13.6%であったが、1982年の統計では32万人にふえ、全体の21%を占めている。ところで1930年の統計は、部族別の数字も示す。それによると、ジャンビ人13万6000人(55.5%)、ミナンカバウ人5万8000人(23.6%)、次いで、バンジャール人が1万6000人(6.8%)と大きな比重を占める。現在は、ブギス人が大きな比重を占めるだろう。要するに、沿岸帯の開発と人口増加に寄与したスマトラ外からの流入は、ここ100年以内では、まずバンジャール人、ついでブギス人である。それでは彼等が流入する以前の潮汐湿地の生業はどんなものだったろうか、またそれは移民の大量流入によって、どんな変化を受けただろうか。次にそれを辿ってみよう。

1 伝統的生業

まず、陸上の土地利用だが、沿岸帯では、川沿いの湿地で、サゴヤシ栽培と焼畑の稲栽培が重要なものであったろう。

ブルバック川河口部の集落ニッパ・パンジャンの元パッシラ、アハマッド

(Ahamad) 氏に、戦前の主食を聞くと、米とサゴヤシであったという。サゴヤシは、ニッパ・パンジャンから南へ、ブルバック川沿いに長く続くサゴヤシ園で栽培された。ここは沿岸帯の川沿い部分で、自然堤防の高みがなく、満潮時には川沿いの数百メートル幅が水びたしとなる、そういう立地である。

ところで、このサゴヤシ園の成立を聞くと、こちらの意図する論旨から外れるのだが、面白いことが判って来る。アハマッド氏もそうだが、カンポンラオトの元プングル、ランタオ・ラサオ・デサの現プングル等、ブルバック・デルタの古い集落の首長は、ひとつのファミリーの出自で、彼等の祖先は、パンゲラン・ウィロハディクスモ (Pangeran Wirohadikusmo) といい、19世紀の後期に東ジャワからジャンビへ来た移民である。イスラム神学教師として、スルタン・タハに召しかかえられ、その篤い信任をえて、外交についてもタハの右腕として活躍した。1887年に、現在のランタオ・ラサオ・デサを領地として与えられた。ウィロハディクスモは農業についても種々の工夫を行い、潮汐湿地の開拓を進めた。先述のサゴ園もそのひとつである。湿地林の中での小規模の焼畑栽培は、動物害、虫害を受けて大変不安定である。食糧安定の為、サゴヤシ園を開いたと伝えられている。

大きなサゴヤシ園は、バタンハリ本流のエステュアリの底部、ムアラ・サバックの対岸にもあった。そこには、バンジェルマシンから約50年前に移住して来たバンジャール人の掘削した、パリット・サゴ (Parit sago) という小さな水路がある。その人、ハジ・モハマッド (Haji Mohamad) 氏に当時の状況を聞くと、この水路入口に1936年頃、中国人がサゴ工場を作り、1945年まで操業していた。モハマッド氏等は、伐採したサゴヤシを水路にうかせて工場へ運んだ。年間100本も切ると、十分な現金収入がえられた。代金で米を買い、朝はサゴ、昼夜は米飯をくったという。

自分でサゴヤシ澱粉をとる場合、水路沿いにサゴ洗い場を設ける。サゴヤシは切り倒して1m長位に切り揃え、二つ割にし、ズイをおろし金でこすりとり、サゴヤシの葉鞘を利用したトユの中で、水をまぜて澱粉をしぼる。白い汁は、ふるいを通して容器にうけ、沈殿させる。これをくり返すと、細粒の良質澱粉

がえられた。

サゴの調理法は3通りあった。ンゴロ・ンゴロ (ngoro-ngoro) は熱湯を加えてクズ湯状にしたもので、時にバナナ、米もまぜた。サグルンダン (sagu rendang) は鍋で乾燥サゴを煎ったもので、ココナットミルクを加えて食べる。レンペン・サグ (lempeng sagu) は、乾いたサゴヤシ澱粉に塩、ココナットミルクをまぜ、水を少し加えて、つなぎにする。これを特別の鍋に入れて手で均らし、ふたをして火にかける。でき上りはチャパティに似ている。

サゴヤシ澱粉はインドネシア島嶼で重要な食糧である。マルクで、町はずれに入ると、今もサゴヤシとイモは主食である。戦前のバタンハリ流域も、サゴヤシ圏の刻印をしっかりと帯びていたわけである。

三仏斉の王が穀類を食わず、サゴを食うとの記述に続いて、諸蕃誌はその産物をあげる。それらは亀甲、カンファ、沈香、ラカ木、丁字、サンダルウッド、カルダモンである。外国商人は、金、銀、陶磁器、絹にしき、絹紗、砂糖、鉄、米と交換する、とある。12、13世紀、スマトラ東岸の主食はサゴであり、米は僅かに輸入される程度だったと推定される。

沿岸帯へとりつくパイオニア達の最も重要な生業は、勿論、漁撈である。パイオニアは、オラン・ラオト、ムラユ、ムラユ・ティムール、それにブギス人などである。ブギス人は出自が比較的はっきりしているが、その他の場合、区分は漸变的である。オラン・ラオトはどちらかと言うと、マラッカ海峡の島々に住む人々を指し、ムラユは、バタンハリ、トゥンカル、ムシなどの地方住民、ムラユ・ティムールはマレー半島やカリマンタン由来のムラユ、といった意味が含まれている。これらのパイオニアが漁撈を行いつつ、潮汐湿地周辺を転々と移動する、そういう世界が存在する。

バタンハリ川河口にはトンネル網をおろすバガン (bagan) 漁が多い。これはいわば定常漁場だが、移動漁場も沢山ある。乾季は、ジャンビとパレンパンの境の感潮水路とその海域へ出漁し、西風が強くなる前に、ブルハラ岬をまわって戻って来る。

雨季は、カンポンラオトから、リアウ州のクアラ・エノックまでの間で漁を

する。

転々と移動する内に、各地の潮汐湿地に土地勘をつけると、マングローブをぬって潮汐水路を分け入り、林を少し切り開いて小屋を建て、焼畑に稲を植える。時には水路を掘削して排水し、ココヤシを植える。こういった小さな開拓地を、あちこちに幾つも持っている。これが潮汐湿地のパイオニア達の伝統的生業スタイルであった。

2 バンジャール農耕

ところが、19世紀末ないし、20世紀初頭以降、大きな変化が起る。バンジャール人による定着的湿地開発である。カリマンタンのバリト川流域は、19世紀後半、バンジェルマシン王朝の継承問題に端を発して、オランダの介入とそれに対する反乱が始まり、不安定状況が長らく続く。丁度その頃シンガポールを中心とする、オランダ、イギリス勢力による海運網の確立もあずかって、バンジャール人は大挙、マレー半島やスマトラ東岸に移住する。ジャンビでは、トゥンカル川流域にその集中域がある。

クアラ・トゥンカルの元チャマット (camat) マスダール (Masdar) 氏の父親は、そのような移民のひとりとして1914年にトゥンカル川河口へ来た。丁度、初代ブングルにタンジュン・ピナンからのムラユ・ティムールが選ばれた頃で、ムラユの漁師村があった。バンジャール人達は林を伐開し、水路を掘削して、湿地開発を行なう。開いたフマ (huma) に稲を植え、同時にココヤシを植える。ココヤシが樹冠を伸ばすまでの3、4年は稲を植えることができる。しかし、次第に溝と畝に掘り分け、ココヤシ園に切り換えていく。開拓は次第に内陸へ進む。

稲作法は次のようなものである。ニッパ・アタップ (atap) かバナナの葉に泥を薄くおき、芽出し粃をばらまいて、バナナの葉でおおう。これを床机の上か、畦状の高みにおく。1週間で4指位に伸びると、苗をアタップからはぎとり、ふとんを巻くように巻いて、フマに運ぶ。そこには第2苗代用地を準備しておく。巻いた苗代をマッチ箱大にちぎり、掘棒 (asak) であけた穴に植える。

第1苗代をスマイ (semai) またはタブラン (taburan), 第2苗代をラムバカン (lambakan) またはラチャカン (lacakan) という。第2苗代に更に40日おいた苗を, 11月頃, やはり掘棒移植する。この時本田は乾いている。やがて雨もたけなわとなると, 時々, 湛水する。小さなパランで1回草とりをする。早生稲は5ヵ月後, 普通稲は6ヵ月後に穂摘みナイフ (renganan) で収穫する。これは要するに湿地焼畑の稲作法である。しかし, 焼畑とはちがって, 最終的にはコヤン園ができ上る。

排水のよい沿岸部や水路近くはこの経過で数年後にヤン園になるが, 排水の悪い内陸部では稲作が継続する。すると当然, カヤツリ草がふえ, 高く茂る。バンジャール人は特徴的な草処理を行なって, 定着水田を確立する。草処理の方法は次のように行う。(1) 2m の丸太をころがして, 高く茂ったカヤツリ草をなぎ倒す。これをインジャ・インジャ (injak-injak) という。(2) その後, ふたりがかりで, カヤツリ原に切目を入れる。ひとりが2丁のパランを草の上に支え, もうひとりがパランを下に押しつけながら前進する。カヤツリ原は50cm から1m 幅の带状に刻まれる。(3) 次に, パランまたはタジャック (tajak, ゴルフクラブのような大鎌) で, カヤツリ草の根際を横になぎ, 草をはぎとって巻く。2m 毎に巻いた草をつむ。水田表面には, カヤツリ草の根網層が露出する。(4) しばらく放置し, 草の芽が再び出ると, またパランで切る。(5) 巻きあげた草は反転させる。腐てしまうと, ほぐしてばらまき, 肥料にする。この後, 移植する。

潮汐湿地の開拓で最も重要なのは排水路の掘削である。泥炭から出る酸性水を排水し, 表面排水で表土を落ちつける。また, 小舟による交通路として重要である。3.5m もの潮汐差があるので, ひき汐時の水勢を利用して, 柔らかいマングローブ泥を掘削するのは, むしろ容易である。一種の水力工法である。バンジャール人が移住した時, 既にムラユが短い水路を掘削しているのを見る。彼等はそれを延長し, また, 新たに掘削する。開拓は何人かのグループで行う。水路は川から直角方向に掘るが, 250m はパリット・コンシ (parit konsi), あるいはスワ (suwa) といい, 共同で掘削する。それから内側の土地は1~2ha 単

位に区切り、各自の土地をくじびきで割りつける。割りつけが決まると、3カ月以内に分担水路の掘削を完了する必要がある。遅れると、クバラ・パリット (kepala parit, 水路長) が土地を他人にふりかえてしまう。掘削後も、6カ月以上、林を開かないで放置すると、長老が、やはり他人の土地に割り当ててしまう。林が残っていると、豚の害がふえるからである。水路清掃を布告後1カ月以内に行わない者は賠償金を水路長に支払わねばならない。支払わない場合は、その者の作物を誰が収穫してもよい。様々な規制措置がある。しかし、これは、実際には、落ちこぼれが出ないようにという方向で働いている。

バンジャール農民は、このように湿地焼畑に元々存在した技術を体系的に組み上げて、潮汐湿地における定着農業の方法を創出した功績を保有している。

3 ブギス人の「開拓」

ブギス人は戦士として有名である。海域世界のことだから、水軍である。パレンバン、ジャンビ、マラッカ、ジョホール、アチェ等、港の間の抗争時になくてはならない戦力であった。したがって、ブギス人は古くから、マラッカ海峡地域に來住していた。その移動が急激な増加を示すのは、スラウェシが戦乱にゆれる時である。17世紀後期のオランダ＝マカッサル戦争の時代、亡命ブギス人は東南アジア全域の海岸におしよせた。ジャンビにも来た。トゥンカルの領有をめぐる、丁度ジョホールとの抗争が始まり、戦力を必要としていたジャンビは、1679年、バンタムに亡命中のダエン・マンギカ (Daeng Mangika) を招いた。このことは周辺地域に亡命していたブギス人をジャンビへよびよせる結果となった [Andaya 1975:12]。

最近では1950年代のカファル・ムザカルの反乱時に、やはり多数の亡命者が出た。彼等は、カリマンタン、スマトラの潮汐湿地の「開拓」に入りこんだ。ジャンビ州でも、ブギス人の増加は著しい。

ブルバック・デルタには1955年以降に出現したブギス人の町が三つある。ブギス人の「開拓」は、バンジャールの創出した湿地開拓法をならい、それをフロンティアの林で大規模かつ組織的に実習してみせるというおもむきがある。

彼等は林の伐開，水路掘削から，植付け，粳精米，運送，販売までの過程をワンセットにして完結させてしまう。いわば，米プランテーションを経営する。

開拓の経過は次のように始まる。移住したブギス人は，農民，漁師，小商人で，密輸などを行なっている。やがて，漁師なかまのとりまとめ，ココヤシの仲買，密輸などで頭角を現わす男が出てくる。これらの仕事は互いに重なり合っている。しかし，短期間に金を儲けるには密輸が一番はやい。リアウ州のクアラ・エノックはそのような密輸基地のひとつであり，10人程で作るグループが沢山ある。3トンのボートに200馬力の船外機を2台積んだ高速艇でシンガポールへ行く。1航海の資金は3000万ルピア＝750万円，これで，テレビ，ビデオ，カメラ等を買いつける。税関の目をかすめて，高速艇でクアラ・エノックへ戻り，品物を処分する。利益率は最近では低下して，100%どまりという。

資本を蓄える間に，いろいろな人間とも知り合う，頭角を現わした男が指導者となって，かねて目をつけてある湿地の開拓に入植する。資本蓄積を密輸で行っている間は陰の時代である。その間，彼はヒトではない。たえず逃げかくれしている。開拓の指導者となって，初めて日なたを歩けるヒトになる。これは，指導者につき従う仲間も同じである。

ブルバック・デルタのシンブルナイクは，そのようなブギス人集落のひとつで，1956年にハジ・カンナ（Haji Kanna）が開拓を始めた。彼は入植直前まで，カンボン・ラオトで漁師をしていたという。当時，シンブルナイクの河口には，ふたりの漁師が居ただけである。河口から2.5km位の地点に家を作り，林の伐開と水路掘削を始めた。仲間をよび集め，1959年には100家族，1964年には250家族が集まった。1969年にはスラウェシへ戻って，故郷から40家族を連れて来た。初めは稲だけ植えていたが，1966年にはココヤシを植え始めた。1983年現在，世帯数1195，人口8182人に膨脹し，5番水路まではココヤシ園，その奥13番水路までの開拓地が一大水田地帯となっている。川沿いのパッサールを中心に，全く独力で，堂々たる町ができ上っている。

ハジ・カンナはイスラム予言者と言われている。建物の内外，合わせて3000

人収容の大モスクで、祈りの導師をつとめるのは彼である。同時に彼は、大地主と噂されている。このような新規集落の指導者は、世俗的権威と、それを飾る何らかの文化的権威を必要とするのであろう。

ブギス人の「開拓」はきわめて投資的色彩が強い。右岸7番水路の開拓経過を聞く中で、偶然に判ったことだが、初代水路長は1959年から1963年にジャワ人人夫を雇って開拓し、1ha単位の土地136地片を作り、それを売り出した。この土地は最終的に78人の農民が所有するが、大きな地主がおり、5ha以上の地主8人で67haの土地を所有する。彼等は不在地主で、小作に米を植えさせている。開拓はまさに投資である。

もうひとつの特徴は、「開拓」地がしばしば無人化してしまうことである。農民開拓の進む沿岸帯は、もともと柔らかいマングローブ泥から成り、時に泥炭も深い。これを排水し、耕作を継続すると、当然、粘土の脱水収縮、泥炭の分解などに伴う沈下が生じる。バンジャール人は、その変化に対して、堤でココヤシ園をかこい、干潮時にのみ開いて排水する感潮樋管を設け、一種の干拓工法を行って、その保全を図る。ブギスはその種の対応が遅れる。乾季の高塩分逆水にやられて生育が悪くなると、他へ移る。対応が遅れる理由は、経験不足というより、開拓のとらえ方に、バンジャール人などと異なるモチーフがあるからである。ブギス人の開拓は決して定着志向ではない。

水田を中心とする開拓地の場合、開拓地放棄の傾向は誠に顕著である。林を伐開して、数年間稲作をつづけると、当然、草がふえる。バンジャール人は既述のような草処理技術をもっている。ブギス人もそれにならった方法で対処するのだが、断固、草に克つ気持が心の中に根づいていない。

草がふえる頃になると、移住者の中に、強盗を働く者が現われる。その背景には、先述のような大地主の存在と、他方、貧乏な日雇いといった貧富差の著しい構造がある。草と強盗がふえると、ブギス人は逃げる。移動をくり返す。安全な、もっといい土地があるだろうと期待をつないで移動し、また「開拓」する。移動する時に、土地使用権なり、所有権の証書を既に入手しているのかどうか、本当のところは判らない。しかし、結果として、広大な一面のカヤツ

リ原が空しく無人の荒野として残される。これがブギス人の「開拓」である。一旦は陸封されたにしても、ブギス人は定着農民になり切れないものが心底のどこかにある。

ハジ・カンナが今、心配するのはそれである。生活は楽になって来た筈なのだが、装身具をつけた女性を狙って強盗が現われ始めたという。これからが、ブギス人開拓集落シンブルナイクの胸つき八丁である。

4 ジャワ人の定着

ブギス人はその「開拓」にジャワ人クーリーを雇う。ジャワ人クーリーは、ブギス人程仕事が速くはないが、厳しい伐採作業に耐えるし、水路掘りも丁寧であるという定評がある。ジャワ人の多い水路に入ると、家敷園地の手入れのよさ、排水路の直線の見事さといったことから、すぐにジャワ人入植地とわかる。

シンブルナイクには一群のジャワ人クーリーが住みついている。左岸12番水路である。リーダーはパ・ミン (Pak Min) という東ジャワ出身の男である。彼等はシンブルナイクの多くの水路掘削を手がけて賃稼ぎをしていた。50×150ドゥパ (約2ha) の開拓代は粃1700kgである。ヘクタール当りに換算すると約4万円である。左岸12番水路はダエン・マディウン (Daeng Madiun) の依頼で1969年に開拓を終了したのだが、工費支払いができないというので、工費のかたに占拠し、掘削人夫で分割した。入植したのはジャワ人26人、ブギス人2人である。

この例は、ブギス人の開拓が、実際はジャワ人の手で施行される例を、偶然の機会に実証している。

ところで、ブギス人が草と強盗に追われて逃げ出したあとに、ジャワ人移民が残っていたり、新たに入りこんで来る例は多い。今、無人の水田地帯、ムアラサバックの東から、スンガイ・シアウに至る開拓地に、ジャワ人が少しずつふえつつある。彼等はブギス人の残したカヤツリ原にいでむ。その草処理技術は徹底した除草と水田化である。

本田準備はまず草刈りであるが、その一角は徹底的に除草し、まわりに畦をめぐらして、水田を作る。雨季は雨水がたまると、足で代かきし移植する。畦なしの陸田部分は棒で穴をあけ移植する。年々、水田をふやす。逆水のかかる立地だと、水路をまわして、きれいに区画された水田で二期作を行う。バンジャール人の草処理が、草の根網層はとらないで残し、焼畑的性格を示すのに対し、ジャワ人の草処理は永久水田化の方向から発想する。草を恐れず、強盗を恐れず、過密地帯の、土に生きる農民の感覚を定着させる。

ジャワ人農民は、また、栽培の多様化を行う。トゥンカル川とリアウ州プラウ・キジャン (Pulaukijang) の間は、ジャワ人移民のひとつのセンターであるが、ココヤシの下にコーヒーを栽培したり、水田に盛土をしてミカンを植えるなど、他の地域と一味違った営農を行っている。

ジャワ農民の移住は、政府の移民政策により、最近大幅に加速されている。ニッパ・バンジャン郡には1983年現在、27のデサがあり、人口は9万5600人である。この内、政府開拓移民（農民はペリタとよぶ）の村が11あり、その人口は3万4200人である。ペリタ村は多くが、沿岸移行帯にあり、沿岸帯の農民開拓地に比べて、不利な立地条件にある。定着率は自発的移民に比べて低くなることは避けられないだろうが、これだけ大量のジャワ農民の移住は、大きな変化を生むにちがいない。何よりも期待できるのは、彼等がてんでに試行錯誤を行って、適合する作物と土地利用法を見出そうとしていることである。また、潮汐湿地の排水水位調節は最大の眼目である。自然の調節が巧妙に働らく農民開拓地と異なり、乾きすぎているペリタ地区では、水路を分節方式で水位を変えて、地域ごとの調節を行うことが必要なのであるが、農民の中に、そのような試みが生まれていることは、やっと本物の定着が始まった印象を与える。

V 中流部移行帯の生業

沿岸帯をはなれてジャンビへ向うと川筋の光景は一変し、見渡すかぎりの湿地林である。1820年に Crooke が観察した状況と変らないだろう。航空写真で

見ると、単調なじゅうたんをしきつめたような密林である。この地域を、私は下流部中央帯とよんでいる。川沿いには自然堤防が発達しているが、川岸から100 m も入ると厚い泥炭になる。泥炭の下には低位段丘面がある。

クンペ川の合流点、タンジュンに至ると、泥炭湿地の中に突っこむ形で幅広い自然堤防帯が現われる。中流部移行帯である。この地域には、ムアラ・ジャンビなどの古い集落がある。中流部移行帯の住民の生業は、蛇行跡低地での減水季稲、湿地林の産物の抽出、川筋での漁撈である。クンペ・イリールの元パッシラ、サマン (Saman) 氏によると、水田は彼の曾祖父の世代に開かれた。それはサワ・ダトゥ (Sawah datuk) とよばれる。その時期は前世紀前半と推定される。それ迄は、今、ゴムが植えられている段丘面がラダンであり、点播オカボを植えていた。祖父の代までは農民であったが、父の代にタンジュンへ移り、商人になった。1920年頃、メダンからゴムが導入され、大変な勢いでひろまった。

タンジュンには1810年代の末にジャンビの前哨基地の港がオランダ人の手で作られる。やがて、ジャンビ＝シンガポール航路が始まり、その船が、タンジュンに投錨することから、積出し港として、タンジュンは次第に大きくなる。サマン氏の祖父の頃には300戸、長さ3 kmの大きな集落を形成する。

タンジュンの産物は第一にロタンであった。太さによって幾種類にも分かれる。次にジュルトン (天然ゴム)。これは、以前は、コムリンやタパヌリの住民が採集に来ていた。村人は、ロタンの採取で、ジュルトンにまで手がまわらなかった。しかし、サマン氏の口調には、林の中でのキャンプが必要なジュルトンとりに対する明らかに侮蔑的なひびきがある。稲作の不調、ロタンの減少におされて、村人がジュルトン採取を始めたのは、ここ3年来である。

ガハル (gaharu, 沈香の類) もあった。これはガハルの木や、ラミン (ramin) の心材にある、病変により生じた樹脂である。かつてシュリヴィジャヤの重要な産品のひとつであった。

ゴムは品質が様々であった。というのは、酢を入れて固める時に、内部に木や土をまぜて増量するからである。また、水ぶくれのものがある。商人はそれ

らに目利きをして、買い値をつけた。私の観察では、まぜものの多い粗悪なゴムは、現在も全く変わっていない。

バラム・メラ (baram merah) という樹脂は、クブ (kebu) 人が持って来て、タバコと交換した。堅く良質の樹脂だった。

林業はオランダ時代は盛んではなかった。しかし、ブングル (bunguru, *Lagerstroemia* spp.) は船材に優れており、沿岸帯に多い船大工から、需要が多かった。今も同様である。沿岸帯には元来ない木で、淡水湿地に限られる。川から 200m 位の間には殊に密集している。船大工指定の寸法に従って、タンジュンで粗挽きしたものを沿岸帯へ運ぶ。船大工が仕上げをする。舟大工はブギス人が多い。そういうことと関係があるのか、タンジュンから沿岸帯への分村がある。シンパン近くの、トゥルック・リマオ (Teluklimau)、スンガイ・ラムブート (Sungailambut)、トゥルック・クラディ (Telukkeladi) 等の小集落は、タンジュンの分村である。そこへ出作りに行く者も多い。

村の稲作は乾季に行う。水田は流路跡にあり、サワ・パヨ (sawah payo) といわれる。サワ・パヨは中央部が皿状にくぼみ、雨季は 1 m 以上湛水するので、栽培不可能である。5 月初めに、畑に点播陸苗代を準備し、2 回移植法で水のひいた所から植える。11 月から 12 月に穂摘みを行う。

VI 土地利用のエスノロジー

最後にふれたサワ・パヨは、上流のミナンカバウ高地から永久水田技術が低湿地に移来したのと考えている。ミナンカバウの水田そのものは、火山山麓での畑作オカボから変化したものであろう。中流部の支谷域には、移植畑、つまり、畑に苗を移植する奇妙な稲作も見られるのだが、これなども、常畑のオカボが水田化する過程を示している。中流部には、もうひとつ、水門つきのサワ・パヨがある。これはいわば、ため池と水田を一体化した構造で、しかもそれを水牛蹄耕によって地拵えをする。

いささか荒けずりだが、バタンハリ川流域について 100 年前の土地利用を想

定すると、沿岸帯は湿地焼畑（陸田）とサゴ、中央帯は湿地林、中流部移行帯はサワ・パヨとラダン、中流域はラダン、移植畑、サワ・パヨと蹄耕、それにサゴ、といったものが考えられる。

このパターンは、マラッカ海峡をはさんで対岸、マレー半島にも全く同じものを見出すことができる。マラッカ海峡をはさむ湿地域とその周辺には、共通の農耕圏が想定できそうである。その稲作農耕の形態は、いくつかの民族要素に分解できる。パラシと掘棒による湿地焼畑は、いわゆる沿岸ムラユの伝統的生業である。他方湿地焼畑を定着水田に変換し、沿岸帯に潮汐水田を開発したのはバンジャール人の創案である。また、移植畑、サワ・パヨ、蹄耕はミナンカバウ人の農耕要素である。

この三つの民族要素が作るマレー型湿地農耕の流布という点で、ブギス人の役割を忘れることはできない。熱帯降雨林を強烈なエネルギーで、ヤブに変換する「開拓」を行い、地方的のみならず、航海者として、遠隔地にまでマレー農耕を流布する。

最後にジャワ人の役割である。ムラユやブギス人の通過型土地利用に対して、ジャワ人は多様な定着型土地利用を作りあげる。ジャワと「マラユ」の対立は定着農民文化と移動漁民文化の対立でもあった。今世紀のジャワ人大量移民の歴史的意味は、クルタナガラ王が「マラユ」をジャワの前進基地にしようとした意図の継続と見ることができる。結局、最後の未開地、潮汐湿地に確固とした農耕形態を作りあげるのはジャワ人であろう。シュリヴィジャヤがうたかたに消えてしまったのに対して、ジャワは無数の遺跡を残した如くに。

注

- 1) 本節の歴史資料に関する記述は、特に指定しないかぎり次の諸文献に依る。Coedès 1947 (Cowling 訳1975), Krom 1931 (有吉訳 1984), Schnitger 1964, Suleiman 1976, 1981.

参考文献

- Andaya, L. Y. 1975. *The Kingdom of Johor. 1641-1728*. Oxford Univ. Press, London.
 Coedès, G. 1964. *Les États Hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*. Translated by Cowling, S. B. 1975. *The Indianized States of Southeast Asia*. Australian National Univ. Press, Canberra.

- Crawfurd, J. 1856. *A Descriptive Dictionary of the Indian Islands and Adjacent Countries*. Reprinted by Oxford Univ. Press. 1971. London.
- 古川久雄, スビアンディ・サビハム. 1985. バタンハリ川流域低湿地の農業景観, その1. 地形と堆積層序. 東南アジア研究 23(1): 3-37.
- Hirth, F. & Rockhill, W.W. (Translation). 1970. *Chau Ju-Kua. His work on the Chinese and Arab Trade in the Twelfth and Thirteenth Centuries, entitled Chu-Fan-Chi*. Ch'eng-wen Publ. Comp. Taipei
- Krom, N. J. 1931. *Hindoe-Javaansche Geshiedenis*. 有吉巖訳. 1984. インドネシア古代史. 道友社. 天理
- Polak, B. 1975. Character and Occurrence of Peat Deposits in the Malaysian Tropics. In *Modern Quaternary Research in Southeast Asia I*, edited by G. J. Bartstra and W. A. Casparie pp. 71-81. A. A. Balkema. Rotterdam.
- Schnitger, F.M. 1964. *Forgotten Kingdoms in Sumatra*. E. J. Brill. Leiden.
- Suleiman, S. 1976. *Monuments of Ancient Indonesia*. Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional. Jakarta.
- Suleiman, S. 1981. *Sculptures of Ancient Sumatra*. Pusat Penelitian Arkeologi Nasional. Jakarta.
- Tideman, J. 1938. *Djambi*. Koninklijk Vereeniging Koloniaal Instituut. Mededeeling No. XLII. Amsterdam.

(古川 久雄)

第Ⅱ部 社会单位の形成

むらとまち

——生活の意味空間——

I 伝統的生活空間

東南アジアにおける人間の居住は、その選択に際して生態的条件に若干の特徴を示しつつも、人口成長、農業発展、都市発展の過程に応じて次第に活動域の重心を移行させながら拡大して来た。大陸部においても、島嶼部においても、伝統的な居住地の一類型は、山地の谷あいの地に求められる。大陸部において比較的早期からみられた相当規模に達する王都の発展は、それらが交通の要衝にあたる位置に立地したことも加わって、伝統的居住地のイメージを混乱させる側面があるが、島嶼部では山地部の高涼地が伝統的な居住地であったというイメージがかなりよく保たれている。その最も典型的な例はスマトラのパダン高地を揺籃の地とするミナンカバウ人の場合である。¹⁾

ローガンによると、1849年頃におけるスマトラの全人口は、248万7310人である。この人口がスマトラ島47万3606km²に分布しているとする、人口密度5.3人/km²を算することになる。彼の数値ではこのうち38万5000人が3000平方マイル(7770km²)のミナンカバウ地域に住んでいたとされている[Logan 1849:361]。この数値を用いて計算すると、ミナンカバウ地域の人口密度は49.5人/km²に達し、これを除いたスマトラ他地域の4.5人/km²の11倍という高さになる。現在のミナンカバウ人の主要居住地域である西スマトラ州の面積は4万9778km²であるから、ローガンの示したミナンカバウ地域はその6分の1弱であって、真の中心域のみ指しているとみなすことができる。ローガンの数値の正確さについては多くの問題があるにせよ、上述の人口密度は、人口分布からみた居住の核心域の存在を、19世紀中葉の状況において明示するものである。

居住の核心域を密度の高さにおいて捉え、それを山間部に求めることは一つの見方であるが、他の地域にも人々が永年居住してきたという事実も無視する訳にはいかない。その1は、小支谷沿いあるいは尾根づたいに広がった焼畑耕作民の居住地、その2は海岸または河口部における海の民の居住地である。前者は周期的土地利用のための休閑地を必要とするので、人口密度を必然的に低く保つことになり、人口増加が顕著な場合には、サラワクのイバン族がその伝承をよく伝えているように、新天地を求めて移動を行なうことになる。後者の生活については、その生活体系が漁撈とサゴ採取を基盤としていたものか、交易・交換を基盤としていたものか、時代的な変遷が加わると不明の部分が多いし、舟の利用が移動を容易にする要素として付加されるのでその実態の把握がさらに困難である。航海を通して東南アジアを海岸沿いに観察することが多かったヨーロッパ人の眼に比較的とまり易かったし、また交易港における土着支配者との関係も重要であったが、その実数を過大評価することは危険である。過去におけるより大きな活動性を認めるとしても、これら両者は共に基本的に少数性を保って来たものと思われる。

核心域の存在を含むにもかかわらず、東南アジアが、全体的にみて基本的に低人口密度を示していたという事実は重要である。東南アジアにおける小人口状況は、過去においてより顕著な様相を示している。西暦1000年頃のインド亜大陸（面積 4.5×100 万 km^2 ）の人口が7900万人、中国本土（ 4.0×100 万 km^2 ）の人口が6000万人と推定されるのに対して、面積的には遜色がない東南アジア（ 4.08×100 万 km^2 ）の全人口は900万人程度に過ぎなかったという推定もある[McEvedy & Jones 1979]。そしてこの相対的状況は表1にみるように、現在に至るまである程度維持されて来た。²⁾ 現在、1500万人の人口を保有するマレーシアが、過激とも言える人口抑制策をとっている中国などと対照的に、7000万人までの増加を可とする人口政策をとったりするのも、ある意味ではこの傾向の延長線上において捉えることができる。

低い人口密度がもたらし得る社会編成には多様な選択の可能性があるが、一義的に決定されるものではない。交通の手段として利用し得る河川が大きければ

表1 東南アジアの人口と人口密度

() 内人口密度

	面積 (100万km ²)	人 口 (100 万人)						
		1600	1700	1800	1850	1900	1950	1984
東南アジア	4.08	20.8 (5)	24 (6)	31.5 (8)	42 (10)	83 (20)	177 (43)	392 (96)
大陸部	1.94	11.25 (6)	12.75 (7)	15.5 (8)	21 (11)	35 (18)	72 (37)	157 (81)
島嶼部	2.14	9.55 (4)	11.25 (5)	16 (7)	21 (10)	48 (22)	105 (49)	235 (110)
インド ¹⁾	4.22	130 (131)	160 (38)	185 (44)	225 (53)	280 (66)	430 (102)	940 (223)
中国本土	4.00	150 (38)	150 (38)	320 (80)	420 (105)	450 (113)	520 (130)	1054 (263)
ヨーロッパ ²⁾	4.22	72.75 (17)	92.25 (22)	135.75 (32)	190.5 (45)	271 (64)	362.5 (86)	443 (105)

1) パキスタン、バングラディシュを含む。

2) ロシア、バルカンを除く。

McEvedy & Jones(1979)による。ただし1984年の数値は、1984 *Escap Population Data Sheet* による。
 (ヨーロッパのみは、1983 *World Population Data Sheet of the Population Reference Bureau, Inc.* による。)

分散した人口状況の中からも、相当な規模の支配権力が発生し得る。東南アジア大陸部では、とくにイラワジ川、ソンコイ川を利用してビルマやベトナムにこの状況が成立し、規模はやや劣るがチャオプラヤー川を利用してタイにおいても同様の状況が生じた。これらの権力の中心は、ときには分断された大人口状況下における国家（たとえばヒンドゥスタンの諸国家）よりも強大であるとみなされることもあった。しかし、東南アジアに発生したこれらの権力はしばしば短命であり、王権の所在地としての王都も、たえざる興亡を繰り返した。

東南アジアに興亡した都市の数と規模は絶対的な小人口を背景にして、限定されざるを得なかった。1850年以前の状況を観察すると、少なくとも一時点において人口15万を越えたときみなされる都市は、大陸部ではアマラプラ (Amarapura)、アラカン (Arakan)、パガン (Pagan)、ペグー (Pegu)、アユタヤ (Ayutthia)、バンコク (Bangkok)、アンコール (Angkor) が挙げられるに過ぎず、島嶼部では皆無であった。しかも、上述の大陸部の6都市は、この期間のいづ

れにおいても人口 20 万を越えることはなかったと推定されるのである。これに対してインドではその時期までに人口 15 万を越えることのあった都市は少なくとも 24 を数え、このうち 11 の都市は人口 30 万あるいはそれ以上に達した時期があった。中国でも人口 15 万を越えたことのある都市は 19 を数え、このうち九つは 20 万あるいはそれ以上の時期があった (Chandler & Fox 1974 の数値による)。このようにみて来ると東南アジアにおける王都の小規模性が推定される。しかも上記の 6 都市のうち、19 世紀末まで都市として存続したのはバンコクのみであって、アマラプラは 1891 年に 1 万 1004 人、アラカンは 1877 年に 2068 人、ペグーは 1878 年に 4337 人、アヌタヤは 1855 年に 3 万人を数える人口を有したに過ぎず、パガンは 1300 年頃に廃墟と化し、アンコールは 1433 年に放棄された。王都は興亡の中にあって、「みやこ」の生活は人々の心にとどめられるべき性格を有していたとしても、その実在性は稀薄であったというべきかも知れない。

島嶼部において伝統的な大都市が存在しなかったことは示唆的である。ラッフルズは 1815 年の中部ジャワのススフナンの王都スラカルタの人口を 10 万 5000 人、サルタンの王都ジョクジャカルタの人口をそれよりやや少ないものと推定している [Raffles 1817: I, 63]。当時のスラカルタ領の全人口は 97 万 2727 人、ジョクジャカルタ領のそれは 68 万 5207 人 (同書 II, 290 では 66 万 372 人) と記載されているので、王国の規模とそれに見合う王都の規模を推測することができるが、これが全インドネシアにおいて、伝統的王国および王都としては最も偉大なものであったことに留意しておきたい。ジャワの世界の中心を占める存在は、物質世界ないし人口においては比較的小さいものであったと言えるのである。ギャーツによって劇場国家の範例としてとりあげられたバリ島のタバナンは、バリ島を構成する八つの小国のうち最大のものであったが、この王国の人口は、18 万人 (1820 年頃、Van den Broek の 1834 年における記述、ギャーツはこれを過大とみる) ないし、20 万人 [Moor 1837: 86] と推定されている。王宮の存在する主邑の規模が想像されよう。ギャーツはこの小単位がそれ自体の中心をもつ完結した小宇宙として存在する姿を、王宮と儀式に焦点を合わせつつユ

ニークに描写しているのである [Geertz 1980].

マレー半島やスマトラ東海岸における国家の小規模性については、アンダーソン [Anderson 1826] やニューボールド [Newbold 1839] などが当時における人口量を示しているが、例えばマレー半島では、ミナンカバウ移民の形成した極小国家群スグリ・スンビランにおける例外を除いても、海岸諸国でさえ1万ないし5万の人口を擁するに過ぎず、従ってその中心集落も余程小さかったと推定される。ミルナーはマレー半島のパハンとスマトラ東海岸のデリをとりあげて、支配者の「名声」(nama) と、それを慕う家来・同調者との関係を重視しつつスルタンへの求心性を強調しようとしているが [Milner 1982], このように個人の資質が重要となる状況はもはや都市的規模において成立するものではない。ちなみにアンダーソンによると、1823年頃のデリ王国のマレー人人口は約7000人であり、奥地の多数のバタック人がスルタンに従属しているがその数は不明という [Anderson 1826:296-297]. そしてスルタン自身はデリ川の兩岸に立地する比較的大きな散村カンボン・アレイ (Kampong Alei, または Ilir) に住んでいた。スマトラ東海岸のシルダン (Sirdang) は、ミナンカバウ系の起源をもち、シアク王国に名目的に従属する小国であったが、この場合には人口と主邑に関するより明瞭な記載があり、これからデリの状況を類推することができる。すなわち、この国のマレー人人口は約3000人、バタック人人口は約8000人と推定され、スルタン・ブサルが居住するカンボン・ブサル (Kampong Besar) は120戸ばかりからなるやや大きな村であった [Anderson 1826:301-302].

国の規模の縮小につれて、「まち」の存在の可能性が薄れて来る。クローファードは、フンボルトの主張する古代社会の都市は国家であったという見方をふまえつつ、早期の東インドの社会を論じて、村落は国家の同義語であったと述べている [Crawfurd 1820:III, 6]. スマトラ山地部における村落の独立性については、19世紀初頭から中葉にかけて多くの記述が残されているが [Marsden 1811, Zollinger 1851, Presgrave 1858 など], これらは上述のスルタン支配よりもさらに小規模な独立単位を構成するものと言えよう。

大人口単位における王都，中人口単位における王宮，小人口単位における個人的資質を有する支配者という，中心の構造にかかわる変化が認められる。単位の規模に応じて違いがあるが，いずれも求心的な構造を有している。そして，東南アジア大陸部およびジャワにおける王都の発現は，全体的な小人口構造のゆえに，その小規模性にもかかわらず，精神的な重要性が付随するかも知れない。他方，独立的とみなされる小国は完全な独立性を究極目的とする訳ではなく，上位者の名目的な権威を認めることによって，かえってその実質的な独立性と中心性を補強している側面がある [坪内 1984]。ここに精神的な求心的世界——それは決して一つの世界として構造化されることはなかったが——の構造の諸相を認めることができる。

Ⅱ むらの生成と発展

小人口状況を背景として，東南アジアにおける人々の実際の生活は，主として村落的環境において営まれていたと考えることができる。人口増殖のかなりの部分は新村形成となって現われ，人口の流れは比較的余裕のある土地の存在を前提に，たえずフロンティアへとむかっていった。伝統的な開村ないし開拓は，血縁・地縁関係あるいは主従・親分子分関係を基軸とする結合を基礎として行われた。すなわち，これらの社会関係を栄養生殖的な分裂によってそのまま移動させた形で，派生村ないし分村形成が行われたのである。派生村形成は，(1)まず最初に，ときには 100km を越える遠距離からの冒険的移住者によって最初の集落が形成され，この集落が元村などからの後続者を加えて膨張する，(2)定住が成功して人口の自然増加が著しくなると，最初の派生村から比較的近い位置に二次的派生村が形成される，という過程を経ることが多い。分離したコミュニティと親村との関係は，分離当初，とくに近接する場合には密接に保たれることもあるが，遠距離の場合には，移動伝説における精神的なつながりは保たれるものの，実際の社会関係においては次第に疎遠となり，その本末関係さえ忘れさられてしまうことがある。筆者がインドネシアの南スマトラ州に

において、ムシ川の支流コムリン川に沿って集落形成史の調査を行った際にも、このような村落形成史のパターンが各所に見出されたが、コムリン川の場合は、起源地とされるバリサン山脈中のスカラブラックの人口規模がもともと小さかったこと、および移動の主流がランボン地方にむかい、コムリン川筋は傍流となったことなどのために、移動先のコミュニティ形成も小規模となり、一つの小型のモデルを提供している [坪内 1979]。ミナンカバウ系やブギス系の人々の移動は、移住地に大きな町を形成する程ではなかったが、その主邑を中心として同起源を保持する王国を建設した場合がよくみられる。

ミナンカバウ系の村落が、タラタック (taratak)、ドゥスン (dusun)、コタ (kota)、ナガリ (nagari) という完成への過程を経て形成されるということはよく知られている [Dobbin 1975, 大木 1984]。完成されたナガリは、バライ (集会所)、モスク、主要道路と枝道、闘鶏場、水浴場、広場などを備え、相当面積の水田、果樹園などを保有していなければならなかった。ナガリの完成像は都市というよりは完結した村落社会を想像させるものであることに注意したい。ミナンカバウ社会に特徴的な親族構造の構成要素としてのスク (母系氏族) を四つあるいはそれ以上含むことが要求されるという点で、ナガリはその構造のユニークさを顕示し過ぎており、また発展過程を定式化しているという点でその制度的取扱いが規範化され過ぎていているといえる。ミナンカバウ社会の外ではより非定式的な独立村形成が進行して来たことを見落してはならない。

全面的利用に先行する時代の大河流域の居住者達は、河川の自然堤防や砂州を利用して部分的な居住・耕作域を形成していた。この時期のデルタの開拓史は基本的には上述の伝統的移住のパターンに従ったものとみられる。たとえばメコン・デルタに流入した初期のベトナム人開拓者達は、自然堤防を順次居住地化していったものとみられる。デルタ開発がその特徴を呈するのは、ときには運河の開削をとまなう大量の人口移入とその増殖による低平地の全面的利用にむけてその動きがはじまってからのことである。紀元1世紀頃に交趾郡十県として、9万2440戸、74万6237人が漢書地理志に記されているベトナムのホンハデルタ (紅河デルタ) を例外とすれば、東南アジアでデルタ開拓が進行す

るのは19世紀に入ってからのものであった。1830年の下ビルマにおける水田面積は、6万6000エーカー（2万6700ha）、1930年におけるそれは991万1000エーカー（400万4000ha）と記されているから、100年間に150倍に達したことになる〔Cheng 1968:241-243〕。下ビルマの人口は1881年262万6000人、1891年330万1000人、1901年410万7000人などが記録されている〔Adas 1974:42〕。この20年間の下ビルマ人口において、デルタ地域以外で出生した者の占める割合は、1881年、1891年各12%、1901年10%であった。この割合は19世紀末には域外から大量の人口流入があったというよりは、その頃までに既にデルタ地域に居住していた人々の自然増加と域内移動で水田拡張が実現されたことを示唆している。デルタ地域への実質的な人口流入はかなり古い時期にその主要部分が完成していたと考えられる。ちなみに1852年における下ビルマ人口は100万ないし125万と推定されており（初代首席弁務官フェイアーによる推定）〔Adas 1974:21〕、この時点から1881年までに年平均2.6~3.4%の人口増加率が算出される。この増加率は当時としてはある程度の流入人口の存在を設定した方がよいだけの高さと言えるのである。

コーチシナ（メコンデルタ）の水田開発は下ビルマよりはやや遅れて進行したが、その水田面積は、1880年の時点で52万2000ha（下ビルマの40%強）、1930年において221万4000ha（下ビルマの55%強）であった〔Sansom 1970〕。開発中期にあたる1894年と1913年の間に、コーチシナの人口は、203万5300人から286万9800人へと1.41倍（年平均1.8%）増加している〔高田1984:253〕。この増加率は上述の下ビルマの1881年から1901年に至る20年間の年平均増加率2.2%を下回るものであって、この時期の開拓者人口の主要部分がメコンデルタ地域内の自然増加によって供給されたと解することも不可能ではない。1894~1913年におけるインドシナ各省の人口増加率には全般的な高率の中にかなり大きな地域の変異があり、とくにデルタ西部のフロンティア、ラクジャ、バクリュウの2省における増加が顕著である。これら2省における増加率（3.8%および4.6%）は他省からの移動を考慮せずに説明することは不可能であるが、この大部分をコーチシナ地域内からの移動と捉えることは既に述べた

数値から不可能ではない。

タイのチャオプラヤー・デルタ、マレー半島のケダー平野などについても同様の開拓過程が進行したと思われる [田辺 1973, 高谷 1982, Dobby 1951, Zaharah 1972, 口羽 1976]。いずれにしても以上の観察はデルタ開発において、大量の遠距離からの移民を必ずしも必要とはしなかったという推論へとむかっている。デルタ開発にかけられた 100 年という歳月は、人類史からみればきわめて短い。域内の人口がある程度の増加率さえ保有すれば、若干の外部移民を加えつつもこれらをもまた自己増殖の源としてとり込み、主として自己膨張によってデルタをうずめつくすことが可能であった。デルタ自体が広大であったから、新村がたえず形成され、そこには域内といってもかなりの距離を移動した人々が住みついていったに違いない。穀倉地帯として成立する地域であるから、食糧供給は十分であり、風土病や伝染病さえ顕著でなければ、人口増加は幾何級数的になり得たのである。

デルタの集落、とくにチャオプラヤー・デルタの集落は、「むら」としての組織性を欠くという点で伝統的な農村イメージから離れたものとして受取られて来た。コーネル大学のバンチャン計画はこの種の村を対象として、第二次大戦後の東南アジア農村研究の嚆矢となったものであった [Sharp *et al.* 1953]。ケダー平野の農村についても同様の地域集団としての非組織性が指摘される [口羽 1976]。デルタにおける組織性の弱い集落の出現は、集団的遠距離移民というよりは、デルタ内に形成されたある程度同質的な文化をもった住民が、一家族あるいはせいぜい数家族単位で移動していく過程の中で出現したと考えると納得しやすいかも知れない。デルタという空間の性格が非組織的な集落を生み出したとみなすのではなく、移動のパターンが非組織的な集落を形成するために一義的な役割を果たしたと考えるのが妥当であろう。次の 2 例はその傍証となるであろう。第一の例は、マレー半島東海岸クランタン川沿いに形成された天水田耕作に依存する集落である。川に面した集落の居住者やその他の土地からの開拓者達が、川から離れた土地に開田し、道路沿いに列村を形成していく過程で、集落としての組織性を欠如する連続的な家屋群が形成されたとみら

れる〔坪内 1976〕。第二は低平地における伝統的移動パターンの存在にかかわるもので、スマトラ東海岸の低湿地にブギス人達が川に直角に小水路を掘って、潮汐灌漑法を用いて開田する作業が現在も続けられているが、その初期においては明瞭な集団の移動のパターンが認められたのである〔坪内 1979〕。タイ人やマレー人における双系的な親族構造は、非組織的な集団構造との親和性を有しているようにみえる。しかし、双系的な親族構造と非組織的な集落構造とが結びつく過程は、デルタ空間を小移動が急激にうずめつくしていく場合など、特定の状況下に限定した方がよさそうである。

Ⅲ 植民都市の性格

ヨーロッパ人が東南アジアとの接触を恒常化して以来、通商基地として、あるいは後には植民地経営基地として、多くの都市が彼らによって建設されていった。植民都市として最も古い歴史を有しかつ著名であったのは、1511年にポルトガル人の手によって確保されたマラッカである。16世紀末にはスペイン人がマニラにその基地を築き、1619年にはオランダ人がジャワ島においてジャカトラを征服してバタビアを建設した。植民都市建設はその後も続き、1819年には英人ラッフルズがほとんど無人の島であったシンガポールに新都市の経営を開始し、1857年にはクラン川を遡行して来た 87 人の中国人達がゴンバック川との合流点で下船し、現在のクアラルンプールとなるべき地点で、錫採鉱をはじめようとしていた。

商業あるいは産業上の目的のために建設された都市は、形成過程の長さや役割に応じてその内的構造を異にしていた。これらの都市の人口規模は、既に述べたように、少なくとも 19 世紀後半までは、人口 15 万に達することがない小規模なものであった。民族的な関係から観察すると、これらの都市には対立する二つの様相が存在していた。第一の様相は混血人社会および混血文化の形成であり、第二の様相は民族間の分離と固有文化の保持である。前者は都市の歴史が長い場合に鮮明化し、それ自体の存在を主張するところまで到達した場合

がある。バタビアやマニラを中心とし、支配民族であったオランダ人やスペイン人との交渉の結果出現したメスティソとその文化はその典型である [Taylor 1983, etc]。マラッカにおけるポルトガル人の子孫達は、同市が1641年にオランダ人の支配下に移ったため、社会的・経済的地位の低下を経験した特異なケースとなった [Cheng 1983]。マラッカでは中国系住民の土着化も進行し、ババとよばれる土着した中国人と中国文化を生み出している [Clammer 1983, Felix 1980]。第二の様相は形成期の状況であると同時に、19世紀以降大量に流入してきた中国人やインド人を含む多様な民族の並存にともなうものであった。

1824年から1836年頃までのシンガポール人口については、かなり多くの著者がその著書やエッセイの中で、数値を示してその実態を紹介している。当時のシンガポール人口統計の分類単位となった民族カテゴリーを挙げると、ヨーロッパ人、インド系英国国民、土着キリスト教徒、アルメニア人、ユダヤ人、アラブ人、マレー人、中国人、コロマンデルおよびマラバル沿岸民、ベンガルおよびその他のヒンドゥスタン住民、ジャワ人、ブギス人、バリ島人、カフィール人（バンツ系黒人）、ベルシャ人、シャム人、ポヤン人（シンガポールの隣島の住民）、コーチシナ人、ポルトガル人等である（次頁の表2参照）。構成民族の種類を異にするが、同様の多民族的状況が他のいずれの植民都市をとっても見出される。都市の内部に居住するか、周辺に居住するかについては、民族別に志向の相違があり、ここにマラッカの例を示すと次頁の表3のようになる。ここに掲げた数値は、マラッカ領に関しては1833年、同市街については1832年のものと記載されているが、事実上同年のものである。ヒンズー人、コロマンデル沿岸人、キリスト教徒、カフィール人、アラブ人、ベンガル人、ジャワ人が市街地のみに居住しているのに対して、マレー人、中国人、バタック人は市外に居住する場合がある。土着民族であるマレー人を中心に、都市とは周辺のなかわりをもちつつ生活する人々が存在することに注意しておきたい。

往時の都市における性比は注目に値するものであり、都市はその中核部を女を重要な構成要件とするメスティソ文化が支えていた場合があったとしても、その外的活動は男の世界に依存するものであった。膨張期の都市にはこの傾向

表2 シンガポール人口の民族的構成 (1826, 1836)

	1826		1836		1826—36 年平均
	人 口	性 比	人 口	性 比	増 加 率
Europeans	111	2.70	141	2.92	2.4
Native Christians	206	1.82	425	1.11	7.5
Armenians	18	2.60	34	3.25	8.5
Arabs	17		41	4.13	9.2
Natives of Colomandel & Malabar	605	17.91	2,348	22.02	14.5
Natives of Bengal and other part of Hindoostan	384	2.02	582	2.75	4.2
Siamese			3		
Bugis & Balinese	1,442	1.49	1,962	1.11	3.1
Malays	5,697	1.34	9,632	1.14	5.4
Javanese	146	3.42	903	1.80	20.0
Chinese	4,279	9.81	13,749	14.64	12.4
Others			164	1.16	
Total	12,905	2.48	29,984	3.15	8.8

資料: Crawford (1828), p. 551; Newbold (1839), I, p. 283.

表3 マラッカおよびマラッカ市街人口 (1832, 1833)

民 族 な ど	マラッカ (1833)		市 街 (1832)	
マレー人	18,296	(64.2)	3,071	(25.3)
中国人	4,764	(16.7)	3,862	(31.9)
バタック人	511	(1.8)	309	(2.5)
ヒンズー人	886	(3.1)	886	(7.3)
コロマンデル沿岸人 (Chuliahs)	1,868	(6.6)	1,868	(15.4)
シャム人	23	(0.1)	14	(0.1)
キリスト教徒	1,921	(6.8)	1,921	(15.8)
カフィール人 (黒人)	43	(0.2)	43	(0.4)
アラブ人	94	(0.3)	94	(0.8)
ベンガル人	43	(0.2)	43	(0.4)
ジャワ人	9	(—)	9	(0.1)
計	28,458	(100)	12,120	(100)

Newbold (1839): I, pp. 136-137.

がとくに著しい。1815年頃のバタビア市街およびその周辺2マイルの人口において、全人口の性比が1.20 ([Raffles 1817: II, 246] より算出) であるのに対して、8年後の1823年のシンガポールの性比は1.99であった(1947年マラヤ人口センサス Appendix C より算出)。シンガポールにおける当時の人口には43%のマレー系民族が含まれ、彼らの性比(1.06)がかなり低かったために、全人口

表4 シンガポール主要民族の性比(女=1.00)

	中 国 人	マレー人	インド人	全 人 口
1825	13.34	1.19	26.76	2.67
30	11.28	1.04	10.39	2.76
34	12.08	1.21	9.37	2.82
40	...	...	...	...
45	8.54	1.29	5.64	4.07
50	11.50	1.18	6.47	3.90
60	14.41	1.51	8.50	6.04
71	6.31	1.09	4.84	3.27
81	5.11	1.07	3.93	3.12
91	4.68	1.11	4.20	3.26
1901	3.89	1.08	4.13	2.96
11	2.85	0.98	5.05	2.52
21	2.18	1.08	5.14	2.10
31	1.68	1.04	5.48	1.75
47	1.13	1.12	3.00	1.22
70	1.02	1.03	1.52	1.05
80	1.02	1.07	1.32	1.04

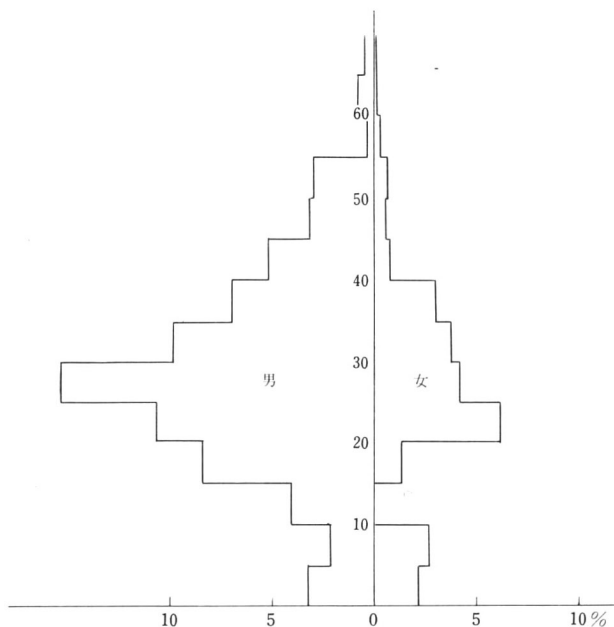


図1 19世紀中頃のシンガポール・ヨーロッパ人人口の性・年齢構造

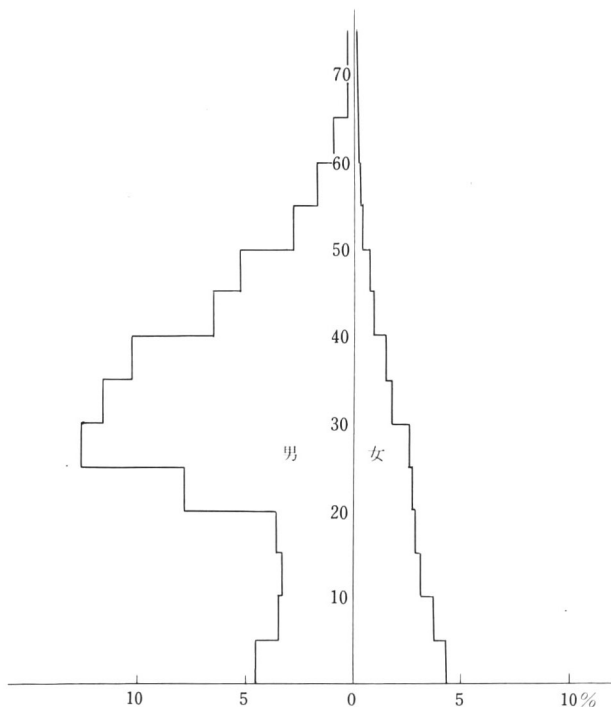


図2 シンガポール・インド人人口の性・年齢構造 (1947)

表5 シンガポールにおける出生率と死亡率 (人口1000対)

年次	(1) 出生率	(2) 死亡率	(1)-(2) 自然増加率
1881	11.4	27.2	-15.8
91	16.2	34.9	-18.7
1901	19.4	46.5	-27.1
11	21.7	51.1	-29.4
21	29.5	33.8	-4.3
31	36.4	24.2	12.2

Department of Statistics, Singapore. Report on the Census of Population 1970, Vol. 1, 1973 p. 33 による。

における性比が上述の程度におさまっていたのであるが、移民の増加とともに全人口の性比は増大し、1860年には6.04という値に達した。このときにはマレー系民族の割合は14.5%にまで低下して、中国人の割合は61.2%にまで肥大

していたのであるが、その中国人の性比は実に14.4（男子4万6795人、女子3248人）に達していたのである。この後中国人の性比は下降の一途をたどり、1931年には1.68にまで低下して来た。インド人の性比は1860年の時点では8.50であって、中国人よりも低かったが、19世紀後半に4.00を僅かに下回る状況を示したものの再び上昇に転じ、1931年には依然として5.48という高い値を示していた。1980年においてインド人性比のみが1.32という相対的に高い数値を維持しているのは、戦後まで続いた高性比の残存である（表4参照）。

シンガポールにおけるヨーロッパ人は数的にみる限り常に少数の存在であった。1871年にはその数は1946人（男1528人、女418人）となり総人口の2.6%を占めるに至るが、1850年には360人（男243人、女117人）で総人口の1%にも達しなかった。1820年代ないし30年代には、70人から150人であったことが残存するいくつかの記録から推定される。比較的早期のシンガポール居住ヨーロッパ人がどのような性・年齢構造を有していたかを、フォートカニング墓地の墓碑にぎざまれた情報〔Stallwood 1912〕を手がかりとして、若干の仮定の下に再現してみると、前掲の図1に示すようになる。再現された人口構成における性比は2.88で、1836年頃のヨーロッパ人性比2.08を上回っているが、これは人口統計には加えられなかったが同墓地に埋葬されることがあった兵士および海員の存在の影響とみられる。人口の性別構成に加えて年齢的に15～45歳の者が人口の主要部分を占めていたことが分かる。最も後の年代に至るまで性比のひずみを伝えて来たインド人について1947年センサスにおける性・年齢構造を示すと図2のようになる。女子の年齢階級別人口が自然なピラミッド状を呈しているのに対して、20～50歳男子人口が出稼ぎ人口の存在を示して異常な大きさを有していることが分かる。

シンガポールにおける出生率と死亡率の変化を1881年から1931年の間の若干の年次について示すと表5のようになる。出生率が次第に上昇していく過程は、女子の出生力自体の変化ではなく、人口統計の正確化および女子人口の割合の増加に対応するものであろう。死亡率については、とくに上述の年齢構造を考慮すると、通常ならば最も死亡しにくい年齢層から発生した死亡であるか

ら、きわめて高い水準にあるものとみななければならない。出生率と死亡率との差は自然増加率であるが、この値が閉じられた人口集団における自然増加率とは異なった意味を持つにせよ、1920年代（年次別データを調べると1922年）に至るまでマイナスの値を示していたことは重要である。極端な表現をすれば、シンガポール人口は、1920年頃までは、それ自体としては常に減少にむかう性向を有していたのであり、絶えざる人口注入によってその維持と増加を続けて来たのである。都市が墓場としての性格を有したことは、バタビア、クアラルンプール、ベンクーレンなどについても指摘されて来ており、往時のヨーロッパ都市とこの点では類似の様相があった。伝統的な農村空間に比して、人間の生活の場としては不利な状況が存在し、伝統的な生活空間であった農村から土着民が流入するには余程の決心を必要とした場であったと思われる。

中心部分において融合部分が形成されているにもかかわらず、たえざる人口流入によって異質部分が継続し、流入者の一部はたえず帰郷していくという点で一時的性が満ちあふれているというのが都市の姿であった。植民都市はその典型であるが、王都であるからといって例外を形成する訳ではなく、タイ国の首都バンコクにも同様の状況が存在していた。男の世界としての都市は居住の一時的性を基礎的な理念として構築される側面を有していたのである。

Ⅳ むらとまち——周流の構造——

現在の東南アジアにおける人間の居住空間および居住状況は、上述のむらとまちの発展の過程の延長において形成された。著しい人口増加のために過去の小人口状況はその様相をかなり失ってしまったが、人々の行動パターンの中には過去をふりかえることによって理解しやすい部分が残存している。今日の東南アジアについてまず第一に指摘されねばならないのは、やや逆説的ではあるが、農村のもつ生活圏としての意義である。開拓のための移動は丘陵地や泥炭性の低湿地など、より条件の悪い場所にむかってではあるが今なお続いている。フロンティアの減少あるいは開拓の困難さにもかかわらず村落間移動が重要な

ことは、1960年から1970年のタイ国について次のような状況として示されている。すなわち1 km²あたり人口密度25人未満(1960年)の郡全体の1960年代年平均人口増加率4.53%は、首都地域の3.45%よりも高かった。1960年代全国人口増加分の16%が都市地域で、84%が農村地域で吸収されたのである[小林1981]。東北タイにおける農村から新開拓地への移動は、「良い田を求める」(ハーナーディ)行為として慣習の中に組み入れられており、そのマイクロなレベルでの事例が、ドーンデーン村調査グループなどによって指摘されている[福井1985]。マレー半島クランタン州の天水田地域の農村ガロックでも、クランタン川上流部に新開地を求めて移動した者が1984年における筆者自身の調査の中でかなり多く数えられた。

伝統的な移動パターンにおいては、遠隔地への移住を行なった血縁的あるいは地縁的集団が新たな定住地において、時間をかけてコミュニティを熟成していく過程があった。そこには「村からの分離」と「村の形成」という一連の事象が包含されていた。デルタ開発は、小親族集団あるいは世帯を単位として、同時進行的に行われたため、コミュニティの存在を稀薄化した側面がある。現代の移動は後者に類似するところがあるが、既にある程度先住者が存在している土地で、隙間をつめるという形で家族単位の居住を行うという場合が増加している点で、フロンティアそのものというよりは準フロンティア的行動といえる側面がある。

隙間をうずめるという意味では、伝統的居住地域における集落もまたその成員の離村や死亡による隙間の発生に応じて成員の交替を行っているのであって、むらにおける成員の固定性は疑問視しなければならない。スマトラの脊梁山脈中の集落では、開村者にはじまる10世代以上にわたる系譜が伝えられていることがある。これらの系譜を有する集落は必ずしも排他的ではなく、系譜は自らのアイデンティティと親族間のつながりを確認するための用具であって、居住資格に直結するものではない。これらの集落は中核的居住者に加えて、周辺の居住者の存在を許容して来たのであって、中核の存在が失われた状態、あるいは全員が中核化した状態が、一部のデルタなどの新開地における非組織的なむ

らのイメージに重なり合うのである。

東南アジアの都市の村落に対する異質性は、量的な側面からすれば、19世紀初頭から20世紀前半までの期間に急増した中国系およびインド系移民に負うところが大きい。彼らの多くは帰国を望む出稼者であったが、状況は今世紀前半のうちに変化し、新規移入が制限される一方、都市における生活環境が改善されて、都市人口自体の自然増加が生じるようになった。土着の人口は、元来、都市の構成要素の一部であったが、移民の増大がその影を薄くしていった側面もある。クアラルンプールは1891年において人口1万9020人の小都市であって、中国人73%、マレー人、インド人各々12%などから構成されていたが、1898年にはマレー人が自らの生活様式を守ることができるよう、市の近辺にマレー人居住区 (Malay reserve) が指定された [Provencher 1971, Gullick 1983]。このような状況を背景に、都市の経済活動が土着住民を吸引する場合、彼らの都市へのかかわりは、かつての中国系・インド系の住民と同様、出稼ぎを主目的とする一時性を顕著に示した。かくして、移民における性比の均衡化にもかかわらず、国内に拠点をも有する人々の場合には都市は依然として「男の世界」としての存在を継続する場合がある。この傾向は女性に対する社会・文化的取扱いに関係しているが、とくにイスラム社会において顕著にみられる。³⁾

近年のように大量の出稼ぎが発生すると、出稼ぎ者の出身地における性比が少なくとも一時的に著しく不均衡になる場合さえある。表6は南スラウェシ州において性比が低い（すなわち男子出稼ぎ者が多い）郡が増加していき、その後やや安定にむかう過程を示したものである。高い性比は都市固有というよりは、むしろ移動にともなうものであって、ミナンカバウ人を主体とする西スマトラ出身者の場合には、1971年の時点では、州外村落部居住者の性比が、州外都市部居住者の性比よりも高いことに注意しておきたい。

都市における居住が出身地別グループによって分離されていたことについては既に述べた。都市的生活の中にむらにおけると同様の人間関係が機能していることについては、東南アジアのみならず、欧米やアフリカを含んで既にかんがりの研究が行われているが、これについては以下の点に着目することが重要で

表6 性比の高さ別にみた郡の数（南スラウェシ, 1972, 1975, 1978, 1981）

性 比	1972	1975	1978	1981
1.00～	32(19.5%)	22(13.4%)	19(11.6%)	38(23.2%)
0.95～0.99	63(38.4%)	59(35.9%)	44(26.8%)	34(20.7%)
0.90～0.94	41(25.0%)	47(28.7%)	53(32.3%)	49(29.9%)
～0.89	28(17.1%)	36(22.0%)	48(29.3%)	43(26.2%)
計	164(100)	164(100)	164(100)	164(100)

Selayar 県に含まれる5郡を除く。

Kantor Sensus & Statistik, Propinsi Sulawesi Selatan, *Sulawesi Selatan Dalam Angka*, 1972, 75, 78, 81, 各年度版より算出。

あろう。第一は、都市の構成が異質的民族集団の共存に依存しているという側面、第二は都市住民と出身地とのネットワークの側面である。これらの二つの側面は関連し合っているが機能における重点の捉え方が異なっている。前者においては都市における集団的存在としての民族そのもの、およびその内部組織が重要である。後者は大量の移入民の発生を契機として近年むしろ顕在化したものであって、家族・親族・友人の個々のネットワークが根源的な重要性を有し、都市内部における同郷者の組織化はむしろその二次的な発展形態と解される面を含んでいる。

出身地との関係において都市移住者の周流性は重要な現象である〔加藤 1983, Hugo 1982, Maude 1979, etc〕。昔日の移民においては、帰郷はその最終目的に組入れられていたが、その実行は事実上困難な場合が多かった。現在の移住者においては、都市居住は明確に一時性を有する出稼ぎと、永久的な志向を有する移住とが混在している。交通手段の発達と移動者の国内限定性の強化は、都市居住者と村落居住者とのコミュニケーションを以前よりも緊密にして、都市永住者についても親族の婚礼・葬儀や、祭日における帰郷を日常化し、また通婚関係を故郷との間に設定することも容易にしている。精神世界としての都市がむらの住民に如何に無関係であろうとも、都市を生活世界としてのみ利用することが可能となっているのである。

都市が民族を融合させるるつぼであるという考え方は、民族生活をモザイクとして捉える方法と対立し、後者への注目は前者の軽視をもたらす場合があり得る。プライメート・シティ（primate city）の成立と支配を重要な様相の一つ

としながら、都市の拡大は東南アジアのいずれの国においても顕著となって来た。多くの人々が都市生活に参加することが、都市文化を生成・強化するというのは短絡的な見方であるとしても、東南アジアの都市の歴史が、独自の生活様式を育成して来た場面をも含んでいたことをも想起してみる必要がある。メスティソ的生活様式の発生にとって、通婚は一つの重要な契機を提供する。バンコクに流入した中国人が、未だに市の一部に居住地域を温存し中国的な生活様式を保持する側面を示しつつも、そのタイ社会への親和性と混住の結果、相当部分においてタイ的文化の持主へと転化している事実は重要である。移民流入がほとんど停止したシンガポールにおいて、民族間通婚がどのような形で進行するかは注目に値する。しかしながら、たとえば植民地時代における白人文化のような支配文化を有せぬ状況で、混血文化が形成可能かどうかは問題であり、異民族間通婚は周縁的存在としての地位にとどまる可能性もある。都市が知識・技術の中心となっている状況は明らかに存在するが、共通項を知識と技術およびそれらがもたらす生活水準に設定し、他を取捨選択可能なオプションとみなすことにより成立するコスモポリタンな態度がエリート層において成立し、それが文化の中心部を形成するという見通しは、現在では一つの可能性の域を出ないのである。

注

- 1) 規模においてかなり小さくなるが、高地を発祥の地とする点で、同様の状況はスマトラ南端のランボン地方にも該当する。マースデンは1811年に出版された『スマトラ史』の中で、南西部の海岸地方の住人にその起源をたずねると、彼らは、山地部の大きな湖（ラナウ湖を指す）の近くの土地から祖先がやって来たたと答えると述べている [Marsden 1811:296].
- 2) Zelinsky [1950] は、東南アジア大陸部に着眼して、インド、中国との比較において、その人口の少なさを異常な状況 (demographic anomaly) として捉えている。
- 3) タイ国におけるバンコク居住者の出身地別性比は、北タイ出身者において低く、南タイのイスラム圏出身者において高い [坪内 1983]。またインドネシアの南スラウェシ州のトラジャ人の間でも女性の流出傾向が比較的強い [坪内 1982]。フィリピンも全地域を通じて都市における性比が低い [McGee 1967]。インドネシアの南スラウェシ州を本拠とするブギス人は、スラウェシ島外に居住する場合に顕著な高性比を示している。

引用文献

- Adas, Michael P. 1974. *The Burma Delta—Economic Development and Social Change on an Asian Rice Frontier, 1852-1941*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Anderson, John. 1826. *Mission to the East Coast of Sumatra in 1823*. (Reprinted in 1971

- by Oxford University Press)
- Chandler, Tertius and Gerald Fox. 1974. *3000 Years of Urban Growth*. New York: Academic Press.
- Cheng Kok Eng. 1983. The Eurasians of Melaka. In Sandhu, Kernial Singh & Paul Wheatley (eds.) *Melaka, the Transformation of a Malay Capital c. 1400-1980*. Oxford University Press.
- Cheng Siok-Hwa. 1968. *The Rice Industry of Burma, 1852-1940*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Clammer, John. 1983. The Straits Chinese in Melaka. In Sandhu, Kernial Singh & Paul Wheatley (eds.) *Melaka, the Transformation of a Malay Capital c. 1400-1980*. Oxford University Press.
- Crawfurd, John. 1820. *History of the Indian Archipelago*. 3 Vols. (Reprinted in 1967 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- Crawfurd, John. 1828. *Journal of an Embassy to the Court of Siam and Cochin China*. London: Henry Colburn. (Reprinted in 1967 by Kuala Lumpur: Oxford University Press)
- Dobbin, Christine. 1975. The Exercise of Authority in Minangkabau in the Late Eighteenth Century. In Reid, Anthony and Lance Castles (eds.) *Pre-colonial State System in Southeast Asia*. Monograph of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society, No. 6.
- Dobby, E. H. G. 1951. The North Kedah Plain, A Study in the Environment of Pioneering for Rice Cultivation. *Economic Geography*, 27-4.
- Felix, Chia. 1980. *The Babas*. Singapore: Times Books International.
- 福井捷朗. 1985. 「東北タイ・ドンデーン村：人口動態（第一報）」『東南アジア研究』23—3.
- Geertz, Clifford. 1980. *Negara, the Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton University Press.
- Gullick, J. M. 1983. *The History of Kuala Lumpur (1857—1937)*. Singapore: Eastern Universities Press.
- Hugo, Greme. 1982. Circular Migration in Indonesia. *Population and Development Review*, 8—1.
- 加藤 剛. 1983. 「都市と移住民：ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』21—1.
- 小林和正. 1981. 「タイ国人口増加の地域構造：1960～1970年」『東南アジア研究』19—1.
- 口羽益生. 1976. 「ケダーの稲作農村パダランラン」口羽・坪内・前田編著『マレー農村の研究』創文社.
- Logan, J. R. 1849. A General Sketch of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, 3.
- Marsden, William. 1811. *The History of Sumatra*. (Reprinted in 1966 by Oxford University Press)
- Maude, A. M. 1979. How Circular is Minangkabau Migration? *Indonesian Journal of Geography*, 9—37.
- McEvedy, Colin & Richard Jones. 1979. *Atlas of World Population History*. Penguin books.
- McGee, T. G. 1967. *The Southeast Asian City, a Social Geography of the Primate Cities of Southeast Asia*. London: G. Bell & Sons.
- Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. The University of Arizona Press.
- Moor, J. H. 1837. *Notices of the Indian Archipelago, and Adjacent Countries, Being a Collection of Papers Relating to Borneo, Celebes, Bali, Java, Sumatra, Nias, the Philippine Islands, Sulus, Siam, Cochin China, Malayan Peninsula, etc.* (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)

- Newbold, T. J. 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca*. 2 vols. London: John Murray. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)
- 大木 昌. 1984. 『インドネシア社会経済史研究』 勁草書房.
- Presgrave, E. 1858. Journey to Pasummah Lebar and Gunung Dempo, in the Interior of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Series II, 2.
- Provencher, Ronald. 1971. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Raffles, Thomas Stamford. 1817. *The History of Java*. 2 vols (Reprinted in 1965 by London: Oxford University Press)
- Sansom, Robert L. 1970. *The Economics of Insurgency in the Mekong Delta of Vietnam*. Cambridge: The M. I. T. Press.
- Sharp, Lauriston et al. 1953. *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Ban Chan, 1948—1949*. Cornell Research Center, Bangkok.
- Stallwood, H. A. 1921. The Old Cemetery on Fort Canning, Singapore. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, 61.
- 高田洋子. 1984. 「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』 22—3.
- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』 創文社.
- 田辺繁治. 1973. 「Cho Phraya デルタの運河開発に関する一考察 (I), (II)」『東南アジア研究』 11—1 および 11—2.
- Taylor, Jean Gelman. 1983. *The Social World of Batavia, European and Eurasian in Dutch Asia*. Madison: Wisconsin University Press.
- 坪内良博. 1976. 「クランタンの零細農村ガロック」 口羽・坪内・前田編著『マレー農村の研究』 創文社.
- 坪内良博. 1979. 「南スマトラ, コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』 17—3.
- 坪内良博. 1982. 「南スラウェシの人口移動と性比の変動に関するノート」『東南アジア研究』 20—1.
- Tsubouchi, Yoshihiro. 1983. Traditional Migration Patterns in Southeast Asia and Their Survival. 『人口学研究』 6.
- 坪内良博. 1984. 「東南アジア島嶼部における『小国』の存在形態に関するノート」『東南アジア研究』 22—1.
- Zaharah binti Haji Mahmud. 1972. The population of Kedah in the Nineteenth Century. *Journal of South East Asian Studies*, 3.
- Zelinsky, Wilbur. 1950. The Indochinese Peninsula: A Demographic Anomaly. *The Far Eastern Quarterly*, 9—2.
- Zollinger, H. The Lampong District and Their Present Condition. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, 5.

(坪内 良博)

世帯と親族

はじめに

人類学では、親族をメンバー規準にする家族と共住または隣接を規準にする世帯とを区別しなければならないと言われて久しい。例えば〈世帯〉とは近親者を中心に日常的共住と家計を共にする集団で、〈家族〉とは近親者を中心に成員権を共有する組織ないし制度であるという。¹⁾ この定義は集団論をも踏まえて精緻化された定義であるが、それでも〈家族〉は〈親族〉と具体的にどのように違うのか、果して区別され得るのかということは明らかにしない。本論では、南スラウェシ（インドネシア）のブギス族、マレー半島（マレーシア）のマレー（ムラユ）族及びオラン・フルの各社会の親族に関する文化的表象を検討することによって、親族の中の切り取られた〈家族〉という概念は非常にあいまいであって、文化的単位としては存在していないのではないかという問題提起をし、その上で共住を中心とする世帯が文化的にも通文化的にも適切な分析単位であることを提示する。ここで〈世帯〉と呼んでいるのは、親族をメンバー規準にするのではなく共住原理に基づく最小生活共同単位²⁾ のことで、その外の特定の機能遂行を考えてはいない。³⁾ 共住原理というのは、共住経験からであろうと、将来の共住への確実な予測からであろうと、時空間の共有を通じて日常生活を営む単位を形成する格律である。通文化的に定義された概念と対象社会の通概念との関係は複雑である（Rosaldo [1975] 参照）。本論の意図する所は、あいまいな分析概念から出発して、それに関する文化概念をそれぞれにふさわしい形で位置づけようとすることである。

I 民族誌的表象

1 ブギス

ブギスの社会では、すでにイスラーム改宗以前に、王 (arung) — 王族・貴族 (anakarung) — 有力者 — 庶民 — 奴隷という階層が成立していて、この階層区分は婚姻を通して「白い血」(王族の血)をどれだけ保持しているかという事によって厳しく保たれた。南スラウェシにおける諸王国は 13 ~ 16 世紀に次々と成立して、17 世紀初頭のイスラーム改宗を経ながら、その王統はインドネシア共和国独立後王制が廃されるまで連綿として継続し、系譜によって記録されている。⁴⁾ 王の始祖は Tomanurung (降りてきた人) あるいは異人、あるいはより古い王国 (通常 Luwu 王国) からの来住者であって、在地勢力の首長である anang, matoa という階層とは一線を画すように王国成立譚は構成されている。⁵⁾ 現実には、いろいろな対応の仕方 (例えば地方豪族を婚姻関係によって王族にとりこんでいく Bone 型と王族と地方豪族との断絶がみられる Gowa 型) があるとはいえ、arung 系統と anang 系統とがまじって、anakarung という称号を持つ王族・貴族層ができ、arung の血の入っていない層と大きな区別が設けられた。これを Bone 王国の例で図示すると表 1 のようになる。

王は、Bone 王国の場合 Arumpone (Arung + Bone), Arung Mangkau' あるいは Petta Mangkau' ri Bone と呼ばれ、Wajo 王国では Arung Matoa Wajo, Luwu 王国では Dato' あるいは Pajung Luwu, Sidnreng 王国では Addatuang などと呼ばれるように、arung が王だけを意味するのではなく、王族、貴族を指したり、称号として用いられることもある。表 1 の (2) の mattola というのは、継承するという意味で、王が在位中に王の血統の王妃から生まれた嫡子である。(3) の matese' というのは熟したという意味で、王と王妃のその他の子供である。(4) は (1)(2)(3) に属する者同士の間で生まれたその他の王族である。ribolang の bola は家を意味し、(4) は王宮にいる王族とでも言えよう。この (1) ~ (4) のカテゴリーの男性が庶民 B の女性から得た子は (5) になる。sipuwe の puwe というの

表1 Bone 王国の階層

	arung		(1)
A	anakarung	anakarung matese'	(2)
		anakarung mattola	(3)
		anakarung matese'	(4)
		anakarung ribolang	(5)
		anakarung sipuwe	(6)
B	to maradeka	ana' cera'	(7)
		to deceng	(8)
		to acca	(9)
		to sugi	(10)
		to warani	(11)
C	ata	to sama	(12)
		ata mana'	(13)
		ata mabuang	(14)

は別れるという意である。(6)はAの男性が隷属民Cの女性から得た子供で、cera'は血の意である。

Bの中の上層 to deceng は有力者であって、血筋による階層ではなく、単に知識人(7)、富裕者(8)、勇士(9)の意味で、どの階層の出身者でもこれらの業績によって社会的に認められることを強調しているにすぎない。知識人は住々にしてAのカテゴリーから出ることもあり、またこれらの業績によって他の階層から貴族層にとりたてられるということも起ってくる。(10)は庶民ということになり、Cは隷属者で、(11)の mana' は相続、(12)の mabuang は新規のという意味である。

この階層を支えるのは、王とそれを取りまく宮廷貴族と、彼らを支持しあるいは同盟関係に入った地方豪族のもつ軍事力、経済的収奪力であるが、一方では婚姻を通じての血筋に対する信仰・イデオロギーがある。むしろブギス人の説明はイデオロギーによるものであって、王国成立譚に端的にみられるように、畏怖すべきものへの敬服・随順が説明原理となる。⁶⁾ その畏怖すべき血の筋は、同じ血の者同士によって継承されていく。即ち、父方と母方との血が半分ずつ子供に伝えられていくのである。⁷⁾ 従って王族が非王族と婚姻すると当然王族の血は半分になり、子供の地位は母方の血に応じて下がってくる。上述の階層表はそのようなメカニズムを整理する枠組であるといえる。

王族男子の複婚は多く行われたが、とくに Bone 王国などのように王族を拡

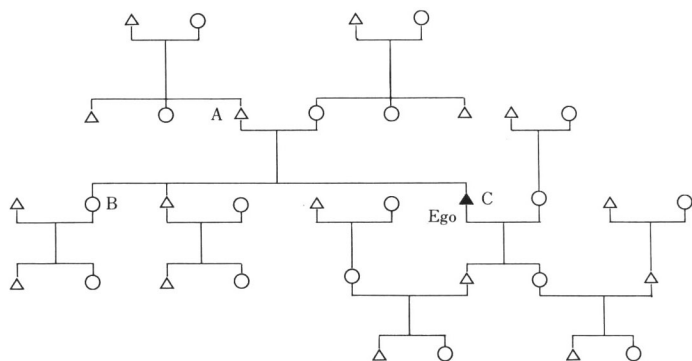
大することによって村落レベルまでの支配組織を確保しようとした所では、王族男子と低位の女性との婚姻が特に沢山あったようである。低位の者も王族の血を受けることによって地位を上昇させるためにそのような婚姻を望んだものと思われる。地位の上の女性が逆に地位の下男性と結婚することは厳しく禁止されている、⁸⁾ いわゆる昇嫁婚である。従って階層が上になる程、適当な婚姻相手が無いままに一生を終る女性も多くなる。階層の差異は、婚姻対象をも限定するが、同時に階層に独自の生活様式が規範としてあり、特に建築様式と婚姻儀礼とは庶民に至るまで注意を払った。婚資の額は当事者達の地位を象徴するものとして強い関心がもたれ、逸脱しないように先例が重視された [Millar 1983:483].

血の純粹さを保つのは同類婚である。近親者同士の婚姻が最も確実かつ有効な方法であり、かつまた双系均分相続のもとでの財の再結集ないしは分散防止にも役立つ。王族に限らず社会の上層部にある者は近親婚、特に父方、母方を問わずイトコ婚が好まれる。第1イトコ婚は適った結婚 (assialang marola), 第2イトコ婚はもっともな結婚 (assialang memang), 第3イトコ婚は遠きを近くにする (riaddeppe' mabelae) と言われる [Mattulada 1975]. ⁹⁾ 階層が上になる程第1イトコ婚が多くなる。所によっては第1イトコ婚を避けて第2イトコ婚を選好する場合もあるが、第1イトコ婚が行われないというのではない [前田 1976; 1982].

イトコ婚に一つずつ名前をつける程であるから系譜関係も明確だと思われる。確かに貴族などの場合は系譜関係が何世代も記憶されている。しかしそれはあくまでも選択された系譜であって、貴族にあっても第3イトコ以上遠くなると親縁関係もあやふやになってくる。父の世代で第3イトコと言われていたから子の世代では多分第4イトコだろうという推測に頼らざるを得ない。事実、第4イトコ以上は cappo', cikali など一括してしまい第4、第5などとは区別せずに遠い親類として扱ってしまう。しかしそれにも拘らず、イトコ婚が繰り返されていくと、血縁関係が非常に密になってくる核的な親族圏が出てくる。この同類婚による親族ネットワークの凝集と、昇嫁婚と複婚とによる親族

ネットワークの拡大 (daung ajue, 木の葉のように散る, というのがズギスの非親族婚の比喻) とによって, 王族を中心とする王圏が成立し, 村落レベルでも同様の婚姻戦略によって階層化がある程度固定される。

このようにして成立する親族圏を *assiajingeng* と言う。これは「^な生る」という *aji* (インドネシア語 *jadi*) からの派生語で, *siajing* (あるいは *soajing*) というのは「一つ^な生り」で, 家族=親族を指すものとされる。*siajing* の関係であること (*siajingeng*) は通常, 血族 (*rappe'*) と姻族 (*siteppang* あるいは *sompung lolo*) とから成ると説明される [Mattulada 1975]。しかし, 前述したように血族と姻族とが対立集団としてあるのではなく, 婚姻によって生じる新しい関係を漠然と *siteppang* と呼ぶにすぎない。漠然とと言ったのは, まず, 配偶者 (夫 *lakkai*, 妻 *baine*), 配偶者の親 (*matoang*), 配偶者のキョウダイあるいはキョウダイの配偶者 (*ipa'*), 子供の配偶者 (*menettu*), 子供の配偶者の親 (*baiseng*) といった親族名称のあるカテゴリーが自己を中心に考えられるが, これは全体として一つの単位ではなく, 全然関係のない数個の単位 (姻族の血族) の一部にすぎない。更に, 姉妹と結婚 (*silettekang angkanguruang* 枕を互に移す) した男同士は *lago* と呼びあうが, このような姻族の姻族はどのように分類されるのかはあいまいとなる。通常は夫と妻とが切り離せない単位とみなすことによって, 血族の配偶者は血族同様に, 姻族の配偶者は姻族同様に扱っているが, それ以上の親族の包摂は躊躇されるのが実情であろう。南スラウェシの内陸にある *Soppeng* 地方では, 血縁者の配偶者を *pamili* (遠い家族) の中に含ませるのにやぶさかではなく, 総ての *in-law* に対して *ipa'* を用いるという [Millar 1983:485]。ともかく上記の姻族名称の範囲のカテゴリーの人は近い姻族 (*siteppang mareppe'*) とされる。一方の血族 (*rappe'*) も, 父, 母, 祖父, 祖母, オジ, オバ, キョウダイ, 子供, オイ, メイ, 孫は近い血族 (*rappe' mareppe'*) とされる。この近い血族, 近い姻族両者をあわせて身内の親族 (*siajing riale*) として遠い親族と区別する (次頁の図1参照)。例えば, 妹が駆け落ちをした場合にその不名誉 (*siri'*) を漱がなければならない *tomasiri'* (恥をこうむった人) の範囲はこの *siajing riale* なのである。オジ, オバの配偶者は親族名称上はこの

図1 ブギスの *siajing riale* の範囲

カテゴリーに含まれていない。またイトコも除外されている。しかし、実際には配偶者も夫＝妻の原則から含まれ、当事者の世代を一つ上にあげることによってイトコ（上の世代のオイ・メイ）も関係してくる。図1でBが *siri'* となる行為の本人とすると、Cを中心にする限り一見イトコは入らないように見えるが、その親のAの *siajing riale* の中にはAのオイ・メイ即ちB、Cのイトコが当然含まれる。即ち *siajing* の境界は名称上でも常に流動的に捉えることができるのである。ちなみに Soppeng 地方で調査した Millar [1983:484] は、*siri'* を共有するのは、姉妹、兄弟、両親、配偶者、子供であって、その他のより遠い血族との共有は漸次減少していくと報告している。

siajing と同じような意味の語に、*sianang*（「子」族）、*siwija*（一つ種）などがあるが、*siajing riale* より小さい単位を指す語はない。¹⁰⁾ 一つの家に住む人々は *sibola*（「家」族、家一つにする、あるいは家全体）であるが、これには *toribola*（家の人）と呼ばれる非親族の同居者も含まれる。Pangkep 県の Bantimurung では *repo'* という語で世話を見なければならぬ最小範囲のものを指すというが、これも配偶者、子供に召使いを含む。同居の単位は昔は多人数からなり、夫婦、未婚子女のみによる構成は焼畑の出小屋などに出かける特殊な状況だけにみられ、一般的な規範として、夫婦、子女を単位として取り出して指す必要はなかったのかも知れない [前田 1982: 122]。インドネシア語の *keluarga* は政府用語

として一般的な意味での家族という意味で通用するが、親族を *keluarga besar* (大きい家族) というように、必ずしも小家族に限定しているのではなく、*siajing* とだぶらせてイメージしているようである。家長という時にはインドネシア語で *kepala rumah tangga* (世帯主) という [Millar 1983:485]。Famili あるいは *pamili* という語は小家族という意味に限定して用いられず、むしろ広い意味での親族として使われる。

なおブギス語にはキョウダイ名称に三つのレベルがあることに注意したい。一つは呼称にも使われる目上・目下の *daeng* (兄姉) と *anri'* (弟妹) である。¹¹⁾ 第二は、話者の性別によって兄弟と姉妹とを別々に指示する場合である。話者が男であれば、自分の兄弟を *padaoroane* (同じ男)、姉妹を *ana'dara* (女の子)、男女2人を指す時は *sippo ana'dara* という。話者が女であれば自分の兄弟を *ana'burane* (男の子)、姉妹を *pada' kunrai* (同じ女)、男女2人を *sippo ana'burane* と言う。この話者から見て同性キョウダイ、異性キョウダイと各々を一括して指す名称が日常用語としては最も一般的である。第三に、すべてのキョウダイを一括して指す時には *silessureng* (生まれを一つにする) または *siajing* が用いられる。この両語は文脈によっては更に広い親族を包摂する。¹²⁾ ことわざにも「妻は代えられるが、姉妹は代えられない」あるいは「夫は代えられるが、兄弟は代えられない」とあるように、夫婦結合より異性キョウダイ結合の方が重要であるとインフォーマントは言う。イトコ関係は夫婦関係より軽んじられる。しかし、キョウダイ関係より親・オジとの関係の方が大切であるとも説明する (Sidrap 県の Amparita の事例)。

上述のように、血の結びつきによってブギスの親族を説明してきたが、家の中心 (*posi bola*)、土地の中心 (*posi tana*) が重視され、体 (*ale*)・家 (*ale bola*)・土地 (*ale tana*) を通じての一貫した象徴作用 [Errington 1983]、土地神 (*Punna Tana*) と祖霊と *arung* とが儀礼的に重なってイメージされること [Maeda 1984] などは、体・家・土地の中心を契機とする関係が昔は基本的であったことが推測される (cf. Silverman [1978])。また 血と *siri'* (恥・名誉) との量が相關関係にあるとするならば [Errington 1977; cf. Millar 1983]、ブギスの学者がそう主

張するように, siri' を根本的価値として考えることも可能であろう。

2 マレー (ムラユ)

マレー半島の南にできたマラカ王国は、王国成立譚がスマトラのスリヴィジャヤ王国の末裔によって 1400 年頃建国されたと語るように、東部スマトラ・マラカ海峡を中心にした南からの勢力の進出であるが、その後の交易港市国家としての繁栄により、いわゆるムラユ諸国の統合のシンボルともなった。¹³⁾ アラブ、インド、中国、タイの影響をこうむった後、ポルトガル、オランダ、イギリスといった外国勢力の侵入と共に、現在はタイに住むマレー族、スマトラに住むマレー族とも恣意的に決められた国境で別々にされ、またインドネシアからの様々な種族の入植もみられるので、一般にマレー語を話し、マレー慣習法に従うムラユ人という枠組も、きわめてあいまいとならざるを得ない。ただ 19～20 世紀にかけて大量の中国人、インド人が流入したのに伴い、ムスリムであることが強調されるようになり、非ムスリムとの対比そのものがムラユ人のアイデンティティの根幹になる。¹⁴⁾

ムラユ社会においても、一方では支配者とそれを取り巻く貴族階層があり、他方では在地の豪族とその追従者と農民の階層とがあった。これに奴隷制も存在していた [Gullick 1958]。Syed Husin [1981] の描く三角形のような支配の構図 (図 2) は、A の完全な形成がなかったことを除けば恐らくブギスの社会にもあてはまるものであろう。王族は raja あるいは anakraja と呼ばれ、王族の血をひいていない首長は datuk, その係累は wan であり、庶民は ra'ayat と総称され、村長 penghulu もその一部と考えられる [Gullick 1958:21-22]。王との近さによって raja, tunku, megat, ungu などという称号が微妙に変化し王族の間での地位の違いが生じる。Perak 王国のように内婚により親族核 (waris negeri) が形成されるのはブギスの場合と同様である。この親族核を Gullick は patri-lineage と呼ぶ。しかし厳密な父系原理が貫徹していたのではもちろんなく、Gullick も認めるように、集团的な側面より出自が重んじられていることから考えて、この場合 lineage という語は親族集団ではなく血統として考え

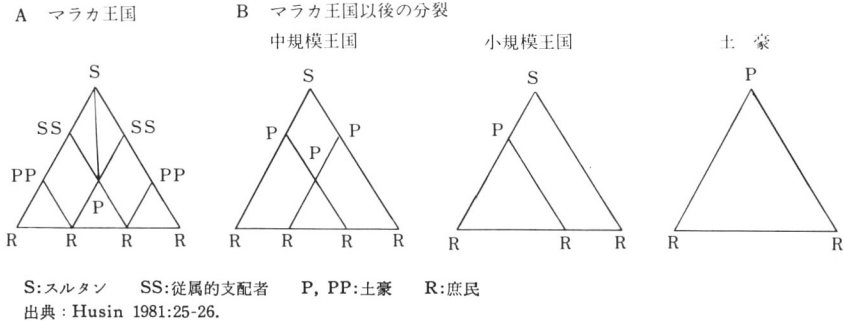


図2 マレーの支配構造

の方が適当である。

貴族層の内婚傾向と同じように、マレー人庶民も親族間の婚姻を優先させる。地域的な変異としては、第1イトコを避けるか否か、その中でも特に父の兄弟の娘との婚姻を避けるか、異世代婚を厳しく忌避するか、などに関する違いが指摘される〔前田1978:495ff.〕。更に地域内婚及び階層内婚とのからみあいも重要である。ブギスに見られるような特定のイトコ婚に対する名称はない。村落レベルでの比較に限れば、ムラユの社会はブギスの社会程婚姻を軸とする階層分化に敏感でないように見える。

イトコの親族示称は *pupu* で表わされる。*sepupu* (第1イトコ), *duapupu* (第2イトコ), *tigapupu* (第3イトコ) というように数字を附加して, *saudara* (キョウダイ) *sepupu* ないしは *adik-beradik* (キョウダイ) *sepupu* と表現される。ブギス語の *sappo'* は *sepupu* と同じ語であるという〔Matthes 174〕が、ブギス語の場合はマレー語と違い *sappo' siseng* (第1の) という風に後に順序数をつけ, *sappo'* 単独で用いられ, キョウダイ名称と熟して用いられない。¹⁵⁾ 呼称にはキョウダイ呼称が用いられる。ムラユのキョウダイ名称は兄と姉との区分があって *abang* (兄), *kakak* (姉), *adik* (弟妹) が一般的であるが、ブギスのように同性対異性によって名称が変わることはない。

ブギス語には見られない *suami* (夫), *isteri* (妻), *saudara, putra* (息子), *putri* (娘), *keluarga* など、経由は別にしてサンスクリット起源の語がマレー語の日

常親族関係の語に多く見られる。前5者には laki (夫), bini (妻), adik-beradik, anak (娘, 息子) のように本来のムラコ語がある。¹⁶⁾ 基本家族・小家族をピッタリ表わす言葉はない。keluarga は小家族に限定する場合もあり得るが、より広い親族を含意している。kelamin (夫婦), anak bini (妻子) という語が強いて言えば小家族にあたる。¹⁷⁾ 広義でいう親族としての keluarga は上述の saudara, adik-beradik, sanak でおきかえられる。ただインドネシア同様、センサスや政府用語として「家族」= keluarga という使い方が定着しつつあることも確かである。これに対し「家」族というのは seisi rumah (家の中の者), serumah (家をつつある者) という語があり、ブギス語の sibola, ジャワ語の somah に対応する。通常 household という場合には keluarga ではなく rumah tangga (家・梯子) が使われる。

ところで keluarga あるいはそれに類似する saudara (marā), sanak (saudara), adik-beradik および waris というのはどのような概念なのか。

サンスクリットの sahodara (sahodari) は「同じ子宮の」という原義から、同じ母から生まれた兄弟(姉妹)を指す。ドラヴィダ系では異母キョウダイもふくみ [Trautman 1981:44], ベンガルでは sahodara あるいは sagarbha は兄弟(bhāi)と姉妹(bon)とを含む [Inden & Nicholas 1977:70]。マレー語でも saudara はもともと兄弟姉妹を指している。¹⁸⁾ 親族一般を指す場合に saudara 単独で用いられることもあるが、より明確には kaum saudara, sanak saudara, saudara mara という複合語が用いられることから、一義的にはキョウダイの意に限定されているのであろう。同様のことは adik を重複させた adik-beradik がキョウダイという意味から広く親族を指すことにも見られる。あまり使われない sanak は恐らくブギス語の anang ないしは sianang のように anak (子) から出た語であろう。¹⁹⁾ waris は普通イスラーム法上の相続、継承権者を意味するが、Kelantan では saudara と同義の親族 (a collectivity of kin, a bilateral set of personal kin) [Firth 1974] の意で使われている。いずれの語を使うにしても、親族を表現するのに saudara (キョウダイ) 関係がその基調のメタファーとなっていて、anak (子) 関係あるいは親子関係 (sianang, sijang, sibija, siles-

表2 マレー語の親族関係用語

マレー語		外来語	
夫婦 ↑ ↓ 親族	[kelamin (夫婦) anak-bini (妻子) anak-beranak (子供達) adik-beradik (弟妹達)	keluarga	wali (後見人)
	sanak (「子」族)	saudara saudara mara kaum saudara	waris (財産相続権者)

前田 1983 : 202の第1表を改変。

sureng) はブギス語程顕著ではない。これらをまとめて、マラカの例に従って整理すると表2のようになる。

Wilder [1982:36, 87] は、sib-names, birth-order names, kin-numeratives, sibling-series, fratronyms あるいは timang-timangan と呼ばれる子供ないしはキョウダイの誕生順を示す呼称をマレー語の称号の意味である gelaran (あだ名の意もある)として分析し、キョウダイ集団の社会的連続性と結束 (solidarity) を強調する。要するに gelaran がセットとしてのキョウダイ結合を強めているというのである。ただ gelaran の存在だけでキョウダイ結合を「集団」として扱うには難点があり、例えば口羽他 [1976:287-288] のようにキョウダイ・セットの居住分布による分析、実際上の協働関係の事実が指摘される必要があろう。都市居住のマレー人を調査した McKinley [1981] も互換性の期待に特徴づけられるキョウダイ統合の理念 (an ideal of sibling unity) がマレー人の行為を「位置づける」、「状況づける」役割を果していると指摘している。²⁰⁾ 彼の場合はキョウダイ間の実際上の葛藤、行き違いを前提とする規範的・理念的紐帯の面を強調する。これらの結論が正しいかどうかは別として、マレー人がキョウダイ・セットに一つの概念的な統合を与えているという見方は重要である。そうはいいながらも、マレーの親族を考察する研究者が集団という語をしばしば用いながら、すぐさま関係ないしは二者関係の重要性を言う (例えば [loc cit.]) ことにも注意したい。²¹⁾

血族と姻族との区別は“saudara”の範囲をめぐる、地域的な違いのみならず、状況・個人による食い違いが見られる。配偶者を saudara として認めるか

どうかについて、Firth は妻を自分の waris と認めない例をあげながらも、waris と結婚した者 (an immediate affine) はその婚姻が継続している限りにおいて waris と認められるとする [1974:46-47]。ただし、姻族の waris は自己の waris とは決して認められないという。Wilder も血縁関係のない配偶者を自己の saudara として含ませない例 [1982:95-96] をあげる一方、傍系尊属親の配偶者の姉からの孫を saudara として認める例をあげて、「婚姻紐帯が血縁紐帯と同じ価値をもちうる」[1982:64] ことを指摘する。Banks は血に基づく親族と婚姻による親族とを別に一括して指す語はマレー語にはないが、両者の間をマレー人は明確に区別しているという [1983:102]。それにも拘らず、配偶者の親族はあたかも自分自身の親族のように扱わねばならないという原則があり、婚姻による関係は重要であることを彼は強調する。シンガポールのマレー人については、姻族の位置は明確に定義されていないが、どのように姻戚関係が近くとも姻族は orang lain (他人) であるという [Djamour 1959:26]。

Banks の主張するように、血 (darah) の伝達が benih (種、精液となって表現される darah 形成の男性貢献分) と baka (darah 形成に際しての子宮内及び授乳に際しての女性貢献分)²²⁾ によって決定され [1983:67]、darah の濃さ薄さが直系的には lapis (世代)、傍系的には pupu (イトコ) の度合を決める [ibid: 54-56] と Sik のマレー人が概念化していると考え、配偶者に対するあいまいさはある程度納得できる。血統が存続するためには配偶者が必要であり、しかもそこから生まれてくる子孫は夫婦にとって等しくすべて血族となる。即ち配偶者が血族でないのは、婚姻当事者及びそれより過去の人にとってであり、それ以後の世代の者にとっては完全な血族なのである。ある程度といったのは、それでは何故配偶者を血族に組み入れてしまわないかという疑問が残るからである。離婚が多く、夫婦関係がこわれ易いからという現象的な説明、あるいは residual category²³⁾ であるからと操作的な説明をすることができるかも知れない。あるいは、熱心な人類学者に問いつめられたマレー人がキョウダイ関係を意味する saudara に引きずられて、非常に狭義に親族を解釈したもので、夫=妻という共住原理から「本当は」配偶者を広義の saudara に入れているのだと勝手

な解釈をすることも可能かも知れない。これはそもそも人類学者の考えるような血族・姻族の区別はなくて、親族の中の一つのカテゴリーを人類学者がたまたま姻族と同定したのだという主張にもなる。

Firth, Wilder は共住を契機とする親族紐帯を指摘しながら、その重要性を十分に展開していない。これに対し Banks は次のように整理する。社会関係の距離の程度（親密さ・疎遠さ、道徳的義務の重さ、軽さ）、すなわち近親と遠親とを区別するのは、血（darah）と合意（muafakat）と愛情（kesayangan）の三つの概念的次元内での関係の在り方である。このいずれの次元においても、世帯がすべての指針となり、現在共住する世帯（内なる社会空間）、過去に共住経験をもつ人々（現在は訪問しあう関係）の空間、その他の訪問関係のある親族・友人の位置する空間、その外にある異人の世界にマレー人の社会空間が分かれる [Banks 1983: 169-171]。ここでは先に引用した「マレー人は血族と姻族とを明確に区別する」という原理は捨てられて、共住原理から社会空間が描かれているのである。

先にも触れたように、マレー語には姻族を全体として指す語はないが、姻族の中の特定の人を指す親族名称には、配偶者から始まって ipar, bisan, biras, mentua, menantu（各々の意味は語形の似たブギス語に同じ）、Negeri Sembilan における semenda がある。これら姻族に対しては、配偶者を含めてキョウダイ・父母呼称が日常生活では用いられる。同時に配偶者のその他の親族に対しても、配偶者から見た呼称がそのまま使われる。これは婚入してきた配偶者をあたかも血族のように認めるという説明からもきわめて「自然」なことであろう。しかも婚後、両者の家の間を往復することによって、婚姻当事者にとっても何ら問題が生じない。ただ親族も姻族の枠組も個人を規準として動くものであるから、他の親族にとっては上記の姻族示称で特定できる範囲でしか、このような呼称による親族の包摂はおきないのである。

Wilder [1982: 91-92] は、親族名称の語形群ないしはパラダイムとして、ipar: biras: bisan を音素の配列、血族名称ではあり得ない r, s, n の音で終わっていること、及び当事者が同じ語を相互に使えることから、一つのセット（a

marriage-plus-sibling 'circle', [*ibid.* : 65]) として取り扱い、同様に3音節からなる *mentua* : *menantu* : *semenda* は一つの意味論的単位となっているとする。これらの語はすべて姻族を指すものであることから、親族領域の構造化が窺われると Wilder は主張する。包括的なカテゴリーとしてではなく、あくまでも個々の対人関係を明らかにする用語の集積であることに注意しておきたい。

このある意味では非常に特定の姻族名称が血族から姻族を区別するための装置であるとの見方を多くの研究者はしているが、しかし除外するだけであれば別に名称をたてる必要がないのも明白である。特定の名称があるのは、それらの位置にある人間が特定されるだけの理由があるからである。その理由の中に恐らく共住ということが入っていると思われる。*mentua*, *menantu*, *ipar*, *biras* は、少なくとも共住の機会があるカテゴリーである。これらの語は婚入者を位置づける語として重要なのである。この際、婚入者が男か女かということも少なくともイスラームの影響の強いムラユでは考慮されねばならぬであろう。Wilder [1970] が特徴づけたように移動する男性と定着的な女性との区別がマレー社会にあるとすれば、婚入者は男の場合が多く、受入れ側は *ipar*, *menantu* としての彼に多くの期待をかけることになる。同じ *ipar* でも姉妹の配偶者達は可能な共同作業者として重要であり、特に *biras* を姉妹の配偶者に限定して使うことがあるのもそのようなことに関係があるのかも知れない。婚入者の出てきた上記以外の親族にたいしては婚姻させる親同士を指す *bisan* があるわけであるが、この *bisan* 関係というのは道徳的義務などが課せられるわけではなく、むしろ *bisan* という関係以外には無関係ですよということを暗に指しているような印象を受ける。もっとも、婚姻関係は個人の間ではなく二つの家族(親)の間のきずなであったからという昔の慣習の残存説 [Provencher 1971:148] もある。

かくして、共住を契機として社会空間を考えた上述の Banks の図式は、血族と姻族とをカテゴリーとして明確に区別する考えより、より妥当性をおびてくるのである。

3 オラン・フル

オラン・フルはマレー半島南部に住むオラン・アスリの一部で、森林産物の採集交易と焼畑とに生計を依存している、非ムスリムの種族である。その社会はムラユやブキスのように王国の中にとりこまれず、比較的隔離した状態に置かれてきた。10～30軒からなる集落にわかれ、各集落は *batin* によって代表される。伝説によれば、スルタンの妹といわれる *Raja Benua* がオラン・フルの中に入って結婚し、その血統の *suku saka* あるいは *suku batin* が *batin* になると言い伝えられているが、現実には血筋とは必ずしもかかわりなく、説得力・弁舌・呪術的影響力のある者が *batin* になっている [前田 1969c : 349-350]。コミュニティが小さいので親族関係が密であることも、*batin* の血統がやかましく言われぬ理由の一つかも知れない。いずれにしても、外部世界との政治的・経済的従属関係はあっても、内部では *batin* の地位についた者が指導的立場にある以外は階層的関係はない。

オラン・フルの社会を個人の観点から見たモデルとして前田 [1967a: 852] は次のようにまとめている。

(1) 核家族——生まれた家族にしろ、結婚して作った家族にしろ、常に個人の第1の壁を形成するのは、核家族である。一組の夫婦からなる家族を *se-kelamin* と称し、必ず独立の生計を営んで、一つの世帯をなしているものである。この世帯の中に、核家族以外の親族がくりこまれているのは、全体の14%強を示すが、その親族の多くは、永久的世帯共同者ではない。

(2) この核家族をめぐって、結婚、葬式、相続などに必ず参与する近親の縁者 *waris* がある。これは、核親族とも言うべきもので、父母、オジ、オバ、きょうだい、子、オイ、メイがこれにあたる。夫と妻との各々の *waris* は厳然と区別されて交わることはないが、配偶者の *waris* が、とくに重要な意味をもっていることは、姻族に対する親族名称の項で述べた通りである。この場合、姻族が、あたかも血縁のように取り扱われ、夫と妻との *waris* が二つ、ひっついて、一つの同心円をなす。

(3) 直系三親等、傍系第三イトコまでの範囲の親族。この場合も、夫婦それぞれの親族が重なって、大きな同心円となる。

(4) 上記の三つが、血縁による限定なのに対し、ここで初めて、地縁によって同心

円を描くことになる。即ち、部落である。もちろん部落の範囲によって、核親族や親族を縦断してしまうことが多い。ことに親族全体が一つの部落の中にいるということは、理論的にも不可能なことである。しかし、このモデルを一つの行動規範として考えると、常に部落の方が、親族の外円をなしているとするのは正しい。部落は、親族と違い、種々の異質なものを容易に受け入れる開いた集団であるので、親族内部よりも、対人関係に相違がつけられる。但し、理念的には、一つの部落は親族の集まりであると言われる。

(5) エンダウ川流域のオラン・フルのコミュニティ。これは、部落連合といったものではない。彼らの意識の間で、一つの川に住む者は、みんな親類なのだ、ということがあり、かつ、部落相互間の接触交渉が、他のコミュニティよりも全体として頻繁であるからである。

(6) オラン・フルの社会。奥地に住み、貧しい生活に迫られている同類の民。必ずしもイスラームに改宗していない者という条件はつかない。

(7) 非オラン・フルの世界。マレー人、中国人、インド人など、彼らの搾取者の世界である。

この同心円の構造の上に、超自然的秩序の世界が垂直的に組みたてられ、全体としてのモデルが、彼らに行為の決定をするための、文化的格律を示すことになる。

sekelamin を核家族としているが、実際には「単身生活者」「欠損家族」あるいは「現在家計を一緒にしているものの集団」としても使われる〔前田 1967b : 467〕。一つの夫婦家族が一つの家屋に住むことが原則でありながら、かなりの一時的寄宿者の存在があるのがオラン・フルでは特徴的であるが、寄宿者と宿主との関係は、若干の類別的關係を除くと、夫婦の一方の ipar ないしは biras か、あるいは mentuha か menantu の所に寄宿している。57 軒に 78 の “kelamin” (対) が住んでいて、寄宿している 21 の kelamin は単身が 3、欠損家族が 4、夫婦のみが 6、夫婦家族が 8、包摂家族が 1 である〔*ibid.* : 472-474〕。前田〔1967b〕の分析が、家屋を単位とする居住者と、“kelamin” の構成者とを別々にわけているのは、“kelamin” と称するものの経済的独立性が強調されるせいであろうが、また核家族という概念にとらわれ過ぎていることも見落せない。「子供があるなしにかかわらず中心的な家族的核となるのは、核家族ではなく

むしろ夫婦であるような印象を抱かしめる」[*ibid.*: 476]と指摘し、また核家族と称するものの4分の1には継子が含まれている事実ともあわせ、かつまた単身生活者をも *kelamin* と報告していることから、*sekelamin* というのは、第一に独立した生活を営める単位ということであり、それはオラン・フルの置かれた生活条件からすると、とりもなおさず夫婦単位となるということを意味していると考えるべきである。オラン・フルの置かれた生活条件が夫婦の協働を必要とすることは、自然条件、日常生活の観察からも言え [前田 1969b]、事実、女性で20歳以上、男性で25歳以上の者に結婚経験の無いものは皆無である。

単身生活者が独自の家に住んでいるのは57軒のうち4軒である。そのうちの3ケースは高齢寡婦で、1ケースは鰥夫（政府の棄置場の管理人）である。一方、高齢寡婦で自活自炊をしながら寄宿しているのが1ケース、寄宿しながら独立した生計を営む若年の鰥夫、未婚者が各々1ケースずつある [前田 1967b: 478]。これらの寄宿者のケースは、離婚直後、出稼ぎ、その他の過渡的単身生活者であって、4軒の独居単身生活は子供が独立世帯を営むか、無子の死別ないしは離婚による残存配偶者である。従って過去には *sekelamin* を形成していたのである。寄宿、寄留、養取の簡易さ、離婚の頻発、あるいは移動の容易さなどから、個人・世帯レベルでの離合集散が指弾を受けることなく行われることが窺われる。

婚姻に関しては、養子、異母、異父をとわずキョウダイとの結婚の禁止、親子ないしは異世代間の禁婚があるだけで、イトコ婚などは自由に行ってもよい [前田 1969a: 743-744]。婚姻当事者の意志が尊重されるとはいえ、婚姻には親族と *batin* との承認が必要である。この際に重要な発言力をもつ親族が *waris* である。この *waris* を代表する者が *wali* と呼ばれ、父親よりもオジ、その中でも母方のオジの発言力が強いとされる [前田 1969a: 745]。女性の *waris* の意向は重要であるが、*wali* となることはない。「両親にとっては、各々の義理のキョウダイが重要な発言力を持つことになる」[*ibid.*: 844] という説明からも、この *waris* は必ずしも血族だけではなく、その配偶者も含まれているのであ

る。

それにも拘らず、婚前には夫と妻との各々の waris は厳格に区別される。結婚式後両方の waris が共食儀礼をもち、両者の結合が確認され、これ以後両者間には相互的な尊敬及び遠慮の態度が期待される。親族同士が婚姻した場合でも、従来の親族関係ではなく、新しい姻族関係によって親族名称が選ばれる [ibid.: 846]。それはマレー語と同じく ipar, mentuha, menantu, bisan, biras の示称である。但しマレーとは異なり、類別的な親族をも包摂する。ipar は配偶者のイトコ、mentuha は配偶者の親のキョウダイとイトコ、mentantu は子の世代のすべての血族の配偶者にまで対して用いられる [ibid.: 844-845]。bisan, biras にはこのような包摂がないだけでなく、上述のカテゴリーとは違って特別な態度の要請がない。ipar, mentuha, menantu に対しては父・母・キョウダイ呼称が呼称として用いられるか、テクノニム (～の父, ～の母) か配偶者名 (～の夫, ～の妻) が用いられ、個人名を呼んだり言ったりするのは厳重に忌避される [loc. cit.]。そして卑属親である menantu をも含んで、aji という尊称の二人称代名詞が用いられる。言語上の忌避は、これらのカテゴリーを大切にすることの表われで、実生活上では、例えば世帯を越えて共同が必要な作業には娘婿や姉妹の夫とグループを組むことが多い [前田 1969b]。「一般に血族に対するよりも姻族に対する義務が強調され、姻族関係が重要視される」[前田 1967b: 472] という。先述の (2) の、waris が区別されながら、姻族があたかも血縁のように扱われるという一見矛盾した表現は、自己以外の waris にとっては区別されるが、自己と配偶者とにあってはその両者が交叉して、配偶者の waris と自分にとっての姻族とが重複するということである。

一方、下の世代から見た場合、マレーの benih と baka のように、オラン・フルでも darah (血) と daging (肉) とが父方、母方とを指すものとして、母方は sebelah daging と言われるが、これらを法的・宗教的・社会的・経済的に区別するということはない。waris の他に suku saka や kaum daging (肉の族) あるいはマレー語と同じ adik-beradik または saudara が、キョウダイより広い範囲の自分の親族を指すのにも使われる [前田 1967a: 843]。

このように *sekelamin*, *waris*, 姻族（もちろん、これを包括する語はない）の間では経済的互酬性に基礎を置いた結合、分離の選択がなされている〔前田 1967b : 483〕。これは単に血縁関係によって一元的に社会関係が構成されているのではないという主張であるが、もう一步進めて、共同生活を営むために血縁関係が利用されるのであって、共同生活の網の目をつなぎ合わせるために血縁関係があるとも言える。近親を越えて遠い親類になると、「はっきりどんな間柄かは知らぬが、自分の親と他者の親とが親類であったから、自分と他者とも親類であろうと推定する位の間柄」〔*ibid.*: 847〕になってしまうということも、生活のための生活に直接関係することが少なくなってしまうからではなからうか。コミュニティが比較的小さく 父方・母方いずれの系譜をも選択でき、新しい婚姻による世代の若返りが行われ、姻族を擬似血族として呼称し、テクノニミーによって系譜関係があいまいになるという状況は、いつでも必要があれば自分の親族に数え入れる可能性を残しつつ、あいまいなままで「貯蔵」しているとも解釈できる。

従って上記の同心円的区分で、親族と集落とが血縁と地縁との区別のように誤解され易いのは訂正されるべきで、*sekelamin* の段階から社会的空間として連続的なものとして捉え、*sekelamin* を最小共住単位と考えた方が良い。(1)～(7)の社会的空間における遠近は、地理的空間と社会関係とが区別されずに「生活」のために同時的に層化されているのである。そう考えてこそ、始めて集団形成に際して、「親族組織」は住民の意識のなかの虚構であって、虚構を作らせる動機はその外に即ち経済的互酬性の勘定に求めねばならない〔前田 1967b : 479〕という指摘が理解される。

このモデルを同心円的構造と捉えるのは、ひとりの個人のある特定の時を静止させた時に同心円のように考えられるということであって、実際は円の境界はあいまいでばやけている。むしろ同心円とするよりは社会関係の網の目が密に張りめぐらされている内なる核から、段々と網の目が粗になっていく外の世界に向うイメージの方が適当であらう。その網の目を地理的に家や集落やエ نداウ川流域という単位が分けているに過ぎない。しかしこの網の目のイメージ

も時間的な過程というものが脱落していることに変わりはない。この網の目の中心にある夫＝妻という単位そのものからして変わり易いということになれば、観察者としてはより変化の少ないと思われる親族を分析の中心に据えたいと思う。しかし婚姻関係を基礎にして始めて成立し得る親族は、単系的な原理ないしは一定の帰属に関するルールあるいは近親婚のような婚姻戦略を与えなければ、常に個人を中心とした流動的な関係に留まらざるを得ない。オラン・フルにとって不変なのは、生きるための生活共同単位を求めることであり、このために婚姻があり、それを通じて親族のカテゴリーが利用される。結果として、時間を止めて分析すれば親族関係が説明原理にはなっても、社会過程としては生活単位という、変化を前提とした装置を考える必要がある。そして共住というのは、始まりにおいて偶然的な事象に見えても、共住そのものは必然なのである。

Ⅱ 比 較

上述の文化概念のスケッチは、実際の日常行為を直接記述するのではなく、当該の社会の人が説明したり、民族誌学者が解釈したりしている「表象」に依存していて、基本的にはこれらの表象を事実として受け取ることを前提としている。²⁴⁾ いわば、それぞれの社会でのいわゆる親族に関係する「文化的単位」[Schneider 1984]と主張されるものを並べたものである。本節では、必ずしも民族誌だけでは明らかにならなかった各々の社会を通じての類似点、差異点を二、三指摘しておきたい。

1 親族名称

親族名称については前節で体系的に言及していないが、その代表的な分析例については、Mattulada [1975]、Wilder [1981]、前田 [1967a] を参照されたい。細かい相違点は別にして、ほぼ同様な骨組みであることは、次に掲げた図3、図4、図5の基本的な名称の配置の比較でわかって、念のためにこれらをまと

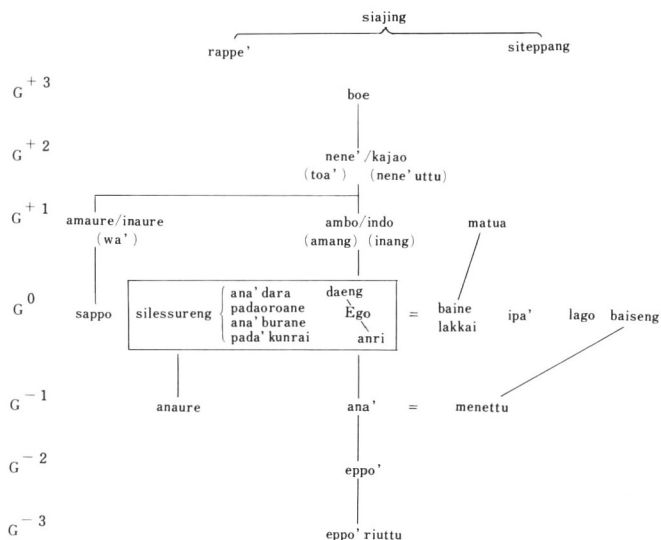


図3 ブギスの基本的親族名称

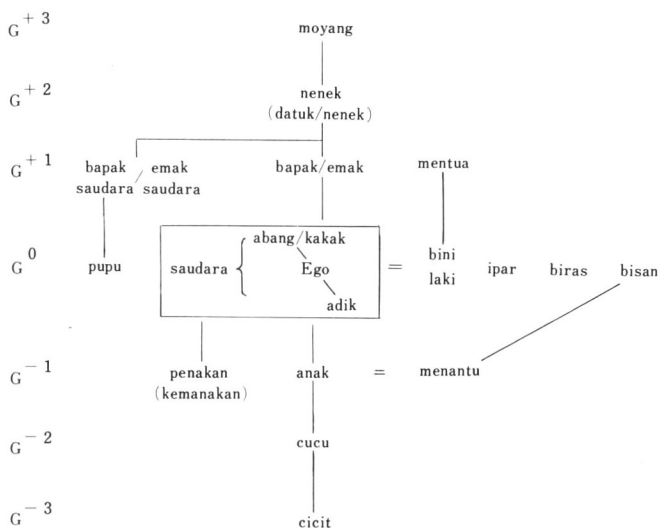


図4 マレーの基本的親族名称

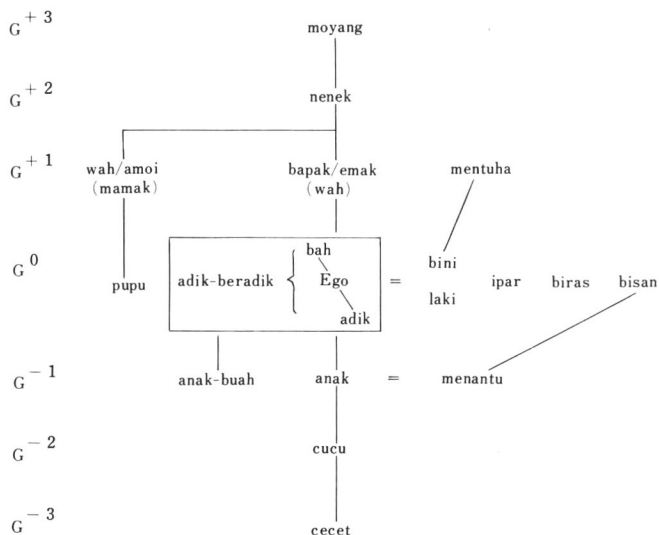
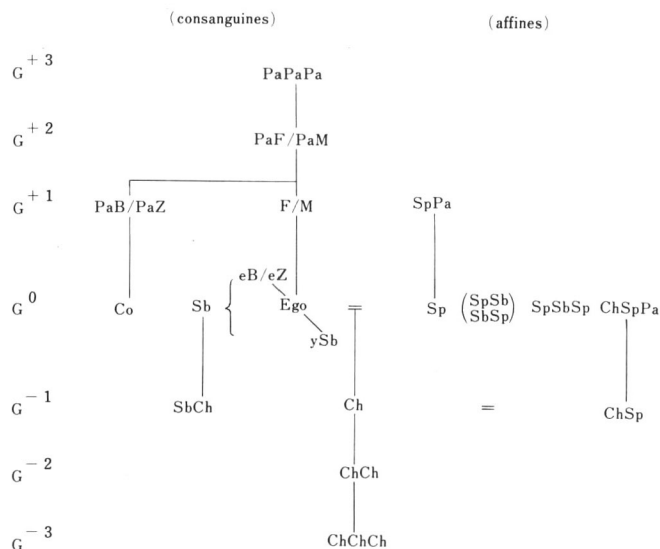


図5 オラン・フルの基本的親族名称



G: generation Pa:parent Sb:sibling Sp:spouse Ch:child Co:cousin
 F:father M:mother B:brother Z:sister e:elder y:younger

図6 基本的親族名称の概念図

めて人類学の慣習に従って英語略号で示すと図6のようになる。

三つの社会を通じて、姻族名称が殆んど同じであることが注目される。 G^{+3} の世代(曾祖父母の世代)と卑属親(G^{-1} , G^{-2} , G^{-3})では、性別による別称がなく、男・女という形容語を附加して区別する。 G^{+2} に関してはブキスでは性別が明確であるが、ムラユでは地域によって混乱があり、オラン・フルでは区別されない。 G^{+2} , G^{+3} , G^{-2} , G^{-3} では傍系の同世代親も包摂し得る。 G^{+1} , G^{-1} の傍系親は、父母・子名称の派生語(ama-ure, ina-ure, ana-ure, penakan, kembangan)²⁵⁾か、それに「キョウダイの」などをつけた複合語(bapak saudara, emak saudara, anak saudara, anak buah)かである。ただし、オラン・フルは別個の名称を用いる。

キョウダイ名称は兄姉と弟妹とを区別するのは三者とも同じである。弟妹はまったく同じであるが、兄姉名称は異なる。ことにマレーの兄／姉の区別、ブギスの話者の性別による同性／異性キョウダイの区別が指摘される。マレー語のみに誕生順の名称が G^{+1} , G^0 のキョウダイに使われる。キョウダイを総称する語が、親族一般をも包摂して使われるのは三つの社会に共通している。

キョウダイ名称の多様さと対照的にイトコ名称は基本的に同じである。また、テクノニムも一般に見られるが、オラン・フルでは個人名の忌避と結びついてより徹底して行われる。親族名称と名付けとは Wilder [1976:305] の主張するように緊密に結びついていて、単に親族名称だけを検討するのは不十分ではあるが、基本的な名称についての言及してみた。

2 姻 族

オラン・フルの場合に明確なように、姻族用語の中で biras (あるいは lago), bisan というのは日常生活上、特に権利・義務の期待される間柄ではない。²⁶⁾もっとも重要なのは一時的にしる共住の機会のある配偶者, ipar, mertua, menantu であり、夫と妻とが親族慣行上同一視される(例えば、妻の意見が必要な時に非血縁の夫が述べる)原則からいえば、これらの人は配偶者同士にとっては最も近い親族になる。姻族を示すとされるブギス語の siteppang (teppa 触れる, 関わる)

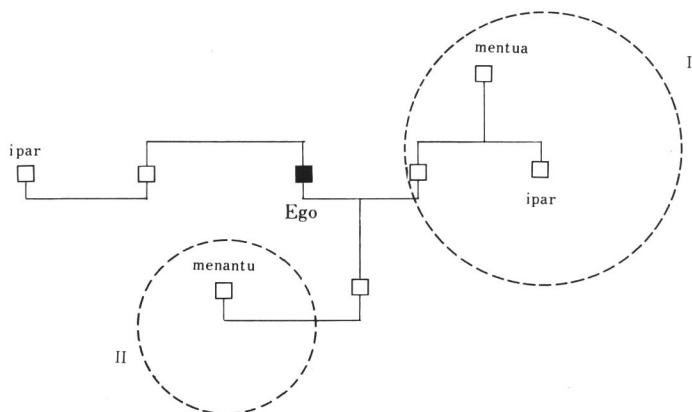


図7 姻戚関係

あるいは sompong lolo (新しい結び?) にしても、実際には姻族をひとまとめに示しているのではなく、姻戚関係者を示すに過ぎない。要するに、図7のように、姻戚関係がⅠからⅡに時間の経過と共に広がっていき、この婚姻を通しての関係が生活の核に組み込まれていくと言え、ある意味では姻族は親族と等価なのである。

3 親 族

親族の範囲については、遠い／近いの区別と、ある程度離れてしまうと親族としては認めないことの二つが共通に指摘される。遠近の境を第2イトコにおくか第3イトコにおくか、非親族を第4イトコ以上にするかということは、どのようなコミュニティ研究をとっても住民が一致して認めるような境界は見られない。むしろ、 G^0 と G^{+1} とのキョウダイとその子孫とが親族圏の核になると解釈の方が明確になる。pupu 関係を世代の距離と等置するのは理論的には正しいが、生活の共同・協力ということでは当然同世代との交渉の機会が多くなり、年老いてからは日常の接触のある範囲の子孫によりつながりの感情が強く持たれることは注意されてよい。

これらの社会では、血縁というものはそれだけで価値を持っているのではな

く、他の生活条件が加わらなければ社会関係として発動しない。恐らく血縁ないしは生物学的紐帯があるが故に発動すると考えられ易い親子関係も、例えばオラン・フルのように7～8歳で自由に他の家に寝泊りしたり、マレー農民のように親子の間で貸借契約関係に入ったり、マレーやブギスの貴族のように親と子との争いが常時みられたりすることを考えると、少なくとも血縁が社会関係を構成する十分条件でもないし、祖父母―孫のように他の結びつきによる関係が代替しうることを考えれば必要条件でもないかも知れない。この三つの社会では、血縁ないし親族関係というのは社会的に一定の定義があたえられて義務・権利が明確にされているように見えるが、実際にはむしろそれを操作して、沢山ある社会関係の中の一つを選択する枠組に過ぎないと言える。

4 世帯

これら三つの社会には、いわゆる親族の中を切り取った小家族を指す語は、部分でもって全体を代表させる提喻的用法以外にはない（前田 [1983:201-202] 参照）。マレー、ブギスには「家」を一つにする人々ないしは世帯を指す語があるが、オラン・フルの場合は、家中心というよりも夫婦中心という原理が強く、この語は報告されていない。同じマレーシアのオラン・アスリの Ma' Betisek (Besisi, Mah Meri) 族でも *kelamin* という語が使われているが、報告者はこれを *household* と訳し、二人が婚姻関係に入ることによって生じてくる共住単位としている [Karim 1981:27-28]。この社会では、もともと *odo'* という語が使われていたといい、現在でも夫婦を呼ぶ *household name* のことを *gelah odo'* と言う [*loc. cit.*]。同じオラン・アスリの Chewong 族の場合も夫婦が生存のために必要なすべての仕事をする自給自足的単位と報告されていて、同様に *household* が訳語として使われている [Howell 1984:45-49]。このことは「夫婦」(対)ということばが使われていても世帯と考える方が適当であることを示している。

世帯あるいは「家族」という単位は、大きな政治組織が確立して徴税、賦役の単位となる時にある程度画一化される。その意味で、そのような単位の必要

表3 オラン・フル, マレー, ブギスの比較

比較の要素	オラン・フル	マレー	ブギス
二者関係	対称的相互性	非対称的相互性	階統的相互性
二者関係の基本的表象型	夫婦 (kelamin)	キョウダイ (saudara)	親子 (siajing)
男と女	一対	移動/非移動	拡張/凝集
夫と妻	平等		上/下
キョウダイ結合	兄弟と姉妹	姉と妹	兄弟と姉妹, 兄と弟
キョウダイ名称	B=Z	弟妹のみ B=Z	B/Z
親子関係	(F・M)→Ch	F/M→Ch	F→S
結合の契機	協働・生産	共住	中心への従属・土地
対人関係の規律	pantang / punen (タブー)	rasa (感じ)	siri' (恥)
	互酬性		pangkat (地位)

でなかったオラン・フルと、その他のブギス、マレーとは区別されねばならない。より生存に密着した単位と為政者の意向にそった権力からの押しつけによる組織単位とは自ずから異なったものとなったとしても不思議ではない。同時に Ma' Betisek に見られるような借用ないしは相互影響の問題も慎重に考えられるべきであろう。

5 模式的比較

ブギス、ムラユ、オラン・フルの親族組織は基本的には同じであるという前程の上で、それらの違いを模式的に示すと表3のようになる。

おわりに

1 親族圏

人の一生という観点から見ると、親族の範囲というものは親族名称表のような静態的なものではなく伸縮可能な社会圏である。生まれた時に組み込まれる親族圏では両親のキョウダイとの結びつきが重要となる。これら尊属の配偶者は生誕以前に親族圏に関係をもっているものとして、血族と変わりなく関係が持たれる。いわば「親」族を構成する。イトコは婚姻可能な対象として、キョウダイは相互援助の相手として存在する。彼らの配偶者は ipar として頼りになる関係になることが多い。自分の家を持って独立すると、配偶者の親族との

関係 (ipar, mentua) が重要になってくる。この段階は「キョウダイ」族を構成すると言ってもよいかも知れない。これが「家」族である。子供が独立していくと、尊属や同世代親との関係より卑属親との感情的な結びつきが強くなり、いわば「子」族とでも言える関係を形成する。必ずしも直系の子孫のみではなく、傍系の者も組み入れられる。

このような個人中心の流動的な親族圏も、ブギスの王族に顕著に見られるように、近親婚による親族核の形成と昇嫁婚によるその拡大とが計られていき、ある一定の祖先から出自した子孫のストックを事実上作りあげることになる [Errington 1977; Kemp 1978]。これは王族、貴族のみではなく村落レベルでも Chabot [1967], Burrige [1956] の報告のように親族核が形成されていることがわかる。そしてこのような親族のストックはその核からの遠近によって財の相続、地位の継承に差異を生ぜしめる。これは血筋という親族原理が操作されるわけである。メンバーの包摂・排除が実際には政治的・経済的理由によってなされても、その説明には長子優先、男系の強調、称号の違いによる血統淘汰の法則、血の純潔さなどの親族イデオロギーが用いられる。もしこのような政治的・経済的理由がなければ、あいまいな親族圏となってしまうのである。

2 二者関係

「親」族、「キョウダイ」族、「子」族と族という字を使っているが、もちろん、これは一つのまとまりのある「集団」というわけではない。親族名称がすべて二者関係によって規定されているように、親族も二者関係の累積体である。この意味で、世帯を中心として切り取られた親族を家族圏ということによって表現した [坪内・前田 1977]。そのような社会圏は必ずしも認知されるすべての者が一定の義務・仕事を共同で遂行したり、財を管理したりすることなく、また時に応じて寄り集う際にもその範囲はあいまいであり、しかも厳密なメンバーシップの固定ということもない。これは loosely structured と言っているのではなくて、家族や親族に固有の構造がそれ自体で形成されるというのは疑わしいということを言っているだけである (北原 [1985:26] 参照)。構造は二者関

係とその統合の契機とに求められなければならない。

親族示称の中で、お互いに同じ名称で指示するのは同世代に限られている。この場合も呼称になると、年齢の上下によってキョウダイ名称が使われる。例外はキョウダイの配偶者同士、子供を結婚させた親同士のみである。即ち、親族関係を表わす名称は、世代または年齢の上下によって区別されていて、常に上下関係が明確にされる。長幼の序列といった道徳的規範には直接結びつかないが、社会的位置づけということが二者関係の根底にあるといえる。²⁷⁾

3 最小生活共同単位

Ⅱ節4に述べたように、いわゆる家族という語にそのままあてはまるものはこれらの社会にはない。総て共住を契機とする、あるいは家屋を中心とする名称である。これはジャワ族の somah, イバン族の bilek, タイ族の khrop khrua, ビルマ族の qeindaung, イフガオ族の hin-bale, 台湾アミ族の roma' あるいは日本のイエ、ベトナムの nha' についても同様である。Bender [1971:237ff.] もアフリカの Ondo, Bambara, Kanuri 諸族の他に、オセアニアの Tikopia の paito の例をあげている。

夫婦・子を中心とする家族の語が存在していないからそのような概念は無いと断定するわけではないが、「家族」が無い筈はないから無理にそれを作りあげたり、枠を押しつけたりする必要はない。むしろ人類学者の目の梁を取り除くことの方が大切であろう。東南アジアでの世帯はその家屋に共住するメンバーが親族核と重複することが多いので、「家族の顕現が世帯である」[前田1983:217] と言った表現がとられることになる。むしろ、人類学、社会学で区別されるような世帯・家族の分け方は混乱をまねくもので、現実在即して、世帯と親族との区別とする方が合理的でもあり、混乱がない。対比されるべきは、婚姻・親子・キョウダイ関係をモデルにする親族と、社会的空間を基盤にする世帯とであって、家族というのはこのいずれの系列に属するのかあいまいとさせたまま使われ易く、寧ろ分析概念として不必要であって、それだからこそ「家族圏」というような語を作ったり、domestic というあいまいな機能をもちこま

ねばならなかったのである。

4 跋 尾

最小生活共同単位としての世帯は、面接的關係を維持し共に年をとっていく人々との共住を原理とする。共住を契機とする結合は親族關係という文化的概念により強化される。親族は文化的に規定されたキョウダイ關係 (adik-beradik, saudara, silessureng) と親子關係 (anak-beranak, sanak, sianang) と婚姻とを基本とするが、父・母・子という集まりが自然の単位としてあるというのではない。家族という独立の文化的単位は明確ではなく、より広い親族と同じように表現されるにすぎない。現実を表象していると思われる絵がここにある。この絵は薄い膜が何枚も重なってできているとして、薄膜をはいでいく作業と薄膜を通して現象を見る作業とが人類学者に課せられているとしよう。まず世帯という柄が親族という地に描かれているように見える。ところが世帯の柄を取り除いてみると、親族というのも一つの柄で、その下にまた地が見えてくる。更に親族の描かれている膜をめくってみると、こんどは社會關係が柄となって現われて、その下に生物學的紐帶あるいは「自然」という地が現われてくる。しかし、この自然も文化によって描かれた柄であることをまぬかれない (清水 [1985: 9-11] 参照)。図柄と地あるいは文化と自然との關係は表象に頼っている限りどこまで行っても相對的なものである。これを逆観すれば、共住を契機とする二者關係の結合、分離という地に世帯の膜、親族の膜、社會關係の膜、「世界」 (=自然) の膜を被せていると見ることもできる。家族・親族・婚姻・血縁というものは、自然に近い普遍的なものではなく、特殊な文化的所産としての柄であって、あくまでも地として見るべきではないということを主張したい。言いかえれば、常識の膜をはいで事實を顕らかにする人類学者、社會学者自身が自分の民俗的用語という常識の膜を現象に被せてしまっているということである。親と子とを基盤とする生育制度としての家族を普遍的な分析概念として用いる必要はなく、むしろ共住を原理とする世帯の分析で十分である。「家族」という用語をあたかも親族内の当然分離し得る基本的な単位として設

定する必要はないし、民族誌的に見ても設定しない方が妥当であることを小論で提示したつもりである。

注

* [謝辞] 原稿の段階で、口羽益生・坪内良博・中川敏の諸氏にコメントをいただいたことを謝したい。

- 1) この定義は村武 [1974: IX] によるものである。世帯を機能・形態から捉えるか、文化概念の単位ないしは規則・戦略からなる文化システムとして捉えるかについては Netting *et al.* [1984] の諸論文参照。歴史的・民俗的には、英語の family と household とは同一視されたり、混同されたりしているが、本論では「家族」を domestic group と区別された分析概念の意味に用いる。最近の家族論の展望は、Yanagisako [1979], 山路 [1981], 上野 [1984] など参照。
- 2) 個人と社会との中間にある単位のうち、最も小さなものとして認められているもの。Hammel [1984: 41] は、個人を超えた（より大きな）集団で、最も大きな多機能的な corporacy をそなえているもの、とする。
- 3) 世帯概念に共住（集団）と生活遂行上の機能（domestic function）という本来別個の社会現象が含まれているという Bender [1967: 495] の指摘参照。前田 [1983: 217] は、(1)現実の生活単位としての世帯と、(2)結婚・出生・養取を基礎とする家族紐帯と、(3)それらに基づいて当該社会で構築されている家族概念（理念型）との区別を提唱しているが、本論では、そこでも触れた家族と親族とが連続していて明確に分け難い点 [同上書: 202] を更に敷衍して、(2)・(3)の面を親族関係の一部として包摂することを目差している。
- 4) 具体的な地位関係を決定するのは、庶民に至るまでこの系譜と婚姻関係とによる。前田 [1982: 130] 参照。
- 5) Mattulada [1975] 参照。南スラウェシではロンタラッ (lontara') と呼ばれる貝葉文による系図、伝承などを通して、ガリゴ期 (9/10 世紀～12世紀)、ロンタラッ期 (13～16 世紀)、イスラム期 (17世紀以降) に時代区分する。ガリゴ期はいわば神代であって後代とは断絶している。異人としての Tomanurung がロンタラッ期に土着勢力の仲裁者として王位についたという伝承が多いのであるが、この土着勢力の anang は、慣習共同体 (adat community) と解釈され、anang はいくつかの soajing (kinship groups) からなり、soajing は rappe (consanguineal groups) と sempung lolo (affinity groups) とからなると考えられている [Mattulada 1978]。神話の分析から古層のブギス社会は天と地との二元対立を中心にした母系制夫婦婚の親族制度だとする考えもあるが、民族誌的な証拠はない。親族集団を血族集団と姻族集団とにわけてモデル化するのとは、この二元論的な考えにとらわれているのではなかろうか。もし血族と姻族とを親族集団の下位構成単位として考えるなら、嫁を出す集団と嫁を受け取る集団ということになる。このような婚姻システムはブギスでは報告されていないし、そのようなシステムとしてはこのモデルは不完全である。これは、当該のブギス語を簡単に集団と解釈することから起きる誤りであって、むしろ準抱仲となる個人を中心としてみたカテゴリーとすべきである。
- 6) ただし、王となるためには血だけではなく、正統性を賦与する神器の継承と、即位にあたっての「人民」との契約とを行わねばならない。この神器を指すブギス語 (kalompoang, arajang) が、大きい (lombo, raja) という語の派生語であるのは、「大きさ」と上下関係との結びつきを示唆していて興味深い。
- 7) 例えば Pangkep 県の山村である Bantimurung でのように、男の血の方がより大きく子に影響するとも言う。前田 [1982] 参照。
- 8) 血統の低い男が血統の高い女と結婚するためには、通常の倍、3 倍の婚資を支払わねばならない。これを Sidrap 県の Amparita では「血を買う」(mangalli' dara') という。
- 9) Amparita では、各々を siparewakkane (もとにもどる)、arungkakane (良い、うまい)、

- sipattujuang (戻らせて認める) とも言う。
- 10) もちろん「夫婦」などの語がないわけではない。詳しくは前田 [1982] 参照。
 - 11) ただし、年齢は下であるが地位の高い者が、年齢は上であるが地位の低い者を呼ぶ時には *kare'* を用いる (*Amparita* の事例)。
 - 12) *lessu* に対応するマカッサル語は *lassu'* であるが、Cense [1979] は、生まれる、出てくるという語義の後に “*v. kind uit moederschoot*” としている。
 - 13) イスラームへの改宗はマラカの方がスラウェシより早い。両者を対比させて、マラカ王朝成立以後をスラウェシのロンタラック期とし、スラウェシにおいて Gowa-Tallo 王国が占めた位置をマラカ王朝が占めたと考えることも可能であろう。そうすればスラウェシにおける国家形成の伝統を最初に示したとされる Luwu 王国は、マラカの場合スマトラの王国ということになろう。
 - 14) Banks [1983] のように親族制度の面でのイスラームの影響を強調するものもあるが、むしろ *adat* に受容されたイスラーム、イスラームと一体となった *adat* の観点の方が、生活全体を律しようとするイスラームの理解には適切であろう。[Ellen 1983] ベルジャ、スーフイズムを通して国家に及ぼしたイスラームの影響については Milner [1983] 参照。
 - 15) このことはキョウダイ・イトコ間の名称上の距離を表わしているとも考えられる。
 - 16) 会話のレベルによって、フォーマルで改まった場合は外来語が用いられる。家庭によっては *bapak* (父) なども *ayah*, *aba* という語を使わせるものもある。
 - 17) ジャワ語の *batih* が夫婦・子の家族を指す語であると言われるが、マレーシアでは常用されない。ジャワでも地域的に片よっているようで、スラカルタでは使われるが、ヨクヤカルタやバゲレンでは用いられないという [Koentjaraningrat 1985:220, note 66]。
 - 18) 逆に近代になってサンスクリットの語形変化をモデルにして *saudari* という女性形を作ったという。[Gonda 1973:428] なお、R. Firth は Kelantan の例から *saudara* を “relative; by inference, sibling” [1974:27] としている。現在では「キョウダイ」「親族」「仲間、同士」などを包摂して使われるために、どの意味が第一義的であるかをマレー人は明確に意識していないように見える。Selangor 州の都市マレーを調査した McKinley [1981: 385, note 3] は、*adik-beradik* が限定されたキョウダイ・セットを指すのに対し、*saudara* は広狭の意で柔軟に用いられることを報告している。
 - 19) S. M. Zain は *se-anak* の省略形とする [Zain n. d.:666]。なお Negeri Sembilan では母方の平行イトコ [de Josseling de Jong 1980:127] を指す。
 - 20) ただし、この “sibling group” を *adik-beradik* にあてているのは [ibid.: 365] 不適当であろう。*adik-beradik* には「キョウダイのように見なす」という意味があり、キョウダイだけを指す語とするのには賛成できない。
 - 21) 関係論的な見方を一貫させたものとして坪内・前田 [1977] 参照。なお、親族名称の中でセットとして扱われているのは、(親の) キョウダイないしは子供 (自分のキョウダイ) だけである。
 - 22) *baka* は一般には、先祖ないしは親族、血筋の意味に用いられ、*saka* と対比させて、父方の祖先・血筋を指すことがある (Zain [n. d.:657] あるいは T. Iskandar [1984:74, 1009])。McKinley [1981:373] は父の *benih* と母の *darah* とによって子供が形成されると報告している。
 - 23) Inden & Nicholas [1977] の Bengal での分析の用語。
 - 24) 比較というのは所与の表象があって始めてできることであって、例えばそれが貧しい村人ひとりだけのものであっても、村長のものであっても、国政に参与するインテリのものであっても、大学院生のフィールドワークに基づくものであっても、人類学者のものであっても、現実態を解釈するためのモデルである限り、比較のための表象としての価値に変わりはない。それらの表象が現実態にどれだけの妥当性をもっているかということは、個々の民族誌の中で検証されるべきであろう。
 - 25) *ure'* はマレー語の *urat* と同じく、血脈、肉の筋、葉脈、神経など、脈・筋の意味である。往々にして、根・中枢の *akar* の意味にも使われ、例えば古いプギス語で *ure' karaka bessi* (鉄のまわりついた筋) は、神聖なあるいは高貴な祖先を意味するという (Gilbert Hamonic

氏の御教示による)。

- 26) 末成 [1983:246-247] によると、アミ族ではマレーの *bisan* にあたる関係に対して、最近福建語からの借用である「親家」を使うようになったという。親族名称の変容を考える上に示唆的である。
- 27) 社会関係を通底するのは二者関係の均衡維持であって、この均衡・調和が文化的に意味あるようお互いを格づけ位置づけるために、自然に基づいたと幻想される親族関係の用語が枠組として使われる。枠づけられた二者関係の維持を行爲原理とするのを対人主義と言う。対人主義の特徴は、枠組の親族関係より二者関係の調和の方が大事にされながら、表面的には常に親族関係を優先させるかのように操作することにある。そしてこの原理は、domestic 対 politico-jural あるいは private 対 public という次元の区別を越えて適用される。

参考文献

- Banks, David J. 1983. *Malay Kinship*. Philadelphia: ISHI.
- Bender, Donald R. 1967. A Refinement of the Concept of Household: Families, Coresidence, and Domestic Functions. *American Anthropologist* 69:493-504.
- . 1971. De Facto Families and De Jure Households in Ondo. *American Anthropologist* 73:223-241.
- Benjamin, Geoffrey. 1980. Semang, Senoi, Malay: Culture-History, Kinship, and Consciousness in the Malay Peninsula. Ms.
- Burridge, K. O. L. 1956. The Malay Composition of a Village in Johore. *Journal of the Malayan Branch, Royal Asiatic Society* 29: 60-77.
- Cense, A. A. 1979. *Makassars-Nederlands Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Chabot, H.T. 1967. Bontoramba: A Village of Goa, South Sulawesi. In *Villages in Indonesia*, edited by Koentjaraningrat, pp. 189-209. Ithaca: Cornell University Press.
- Djamour, J. 1959. *Malay Kinship and Marriage in Singapore*. London: The Athlone Press.
- Ellen, Roy F. 1983. Social Theory, Ethnography and the Understanding of Practical Islam in South-East Asia. In *Islam in South-East Asia*, edited by M. B. Hooker, pp. 50-91. Leiden: E. J. Brill.
- Errington, Shelly. 1977. Siri, Darah dan Kekuasaan Politik di dalam Kerajaan Luwu Zaman Dulu. *Bingkisan Budaya Sulawesi Selatan* 1 (2): 40-62.
- . 1983. Embodied *Sumange'* in Luwu. *Journal of Asian Studies* XLII: 545-570.
- Firth, Raymond. 1974. Relations between Personal Kin (*Waris*) among Kelantan Malays. In *Social Organization and the Applications of Anthropology*, edited by Robert J. Smith, pp. 23-61. Ithaca: Cornell University Press.
- Gonda, J. 1973. *Sanskrit in Indonesia*. 2nd Edition. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Gullick, J. M. 1958. *Indigenous Political Systems of Western Malaya*. London: The Athlone Press.
- Hammel, E. A. 1984. On the *** of Studying Household Form and Function. In *Netting et al.*, pp. 29-43.
- Howell, Signe. 1984. *Society and Cosmos: Chewong of Malaysia*. Singapore: Oxford University Press.
- Husin Ali, Syed. 1981. *The Malays: Their Problems and Future*. Kuala Lumpur: Heinemann Asia.
- Inden, Ronald B. and Nicholas, Ralph W. 1977. *Kinship in Bengali Culture*. Chicago: University of Chicago Press.
- Iskandar, Teuku. ed. 1984. *Kamus Dewan*. Cetakan Kedua. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa

- dan Pustaka.
- Josseling de Jong, P. E. de. 1980. *Minangkabau and Negri Sembilan : Socio-Political Structure in Indonesia*. 3rd Impression. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Karim, Wazir-Jahan. 1981. *Ma' Betisek Concepts of Living Things*. London: The Athlone Press.
- 菊地 靖 (編). 1982. 『東南アジアの社会と親族』東京: 至文堂.
- 北原 淳. 1985. 「タイ中部一村落における同姓グループ (トウラクーン) について」『神戸大学文学部紀要』2: 23—67.
- Koentjaraningrat. 1985. *Javanese Culture*. Singapore: Oxford University Press.
- 口羽益生; 坪内良博; 前田成文 (編). 1976. 『マレー農村の研究』東京: 創文社.
- 口羽益生; 前田成文. 1980. 「屋敷地共住集団と家族圏」『東南アジア研究』18: 186—205.
- Kemp, Jeremy H. 1978. Cognatic Descent and the Generation of Social Stratification in South-East Asia. *BKI* 134:63—83.
- McKinley, Robert. 1981. Cain and Abel on the Malay Peninsula. In *Siblingship in Oceania: Studies in the Meaning of Kin Relations*, edited by Mac Marshall, pp. 335—387. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 前田成文. 1967a. 「マレー半島におけるジャクンの親族名称」『東南アジア研究』4: 834—853.
- . 1967b. 「マラヤにおけるジャクンの家族構成の特質」『東南アジア研究』5: 463—483.
- . 1969a. 「ジャクン (オラン・フル) の結婚と離婚」『東南アジア研究』6: 740—757.
- . 1969b. 「マラヤ原住民の経済生活」『アジア経済』10(5): 83—103.
- . 1969c. 「ジャクン・コミュニティの社会秩序」『東南アジア研究』7: 342—362.
- . 1973. 「双系の親族組織におけるイトコ婚の一考察」『東南アジア研究』10: 478—502.
- . 1976. 「コミュニティ宗教におけるシンボル——南スラウェシ省アンバリタにおける事例」『東南アジア研究』14: 408—432.
- . 1982. 「生活環境と社会組織——南スラウェシの山村誌」『東南アジア研究』20: 114—137.
- . 1983. 「マレーシアの家族」『諸文化と家族』原ひろ子 (編), 200—220 ページ所収. 東京: 至文堂.
- Maeda, Narifumi. 1984. An Inventory of Agricultural Rites in Amparita, Sidrap. In *Transformation of the Agricultural Landscape in Indonesia*, edited by N. Maeda and Mattulada, pp. 123—140. Kyoto: CSEAS Kyoto University.
- Matthes, B. F. 1874. *Boeginesch-Hollandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Mattulada. 1975. *Latoa: Satu Lukisan Analitis terhadap Antropologi-politik Orang Bugis*. Disertasi Universitas Indonesia.
- . 1978. Pre-Islamic South Sulawesi. In *Dynamics of Indonesian History*, edited by Haryati Soebadio and Carine A. du Marchie Sarvaas, pp. 123—140. Amsterdam: North-Holland Publishing Co.
- Millar, Susan Bolyard. 1983. On Interpreting Gender in Bugis Society. *American Ethnologist* 10: 477—493.
- Milner, A. C. 1983. Islam and the Muslim State. In *Islam in South-East Asia*, edited by M. B. Hooker, pp. 23—49. Leiden: E. J. Brill.
- 村武精一. 1973. 『家族の社会人類学』東京: 弘文堂.
- Netting, Robert McC.; Wilk, Richard R.; and Arnould, Eric J. eds. 1984. *Households : Comparative and Historical Studies of the Domestic Group*. Berkeley: University of California Press.
- Provencher, Ronald. 1971. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*.

- Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Rosaldo, Renato. 1975. Where Precision Lies: 'The hill people once lived on a hill.' In *The Interpretation of Symbolism*, edited by Roy Willis, pp. 1—22. London: Malaby Press.
- Schneider, David M. 1984. *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 清水昭俊. 1985. 「出自論の前線」『社会人類学年報』11: 1—34. 東京: 弘文堂.
- Silverman, Martin G. 1978. Some Problems in the Understanding of Oceanic Kinship. In *The Changing Pacific: Essays in honour of H. M. Maude*, edited by Niel Gunson, pp. 94—109. Melbourne: Oxford University Press.
- 末成道男. 1983. 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入り婚へ』東京: 東京大学出版会.
- Trautmann, Thomas R. 1981. *Dravidian Kinship*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 坪内良博; 前田成文. 1977. 『核家族再考——マレー人の家族圏』東京: 弘文堂.
- 上野和男. 1984. 「大家族・小家族・直系家族——日本の家族研究の三つの系譜」『社会人類学年報』10: 29—50. 東京: 弘文堂.
- Verdon, Michel. 1980. Shaking off the Domestic Yoke, or the Sociological Significance of Residence. *Comparative Study of Society and History* 22: 109—132.
- Wilder, William D. 1970. Socialization and Social Structure in a Malay Village. In *Socialization: The Approach from Social Anthropology*, edited by Philip Mayer, pp. 215—268. London: Tavistock.
- . 1976. Problems in Comparison of Kinship Systems in Island Southeast Asia. In *Changing Identities in Modern Southeast Asia*, edited by David J. Banks, pp. 291—309. The Hague: Mouton.
- . 1982. *Communication, Social Structure and Development in Rural Malaysia: A Study of Kampung Kuala Bera*. London: The Athlone Press.
- 山路勝彦. 1981. 『家族の社会学』東京: 世界思想社.
- Yanagisako, Sylvia J. 1979. Family and Household: The Analysis of Domestic Groups. *Annual Review of Anthropology* 8: 161—205.
- Zain, Sutan Mohammad. n.d. *Kamus Moderen Bahasa Indonesia*. Jakarta: Grafika.

(前田 成文)

都市のなかの「むら」

——ジャカルタにみる婚姻形態——

はじめに

「社会的距離測定法」(social distance scale) というのがある。ボガードスという人が半世紀以上も前に提唱したもので、その後改良が加えられ、現在では、スケール法に基づく社会心理学の古典的な態度測定法とみなされている [Bogardus 1925 ; Selltitz et al. 1976:421-422]。アメリカで、人種的偏見に関する研究などに盛んに用いられた。

測定法の内容は、基本的には簡単である。質問紙の一方に「英国人」、「黒人」、「フランス人」、「中国人」、「ロシア人」といった、人種ないし国民名称のカテゴリーが列挙されている。もう一方には、「自分の国から締出す」、「自分の国に訪問者として受入れる」、「自分の国の市民権を与える」、「自分の職場に受入れる」、「自宅近くの隣人として受入れる」、「自分の属するクラブに受入れる」、「婚姻による近しい親戚として受入れる」といった、関わりの深さ浅さを示す項目が並んでいる。列記された人種・国民カテゴリーに属するごく「平均的」人々を頭に描き、これらの人々とどこまで関係の深さをもつ心情的用意があるかないかを尋ねるのが、ボガードスの測定法である。たとえば、「平均的黒人」に対する親近・忌避の感情的度合を、「自分の職場に受入れてもよい」と思うほどか、あるいは「自分の国から締出したい」と思うほどかなどの項目選択によって示す。

「社会的距離測定法」においては、関わりの深浅を表示する質問項目は、物差しのように単線上の一つのスケールを形成するとみなされる。そして、上の例でいえば、「自国からの排除」が負の極端を示すものであり、「姻戚関係」が正の極端を画するものであるとされる。

社会的距離測定法に関して、果してこれがスケールを構成しているのか、あるいは人種・国民カテゴリーの設定は、職業、宗教などを取り入れた多角的なものにするべきではないのかなど、種々の批判があることであろう。批判は批判として、少なくとも結婚を媒介とする関わり——それが姻戚関係にしろ自身自身の結婚にしろ——への対応が、ボガードスの想定するように、われわれにとって多くの場合、自他を弁別する際の最も峻厳な判断基準を含むことに、大方の異存はないのではないだろうか。それも、この判断基準が、単に「わたし(たち)」と「かれら」との相対的な社会的距離を示すだけではなく、しばしば自他の質的弁別をも意味することは、日常生活や小説・映画などの想像世界をとおして、われわれにとって馴染みの深い経験である。婚姻という状況は、たとえ仮定の状況設定下ではあっても、いつもは潜在化しているかもしれない集団間の境界を、意識の上に顕在化させてくれる作用がある。

婚姻は、いうまでもなく、個人的かつ同時にすぐれて社会的決断であり行為である。そこには、親近感や恋愛感情といった個人の生の情感だけではなく、社会的許容や承認への配慮がつねに働く。個人の情感さえ、大きくは社会や文化に規定されることを考えるとき、社会的行為としての婚姻の意味がより明確に理解されよう。恋愛結婚、すなわち愛情による個人と個人の結び付きを一つのイデオロギーのように信奉するアメリカにおいてさえ、統計的にはホモガミー (homogamy)、すなわち同一の社会・文化的属性を共有する人々が結婚する、という傾向の生じてくるのも、こうしたことに起因している。

本稿では、上記のような婚姻の意味を念頭におきつつ、インドネシアの首都ジャカルタにおける婚姻形態について考察してみたい。それも、とくに、種族を中心とする婚姻形態について考えることとする。

周知のように、インドネシアは多民族国家である。かつて、H. ギアツは、「インドネシアの都市ほど、『複合社会』 (plural society) という言葉があてはまるケースはない」と述べたが [Geertz 1967:34]、まさに都市は、インドネシアの種族的多様性を凝縮した形で具現している。なかでも、首都ジャカルタには、インドネシア諸地方からの移住民が集中する。たとえば、1971年センサスで

もとにした計算によると、ジャカルタ人口の3人に2人は、地方出身者ないしその子供であろうとの推計である [Speare 1975:68]。「都市のなかの国」ともいわれるほど、ジャカルタはその人口構成において、多民族国家インドネシアを反映している [Mertens 1976]。

この種族的に多様な都市ジャカルタにおける、種族内ないし種族間の婚姻形態を概観しようというのが、本稿の目的である。多民族社会・多民族社会において、民族意識・種族意識が目に見えた形で顕現する身近な場、それが婚姻である。ジャカルタというコスモポリタンな生活空間を共有する人々の間で、種族という境界が婚姻においてどこまで存在するのか、そしてそれはどのように変容をとげているのか。¹⁾

結婚相手の選択は、ジャカルタにおいてといえども、もとより極めて限定された生活空間のなかで行なわれる。たとえ同一種族間の婚姻であっても、結婚相手の選定は、籤引きのごとく無作為になされるのではなく、日頃の交友ネットワークとの関わりにおいてなされるのが普通である。ジャカルタに数多く住む地方出身者の婚姻形態を観察することにより、かれらの生活空間の特徴や広がりについても、ある程度の感触を得たいというのが、本稿の第二の目的である。いわば、移住民の出身地におけるような「むら」的生活空間が、果してジャカルタにも認められるのかという疑問である。

I 事例報告の概観

ジャカルタを含むインドネシア都市部における婚姻形態に関して、残念ながら今までのところ、研究成果の積重ねはほとんどみられない。私が調べた限りでは、種族別の婚姻形態を中心に据えた研究成果が無いだけでなく、二次的にもこの問題に触れる研究さえ、皆無といってよい状態である。センサスその他の政府機関によって集計されたデータも、インドネシアの独立後は“種族”を質問項目として扱っていないため、ここでの問題意識に応える情報を提供してはくれない。夫婦の出生地域といった、ある程度出身種族を示唆するような

統計資料さえ、私の知る限り存在しない。文献調査の段階でもう一つ判明したことは、ジャカルタに関する従来の都市研究には、まったくいってもよいほど、婚姻形態についての言及が無いことである。都市貧困層、人口移動、人口構成、いわゆるインフォーマル・セクター (informal sector) など、ジャカルタに関する研究成果には近年目覚ましいものがある。²⁾ しかしこれらの研究も、婚姻形態に関しては黙して語らない。

インドネシアの1980年センサスによると、ジャカルタの人口は650万である。このように大きな対象全体を射程内に入れ、包括的に扱った研究成果が存在しない以上、ミクロな対象に焦点を当てた事例研究の結果を点検しつつ、これからの作業を進めていかざるをえない。以下では、これまでジャカルタについてなされた研究のうち、特定サンプルの婚姻形態に言及する幾つかの調査報告から、とりあえず種族間婚姻形態の概観を手探りしてみたい。具体的には、ジャカルタ在住カップルの種族的背景の比較と、ジャカルタで結婚した夫婦の婚姻形態という2種類のデータを検討する。まず、前者のデータをみてみよう。

事例研究においては、なんらかの形で調査対象を絞りこむ必要がある。表1は、在ジャカルタの施設ないし機関、この場合は学校によって、調査対象を絞りこんだ例である。この学校は、南ジャカルタにあるイスラーム塾アシシャフィーヤ (Asyshafi'iyah) で、表には、この学校の男女生徒 (主として高等学校レベル) のサンプル186人について、彼らの両親の種族的背景が示されている。総ての親がジャカルタに住んでいるわけではないが、その大部分、86%がジャカルタ住いであり [Jusuf 1973:55]、全体としてジャカルタ在住者のサンプルとみなしてもよいであろう。表1によると、一般に高い率の種族内婚が認められ、全体で88%が同一種族間の結婚である。なお、生徒の父親の職業を述べると、ほぼ半分近くが商人であり、約20%が公務員である。³⁾

本稿の問題関心にいくらかでも注意を払っているデータ源として、ジャカルタ在住の特定種族に関する研究がある。表2は、ジャカルタ在住の幾つかの種族に関する調査から、種族内婚の割合を列挙したものである。ほとんどの調査は、インドネシア大学の修士論文のために行なわれたもので、既述のよう

表1 アンジャフィーヤ塾生の両親の種族的背景 (1972 年)

母親 父親	バ ウ	タ イ	スン ダ	ジャ ワ	マ ウ ラ	バン ジ ャ ル	ラ ン ボ	ミ ナ ン カ バ ウ	リ ア ウ	パ レ ン バ	マ ラ ヤ	アラ ブ	イン ド	合 計
バタウィ	108	9	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	119
スンダ	6	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	34
ジャワ	2	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11
マドゥラ	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
バン ジャ ール	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2
ランボン	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	2
ミナ ン カ バ ウ	—	1	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	6
リアウ	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
パレ ン バ	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
マラヤ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
アラブ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	4
インド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
合 計	116	40	10	1	1	3	5	2	1	1	1	4	2	186

出典：Jusuf [1973:60].

に、本稿の主題に関わる調査が、政治的にも問題の多い種族意識を扱うこともあって、今までのところあまり注目されなかったことを物語っている。

都市での調査においては、農村部における調査と比べると、たとえ調査対象を一つの種族に限定したとしても、そのサンプルの選定が難しい。次頁の表2に引用した調査は、大別二つの方法のいずれかで、この問題に対処している。一つは、ジャカルタの一定地域に焦点をあて、そこに多く住む特定のある種族を調査する方法である。それも、職業などの関係から、当該種族がとくに多く固まって住んでいるような地域での調査である。表2でいえば、サンギル・タラウッドからブギスまでの四つの調査がこれにあたる。クルラハン(kelurahan)という、地方でいえば「むら」に相当する行政単位かそれより小さな単位を取りあげ、その地域の末端行政長の保管する居住者台帳や、当該種族がキリスト教徒の場合は教会組織、さらには同郷会などをとおして、特定種族に接近する方法である。サンギル・タラウッドからブギスまでの4種族は、大部分の人が水夫など海と関係した職業についており、そのため港のある北ジャカルタのタンジュン・プリウック地域(Tanjung Priuk)に数多く住んでいる。⁴⁾

表2 ジャカルタ在住諸種族に関する事例研究と種族内婚率

出身種族／出身地域	種族内婚率	サンプル数	調 査 年	出 典
サンギル・タラウッド	81%	191	1963	Suparlan [1963:134]
ゴロンタロ	82%	62	1969	Amali [1970:111]
ミナハサ	96%	500	1969	Sis [1970:39-40]
ブギス	54%	217	1977	Roosmalawati [1979:107]
ミナンカバウ	86%	299	1970	Naim [1979:195]
トバ・バタック	100%	56	1976	Pandjaitan [1977:86, 93]
マドゥラ	100%	113	1971	Lõbarnebal [1973:112-114]

これに対して、トバ・バタック (Toba Batak) とマドゥラ (Madura) に関する調査は、ジャカルタにおいて特定種族の専売業のようになっている職業を選び、その職業に従事している人から、当該種族に属する人々を手繰っていくやり方である。トバ・バタックの場合には、イナン・イナン商人といって、この種族の女性に多い担ぎ屋業を手掛かりに調査を実施している。イナン (inang) というのは、文字どおりには「オバさん」ないし「乳母」のことであるが、密輸商品の担ぎ屋兼商人のことを指す。もともとは、インドネシアの日本軍占領時代に、生活苦からトバ・バタックの女性が、シンガポールとメダンの間で始めたのが起こりらしい。マドゥラの場合は、サテ・マドゥラ (sate Madura) といい、屋台の串焼き売りである。ジャカルタには多くの串焼き売りがいるが、その中でもマドゥラ出身者の串焼きは、たれや仕込みに秘密があり、とくに美味しいことで有名である。

二つの方法ともに、ジャカルタ在住の特定種族をどこまで代表することができるか問題のあるところではあるが、どちらの方法がより適性かの判断は、ジャカルタ内での当該種族の特徴を考慮しつつなされるべきものである。たとえば、在ジャカルタ・マドゥラ人の数はまだ少なく、職業も串焼き売りに集中している。しかし、イナン・イナン商人の場合は、彼女らがジャカルタに数多く住むトバ・バタック人を代表するとはいいい難い。なお、表2のうちミナンカバウに関する調査は、上の二つの方法のいずれにも属せず、ジャカルタ内居住地域やジャカルタでの職業による限定をつけずに、調査者の知人・友人からさらにはその知己へとアンケートを配り、調査を実施したものである。

表2の結果であるが、ジャカルタ在住のこれら種族の婚姻形態をみる限り、種族内婚の率は高いといえる。唯一の例外はブギスであるが、これについてはあとで検討することにする。なお、ここで確認しておくべきは、表2そして表1にも共通する限界で、表の数字はあくまでジャカルタ在住カップルの種族的背景の比較であり、彼らの結婚が、果してジャカルタでとり行なわれたものなのかどうかの区別はなされていない。

表2の調査で種族外婚の形はどういうものかを述べると、サンギル・タラウッドの場合、男女を問わず種族外婚の四割が、出身地も近く同じキリスト教徒であるミナハサ族との結婚であり、他の四割が、サンギル・タラウッドの男性とスンダ (Sunda) ないしジャワの女性との結婚である。ゴロンタロ (Gorontalo) とミナハサでは、種族外婚の相手として卓越したグループはみられないが、スンダ、ジャワ、マカッサル (Makassar) などの名があげられる。ミナカバウについては、この点に関する言及が調査報告においてなされていない。また、ブギスにおいては、種族外婚の87%が、スンダないしジャワの女性との結婚である [Roosmalawati 1979:107]。ブギスの種族外婚について、調査者のあげている説明は、表2の結果の限界をも指摘しているので、ここで少し検討してみよう。

ロースマラワティによると、種族外婚者の大部分は、ジャカルタに来たとき独身であった男性達で、その後ジャカルタで結婚相手を見付けた事例である。ジャカルタでは独身のブギス女性を見付けがたいというほかに、ここには婚資 (uang naik) の問題がある。ブギスの婚姻においては、男から女へ多額の婚資が必要とされる。ブギスの故郷南スラウェシでは、この婚資は男性の親族全体の協力によって支払われるものの、親族から遠く離れてジャカルタに住む者は、自分自身で婚資の都合をつけなければならない。ゆえに、ジャカルタにやって来たブギス独身男性は、この地に多いスンダやジャワの女性と結婚することになるというものである [ibid.: 107-108]。ただし、種族外婚をしたブギス男性の間にあっても、ブギス女性と結婚することが理想とされており、自分に経済的余裕のできた後に、ブギス族の女性とも結婚すること、つまり一夫多妻婚の

多々あることが、ロースマラワティによって指摘されている。彼女のサンプルでは、34 %の人が一夫多妻婚で、そのうち12 % (一夫多妻婚全体の32%) が、ブギス女性を第二夫人とする人達である。なお、一夫多妻婚者のなかには、第一夫人のブギス女性を故郷の南スラウェシにおいたままジャカルタに出掛け、スنداやジャワ女性を「現地妻」の第二、第三夫人としている人々も含まれている [loc. cit.].⁵⁾ タンジュン・プリウックのブギス人には、船乗りとしてジャカルタ＝南スラウェシ間を往復する人が多く、こうした結婚生活も可能なのであろう。

ブギスの事例は、たとえ実際の種族内婚率が低いとしても、依然として理念としての種族内婚志向が強い可能性を示唆しているとともに、ジャカルタ内においてとりかわされる婚姻形態それ自体について、個別に検討する必要性のあることをも指し示すものである。ジャカルタ在住カップルのなかには、ジャカルタで結婚した人もその他の地で結婚した人も含まれている。結婚の時期にしても、ジャカルタ到来以前の人もいれば以後の人もいるというように、まちまちである。確率的には、ジャカルタ到来以前の結婚は、移住者の故郷で挙げられている可能性が強く、当然種族内婚の圧倒的に多いことが予想される。

上の点をも勘案した調査結果は、残念ながらジャカルタ在住者の婚姻形態に関するそれよりさらに数が少ない。表2に引用した調査でいえば、サンギル・タラウッドとゴロンタロのわずか二つにしかすぎない。それによると、1955年から1963年の間にジャカルタで挙げられたサンギル・タラウッドの結婚49件、同様の1960年から1969年にかけてのゴロンタロの結婚8件のうち、種族内婚はそれぞれ94 %と50 %であった [Suparlan 1963 : 133 ; Amali 1970 : 109-110]。種族外婚の数は両者とも男女半々であり、その結婚相手は、サンギル・タラウッドではミナハサが多く、ゴロンタロではスندا、ジャワ、アンボン (Ambon)、ブギスとまちまちである。ゴロンタロの結果は、先のブギスのケースと同じく、必ずしも高い種族内婚率を示していない。事例の数が少ないということもあるのであろう、この点に関して、調査者のアマリはなんら説明を加えていない。サンギル・タラウッドについては、ジャカルタにおける結婚においても、明ら

かに高い率の種族内婚がみられる。

統計資料は呈示されていないが、ジャカルタで挙げられる結婚において、種族内婚が卓越することは、トバ・バタックについても認められている。パンジヤイタンによると、彼女の属する HKBP (Huria Kristen Batak Protestan バタック・プロテスタント協会) 系のラワマングン (Rawamangun) 教会支部では、未だかつてラワマングン地区のトバ・バタックが、ジャカルタで他の種族と結婚したという話を聞いたことがないという [Pandjaitan 1977: 66-67]。また、ロバルヌバルによると、首都在住マドゥラ人既婚者のなかには、ジャカルタで結婚式を挙げた人さえないということで [Lobarnebal 1973:125]、これまたマドゥラ出嫁ぎ人の場合も、故郷での種族内婚の一般的なことを示唆している。

以上、質量ともに限られたデータをもとにしての概観ではあるが、ジャカルタにおける種族をめぐる婚姻形態について、およそ次のようなことがいえそうである。すなわち、一般的にジャカルタでは種族内婚率が高い。それは、まず、ジャカルタを「ふるさと」とするバタウィ族を含めて、ジャカルタ在住カップルの間に広くみられる。この傾向は、これまでにあげた調査以外にも、ラハルジョ等が 1974 年に行なった家族計画についての調査結果にもあらわれている。それによると、ジャワ、スンダ、バタウィ、スマトラ出身者、ミナハサ、華人等を含む 146 人のジャカルタ在住既婚女性に関して、「彼女らの父母および夫の種族的背景に関する解答結果は、異種族間結婚の様相 (存在) を示している。しかし、その割合はそれほど大きくはない」というものである [Rahardjo and Papanek 1980:27]。

ジャカルタに住む人々は、顔のない民衆の寄せ集めではない。種族内婚が、ジャカルタ到来以前に結ばれたのかあるいは到来以後に結ばれたのかにかかわらず、ジャカルタには、“同質の種族的・文化的背景を分かち持つ家族”という生活空間が想定できる。さらに、ジャカルタで挙行される結婚も、種族内婚への志向が強い。種族的・文化的に齊一な家族が、外からジャカルタへ流れ込むだけではなく、こうした家族がジャカルタのなかでも、多くの場合再生産されているということである。

表3 ジャカルタの種族・民族別人口に関する推計値 (1961 年)

出 身 種 族 / 出 身 地 域	人 口	百 分 率
バタウィ	655,400	22.9
スンダ	952,500	32.8
ジャワ / マドゥラ	737,700	25.4
アチュ	5,200	0.2
バタック	28,900	1.0
ミナンカバウ	60,100	2.1
南スマトラ	34,900	1.2
バンジャール	4,800	0.2
南スラウェシ	17,200	0.6
北スラウェシ	21,000	0.7
マルク / イリアン	11,800	0.4
東ヌサトゥンガラ	4,800	0.2
西ヌサトゥンガラ	1,300	0.0
バリ	1,900	0.1
ムラユ / 外島他地域	19,800	0.7
不明	38,600	1.3
華人	294,000	10.1
その他	16,500	0.6
合 計	2,906,500	100.0

出典：Castles[1967:185].

種族外婚についていうと、表1のバタウィ族とジャワ族、スンダ族、あるいは表2のサンギル・タラウッド出身者とミナハサ族間の結婚のように、お互いに出身地域も近く宗教も同じ種族の間で、種族外婚の起こる可能性が高い。また、地方出身者の男性が、ジャカルタで他種族の女性と結婚する場合、相手はジャワないしスンダ女性であることが多い。これは、働き者として名高いジャワ女性、あるいは美人として誉れの高いスンダ女性の魅力や、比較的アダット (adat 慣習, 伝統) 規制のゆるやかなジャワないしスンダ文化の出身者への近付き易さであろう。しかし、より重要なのは、ジャカルタ内の種族別人口比率の影響であると考えられる。

表3は、オランダ植民地時代の統計・センサス、および1961年のセンサスをもとにして推計されたジャカルタの種族別人口構成である。いささか古いデータではあるが、種族間の相対的ランキングは、今とあまり変わっていないと思われる。この25年間の主な変化は、人口流入によるジャカルタのさらなる都

市化にともなうバタウィ族の比率の減少と、ジャワ、スンダ、および外島出身者の比率の増大であろう。

いずれにしても、表3から、ジャワ、スンダがジャカルタ人口の大半を占めていることがわかる。とくに、出身地が遠隔地の場合、女性だけがジャカルタへ出稼ぎに来ることは珍しく、ジャカルタ女性人口の種族別構成は、ジャカルタに近接・隣接したジャワおよびスンダ地方出身者に、より比重の偏ったものであろうことが想定できる。したがって統計的に、地方出身男性がジャカルタで他種族の人と結婚する場合、その相手はジャワないしスンダの女性である確率が高いことになる。

上のような結論は、一体どの程度まで一般化できるのか。移住民の間であっても、ジャカルタ滞在の期間が長くなるにつれ種族外婚の率が高くなるのか。どのような人々が、種族外婚を行なう傾向にあるのか。このような疑問に対する答えは、ブギスのケースにみられるように、当然種族によっても様々であろう。以下では視野をより限定し、私が1980年から1981年にかけて行なった、ジャカルタ在住ミナンカバウ移住民の事例を考察する。表1、表2の接近法と異なり、私の調査の場合は、移住・出稼ぎ先のジャカルタでサンプルを絞るのではなく、移住・出稼ぎ人の出身村によってサンプルを絞ることにした。出身村の性格を理解することにより、サンプルの特徴やサンプルからの一般化の限界をよりの確に把握できると考えたからである。

以下では、西スマトラのシルンカン (Silungkang) 村出身者の事例を中心に、種族をめぐる婚姻形態を考えることとする。

II シルンカン村と地理的移動

シルンカン村は、ミナンカバウ族の故地である西スマトラ州のうち、彼らの文化的中核地帯とされる内陸高地に位置している。⁶⁾ ミナンカバウの伝承や諺にもよく名前が出てくる村で、西スマトラの村々のなかでも歴史が古いとされている。

村はシンカラ (Singkarak) 湖からクワンタン (Kuantan) 川へと続く水系の支流に面し、ラシ (Lasi) 川を挟むようにして両川岸に集落が広がっている。シルンカン¹⁾は谷間の地にあり、そのため谷地を除いて水田はほとんど存在しない。田畑、居住地、森林をあわせた村の総面積は 3580 ha であるが、そのうち耕作地は 13 % にも満たず、とくに水田は耕作地の 25 % (111ha) を占めるにすぎない。もともとは傾斜地に集落を営み、そこに畑やコーヒー園をつくるとともに、谷地では水田を耕して生活していたようである。19世紀末に、村の比較的近くにオンビリン (Ombilin) 炭鉱が開かれ、それにとまって炭鉱と西スマトラの州都パダン (Padang) を繋ぐ鉄道が敷設された。鉄道はシルンカンの谷地を通過し、シルンカン自身にも停車駅が設けられるにいった。さらに今世紀初頭になると、鉄道に平行するようにして、自動車道が建設されている。こうした変化は、シルンカンの人をして、農業にかわる商業への道に活路を見出させる刺激となった。

交通網の開通に対するシルンカン人の積極的な対応の背景には、農業に適さない劣悪な地理的環境もさることながら、織物という家内工業の存在も重要であった。シルンカンにおける織物業が、いつ頃から始まるものなのかは明らかでない。1830年代のオランダの記録として、当時輸入木綿糸が西スマトラ内陸部で織り糸用に紡がれ、その製品がシルンカンにも送られていたことが記されている [Oki 1979:148]。

村の年寄りに聞いた話では、昔は女性が布を織り、男性が製品を行商して歩いていたという。いずれにしても、道路、鉄道をとおして外の世界と繋がれることにより、その後シルンカンの織物業が飛躍的に発展し、さらには男性の行商距離・行商頻度が増大したようである。

上の叙述からわかるように、19世紀後半以降、そしてあるいはそれ以前から、シルンカンには男性による行商・出稼ぎの伝統があり、それは形を変えながらも現在にまで伝わっている。インドネシアの独立後、とくに 1960 年代以降は、シルンカン人の家族による、ジャカルタへの地理的移動が盛んとなった。

村の人口について述べると、1961 年、1970 年、1980 年のセンサスの結果は、

それぞれ 7478, 7848, 8861 であった。1961 年から 1980 年までの 20 年間に、この村の人口は 19 % 増えたことになる。同じ期間のインドネシア、スマトラ、西スマトラの人口増加をみると、それぞれ 52 %, 78 %, 47 % で、シルンカンより人口増加率ははるかに高い。シルンカンの低い人口増加率は、出稼ぎ・移住などの人口流出によって引き起こされたものである。シルンカン人のジャカルタへの地理的移動であるが、ジャワへの出稼ぎがミナンカバウ族の間にまだまれであった時代の 1912 年に、早くもシルンカン商人の、蘭領東インド総督府バタビア (Batavia) への進出が認められる [Marzali 1973 : 101]。オランダ時代、ジャワに渡ったミナンカバウは、その大部分がオランダ高等教育を目的とした人々であり、こうした早い時期でのシルンカン商人のジャワ行は、出稼ぎ好きとして知られるミナンカバウ族の間にあっても、特筆すべき事柄である。この背景には、織物と行商の伝統が大きな役割を果たしていた。

まず、シルンカンの織物は、オンビリン炭鉱に勤務するオランダ人によって、ヨーロッパへの土産物としての価値を見出されることとなった。また、布地を行商するところから、シルンカン商人はバティック (batik ジャワ更紗) の売買にも従事するようになった。こうしたことから、オランダ植民地行政の中心地であるバタビア、あるいはバティックの産地であるジャワへの関心が、早い時期から、シルンカン商人の間に芽生えた。

シルンカン人をジャワへとひきつけたもう一つの要因は、1927年にシルンカンで起こった共産党蜂起である。⁷⁾ この蜂起になんらかの形で関与した人々の多くは、オランダのその後の取締りの手を逃れ、遠くの地、たとえばジャワへと渡って行った。また、蜂起参加者の何人かは、逮捕されるとジャワに流されており、自分の親族・同郷人が流された島ということで、ジャワに興味をひかれた人々もいたと聞く。

早い時期でのシルンカン人のジャカルタ進出にもかかわらず、この都市が、シルンカン人の地理的移動における最大の求心地となるのは、他のミナンカバウ族の場合と同じように、インドネシアの独立後、それも 1960 年代以降の話である。

ジャカルタに、現在何人くらいの数のシルンカン人が住んでいるかであるが、1970年に、ジャカルタ在住シルンカン人の同郷会組織 PKS (Persatuan Keluarga Silungkang シルンカン家族会) が、在ジャカルタ・シルンカン出身者にかんするセンサスを行なっている。ジャカルタは広大であり、かつまた人の出入りも激しいため、限られた費用と労力のもとで、必ずしも総ての在ジャカルタ・シルンカン家族を網羅できたわけではない。しかし、推定 80 % の家族はカバーできたとされている。この調査に基づく在ジャカルタ・シルンカン人の推計値は 315 世帯、2317 人であった [ibid. : 115-116]。

私自身も、1981 年に PKS と IMPPS (Ikatan Mahasiswa Pemuda Pelajar Silungkang シルンカン青年・学生連合) の協力により、同じようなセンサスを試みた。その結果によると、ジャカルタ在住シルンカン人の総数は、推計 557 世帯、3646 人であった。1970 年から 1981 年にかけて、ジャカルタのシルンカン人口は 57 % 増加したことになる。ちなみに、シルンカン村の人口自体は、同じ期間に 13 % しか増えていない。1981 年に、丁度ジャカルタに出て来ていたシルンカン村の村長と、私はたまたま話す機会があった。村長の話によると、当時移住・出稼ぎに出ていたシルンカン出身者のうち、90% 近くがジャカルタで生活しているだろうとのことであった。

婚姻形態についていうと、母系制のミナソカバウ社会では、同村内婚と母系氏族外婚の規制が、慣習法上の一般的な決りである。幾つかの調査結果をみても、実際に同村内婚への志向が強い [Kato 1982: 230 ; Naim 1979:195; Thomas 1977:104-106]。こうしたなかでも、シルンカンは、とくに同村内婚志向が強いことで有名である。1970 年代初頭までは、同村内婚を守らない者には、村八分のような制裁さえ加えられた。たとえば、「よそ者」と結婚したシルンカンの女性は、村でそのまま生活することが許されず、村を出なければならなかった。

同村内婚志向は、村でみられるばかりでなく、ジャカルタに住むシルンカン人の間でも根強い。1970 年のセンサス実施の際も、センサスの対象となる「シルンカン人」(orang Silungkang) とは、両親ともにシルンカン出身者で、さら

に自分自身結婚している場合には、結婚相手もシルンカン人である者、と定義されている [Marzali 1973:3-4]。センサス終了後のデータ・チェックにおいて、「よそ者」と結婚している人が何人か発見されたが、その数はわずかに14、男が13人、女が1人だけであった [ibid.: 115]。⁸⁾

同村内婚規制がジャカルタや他の出稼ぎ地でも守られている例は、なにもシルンカンだけに限られない。シルンカン以外の幾つかの村の出身者についても、同じような傾向のあることが報告されている [加藤 1983: 56; Naim 1979: 195; Persoon 1982: 141]。ただし、シルンカンはこうした傾向が際立って強い村である、とはいえそうである。

シルンカン村の特徴をまとめると、出稼ぎの歴史が古く、また数の上でも村をあとにして村外で働いている人が多い。現在の移住・出稼ぎ先は、主としてジャカルタで、職業は商人である。昔から商業志向が強いため、従来、教育への関心は薄かった。シルンカン人の親が子供の高等教育にも力を入れたしたのは、今から10年ほど前からのことである。結婚形態については、少なくとも1970年頃までは、村においても出稼ぎ地においても、村内婚の順守が標榜されていた。

1970年以来、シルンカン人の同村内婚志向には、かなりの変化がみられるようになった。この点について、私がジャカルタで行なった調査をもとに検討してみよう。

Ⅲ 在ジャカルタ・シルンカン出身者の婚姻形態

私が1981年に実施した在ジャカルタ・シルンカン出身者のセンサスにおいては、世帯主と伴侶、そして子供達に関する人口学的情報だけではなく、存命中の既婚の子供達の婚姻形態についても質問した。さらに、世帯主の存命中の兄弟・姉妹に関しても、彼らの婚姻形態について尋ねた。子供、兄弟・姉妹ともに、彼らの現在の居住地をジャカルタに限定せず、シルンカン在住あるいはインドネシア他地域の在住者をも網羅するよう努めた。

表4 シルンカン出身者の婚姻形態

学式の年 学式地	1946年 以前	1946— 1950	1951— 1955	1956— 1960	1961— 1965	1966— 1970	1971— 1975	1976— 1981	合 計
シルンカン	0 (0) 157	1 (0) 79	0 (0) 74	0 (1) 120	0 (1) 115	0 (0) 117	0 (1) 86	1 (3) 80	2 (6) 828
西スマトラ	0 (3) 3	0 (1) 2	0 (1) 1	0 (3) 3	0 (2) 5	0 (1) 1	0 (2) 4	1 (4) 6	1 (17) 25
他地域	0 (0) 2	1 (0) 1	3 (1) 6	4 (0) 19	6 (2) 64	17 (5) 76	26 (8) 142	53 (23) 216	110 (39) 526
ジャカルタ	1 (0) 1	3 (0) 5	1 (0) 1	1 (0) 5	0 (0) 13	8 (0) 22	5 (0) 12	10 (1) 25	29 (1) 84
インドネシア 他地域	1 (3) 163	5 (1) 87	4 (2) 82	5 (4) 147	6 (5) 197	25 (6) 216	31 (11) 244	65 (31) 327	142 (63) 1463
合 計									

親子あるいは兄弟・姉妹が同じジャカルタに滞在し、なおかつ各自世帯主である場合には、同一の名前が重複して言及される可能性がある。こうした可能性を除去するため、データ処理においては、集計した総ての名前をワードプロセッサに打込み、ABC 順に並びかえるとともに、名前、年齢、学歴、職業を点検しつつ、重複言及された名前を消去するといった、きわめて込み入った手続をとることとなった。以下に述べるのは、こうして整理されたセンサス・データのうち、とくにシルンカン出身者の婚姻形態に関するものである。

集計に含まれた対象は、世帯主と現在の伴侶、世帯主の存命中の既婚の子供とその伴侶、世帯主の存命中の既婚の兄弟・姉妹とその伴侶である。死別、離別、一夫多妻婚などによって、1 回以上結婚したことのある人については、現在の伴侶ないし最も最近まで一緒だった伴侶との結婚に関して尋ねた。なお、現在実際に一夫多妻婚の人は5 人にも満たず、それも妻の数はふたりである。彼らの結婚は、それぞれ独立の結婚として計算した。

表4 は、結婚式の西暦年および結婚式の場所によって、シルンカン出身者の間における結婚形態を数え上げたものである。表の桁目の数字のうち、横線の上の左側の数字は種族外婚の数を、右の括弧内の数字は種族内婚ではあるがシルンカン出身者以外のミナンカバウ人との結婚の数を、そして横線の下側の数字は、各桁目ごとの結婚総数を示したものである。この表から、次のようなことがわかる。なお、以下では、「村外婚」という言葉でシルンカン以外のミナン

カバウ人との結婚を、「種族外婚」という言葉でミナンカバウ以外の種族との結婚を指すこととする。

(1) アダットにより、村外婚ひいては種族外婚が禁止されていたにもかかわらず、村外婚や種族外婚はオランダ時代から存在していた。しかし、1965年までは、それも、とくに第二次世界大戦終結までは、村外婚・種族外婚が起こることはきわめてまれであった。

(2) 1956年以来、シルンカン村の外で結婚式を挙げるカップルが増えており、1971年からは、村の外で結婚式を挙げる人の数が、村で結婚式を挙げる人の数を上回るようにさえなっている。

(3) 村外での結婚式の増加が先行し、やがて1966年から、村外婚・種族外婚の数が増え始めている。また、各時期をつうじて、村で挙げられた結婚式のほとんど総てが、シルンカン出身者同士の結婚である。したがって、結婚式を村内あるいは村外で行なうかは、単にどこで結婚式を挙げるかの場所の問題にとどまらず、シルンカン人、なかでも移住・出稼ぎシルンカン人の価値観や、生活志向の変化を反映していると思われる。

(4) 村外婚も増加傾向にあるが、シルンカン出身者が「よそ者」と結婚する場合、結婚相手は同族のミナンカバウ人よりは、他種族出身者である可能性のほうが高い。

(5) 村外での結婚式の増加、村外婚・種族外婚の増加は、とくにジャカルタにおいて顕著である。

表4の結果のうち、村外婚者・種族外婚者の数を、シルンカン出身者の性別によって分類したものが表5である。⁹⁾ 表中、挙式地の《西スマトラ》には、シルンカン村での挙式も含めた。枠目内の数字は、左の数字が種族外婚者の数を、括弧内の数字が村外婚者の数を示す。＊印は、当該期間中に結婚した者がいなかったことを意味している。また、表の左側の性別は、シルンカン出身の種族外婚者の性別を示す。《ジャカルタ》および《インドネシア他地域》の両方において、この20年間、男女ともに村外婚者・種族外婚者の数が増加傾向にあることがわかる。とくにジャカルタにおける女性のそれは、この数年増加が著しい。

表5 シルンカン出身者にみる種族外婚の事例

挙式の年 挙式地		1946年 以前	1946— 1950	1951— 1955	1956— 1960	1961— 1965	1966— 1970	1971— 1975	1976— 1981	合 計
西スマトラ	男	0 (3)	1 (0)	0 (0)	0 (3)	0 (3)	0 (1)	0 (1)	1 (5)	2 (16)
	女	0 (0)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	1 (2)	1 (7)
ジャカルタ	男	0 (0)	1 (0)	2 (1)	4 (0)	4 (1)	9 (2)	15 (1)	21 (10)	56 (15)
	女	0 (0)	* *	1 (0)	0 (0)	2 (1)	8 (3)	11 (7)	32 (13)	54 (24)
インドネシア 他地域	男	1 (0)	3 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	6 (0)	2 (0)	4 (0)	18 (0)
	女	* *	0 (0)	* *	0 (0)	0 (0)	2 (0)	3 (0)	6 (1)	11 (1)
合 計	男	1 (3)	5 (0)	3 (1)	5 (3)	4 (4)	15 (3)	17 (2)	26 (15)	76 (31)
	女	0 (0)	0 (1)	1 (1)	0 (1)	2 (1)	10 (3)	14 (9)	39 (16)	66 (32)

表6 シルンカン出身者にみる種族外婚における伴侶の出身地

	伴 侶 の 出 身 地						合 計
	ジ ャ カ タ	西ジャワ	中 ・ 東 ジャワ	スマトラ	イネ シ ド ア 他 地 域	そ の 他	
シルンカン 出身者の性別							
男	17(22%)	26(34%)	18(24%)	9(12%)	2 (3%)	4 (5%)	76(100%)
女	14(21%)	9(14%)	25(37%)	9(14%)	9(14%)	0 ー	66(100%)
合 計	31(22%)	35(24%)	43(30%)	18(13%)	11 (8%)	4 (3%)	142(100%)

種族外婚における結婚相手の出身地に関しては、ジャワ島出身者が圧倒的に多い(表6)。種族外婚者の性別による主な違いは、シルンカン出身者が男である場合、西ジャワ出身の女性(おそらく多くはスンダ女性と思われる)と結婚している人が多く、また少数ではあるが、中国系インドネシア人(3人)やマレーシア人(1人)と結婚している人がいるのも目立つ(後2者のケースは、表6では《その他》に含まれている)。シルンカン女性の種族外婚者については、ジャワ男性との結婚が比較的多く、また南スラウェシやカリマンタン出身者との結婚も幾つかみられる(後2者は、表6では《インドネシア他地域》に含まれている)。なお、表6における《ジャカルタ》であるが、果してこれがバタウィ族を指すのか、あるいは他の種族ないし異種族間結婚の子供でジャカルタ生まれの人を

表7 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（職業）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ 他 地 域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の職業						
商 業	472 (85%)	11 (46%)	10 (91%)	21 (64%)	11 (61%)	525
職人業・手仕事	27 (5%)	4 (17%)	1 (9%)	4 (12%)	4 (22%)	40
事務職	50 (9%)	9 (37%)	0 —	7 (21%)	3 (17%)	69
主婦業	0 —	0 —	0 —	0 —	0 —	0
その他	6 (1%)	0 —	0 —	1 (3%)	0 —	7
合 計	555(100%)	24(100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	641
シルンカン女性の職業						
商 業	27 (11%)	3 (10%)	2 (14%)	2 (8%)	0 —	34
職人業・手仕事	13 (5%)	1 (4%)	1 (7%)	0 —	2 (8%)	17
事務職	4 (2%)	4 (14%)	0 —	0 —	2 (8%)	10
主婦業	197 (81%)	21 (72%)	11 (79%)	22 (88%)	21 (84%)	272
その他	2 (1%)	0 —	0 —	1 (4%)	0 —	3
合 計	243(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	25(100%)	336

表8 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（教育程度）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ 他 地 域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の教育程度						
小学校	86 (16%)	3 (12.5%)	1 (9%)	3 (9%)	3 (17%)	96
中学校	218 (39%)	9 (37.5%)	5 (46%)	12 (37%)	7 (39%)	251
高等学校	169 (30%)	6 (25%)	1 (9%)	11 (33%)	4 (22%)	191
大学・大学院	83 (15%)	6 (25%)	4 (36%)	7 (21%)	4 (22%)	104
合 計	556(100%)	24 (100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	642
シルンカン女性の教育程度						
小学校	75 (31%)	0 —	3 (21%)	5 (20%)	2 (8%)	85
中学校	114 (47%)	8 (28%)	6 (43%)	8 (32%)	10 (38%)	146
高等学校	46 (19%)	12 (41%)	4 (29%)	10 (40%)	7 (27%)	79
大学・大学院	8 (3%)	9 (31%)	1 (7%)	2 (8%)	7 (27%)	27
合 計	243(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	26(100%)	337

表9 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（出生地）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ他地域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の出生地						
シルンカン	506 (91%)	16 (67%)	9 (82%)	25 (76%)	13 (72%)	569
西スマトラ他地域	5 (1%)	7 (29%)	1 (9%)	1 (3%)	1 (6%)	15
ジャカルタ	12 (2%)	1 (4%)	1 (9%)	2 (6%)	2 (11%)	18
ジャワ島他地域	24 (4%)	0 —	0 —	5 (15%)	2 (11%)	31
その他	9 (2%)	0 —	0 —	0 —	0 —	9
合 計	556(100%)	24(100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	642
シルンカン女性の出生地						
シルンカン	202 (84%)	12 (42%)	7 (50%)	9 (36%)	10 (38%)	240
西スマトラ他地域	7 (3%)	7 (24%)	2 (14%)	2 (8%)	5 (19%)	23
ジャカルタ	10 (4%)	5 (17%)	5 (36%)	5 (20%)	8 (31%)	33
ジャワ島他地域	11(4.5%)	3 (10%)	0 —	9 (36%)	2 (8%)	25
その他	11(4.5%)	2 (7%)	0 —	0 —	1 (4%)	14
合 計	241(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	26(100%)	335

表10 シルンカン出身者の出生地に関する年齢の推移

	シルンカン出身者の 1981 年時の年齢				
	40—49歳	30—39歳	20—29歳	10—19歳	0—9歳
男性の出生地					
シルンカン	221 (93%)	345 (92%)	274 (67%)	154 (32%)	49 (12%)
西スマトラ他地域	2 (1%)	10 (3%)	7 (2%)	25 (5%)	6 (1%)
ジャカルタ	3 (1%)	1 (0%)	80 (19%)	260 (55%)	359 (84%)
ジャワ島他地域	11 (5%)	16 (4%)	28 (7%)	20 (4%)	10 (2%)
その他	1 (0%)	4 (1%)	19 (5%)	20 (4%)	3 (1%)
合 計	238(100%)	376(100%)	408(100%)	479(100%)	427(100%)
女性の出生地					
シルンカン	93 (91%)	147(81.5%)	149 (55%)	153 (33%)	57 (14%)
西スマトラ他地域	1 (1%)	12 (6.5%)	16 (6%)	20(4.5%)	6 (1%)
ジャカルタ	2 (2%)	3 (1.5%)	78 (28%)	249 (54%)	339 (82%)
ジャワ島他地域	4 (4%)	14 (7.5%)	13 (5%)	17 (4%)	10 (2%)
その他	2 (2%)	4 (3%)	16 (6%)	20(4.5%)	4 (1%)
合 計	102(100%)	180 (100%)	272(100%)	459(100%)	416(100%)

指すのかは、確定し難い。おそらく、多くは前者であろう。

村外婚者・種族外婚者の特徴であるが、ここでは表7から表9に掲げてあるように、シルンカン出身者の性別によって、彼らの職業、教育程度、出生地についてみてみた。なお、村外婚・種族外婚ともに1960年以降増えていること、そしてシルンカン出身者の職業・教育程度・出生地は、1960年頃を境として大きく変化している可能性があることを鑑み、表7から表9の結果は、1961年から1981年までの間の全種族外婚（ジャカルタでの挙式に限定せず）について集計したものである。表中、シルンカン出身者同士の結婚件数が、女性よりも男性に多いのは（たとえば表7では、女性243に対して男性555）、結婚は夫婦のどちらか片一方のみについて記録されたものであり、シルンカン出身者同士の結婚は、データ集計時に、そのほとんどが男性側に記録されたことによる。この意味で、同村内婚のシルンカン女性の特徴は、男性のそれに比べると代表性に劣るといえる。また、表の間で事例の総数に違いがあるのは、各項目ごとに、データ不在の事例を除外して集計しているからである。

表7、表8、表9の結果から、次のようなことがいえる。¹⁰⁾

(1) 村内婚者に比べ、村外婚・種族外婚の男性は、“ジャカルタ女性”と結婚した者を除き、《商業》の割合が低く、《事務職》の割合が高い（表7）。女性については目立った違いは無いが、これは、ほとんどが《主婦業》であるためで、結婚前の女性の職業を尋ねていたら、あるいは結果は違っていたかもしれない。

(2) 教育程度については、村内婚と村外婚・種族外婚の男性の間に、際立った相違はない（表8）。しかし女性の場合は、前者に比べ、後者の教育程度が高い。

(3) 村内婚者に比べ、村外婚者・種族外婚者には、シルンカンでではなく他郷で生まれた人が多い（表9）。これは、とくに、女性の村外婚者・種族外婚者の間に顕著である。《西スマトラ他地域》、《ジャカルタ》、《ジャワ島他地域》で生まれた女性の場合には、半分以上がシルンカン出身者以外の男性と結婚している（表の横欄をとおしてみよ）。他郷生まれのシルンカン人は、親がすでに一

家揃って村の外で生活しており、その結果親の仕事先で生まれた人々である。こうした人達は、かつて時には、教育のため親の出身村の祖父母などのもとに預けられたりしたこともあった。また、なかには、後になんらかの事情で親子揃って帰村し村で生活するようになった人々もいるであろう。しかし1961年以降についていえば、こうした人達は、おおむねそのまま村の外で育った可能性が強い。他郷で生まれた人は、シルンカン外での暮しの長い人とみて、まず間違いない。

他郷での出生と村外婚・種族外婚との結び付きは、今後のシルンカン出身者の婚姻形態を考えると、きわめて重要である。表10は、センサスにおいて拾うことのできたシルンカン出身者のうち、50歳以下の人の出生地を集計したものである。ジャカルタ在住の世帯主を起点として、彼らの存命中の子供、兄弟・姉妹（ジャカルタ在住とは限定せず）を列挙した結果である。¹¹⁾ジャカルタが起点であるだけに、一般的に世帯主の子供が含まれる0歳から19歳までの年齢では、ジャカルタ生まれの割合が多くなるであろうことは予想できる。それにしても、表10は、単に実数をみただけでも、ジャカルタ生まれのシルンカン人が1961年以来急激に増加したことを示している。

表9にみたような結果が今後とも観察されるとするならば、他郷出生者、とりわけジャカルタ出生者の増加は、シルンカン出身者の間に、将来にわたって種族外婚の数が増えるであろうことを示唆している。

おわりに

異種族間の結婚は、インドネシアでも、たとえばジャワの北海岸地帯やリアウの島嶼部のように、昔から多種族の往来の激しかった地域では、オランダ時代以前から、比較的頻繁に起こったであろうと想像される。しかし、このような結婚が「雑婚」(kawin campur)として概念化され、それも一種の「社会的問題」としてインドネシア人の意識にのぼるようになるのは、20世紀の初頭、蘭領東インドの領域支配が最終的に確立し、人々の間に「蘭領植民地現住民」

という共通の準拠枠が形成されてくるとともに、各地域間、すなわち各種族間の交通・往来が頻繁化してきた時代以降のことであると思われる。

この時代の異種族間結婚に対する認識枠の形は、1920年代から1930年代にかけて、主としてミナンカバウ出身の作家によって書かれた小説によくあらわれている。これらの小説の中では、その典型的な形において、異種族間結婚は社会の進歩的人々、たとえば他郷生活の経験のある知識人や商人が、恋愛などをとおして内発的に志向する選択であり、自己の伝統の相対化の手段でもある。異種族間結婚が、多くの場合、結局は伝統の力に抗し切れず最終的には悲劇に終わっているのも、これらの小説に特徴的である（より詳しくは Teeuw [1967 : 57-63, 69-72] を参照）。

これと異なる異種族間結婚のモチーフ化が、私が1981年、ジャカルタでの調査時に買い求めた二つのカセットテープにみられる。これは、この10年ほど伸びの目覚ましいカセットテープ市場のためにジャカルタで制作・録音されたドラマで、『分れ道にて』(*Disimpang Duo*)と『スンダ女性を妻として』(*Marboru Sunda*)という題のものである。¹²⁾前者は2巻テープで、ミナンカバウ男性とジャワ女性の結婚を、後者は1巻もので、バタック男性とスンダ女性との結婚に関する物語である。ジャワやスンダに比べれば、ミナンカバウもバタックも、ジャカルタ人口中あるいはインドネシア人口中の比率は少ない。しかし、人口サイズの順番でいけば、インドネシアで5、6番目に大きな種族で、ジャカルタでも、政治・経済・教育などにおいて影響力のある種族と他とともに認め・認められており、なおかつアダットの強いことでも知られている。種族的自意識・自負心が強く、「重みのある少数種族」とでも呼ぶべきこの二つの種族が、インドネシア人口・ジャカルタ人口の多数派であるジャワの女性・スンダの女性との結婚を、揃って扱っているところが面白い。テープは、ジャカルタ在住のミナンカバウおよびバタックの芸能グループにより演出・制作されたもので、それぞれの土地の言葉で語られる物語は、明らかにジャカルタ在住のミナンカバウ人、バタック人を市場対象として作られたものである。

物語の筋は、概略つぎのとおりである。マスパール(Maspar)、オジャ(Ojak)

という、それぞれミナンカバウとバタックの青年が、親の期待を一身に受け勉学のためジャカルタへと発つ。マスパールは、初期の目的を達成してインシニョール (Ir. 理工系の修士) となるが、オジャの場合は、都会の誘惑に負け勉学がおろそかになってしまう。いずれの場合も、大学での友達であるジャワ女性やスンダ女性と恋に落ち、親の許しも得ずにジャカルタで結婚し、オジャには子供までできてしまう。やがて、妻あるいは妻子を親に引きあわせるため故郷に帰るが、結婚という既成事実をめぐる、親子、親戚の間にドラマが展開される。その過程で、アダットをめぐる議論も繰り広げられるが、この部分は、アダットの知識に乏しい都会の若者たちに対して、一種のアダットを教諭す場ともなっている。結末は、マスパールもオジャも、アダットを無視した自分たちの非、すなわちアダットによるところの最も相応しい結婚相手 (たとえばオジの娘) との結婚を避け、異民族の女性と、それも親の許可なくして結婚したことの非を謝罪することにより、彼らの結婚も認められ、祝福されるというものである。

オランダ時代の小説であったならば、マスパール、オジャともに、妻 (子) を親に引きあわせるような状況は起こらなかったであろうし、また、彼らの結婚が認められ、祝福されるようなこともなかったであろう。イトコ婚や種族内婚といった、アダットに則って相応しいとされる婚姻形態を依然として理念として掲げながらも、種族外婚が社会的にも許容されるにいたったことを、カセットテープの物語は反映している。

表1、表2の結果をみる限り、ジャカルタに住むカップルの多くが、種族内婚によって結ばれた夫婦であるという印象を受ける。この印象は、ジャカルタ全体に当てはめてみても、おそらく大方において正しいであろう。しかし、一方、西スマトラ・シルンカン村出身者の事例は、1971年頃から、ジャカルタにおける婚姻形態にも徐々に変化のあることを示している。シルンカン村は、種族内婚志向の高いミナンカバウ社会でも、とくに村内婚規制の強い村として有名であり、この村の出身者にみる婚姻形態の変化の兆しは、上のカセットテープの物語と同様に示唆的である。

シルンカン出身者の間の変化の徴候は、1961年頃からみられる。一つは、ジャカルタで結婚式を挙げる人が増え始めたこと（表4）、そしてもう一つは、おそらく一部その結果として、ジャカルタ出生者の数が増加し始めたことである（表10）。両方の傾向ともに、ジャカルタへ移住・出稼するシルンカン出身者の生活基盤が、村を離れてジャカルタへと移っていることを示している。

種族外婚の件数は、1966年頃から増え始め、それも年を追うごとに増加している（表4、表5）。シルンカン出身者の事例でいえば、1976—1981年の間にジャカルタで挙げられた結婚のうち、25%が種族外婚、11%が村外婚（シルンカン出身者以外のミナンカバウ人との結婚）である（表6）。

他種族出身者と結婚した人は、他郷で生まれたシルンカン出身者に多く（表9）、他郷での生活経験の長さが、種族外婚と関係していることを示唆している。この結果は上の生活基盤の所在と、密接に関連していることはいうまでもない。

高い教育程度や事務職といった職業も、種族外婚と相関していると思われるが、シルンカン出身者には、高等教育を受けた人や事務職の人がまだ少なく、相関の程度はあまり明かではない（表7、表8）。

将来の見通しとしては、種族内婚、なかんずく村内婚が、依然として理想として掲げられ、なおかつ統計的モードとして残るであろう。若い世代のなかには、旧式であるとして、意識的に村内婚に反発する人達もいることはいる。しかし、私のジャカルタでの経験では、あとうならば、親の世代にあっても子供の世代にあっても、シルンカン出身者同士の結婚が望ましい、と考えている人が大多数である。前出のシルンカン同郷会の青年部会である IMPPS が、ピクニックやスポーツ大会などを催し、ジャカルタ在住の年頃のシルンカン青年男女が、お互いに出会い、知りあう機会を作り出すよう努力しているのも、村内婚の理想があるからにはかならない。

しかしながら、一方で、ジャカルタ生まれのシルンカン人が増えていること（表10）、また、ジャカルタ在住シルンカン子弟の教育も将来高度化されるだろうこと、などを考えると、同村出身以外の要素が、伴侶選定の際の重要な基

準となってくるであろう。それは、たとえば、教育程度、出身階層、生活様式などが、お互いに釣り合っていることかもしれない。若い世代にみられる恋愛結婚志向も、シルンカン出身者の婚姻形態をますます多様なものとするに違いない。

今後は、とくに、表5にその徴候がみられるように、女性の種族外婚が、男性のそれより早いペースで増加すると私は考えている。ジャカルタに生まれ育ち、教育も仮に高いとしても、シルンカン男性には、ジャカルタ在住のシルンカン女性だけではなく、村で生まれ育った同郷女性も、将来の伴侶の候補者となりうる。イスラーム教徒にとって最大の聖祭である断食明けのお祭りには、たくさんの出稼ぎ人がシルンカン村へと帰って来る。そして、お祭の済んだ後一週間ほどは、出稼ぎ先から一時帰郷した若者と村娘との結婚式が続く。しかし、こうした選択は、都会生まれのシルンカン女性には、まったくといってよいほど閉ざされている。ジャカルタ生まれで、ある程度までの学校に行った女性が、教育も低いに違いない田舎者と結婚することは、本人にとっても彼女らの親にとっても不本意であろう。これらの女性にとっては、村内婚の選択の幅が狭いだけに、種族外婚の可能性が増えざるをえない。

もう一つ、これまた女性にとってより深刻と思われるのが、ジャカルタやその他の都市での、死別・離別による再婚の問題である。たとえ初婚は村内婚であっても、他郷での再婚相手も同郷出身者である確率は、年齢コホートの結婚可能な男女数のバランスからいっても少ないに違いない。

いずれにしても、種族外婚の数が増えるにしたがい、ジャカルタで私が何度か聞かされたように、種族的背景や同村出身といった考慮よりは、現在は当然のこととされている同じイスラーム教徒という配慮が、あるいは、いずれ、最小公約数として中心的な判断基準となるのかもしれない。

種族外婚の増加による通婚圏の拡大は、村内婚→村外婚（種族内婚）→種族外婚といった、単線的な移行経過をたどるのではない。本稿の初めに述べたごとく、都市における種族内婚といえども、結婚相手の選定は、決して無作為になされてはいない。シルンカンに代表されるミナンカバウの例でいえば、ジャ

カルタでの種族内婚は、出身村という枠組みのなかでの婚姻であり、都市でのこの枠組みの重要性の相対的低下は、他のミナンカバウ人との結婚とは結び付かず、むしろ表4の示すように、他種族との結婚により強く結び付いている。したがって、都市における婚姻形態の研究にあっては、たんに種族内婚、種族外婚の対比だけではなく、都市での種族内婚を内側から支える人間関係のネットワーク、つまり都市のなかの「むら」の同定が緊要である。

ミナンカバウの場合は、都市のなかの「むら」は、文字通り出身村とそれを母体とする同郷会である（だからこそ、村内婚の減少は種族外婚の増加と結び付く）。しかし、種族によって、この「むら」の形はまちまちであろう。それは、トバ・バタックのように、キリスト教会に根差したものであるかもしれないし、サンギル・タラウッドのように、村落を越えたより広範な同一出身地域とジャカルタ内の特定居住区域に立脚したものであるかもしれない。

「むら」の形がまちまちであるということは、とりもなおさず、都市での「むら」の形成過程が異なるだけではなく、「むら」の変容過程も異なるであろうことを意味している。そして、それは当然のことながら、種族外婚への道も様々であろうことを示唆する。

本稿では、婚姻形態に関する社会階層的分析がなされなかったが、こうした分析とともに、将来は、ジャカルタないしインドネシア都市部における婚姻形態の、種族別の事例研究が待望される。

上記以外に、今後に残された研究課題の一つに、種族外婚における伴侶選定過程の問題がある。このような究明をつうじて、種族外婚増加の理由もより明確になろう。

いずれにしても、インドネシア都市部における婚姻形態の研究は、多種族国家インドネシアの国民統合を考えるうえでも、今後ますます重要となろう。

注

- 1) 東南アジア研究において、このような問題関心はまだ充分には展開されていない。わずかにシンガポールについて、幾つかの研究が存在する。シンガポールにおける異民族間の婚姻形態に関しては、Foon and MacDougal [1977], Kuo and Hassan [1979], Lee et al. [1974] を参照。
- 2) これらの研究の概観については、ESCAP [1981], Sethuraman [1976] を参照。
- 3) アシジャフィーヤの塾生に、どうして「ジャカルタ現住民」ともいえるバタウィ (Batawi) 族が多いのかは、調査のなかでは明らかにされていない。バタウィ族はイスラーム教育に力を入れるとは、昔からよくいわれている。
- 4) サンギル・タラウド (Sangir Talaud) は、実際は種族ではなく、二つの小島嶼群の名前である。しかし、この地域の出身者はジャカルタで一つの同郷会を形成していること、そしてジャカルタのサンギル・タラウド社会を調査したスバルランが³、この地域の出身者を一つのグループとして扱っていることなどから、ここではあたかも種族のようにして考えた。ただし、タンジュン・プリウック (Tanjung Priuk) では、タラウドよりサンギル出身者が圧倒的多数である。ミナハサ (Minahasa) の種族内婚率は、タンジュン・プリウックにあるミナハサ同郷会の代表メンバー (メンバーは家族が単位で代表メンバーは世帯主) の構成から計算した。ブギス (Bugis) のサンプルには一夫多妻婚者が多数いるが、表2の数字は第一夫人の種族的背景に依拠している。ミナカバウ (Minangkabau) に関するデータは、バンドン、ウジュン・バンドン、メダンからのものもあるが、その大部分はジャカルタからのものである。
- 5) 第三夫人までいる人の数は13人で、他は第二夫人までである [Roosmalawati 1979:107]。
- 6) 本稿のデータ源であるサーベイ調査は、1981年の7月から12月にかけて、ジャカルタにおいて実施された。この時の調査費については、アメリカの Social Science Research Council から、滞在費については、京都大学東南アジア研究センターから援助を受けた。さらに、1985年の1月と2月に、数日間ずつではあったが、シルンカン村とジャカルタにおいて補足調査を行なっている。この時の費用は文部省の科学研究費による。シルンカン村の昔の様子に関しては、主にジャカルタおよび村に住んでいる老人から聞き取り調査を行なった。
- 7) この蜂起に関するより詳しい内容は、Benda and McVey [1960] を参照。
- 8) これらの人々は、マルザリのデータ処理からは除外されている。なお、後出の表4が示すように、種族外婚者の数は、実際にはこれより多かった可能性がある。
- 9) シルンカン出身者同士の結婚は、男女両方に適用するわけで、表5では当該期間中の男女別結婚総数は示さなかった。
- 10) 表7の“職人業・手仕事”とは、主として織物業と縫製業を指す。表8の各教育程度には、1年以上通学した途中退学者 (《小学校》では3年間通学) も含まれている。
- 11) 50歳以上の年齢では、ほとんど総てがシルンカン生まれである。なお、表のなかで、29歳以上の年齢で男女数に大きな差があるのは、センサスにおける情報提供者が、主として男性だったことによる。
- 12) 『わかれ道にて』は、バレロン・グループ (Balerong Group) によって制作され、グローブ (Globe) から発売されている。『スندا女性を妻として』は、グループ・パルポルン (Group Parpollung) によって制作され、ボーイング 747 (Boeing 747) から発売されている。両者とも、1980年末か1981年初頭に発売されたものと思われる。なお、後者のテープの粗筋を理解するについては、タンバ氏 (J. L. Tamba) の協力を得た。

参考文献

- Amali, Jurhan. 1970. *Masjarakat Gorontalo di Tanjung Priok Jakarta*. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Benda, Harry J.; and McVey, Ruth T. 1960. *The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia: Key Documents*. Ithaca, N. Y.: Cornell Modern Indonesia Project.
- Bogardus, E. S. 1925. Measuring Social Distances. *Journal of Applied Sociology* 9: 299-308.

- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profile of Djakarta. *Indonesia* 3(April): 153-204.
- ESCAP. 1981. *Migration, Urbanization and Development in Indonesia*. New York: United Nations.
- Foon, Chew Sock; and MacDougal, John A. 1977. *Forever Plural: The Perception and Practice of Inter-Communal Marriage in Singapore*. Papers in International Studies Southeast Asia Series No. 45. Athens, Ohio University: Southeast Asia Program, Ohio University.
- Geertz, Hildred. 1967. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by Ruth T. McVey. New Haven: Human Relations Area Files.
- Jusuf, Sulaiman. 1973. Perguruan Asyasyafi'iyah di Jakarta Selatan: Suatu Studi Perbandingan mengenai Nilai Nilai dan Norma Norma dari Santri Yang Bermukim dengan Yang Tidak Bermukim. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Kato, Tsuyoshi. 1982. *Matriliney and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- 加藤 剛. 1983. 「都市と移住民：ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』21 (1): 47-61.
- Kuo, Eddie C. Y.; and Hassan, Riaz. 1979. Ethnic Inter-marriage in a Multiethnic Society. In *The Contemporary Family in Singapore*, edited by Eddie C. Y. Kuo and Ailine K. Wong. Singapore: Singapore University Press.
- Lee, Che-Fu; Potvin, Raymod H.; and Verdieck, Mary J. 1974. Interethnic Marriage as an Index of Assimilation: The Case of Singapore. *Social Forces* 53(1): 112-119.
- Lobarnabal, Sudja'i Zak. 1973. Pedagang Sate Madura di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Marzali, Amri. 1973. Orang Silungkang di Jakarta: Latar Belakang dan Fungsi Konflik dalam Sistem Kekerabatan Mereka. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra dan Kebudayaan, Universitas Gajah Mada.
- Mertens, Walter. 1976. Jakarta, A Country in a City: A Demographic Introduction to Jakarta. *Majalah Demografi Indonesia* 3(6): 50-109.
- Naim, Mochtar. 1979. *Merantau: Pola Migrasi Suku Minangkabau*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Oki, Akira. 1979. A Note on the History of the Textile Industry in West Sumatra. In *Between People and Statistics: Essays on Modern Indonesian History*, edited by Francien van Anrooij et al. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Pandjaitan, Nurmala Kartini. 1977. Kegiatan Dagang Inang-Inang: Kedudukan dan Perannya dalam Keluarga dan Masyarakat Batak Toba di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Persoon, Gerard. 1982. *Wij met Elkaar: De Minangkabau in Jakarta*. Leiden: Instituut voor Culturele Antropologie en Sociologie der Niet-Westerse Volken.
- Rahardjo, Julfita; and Papanek, Hanna. 1980. Pemilihan Sample, Cara Mewawancara dan Ciri Khas Responden. In *Wanita Kota Jakarta: Kehidupan Keluarga dan Keluarga Berencana*, edited by Julfita Rahardjo et al. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Roosmalawati. 1979. Migrasi Orang Bugis ke Jakarta: Suatu Pendekatan Antropologis mengenai Masalah Pola Perpindahan Orang-Orang Bugis Keluar Daerah Asalnya. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Selltiz, Claire; Wrightsman, Lawrence S.; and Cook, Stuart W. 1976. *Research Methods in Social Relations*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Sethuraman, S. V. 1976. *Jakarta: Urban Development and Employment*. Geneva: Interna-

- tional Labour Office.
- Sis, Maulud Tumenggung. 1970. Mapalus Orang-Orang Minahasa di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Speare, Alden, Jr. 1975. Interpreting the Migration Data from the 1971 Census. *Majalah Demografi Indonesia* 2(3): 66-85.
- Suparlan, Parsudi. 1963. Masyarakat Sangir Talaud di Tanjung Priuk: Dengan Latar Belakang Masyarakat Sangir Talaud di Sangir Talaud. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Teeuw, A. 1967. *Modern Indonesian Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Thomas, Lynn. 1977. Kinship Categories in a Minangkabau Village. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of California, Riverside.

(加藤 剛)

第Ⅲ部 歴史と国家

「ジャワ」から「インドネシア」へ

——インドネシア・ナショナリズム再論——

はじめに

東南アジアの国民国家 (nation-state) のなかでインドネシアが際立った大国であることは周知の通りである。面積・人口ともに東南アジア全体の4割を越え、「サバンからメラウケまで」と誇示される東西の距離は 5000km 以上に達している。

国民国家としてのインドネシア共和国が成立してからすでに40年が経過した。その間に統一インドネシアの分割ないしそれからの分離独立のころみはいくつか存在したが、いずれも実現しなかった。逆に、国民国家の枠組はますます強化されてきた。このことは、現代世界が国民国家の時代であること、したがって現代世界の構成単位として国民国家が強靱な持続性を有していることを明示している。

インドネシアという国民国家が成立する上で決定的であったのは、次の二つのことがらであった。第一は、インドネシアが旧オランダ領東インド（東インド植民地国家）の領域をそのまま継承して成立したことである。第二は、国民国家の創出をめざす運動（ナショナリズム）が、たとえばジャワ・ナショナリズム、バリ・ナショナリズム、ミナンカバウ・ナショナリズムとしてでなく、その当初から、インドネシア・ナショナリズムとして成立し展開していったことである。この限りでみると、インドネシアは植民地支配とナショナリズムを両親として誕生したのであり、植民地ナショナリズムの典型的な型をしめしている。

とはいえ、「多様性の中の統一」を国是の一つとして掲げるほどに広大な空間と多様な社会・文化を包含しているインドネシアにおいて、これらの多様な

地域がインドネシアへと変容していくプロセスは決して一様ではなく、地域ごとにその様相を異にしていることは当然である。ことに、これらのプロセスにおいて何を重要な変容のファクターとして考慮すべきであるのかという問題は、それぞれの地域ごとの独自の社会と文化と制度のあり方から切り離すことはできない。それは場合によっては、変容のプロセスを共通に測定する基準をはたして設定しうるのか否か、という問題を導き出すことになるはずである。

本稿の趣旨は、以上に述べてきたことがらを念頭において、インドネシアの中からジャワをとりあげ、「ジャワ」が「インドネシア」へと変容していくプロセスを概観することである。ここに「ジャワ」の意味は二重である。第一にそれはジャワ語を母語とする人々すなわちジャワ島中東部を中心とするジャワ族の世界を意味し、第二に植民地時代と現代とを問わずインドネシアにおいてもっとも重要な政治的・経済的役割を果たしてきた空間としてのジャワ島の全体そのものを意味する。このように、本稿においてジャワという語が二重に用いられること・二重に用いられざるをえないことは、後述する通り、「ジャワ」から「インドネシア」へという変容のプロセスそのものにかかわっていることがらなのである。次に「ジャワ」から「インドネシア」へと変容するとは、その変容のレベルをどのように設定するかによって、多義的にならざるをえない。さし当り、「ジャワ」という観念と心理にかかわって（もしくはそれが成立するのにあいともなって）それとは別の新しい観念と心理が誕生し、それが次第に（もしくはそれが同時に）「インドネシア」という「時代精神」として共通にイメージされること、そして、この「イメージの共同体」[Anderson 1983: 14-16]を獲得し構築し制度化するためのこころみが出現することである、と規定する。なお以上のことがらを考察する際に主要な時期として設定されるのは、ジャワ島に新しい植民地空間が成立する18世紀の半ばから、インドネシア・ナショナリズムが自己増殖的な再生産の段階に到達する1910年代までの約1世紀半の期間である。

次に、このような変容を本稿で取り扱う際の視角と主要な論点は次の通りである。第一は、ジャワの王権とその変容を植民地国家との関係およびナショ

ナリズムとの関係において論ずることである。ジャワの王権はインドネシアの各地域に成立してきた伝統的権力の中で、植民地支配下においてなお例外的に存続したのみならず、その完成度（なかんづく文化的完成度）において屹立していた。それにもかかわらず、20世紀のナショナリズムの時代において、ジャワの王権がたとえばジャワ・ナショナリズム（ジャワ人によるジャワ国家の創出をめざす運動）を生み出す喚起力となったり、ジャワ・ナショナリズムが直接にそこへ向って収斂していく求心力となることはなかった。それは何故か、ということを変更して問うことは、王権の変容ということがらを中心にすえて、一方でそれと植民地権力との関係、他方でナショナリズムとの関係を定置する作業が求められるのである。概していえば、従来までのところ、インドネシアの「正史」と国際的なアカデミズムとを問わず、ジャワの王権は、19世紀までのジャワの権力編成と配置の問題として現代史から遠ざけられるか、もしくは、ジャワの伝統的文化の問題として文化研究・古典研究のカテゴリーに封じ込まれるかのいずれかであった。その結果、19世紀と20世紀との深い断絶が、共和国とアカデミズムとを問わずに共通の前提として受け入れられ、「知の伝統」と化してきていた。このような了解そのものを再検討しようとするためにもこの王権をめぐる問題は、「あらためて問う」べきことがらであると思われる。

第二は、19世紀の半ば以降に顕著になるジャワ島の社会変化を「ジャワ」から「インドネシア」への変容という文脈に定置することである。上に述べた通り、19世紀と20世紀の間に断絶があるという認識は、インドネシアの現代史とくにナショナリズムの発展史を記述する多くの文献に、ほとんど一様に認められる。オランダ植民地政府の公文書とインドネシアの「正史」とアカデミズムの生産する研究とを問わず、現代史の記述の起点を今世紀の初頭における「倫理政策」とそれに呼応して出現する原住民知識人や団体（典型的にはカルティニとブディ・ウトモ）にすえるのが一つの「伝統」となってきた。その前提にあるのは、その時期にインドネシアの近代が始まるという共通の認識であった。従って、19世紀は近代の「ヒカリ」がいまだ到達することのない「ヤミ」の時代であるとみなされてきた。だからこそ、19世紀までの歴史は植民地政策の変

遷史、なканずく経済政策の変遷史として描かれるか、もしくは先に述べたような王朝の興亡史（これが植民地の発展史もしくは侵略の拡大史と表裏一体をなしていることはいうまでもない）ないし王朝の文化史として描かれるのがつねであった。それが20世紀になると、あたかも主人公が突如として交代するように、ナショナリズムが登場するのである。しかし19世紀と20世紀はこれほど截然と分ちうるのであろうか。植民地の文書からもれ（それゆえ、アカデミズムの視野に収めにくく）、ナショナリストの主要な関心からももれていることがらのなかに、「二つの時代」と「二つの世界」を結びつけているものがないであろうか、というのが本稿の論点である。それを、組織・運動・事件とこれらを書きとめる文書およびこれらの文書（それが植民地官吏の手になるものであるとナショナリストの手になるものであるとを問わずに）の連鎖ないし再構成によって作りあげられる政治史の領域を拡大すること、もしくはその領域を開放して広い社会変化と文化変容を視野に入れることによって、換言すれば、社会過程に錘鉛を下ろすことによって考察してみようとするのが本稿の視角である。

とはいえ、これらの二つの考察の対象は、いうまでもなくそれぞれに多様な問題を含んでおり、いくつもの個別具体的な研究を要請するものである。本稿の趣旨は、その変容のプロセスについての見取り図を描くことによって、それぞれに問題とされるべき論点を提示することである。¹⁾

I ジャワの王権とその変容

1 ジャワの王権

歴史的にみるとインドネシアには二つの王権の伝統が認められる。一つは河川や河口の交易の要衝に成立し海域世界のネットワークへの参入によって基礎づけられた王権である。何者の所有にも帰すことのない従ってすべての者に開放されている「一つの海」“the single ocean”²⁾ という伝統がこの海域世界には成立していた。この「海の世界」では、人・物・言語・情報・文化が環流し、これらの環流の「結節点」に成立した王権は人・物・言語・情報・文化が交差

し交流する窓口であった。一方、これらの王権の物的基盤はその時々限定的な財の交流におかれていたから、「一つの海」が財の一方的篡奪者＝「海賊」を含めてたえず新規の参入者を迎え入れるということがらとあいまって、王権が長期に安定的に維持されることはなかった。その意味で、「海の世界」の王権（ムラユ的世界の王権）は、開かれた体系・自己非完結的な体系を示していた、といえよう。

これに対してジャワ島深南部（「ジャワ核域」）の独立火山峰の山麓に成立したジャワ族の王権は、稲作生産に基礎づけられた王権の伝統を形成してきた。そこは豊穡な稲作社会の中心であるとともに、「海の世界」を窓口として流入してきた王権思想が長期に安定的に定着する空間であった。ジャワは稲米儀礼を核とする自然と人事への繊細な関心が王宮に向けて求心的に収斂する世界であり、王宮は「宇宙的秩序」を創出し維持する主宰者であった。その意味でそこに成立したのは「野の世界」の王権の伝統であり、そこで示されたのは閉ざされた体系・自己完結的な体系であったということができよう。³⁾

ジャワの王権は紀元後8世紀から13世紀頃までの間に中部から東部へ向ってそのセンターを東漸させていった。ところが13世紀末になるとその中心はジャワ島東部の農業地帯から一気に北上してジャワ海の河口部へ移行してマジャパヒト王国の成立をみることになる。それは13世紀末に至ってジャワの王権が先の二つの伝統を包摂する王権・強力な物的・人的資源に基礎づけられた王権へと発展したことを示している。「多様性の中の統一」“*Bhinneka Tunggal Ika*”の標語がもともとマジャパヒトの時代に由来するように、多様性の統一とは先ずもって「海の世界」と「野の世界」（王権の型でいえば「ムラユ型王権」と「ジャワ型王権」）の合一化を意味しているのである。

ところで重要なことは、この強力な王権が遠征と制圧、支配圏の拡大と確立を実現し保障する強力な軍事集団として先ずもって機能していたことである。このような強力な王権は、その後3世紀を経て、イスラムの流入と戦争と小王朝の興亡と文化的伝統の破壊・断絶ののちに、16世紀末に至って、マタラム王権において再度継承された。マタラム王権はその中心をあたかもジャワ王権の故

地に帰還するかのようにジャワ深南部の「マタラムの地」においた。そのことは、マジャパヒトの場合とは逆に、「海の世界」の王権（この場合イスラムの王権）がジャワ北岸の河口部から上ってついに「野の世界」の中核を押さえたことを意味していたのである。

マタラム王権の変容を以下に概観するのに先立って、次の二つの点を留意しておきたい。第一は、マタラムの成立する16世紀後半以降、西欧植民地勢力がインドネシアの各地に拠点を確立し拡大していったことである。16世紀以降のポルトガル、17世紀以降のオランダ（副次的にイギリス）の勢力拡大はインドネシアにおけるイスラム王権の勃興期（典型的に16世紀以降のアチェ王権の台頭と17世紀前半のマタラムの拡大・バタヴィア城攻撃）と軌を一にしていたのであり、各種の勢力がせり合う状況が出現していたのである。第二は、西欧の勢力拡大が、「一つの海」の伝統の解体（「海域世界」の主要なネットワークの独占化）とこれにともなう「海の世界」の王権の伝統の解体（要衝地点の掌握と支配）として、従って「海の植民地化」として進行したことである。このような植民地化の過程は、ジャワを除けば、19世紀半ばまでインドネシアの各地域において一般的に認められたのであり、領域の包括的支配を中核とする植民地化が進行するのはそれ以降のことであった。しかるにジャワだけはすでに17世紀の前半からオランダ勢力の内陸部への拡大とこれにともなう領域支配の過程を経験したのである。

2 王権の変容

1578年頃に成立したとされるマタラム王権は17世紀の前半までにその支配圏をジャワ島西部と東端部を除く全域に拡大した。その後は内紛とオランダとの抗争をくり返し、1755年にはジョクジャカルタとスラカルタの二王国に分裂、1757年にはスラカルタからさらにマンクヌガラ王家が分立し、越えて1813年にはジョクジャカルタからパクアラム王家が分立して、四つの小王国が並存することになった。この過程で王権はどのように変容したのであろうか。約言すれば、この過程で王権は戦闘集団の主宰者から「模範的中心」としての王宮へ

と変容していったのである。

ジャワに成立した王国の性格が研究対象としてとりあげられそれが論ぜられる場合に、一般に二つの典型が認められる。第一は王国の性格を王権維持の構造や支配圏拡大の態様を通して示そうとするもので、多くのジャワ史の研究書が示すように、そこでは王朝の歴史は戦闘集団の制度化（戦闘と遠征と王侯貴族の通婚圏の拡大）とその崩壊（王位継承をめぐる内紛と地方反乱と対抗勢力の台頭）の歴史として示される。あるいは王権維持の構造に着目して、婚姻のネットワークを基礎とする家産官僚制として示される（たとえば Schrieke [1955: 1957]）。第二の典型は、Heine-Geldern によって定式化され [Heine-Geldern 1942], C. Geertz によってあまねく流布された [C. Geertz 1968 ほか] 典型で、王国がそのセンターである王宮によって定義され、王宮が「模範的中心」“Exemplary Center” [Geertz 1968 : 35-43] であったことに力点をおくものである。これが、考察の主たる対象を文化パラダイムにおいていることはいうまでもない。

これら二つの典型は、同一の対象に対してどの局面に注目するのかというアプローチの相違を反映していると考えすることは、一見妥当な理解のように思われる。たしかに、ジャワの王は、一方で、「宇宙の主宰者」[土屋 1982a : 32-52]の意志のこの世における体现者、宇宙的秩序の源泉という理念上の王の完璧性を体现するものであり [S. Moertono 1968; B. Anderson 1972]、他方で、現実の最高権力者としてその権力の維持に腐心するものである（たとえば M. Ricklefs [1974:22 passim], O'Malley [1977:163, 201n-202n]）。そしてこれら二つの要請は、それぞれに困難な要請であるだけでなく、しばしば相矛盾し相互に対立する要請であったから、それがジャワの王権それ自身への脅威となっていたのである。このような王権の在り方に対して、王権の前者の機能に着目すれば先に述べた第二の典型が王・王国の性格として論ぜられ、後者の機能に力点をおけば第一の典型が論ぜられることになる。

しかし、このことをマタラム王朝の歴史にてらして考えれば、実は、マタラムそれ自身が 1755 年の二王国への分裂を決定的な展開点として、戦闘集団から「模範的中心」へと変容し、王宮が「模範的中心」としての役割を自覚的に

演ずることになったといえるであろう。すなわち、マジャパヒト王国の崩壊時（この王国は1294年に成立し1478年頃に滅んだとされる）からマタラム王国の分裂に至る約300年に及ぶ期間のジャワ島中東部は、たえざる戦乱の渦中にあり、この長い期間、王と王権は先ずもって戦争・遠征・内乱と反乱の鎮圧を主たる任務とする戦闘集団として機能していたとみなしうるのである。何よりも顕著であったことは、「模範的中心」として機能すべき王宮が頻繁に破壊ないし放棄されたことである。マタラム成立後からその分裂に至る約180年間においてももっとも長期間にわたって王宮がおかれたのはスラカルタ西方のカルタスラであった（1680～1743）が、この約60年間においても、王宮はスロパティの反乱（1686～1703）、王位継承をめぐる戦乱（1703～1708、1718～1723）、バタヴィアでの中国人虐殺を契機とする大動乱（1740～1751）によって軍事的に脅かされつづけ、ついには反乱軍の手中におちた（1742）のである。

このような過程で18世紀後半以降のジャワの王権の性格を規定することになる二つのことがらが進行していった。第一はマジャパヒト時代までに形成されていたジャワの文化的遺産と伝統が徹底的に破壊されたことである。この破壊（従ってジャワ文化の非連続性）は、イスラムによるヒンドゥ・ジャワ文化の破壊という形で進行すると同時に、否それ以上に、マジャパヒトの故地である東ジャワおよびジャワ王権の富の源泉であるジャワ島北海岸地域・海に向って開かれた港湾拠点（いわゆる Pasisir 〈沿岸〉地帯）の支配権をめぐる恒常的な戦乱状態がイスラム勢力同士の間で作り出されていたことに起因していた。だからこそ、18世紀の後半からマタラム分裂後の各王家で始まる「ジャワ・ルネサンス」（後述）は、文字通り、今や喪失された古の文芸を「復興」するものとして行われたのである。

次に第二のことがらは、王権とオランダの関係に直接にかかわることがらである。それはオランダ（当時においては東インド会社、VOC）が、バタヴィアの周辺部から Pasisir 地域へとその勢力圏を拡大する一方で、中ジャワで繰り広げられる権力抗争の第三の当事者としての役割を次第に強化していったということである。この役割の強化と VOC の勢力圏の拡大とは、いうまでも

なく軌を一にしていた。VOC の軍事力が抗争勢力の一方に加担する（この加担は、通常、抗争勢力のいずれかがバタヴィアに拠点をおく VOC に対して援助を求めることの結果生ずる）というパターンは、アマンクラット 1 世（マタラムの創設者セノパティから数えて第 4 代目の王、在位 1644～1677）の死の直前から開始され、それ以降は、マタラムの王位継承をめぐる内紛と抗争に際しての常態として進展していった。そして、その都度マタラムは VOC に対して膨大な戦時負債を負うことになった。負債はマタラム領土そのものの割譲と農産物の供出と貿易特権の移譲の形をとり、マタラムは自らの富の基盤を次第に喪失していったのである。

VOC がマタラム王権にかかわる政治主体としての役割を強化していくというこの過程は、1755 年のマタラム分裂、殊にその結果としてのジョクジャカルタ王国の創設において一つの頂点を迎えた。そしてこの分裂こそジャワ王権の歴史を画するものであり、また、王権の変容に関して決定的な転回点となった。それは次の二点において画期的であった。第一は、ジョクジャカルタ王家がマタラム王権の委任を受けた VOC と反乱軍のリーダーの間に交わされた条約によって成立したということである。ギヤンティの和議と呼ばれるのがそれであり、条約は 1755 年 2 月スラカルタ近郊のギヤンティにおいて、VOC を代表するスマラン駐在の VOC 北部ジャワ東北沿岸州長官（1748 年以降設置）の Nicolaas Hartingh とスルタン・マンクブミ（Sultan Mangkubumi、後に Sultan Ham-angkubuwana 1 世〔在位 1749～1792〕としてジョクジャカルタ王家の創設者となる）の間で交わされ、ジャワ語とオランダ語で記された。そこでは VOC がマンクブミに対してスルタン・アグン（Sultan Agung、在位 1613～1645）以来のスルタン称号を授与すること、マタラム王国の所領の半ばを与えること、一方スルタンは年額 1 万リアル（スペイン・ドル）の収入とひきかえに Pasisir を VOC に譲渡すること、また王侯領の首相（^{パティ}Patih）の任命と解任は VOC の同意の下に行うこと、を骨子とする条項がもりこまれていた。さらに両者の会談では、新たにマンクブミの支配下に入る「^{チヤチヤ}世帯」（Cacah）数が 8 万 7050 と定められ、スラカルタ（すなわちマタラム王国からジョクジャカルタ王国をさし引いて形成された王

国)のそれが8万5450と定められ、それぞれの「世帯」数に見合っ^てマタラムの領土は二分された。⁴⁾ このように、ギヤンティ条約においては、VOCこそが王位の称号を賦与し王国の外縁を定義する主体であった。条約締結行為の主体が VOC であること、王国の外縁が明確な可視の数字として確定されたことにおいて、1755年のマタラム分割はジャワの王権がオランダによって創出され・維持されるという時代の幕開けを告げたのである。

第二に重要なことは、この結果、おのおのの王宮と家臣団と領土を有しその所領を近接させる二つの(のちには四つの)王家が中ジャワの南部平原に並存するに至ったということである。現実^ににジョクジャカルタとスラカルタは六十数キロの距離を隔てるにすぎない。これらの王家は、政治的には相互に反目と敵対を繰り返しつつ、また、そのすべての場合にオランダの調停と裁可を仰ぎつつ、そしてそのつど政治的な力をオランダによって剝奪されていった。その結果として、ジャワの戦乱はやみ、王権は「模範的中心」としての機能を特化させていくことになる。それは、王宮を中心とする文化が極限にまで内向的に展開するところにもっともよく示されていた。

以上の状況を約言すれば、それはオランダによってジャワの王権が「封印」される状況であった。それは以下の諸点を意味する。第一はジャワの王権はもはや空間的に拡大する途が閉ざされ戦闘集団としてのポテンシャルティを喪失したこと。第二は各王家の内部と王家の間とを問わず、紛争ないし紛争の危機が生じた場合、オランダはつねに現状を維持する方向(4王家の外縁の固定化)で裁可者として機能したこと。第三はオランダのこの機能は王宮内部ないし王宮間の政治的配置図をオランダが決定する(王位継承者の承認と首相の人事権の掌握がその根幹をなす)方向で、時代の進展とともに強化されたこと。こうして、オランダに反抗する王族は王宮から排除された。図1にかかげる19世紀前半の王位の頻繁な交代ないし在位期間の短さがこのことを明示している。バク・ブオノ6世(在位1823~1830)のように、ジャワから追放される王も現れた。第四は、これらの過程においてジャワとオランダの彼我の軍事力の差はますますあらわとなり、その物理的強制力と複数の王家の並存という状況がこの「封

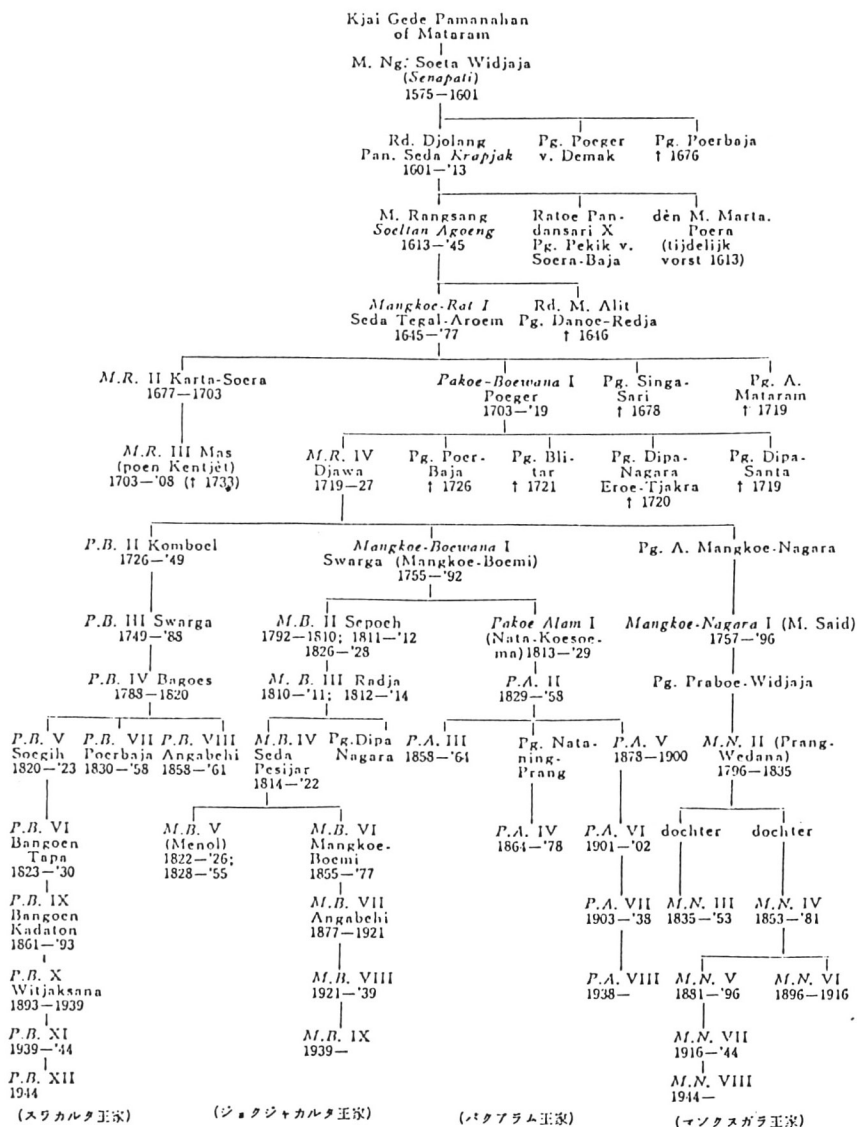


図1 マタラム王国の系統図

印」を保障したこと。

すなわち、ジャワの王権は 18 世紀半ば以降政治権力としてはますます無力化し、政治権力（なにかんづく戦闘集団としての機能）としてまさに無力であることにおいて、その存続を保証されてきたのである。1830 年から 1849 年までの長期間アンボン島に流刑されたパク・ブオノ 6 世の配所での生活を綴った『バングン・トボの書』に明瞭に認められるように、オランダはジャワとジャワの王権を囲繞して天地に満ちていた。そして、配所からはるかに「遠い」(adoh) スラカルタの都を「思慕する」(oneng) 王の眼は、そのまま、もはや歴史的に喪失されたジャワの王権の栄光を追憶する末期の眼であったのである。⁵⁾

3 王宮文化と「ジャワ学」

ジャワの王権は以上に概観したように政治的にはますます無力化していったが、その過程は王権が文化的活動に特化し、文化の唯一のセンターとしての王宮の機能が異様に肥大化していく過程であった。先に述べた本稿の視角からみて重要なのは次の二点である。

第一は「ジャワ・ルネサンス」の競合ということがらである。マタラムの分裂と分立した王国の外縁の固定化によりジャワの中東部における大規模な戦乱の時代は終息した。その後、1810 年からほぼ 20 年間、パクアラム家の分立とディボネゴロ戦争 (1825～1830) によって中ジャワは再び騒擾の渦中に入ったが、1830 年以降は先に述べた「封印」の状況が一層進展し、ジャワは文字通り「静謐」の時代を迎えた。このことと軌を一にして、1750 年代後半から 1800 年代初頭に至る半世紀間と 1830 年以降のジャワの各王国では、王宮文化が開花した。そこでは各々の王宮がそれぞれに「模範的中心」として機能することになったが、そこで意図されたのは「古のジャワの理想型」を再生させることであった。「古のジャワ」の再生とは、マジャパヒトの崩壊以降の戦乱の時代、ことにスルタン・アグンの遠征をアンチクライマックスとして破壊された文化的伝統を、ジャワ文化の正統な「かたち」として再現してみせることであった。この場合に顕著であったことは、複数の王宮すなわち複数の「模範的中心」が

並存し、しかも、これらの王宮間をめぐる情報の流通がますます頻繁になることによって、文化の様式が競合的に創出されるという状況がもたらされていたことである。⁶⁾ この競合は様式の細部における微妙な差異として示され、この差異は時とともに進展した。

18世紀後半以降のジャワの王権は、このように、それぞれが「ジャワ文化の再生」の担い手であることを主張し、おのおのが「模範的中心」の創出をこころみたのである。それは、政治権力が無力化するのにあいともなって王宮文化が内展していくことを意味していた。

各王宮はそれぞれに「真正」「asli」な様式を作り出した。それは、踊り(beksa)、歌謡(tembang)、ワヤン(ワヤン人形の形姿とその演出)、家臣団の衣裳、王宮儀礼のフォーム、パティックの紋様と色調等、およそ人間集団の観念と心理とが表出されるすべての領域に及んでいった。この中で「模範的中心」としての王宮の正統性を証する上でもっとも顕著であったのは、言語による秘義の創出、すなわち「年代記」(babad)や「物語」(sèrat)を作成するという営為であった。これらは18世紀の後半以降各王宮で数多く記され、それぞれに王家と王宮にとって「聖なる遺産」(pusaka)となった。「ジャワ・ルネサンス」はこのような文芸活動によってその頂点をきわめたのである。この時代からは、ヨソディプロやロンゴワルシトやジャエングラットのような「^{プジャヤンガ}宮廷詩人」(pujangga)が生まれ、「古のジャワ」を言語活動において再生する営為の中心的役割を担ったのである。そして、「模範的中心」としての王宮の存在を最終的に保証していたのは、ジャワ語という言語空間であり、18世紀以降のジャワ語の展開のうちに、「範型」としての王宮、従ってこの王宮に求心的に形成されることとなる支配の内向性ということがらは、もっとも見事に制度化されていったのである。ここにいうジャワ語の展開とは敬語体系の著しい内展、すなわち、クロモという「優雅なジャワ語」とンゴコという「粗野なジャワ語」の二重性が話言葉のすべての領域で間断なく意識され、この二重性が機能することを意味している。ある特定のレベルのジャワ語をある特定の局面で適切に選択してそれを誤りなく用いること、また、その特定のジャワ語が特定の所作(表情、身振り)

を自ずからに規定する（言語と所作が一つになる）こと、それが話し言葉としてのジャワ語の特性である。そして、使用可能なものとしてストックされた言語レベルが多岐に及んでいるほど、その言語空間は王宮に近く（「優雅」である）、そのストックが乏しいほど王宮から遠い（「粗野」である）という了解が成立している。この意味で、「模範的中心」としての王宮は先ずもってジャワ語の言語空間の中心であった。⁷⁾そこでは、「ジャワ人になる」とは、ジャワ語を正しく使えるようになることと同義である、とされたのである [H. Geertz 1961 : 105]。

このようなジャワ語のあり方とくにクロモは、すぐれて歴史的に形成されたものであり、きわめて人工的であったといえることができる。それは、宮中言語として生れ、「年代記」等の書き言葉の中で展開し、ワヤン劇の上演と官僚制の浸透にともなって王宮外へとひろがり、さらに、19世紀末以降は、西欧的教育制度の成立にともなってジャワ語の教科書と教師によって制度的に担われた。ジャワ語の言語空間の成立は、このように、18世紀以降のジャワの王権の変容と直接にかかわっていたばかりでなく、実は植民地政府の施策とも切り離しがたく結びついていたのである。⁸⁾

ジャワ王権の変容を植民地国家およびナショナリズムとの関係にてらしてみるときに第二に重要なことは、19世紀以降次第に制度化されていくオランダアカデミズムの役割である。約言すれば、ジャワの言語と文化と歴史を対象として展開されたオランダアカデミズム（それは「ジャワ学」Javanologie と総称される）の成果こそ、ジャワの王権とナショナリズムとの関係のあり方を規定する連結環の役割を果たしたのである。「ジャワ学」の成立とその展開の様相について筆者はすでに別に論じた [土屋 1984 a] が、その要点を略述すれば次のようになるだろう。

(1) 「ジャワ学」はジャワ語辞典の編纂事業から始まる。すべてのジャワ語が蒐集されその一つ一つがオランダ語によって意味を与えられ定義されるという辞典の編纂事業は「ジャワ学」の性格をもっとも良く示している。すなわち、「発見し・蒐集し・整理分類し・解義する」という知的行為を制度化していく

ことである。これらの成果はいうまでもなくオランダ語によって公表され、広く公開され、オランダ語という窓口さえ通れば、何人でもその成果に接近しうる。このようにして「ジャワ学」の伝統が形成されていくのである。このような「ジャワ学」の中でジャワ学者がもっとも情熱を注いだのは、ほかならぬジャワ古典古代の歴史・言語・文化の研究分野であった。「ジャワ学」とは基本的にジャワ古典研究であった。すなわち、18世紀以降のジャワの王権が「古のジャワ」を再生するのとまさしく対応して、「ジャワ学」は「古のジャワ」をまったく別のパラダイムにおいて解義し説明しようとしたのである。

(2) このことは、「ジャワ・ルネサンス」の担い手である王宮とプジャンガが、ジャワ学にとってもっとも貴重な研究対象であったということの意味している。それまで、王宮はジャワ語の書き言葉の世界の排他的な主宰者であり、とくに、文字を書き記すという行為に直接関与するプジャンガはその世界の伝統の排他的な継承者であった。彼らは王をパトロンとし王と王国の故事来歴を顕賞する物語の創出者であり、現実の王国と物語の王国とは一つに重ね合わされていたがゆえに、物語を創出するというこの行為は、宇宙の秘蹟に通じ人の世の定めや行く末を透視しうる「聖なる力」の発現としてみなされた。このようなジャワの知の世界こそ、「ジャワ学」の知的関心をやみがたく喚起するものであった。19世紀半ば以降の「ジャワ学」の展開の過程に認められるのは、プジャンガにとってのパトロンが王と「ジャワ学」の碩学の二重になる過程、かくしてプジャンガが「ジャワ学」にとってのインフォーマントと化していく過程である。この過程の前提をなしたのがオランダ対ジャワの王権の政治的・経済的な優位の差が一層拡大していくという状況であったことは、いうまでもない。この過程で、ジャワ語を定義し（辞典の編纂）ジャワ史を再現し（碑文研究、古ジャワ語研究）ジャワ文化の輪郭を描く（年代記研究、ワヤン研究、儀礼研究）というような知的活動のイニシアチブは、徐々に、「ジャワ学」の下へ移行していった。この過程はまたオランダ本国で「ジャワ学」の講座が設置され研究機関と学術研究誌が作られて、ジャワ学者の調達と学の伝統が形成されていく過程であった。このような圧倒的な制度化が進行する過程で、ジャワの秘義の

世界・その知の伝統はあたかもガラス箱の中に収められるようにして、オランダ（その中核としてライデン大学）へ移行していくのである。

(3) このことは、ジャワの王宮が秘義の主宰者であるところか、西欧近代知性の隈なく明るい光に照射され解義されるということを意味している。「王宮が博物館と化す」という状況、「プジャンガのジャワ古典についての知識の当否がジャワ学者によって判断される」という「無慙」な状況が出現したのである。19世紀末をもってジャワのプジャンガの伝統が途絶えたということは、上のような状況と直接にかかわっていたのである。この状況がさらに進展するとジャワ人の中から「ジャワ学」の伝統に直接参入する者が出現する。彼らはオランダ人学者を師としてライデン大学に学び、その成果をオランダ語で発表して学位を得る、という道程を歩む者たちである。現在なお続くこの状況は今世紀になって開始されるのであるが、ここにこそ、19世紀以降制度化されていく「ジャワ学」の強靱性が示されているのである。

4 「失われた王国」の遺産目録

ナショナリズムとジャワの王権の関係は、以上に概観してきたことがらの帰結として、次のようにまとめることができる。

第一は、18世紀以降のジャワの王権がたどった道程の中に明示されているように、王権そのものが複数となって並存・競合してきたことの帰結として、ジャワそれ自身が一つの観念によって収斂していくべき現実のセンターを完全に喪失していたということである。

現実の王権のその何れもが政治的に無力化しオランダによって「封印」されるという状況は19世紀半ば迄に完成していた。ディボネゴロ戦争の終結（1830年）が、ジャワの王権の物理的潜在力の最後の表明であり、それ以降ナショナリズムが誕生する迄の約80年間、ジャワは名実ともに「静謐」の時代を迎えていたのである。ジャワであれこれの「救世主運動」が散発的に発生するのは、ディボネゴロ戦争以降のことであるが、これらが何れも現実の王権と断絶したところで発生する「千年王国運動」であったこと、すなわち、「失われた王国」

の再生をめざすものであったこと〔土屋 1971 : 247-249〕は、ジャワの王権の潜在力の喪失という状況を見事に示していたのである。

第二は、ジャワの王権が政治的に無力化するのと軌を一にして文化的活動に特化したことの結果として、ジャワ語の言語空間が異様に濃密化したことである。それは、ジャワ語が跪拝の構造を制度化していくことを意味したが、それとともに、植民地権力がこの構造を支えること——典型的に「ホルマット制」〔Sutherland 1979〕の進展とジャワ語教育の拡大——を意味していた。「世界でもっとも温和なジャワ人」というクリシェの成立する根底にあったのは、このようなジャワ語の機能であったといえるだろう。ジャワでナショナリズムが誕生するのとジャワで二重言語状況（オランダ語とジャワ語もしくはマレー語とジャワ語）が成立するのが軌を一にしているのは、まさにこのようなジャワ語の言語空間のつのりゆく重さということがらと深くかかわっていた。ジャワ語以外の何らかの言語によってジャワ語が対象化される時——すなわち、ジャワ語の世界に住む人々のあいだで新しい概念と心理とが共有される時——ジャワ語の重さとは、現実の王宮をセンターとしてそこに収斂する言語空間の重さと、現実の植民地支配の重さとの二重の重さとして意識されていた。⁹⁾ ジャワ人のナショナリストにとって、ジャワ語に代えてマレー語（インドネシア語）を用いるということは、たんに彼らの聴衆（現実の聴衆と想像された聴衆とを問わず）がジャワ語圏の外にまで広がっていたということだけでなく、ジャワ語の世界からの解放・ジャワ語の言語空間をみだす秩序からの解放が、植民地的秩序に拮抗する新しい秩序・対抗秩序を創出するために必須のことがらであったからである。

第三は、「ジャワ学」の成果が、ナショナリストにとって「失われた王国」の遺産目録・財産目録として機能した、ということである。「ジャワ学」とナショナリストの関係を考える上で重要なことは、「ジャワ学」がジャワの書き言葉の世界・王宮の大伝統を研究対象として成立していたこと、および、その成果がオランダ語によって公開され蓄積されていったことである。すなわち、ジャワ文化の伝統の正統なかたちが、ジャワ語以外の言語によって徹底的に対

象化されたのである。このことは既に述べた通り、オランダ語という窓口を通れば、何人でもその成果に接近しうること、宮中の秘義の世界を目のあたりにしうることを意味していた。ところでジャワ人の中で、オランダ語とジャワ語の二重言語の世界に生きるようになる最初の世代は、19世紀末から今世紀初めにかけて登場してくる。彼らは、オランダ語の文書を理解し作成しうる人々であり、その中核に存在したのは、植民地官僚制の中に調達されていたエリート、すなわち、何れの王家であれマタラム王国の系譜につながる王侯貴族・家臣団（プライイ層）の家系の出身者であった。この集団こそジャワのナショナリストを生み出す供給源であった [Nagazumi 1972]。

彼らにとって、オランダ語で解義され整序されたジャワ文化、殊に古典古代の文化は、現実の政治的に無力な王権とは全く別の「失われた王国」の理想型を再編成するための格好の「目録」であった。アカデミズムの成果は「世俗化」されて、ナショナリストの意のままに取捨選択され組み替えられることになる。こうして、「栄光の過去」と「黄金の時代」が自在に復原され、ナショナリストの描き出す文脈——なかんずく、植民地的秩序に拮抗する新しい秩序を構築するという文脈——の中に定置されることになる。「ジャワ学」がナショナリストにとって「遺産目録」・「財産目録」となるとは、このような状況を意味したのである（そして、このような編成替えにもっとも成功したナショナリストこそ、タマン・シスワ運動を創出した人々であった [土屋 1982a]）。

Ⅱ ジャワの文化変容

以上に概観した王権の変容は、ジャワ（ことにジャワ語の言語空間）が、「ジャワ学」によってであれナショナリストによってであれ、ジャワ以外のものによって対象化される、ということがらと密接にかかわっていた。この過程をひきおこす直接の契機となったのは、「ジャワ学」の展開や二重言語状況の出現であったが、それらをもたらし背景にあったのは、いうまでもなく、19世紀半ばから進行して20世紀初めには完成する植民地国家——バタヴィアを政治・経

済・行政のセンターとし植民地の行政区画に沿ってサブ・センター以下の官僚ヒエラルキーが形成され、これらの植民地都市（もしくは都市内部の植民地空間）を結ぶネットワークが十全に機能することによって維持される領域支配の体制——であり、この国家を支えるべく創出された近代的西欧的教育制度（この制度に沿って人々はバタヴィアに収斂するヒエラルキーを経験する、すなわち「新しい巡礼圏」[Anderson 1983: 104-128] がそこに成立する）や交通網・情報網の拡大と緊密化であった。¹⁰⁾ この中から、人々がジャワ語圏の世界の外（典型的にバタヴィア）へ出て新しい世界を目にし新しい情報を得る——なかんずくオランダ語を通じて世界大の情報を得る——という状況・情報が開放系になるという状況が始まるのであり、それがやがてナショナリズムを生み出す直接の契機となるのである。

しかしこの過程はたんにナショナリズムを生み出しただけではない。そこで進行していたのはジャワ島におけるゆるやかな社会変化であり、その変化にもなって生れてきた新しい文化状況であった。そこで重要なことは、これらの変化が20世紀以降に始まるナショナリズムに先行して生じていたこと、なおかつ、ナショナリズムが「インドネシア」という「時代精神」を鼓吹し領導していくに際して、「インドネシア」文化を生み出す統合力を草の根のレベルで作りあげていったことである。

ここにいう新しい文化状況とは、19世紀後半から出現する大衆文学や民衆音楽であり、それらは、植民地国家の文化政策やナショナリストが追究する文化活動（各種政党の出版活動、宗教改革、教育運動、集会と討論、これらを通じての政治的動員のレベルを高めること）とは、直接的には無縁のままに、ジャワ島をはじめとする植民地社会各地で原住民社会それ自身を消費市場として自生的に展開していった大衆文化であった。そのゆえにこそ、ナショナリズムが前進と後退、高揚と退潮を繰り返すなかで、これらの文化現象はそれ自身一つの社会過程として自己増殖的に進行し、「インドネシア」民族文化の形成——「ジャワ」から「インドネシア」への変容——に対して一貫して潜在的な統合力として作用しつづけた。

以下にこの新しい状況を概観してみよう。

1 「メスティーソ的文化圏」の成立

19世紀の半ば以降、ジャワではジャワ族の生活空間であると否とにかかわりなく、バタヴィア、バンドゥン、スマラン、スラバヤなどの植民地都市を中心にして、次のような社会変化が共通に認められるようになる。第一はジャワのオランダ人社会が「純正」化することである。¹¹⁾「純正」化とは、オランダ本国の市民社会がそのままジャワに再現されるという社会現象であり、その前提をなしたのは19世紀前半以降植民地国家の制度化の進行が18世紀末迄の VOC の時代に脆弱化していた植民地と本国の紐帯を強化させる政策と軌を一にして進行していったことである [C. Day 1904]。植民地経営にかかわる本国政府の管轄権が拡大するのにもなって、VOC 時代に形成されていたクレオール社会のネットワーク（これは VOC にかかわる門閥・閥閥支配の存在を基礎として成立していた）はその機能を停止して、本国から植民地行政官として派遣される官吏のネットワークにとって代わられた。こうして、VOC 時代の「現地化」した生活様式（その典型として現地妻〈ニヤイ〉の存在と子弟の養育を預かる乳母〈バブ〉の存在）に代わって西欧市民社会の生活様式が植民地に根付くようになった。この傾向は、1870年のスエズ運河開通以降、家族を同行する官吏や企業家が漸増するのに従って加速された。こうして、新しい住宅街（並木と広い前庭と広い応接室）と教会、子弟のための学校、各種のクラブ、乗馬やテニス、郊外の保養地のような生活空間が植民地都市に出現し始めた。¹²⁾

第二はオランダ市民社会が形成されるのにもなって、^{ユーレシアン}混血集団 (Eurasian) がその分だけ「現地化」したことである。彼らの数は19世紀中を通じて増え続ける一方で、¹³⁾ 19世紀中の行政改革によって植民地官吏への途を閉ざされたことから、次第に植民地都市の外へと生活空間を拡大していった。その顕著な例は、民間プランターとしてプランテーションの経営に当るものであり、それは彼らがジャワの農村地域に拡散するとともに、そこで VOC 時代以来の「現地化」した生活様式を維持し続けることを意味した。要約すれば、ユーレシアン

は19世紀中を通じてジャワの全域に遍在するようになるのである。第三は、プラナカン（ジャワ生れの華人）の数が増大するとともに、その「現地化」の過程が19世紀の半ばまでには著しく進行していたことである。プラナカンの「現地化」の標識は、マレー語だけを解する華人が増大したこと、および、大小の流通機構の毛細管に至るまで彼らが浸透していったことである。これは華人の同化現象であるとともに、華人が先のユーレシアンと同じくジャワに遍在するようになったことを示している。第四は、いうまでもなく、ジャワの上層階層、とくにプリアイの生活様式が、オランダ社会が「純正」化するのにもなって次第に西欧化していったことである。この過程は、原住民エリート層の間にオランダ語とジャワ語という二重言語状況が進展する過程と軌を一にしていたといつてよい。

このような社会変化の一つの重要な帰結は、植民地国家の中核であるジャワ島（とくに都市部）が、新しい生活空間を創出し拡大していく点でフロンティアとして機能するようになったことである。それはたんに、中東部ジャワのジャワ語圏の生活空間から離れて植民地都市に移り住み（もしくは各地で植民地官僚制にくみこまれて）新しい生活を経験するようになったジャワ人にとってのみフロンティアとなったのではない。ジャワ島にめぐらされていく官僚制度とジャワ島の各地で拡大していく植民地都市とは、ジャワ人のみならずオランダ領東インドのすべての領域の人々（とりわけエリート層）にとってフロンティアであった。同じく、オランダ人、ユーレシアン、華人のいずれにとってもジャワ島はフロンティアとなったのである。このような状況は20世紀以降さらに進行するのであるが、このフロンティアでは、ファーニバルのいう「複合社会」[Furnivall 1939: 446-469]が固定的に成立していたのでは決してない。むしろ逆に、そこでは、これらのすべての社会集団（少くとも複数の社会集団）が共有する文化現象が現われ始めていたことが注目される。19世紀の半ば頃からジャワの植民地都市で出現するこのような文化現象は「メスティーソ的文化現象」と名付けることができよう。ここに「メスティーソ的文化現象」とは、文化の市場圏（生産者と消費者）においても文化の形式と内容においても、それがあ

特定の社会集団・文化集団に完全に帰属することがないゆえに、複数の集団によって共有・分有される文化状況である。ジャワの場合、この文化現象に共通するのは、(いずれの集団からみてもその集団の外の世界への) エキゾチシズム (およびその系としてのロマンチシズムと「怪奇趣味」)、メランコリー、センチメンタリズム等の心理であり、その心理の中核にあるのはノスタルジアである。一方、その形式を約言すれば、それはクリシェの成立する世界である。

併せて注目しうるのは、これらの文化現象が市場原理にもとづいて生み出され発展していったこと、そして、その発展の結果、やがて原住民社会そのものを最大の消費市場とすることになったということである。この過程で、「メスティーソ的文化現象」はその「メスティーソ性」から離脱して「多様なインドネシア社会」の全域で消費可能な、従って「多様なインドネシア社会」の統合力として働らく「民族文化」としての性格を顕著に示すようになる。それが統合力たりえたのは、それが「マスカルチャー」として展開していったということと相並んで、これらの文化現象がその起源において、「メスティーソ的」であったということと密接にかかわっていたのである。

これらの「メスティーソ的文化現象」の成立と展開の具体相はどのようなものであったのか。それについて各論を展開することは本稿の範囲を越えることなので、さし当りその見取り図だけを以下に描いておこう。

2 新しい文化現象

ジャワにおける「メスティーソ的文化現象」として注目しうるのは、次の四つの文化領域である。第一は、(1)新しい様式の風景画の成立であり、第二は、(2)クロンチョン (Kroncong) 音楽の拡大であり、第三は、(3)マレー語大衆小説の成立であり、第四は、これら(1)から(3)の領域を統合するものとしての大衆演劇の成立と展開である。

(1) この領域は「美しき東インド」の風景画と総称される。そこで描かれるのは、青空をながれる雲、火山、椰子の樹、水田と水牛、笛を吹く少年、赤いショール、波立つ海岸線など、雨に洗われ日にかがやく「うるわしの熱帯」と

美化された田園風景である。その色調は淡い褐色と黄色とを基調としている。このような甘美な風景画が「静寂と平和と歓喜にみちたパラダイス」[C. Holt 1967 : 195] を表現していることはいうまでもない。そこでは、熱帯の植民地は「うるわしの東インド」として再構成されているのであるが、重要なことはこのようにして風景が対象化されてある輪郭を与えられていること、風景がクリシェの風景として再構成されているということである。

このような風景画は植民地社会のオランダ人の邸宅の応接室の壁を飾るところから開始されたという。植民地国家の制度化とオランダ人社会の「純正」化の結果、ジャワでの滞在が「任期をまとうする」ことであるというオランダ人家庭が増加した [Smail 1971 : 281-283] が、彼らは任期中に応接室を飾った風景画を帰国に際して故国オランダへ持ち帰った。それらの風景画は「彼らのノスタルジア、彼らのものであってなおかつ彼らのものにあらざる土地へのノスタルジア」[C. Holt 1967 : 195] をかきたてるものであったからである。当初それらを制作したのはオランダ人の風景画家であったが、今世紀に入ると A. Surio Subroto (1878~1941), Mas Pringadie (c.1875~c.1936), Basuki Abdullah (1915~) のように同じ手法で風景画を描くジャワ人の職業画家が現れてくる。それとともに、「美しき東インド」の風景画はオランダ人社会を越えて植民地の各社会集団の間に受容されるようになる。さらに重要なことは、このクリシェの風景が「大衆市場」に浸透して（今日あまねく眼にするような）みやげ細工のデザインやバティックの壁掛けの中にくり返し現れるようになることである。

これらのことは、各々の社会集団・文化集団にとってそれぞれに「彼らのものであってなおかつ彼らのものにあらざる世界」の風景がその「メスティーソ性」を離脱してただ一つの社会集団のもとへと帰属していくことを示している。すなわち「うるわしの熱帯」は「うるわしの祖国」へと変容していくのである。こうして風景が対象化されそれがクリシェとして再構成され、次いで、その風景に「国籍」が与えられていく過程を、われわれは植民地の風景画の成立と展開のうちに認めることができるのである。そして、ここにいう「ただ一つの社

会集団」ないし「祖国」ないし「国籍」とは、〈インドネシア〉という以外に命名しようのないものであった。¹⁴⁾

(2) 上に述べた風景画とその起源と展開の様相を異にししながら、きわめて類似した文脈において定置しうるのがクロンチョン音楽である。¹⁵⁾ 今日のインドネシアで代表的な(唯一の)国民音楽としてあまねくゆきわたっているクロンチョン音楽がジャワの各地にひろがるのも19世紀の後半以降のことであった。クロンチョンの起源は「ポルトガル系」住民(実際は、もともと南アジアとインドネシア各地から奴隷として調達され、のちにキリスト教に改宗した「解放奴隷」*Mardijkers*を主体としていた)の伝統音楽である。1661年以降「ポルトガル系」住民はバタヴィア北東部のトゥグ地域に集住させられていたが、彼らは本来「子守唄」および「舟曳き唄」として歌われていたポルトガル音楽にアジア諸地域の音楽が混在してできたクロンチョン音楽(これはポルトガルでは「ムーア人の音楽」という意味で「モリッコ音楽」とも呼ばれた)を遠い先祖と自分たちをつなげるよすがとしてひき語り伝えてきた。クロンチョン・ギターが細かくリズムを刻む上にもうくセンチメンタルな旋律が流れるのがこの音楽の特徴で、ハワイアンのような海洋音楽と共通性をもつ。

19世紀の後半に入るとトゥグ地域と周辺の外界との接触が次第に緊密化し、クロンチョンは「ポルトガル系」住民の文化伝統の枠を越えて他の社会集団に浸透するようになった。この過程でもともとポルトガル語で歌われていたクロンチョンに加えて、マレーの四行詩(パントゥン)やオランダ語で歌われるクロンチョンが作られ、同時に、歌詞と旋律の双方においてノスタルジックな情感を誘う基調が定着していった。クロンチョンはその後恋歌として歌われることによって兵営から兵営へ港から港へと、ジャワのみならずインドネシアの各地に拡大していった。なかでもトゥグからわずか2kmの海岸に、1870年代にはタンジュンプリオクの大港湾が完成し、インドネシアの各地を結ぶ航路の一大センターとなったことがクロンチョンが各地に浸透していく上で大きな要因となった。

当初クロンチョンはマレー語で歌われたりオランダ語で歌われたり、時には

マレー語とオランダ語の歌詞がかけ合いの形でくり返されたりした（これが恋歌としてのクロンチョンの特徴をもっとも良く示している）が、この音楽をもっとも好んだのはほかならぬユーレシアン¹⁶の社会集団であり、彼らはクロンチョンこそ彼ら自身の音楽であると感じていたという。

以上にうかがえるようにクロンチョンもまた先の絵画の様式と同様に、その旋律がどこにも所属しないことによって多数の社会集団の間に広まっていったといえよう。この無所属性（ユーレシアンにもっとも愛好されたことがそのことを明示している）と、それにもかかわらずその歌詞と旋律がロマンチズムやノスタルジアをかきたてたことは、19世紀ジャワの新たな文化状況、アモルフで「メスティーソ¹⁷的」な文化状況をみごとに示している。そこでは、クロンチョンの旋律によっておのおのの人間が、たとえうたかたにせよ、いずこかに存在するやすらぎの地への「あこがれ」をかきたてる、という心象風景が成立していたといえよう。事実クロンチョンは「古きよき時代」を回想するよすがとして、（インドネシアでもオランダでも日本でも）今日なお演奏されているのである（その格好の例は各地の「インドネシア・レストラン」のバック・ミュージックである）。

しかるに時代が下るほどにクロンチョン音楽は民族性を強めていく。ジャワ史上、広く公然と歌われる最初の恋歌であったことによって巨大な潜在的市場を獲得した¹⁸（20世紀のインドネシア民族文学の主要なテーマが「封建的」結婚制度からの解放と「男女の真の愛」の覚醒であったこと¹⁹に注意してほしい）クロンチョンは、今世紀以降、Ismail Marzuki (1914～1958)¹⁸や Gesang Martohartono (1917～)¹⁹に代表されるすぐれた作曲家と数々の名曲を生み出す一方、年ごとのコンクールを通じて有名歌手や楽団 (orkes kroncong) を背出し、一方、ジャワ風にアレンジされたクロンチョン（ジャワ語で歌われガメランのリズムがビートに加えられる）、ジャワ・クロンチョン (Kroncong Jawa) が現われることによってジョクジャカルタやスラカルタのようなジャワ語圏の中心部にまで深く浸透していった。1925年のラジオ放送の開始はそれをさらに加速した [Kementerian Penerangan 1953; Armijn Pané 1953]。この過程は民衆音楽の発展というそれ自身自立した社会過程として進行したのであり、ナショナリズム

の高揚や退潮とは直接に関連することはなかった。それがナショナリズムに結びつくのは独立と革命の時代であり、1945年以降には数多くのクロンション革命歌 (Kroncong Revolusi) や愛国歌 (Kroncong Patriot) がうみ出された。そのことは20世紀の半ばまでにクロンションが、インドネシアの全域で流通可能な殆んど唯一の音楽形式に発展していたということを示している。このような過程は先の風景画よりもさらに端的に、ある文化現象がその「メスティーソ性」・無所属性を脱して「国籍」を得るに至る過程を明示している。²⁰⁾

(3) 19世紀の後半から始まるもう一つの顕著な社会現象は、マレー語の日常会話体で書かれた大衆向きの小説が出版市場に登場したことである。²¹⁾ それまでジャワの出版市場はオランダから輸入される出版物を除けばオランダ語の各種新聞に限られていた。マレー語大衆小説という市場を開拓してその出版元になったのはプラナカン集団であったが、それは彼らがジャワの全域に遍在していることにともなって出版・販売の市場はジャワ全土に広がっていた。その主たる読者層はもはや中国語を理解しないプラナカンであり、読物の多くは中国起源の歴史物、活劇物、詩などの翻訳ないし翻案であったが、それらがマレー語の書物として刊行されていったことは、この市場に他の文化集団の参入をうながすことになった。すなわち、オランダ人、ユーレシアン、プラナカン、ジャワ人をはじめとする植民地の知識人らによって、単なる翻訳・翻案でなく、ジャワを舞台とした物語がマレー語で創作されて広い読者層を獲得するようになる。これらの物語の内もっとも広く読まれたのは、『ニャイ・ダシマ物語』(1895年)、『ニ・パイナ物語』(1900年)、『ロッシーナ物語』(1903年)のようなニャイを主人公にした被虐性の強い犯罪小説(これらは何れも「実話小説」のスタイルで書かれた。また、毒殺と刺殺への恐怖が全編をつらぬいていた)か『奴隷から王様へ』(1898年)のようなジャワを舞台にした歴史小説であった。²²⁾ このような大衆小説は20世紀に入っても活況を呈し、『紅はこべ』の翻案小説とシャーロックホームズの翻案物などが人気を博し、主人公は民衆のヒーローとなった。一方、『ニャイ・ダシマ物語』のように再三演劇化されたり映画化される(1929年が最初の映画化)とともにそのつど物語が民族化する(たとえば今世紀に入るとニャ

イ・ダシマは『人形の家』のノラのように描きなおされる) 傾向をみせた。²³⁾

これらの大衆小説の伝統は「正統な」民族文学史の中では「マレー・シナ文学」ないし「前インドネシア文芸」としておとしめられ遠ざけられてきた。しかし、「バライ・プスタカ」(1917年の官製「文化文芸局」)の時代に始まって「プジャンガ・バル」(1933年以降に刊行される文芸誌)で開花する正統インドネシア文学のはるか以前に市場に現われた大衆小説こそ、20世紀を通じて、実はもっとも広く民衆に読まれかつ語り伝えられてきた文芸であった。とくに小冊子で安価なことがこの文芸市場の継続性と市場圏の拡大を支えていた。

19世紀の「メスティーソ的文化的現象」として出現したこれらの大衆小説の世界は、20世紀になって一方でそれ自身の展開過程を辿りつつ、他方ではナショナリズムの「時代精神」を吸収し、この「時代精神」と手を結ぶようになる。先に述べた『ニャイ・ダシマ物語』の変化や『紅はこべ』の一連の翻案物の主人公が反植民地闘争の伝説的闘士であるタン・マラカになぞらえられる²⁴⁾のは、その顕著な例である。ここにも「メスティーソ的」世界からの離脱とその民族化という共通の過程が認められるのである。そしてさらに時代が下って1970年代の末になると、これらの「ニャイ」物語は、プラムディアというインドネシア国民文学のもっとも正統な担い手の文学世界の中に、それらが初めて出版市場に現れた時からほぼ1世紀を経たのちに、生き生きとよみがえることになるのである。²⁵⁾

(4) 大衆演劇として19世紀末に成立し、それ以降、以上の各分野の文化現象を統合的に表現することによってそれらの拡大に寄与したのが、コメディ・スタンブル(Komedi Stambul)というユニークな劇団であった。この劇団は1891年にスラバヤで結成されたが、その中心人物はAugust MahieuというユーレシアンとYap Goan Tayというスラバヤ生れのプラナカンであった[Salmon 1981: 40]。

この劇団名スタンブルがイスタンブールに由来するといわれているように、そこで舞台化されたのはエキゾチズムにみちた「国籍不明」の世界であった。Mahieuらはサンディワラ(インドネシア各地の民衆劇)とフランスの喜劇を融合

し、アラブ、トルコ、ベルシャなどに由来するおよそエキゾチックな舞台装置、衣裳、テーマを合体させた演劇様式を作り出した。演じ物も「白雪姫」や「眠り姫」のような西欧の妖精物語から始まってシェークスピアの悲劇、中国の活劇、ジャワの物語、『ニャイ・ダンマ』のような大衆小説などを自由自在にアレンジしていた [Armijn Pané 1953: 8-10]。このような様式こそ、複数の文化集団からなる観衆に受容される条件であり、この劇団は、ジャワの各地、ことに沿岸沿いにひろがるバタヴィア、スマラン、スラバヤのような植民地都市を興行して歩き大きな人気を博したという。

舞台で用いられた言語はマレー語であったが、そこにはしばしばオランダ語が混入した。ところで、このような「国籍不明」の極彩色の舞台上で、舞台の情感を高めたり場面の展開を促したりするためのバック・ミュージックとして用いられたのが、ほかならぬクロンチョンの旋律であり、ギター、ヴァイオリン、フルート、打楽器、ピアノなどを伴奏にしてクロンチョンの歌が歌われた。このようにしてコメディ・スタンプルの舞台から生れ流布していったクロンチョンは、とくにクロンチョン・スタンプルと称されている。F. Cramer のような有名な舞台俳優は、しばしば人気のあるクロンチョン歌手であった [Salmon 1981: 129]。

このようにユーレシアンとプラナカンを担い手として始まったコメディ・スタンプルはクロンチョン音楽をジャワ各地に広める役割を果たすとともに、その興行的成功は同種の劇団 (Komedi Opera Stambul, Opera Permata Stambul, Wilhelmina, Sinar Bintang Hindia, Indra Bangsawan, Opera Bangsawan など。その興行主の多くはプラナカンであった [C. Salmon 1981: 40]) がひき続いてジャワ各地で設立される契機となった。さらにまた、このような民衆向けの劇団興行の活況の中から、1911年にスラバヤで設立されて東ジャワに広まったルドルク・ブスタン (Ludruk Bestan) [Ki S. Ajiwongsokusumo 1972] や、1926年にスラカルタで生れその後ジョクジャカルタを中心にして発展したケトブラック (Ketoprak) [Asti Dipodiningrat 1972] や、独立後ケトブラックの系譜をひいて成立し現在もっとも人気のあるスリムラット (Srimulat、この名称は設立者の名前

に由来、彼女は1905年生れで1968年没) [Kristanto 1983] のような、ジャワ人を主体とする民衆演劇の世界が生れ育っていくのである。

おわりに

本稿の冒頭で述べた通り、国民国家インドネシアが「蘭領東インド」というオランダ植民地国家の編成とインドネシア・ナショナリズムの成立展開を両親として誕生したことはいうまでもない。しかし、これらの顕在的な政治統合の過程に先立って、もしくはその背後で進行していたジャワ王権の変容とそれとともなって生じた王宮文化の変容、また、植民地都市空間の社会変化とそれとともなって生じた文化変容の過程は、本稿で概観してきたように、「ジャワ」から「インドネシア」への変化、もしくは、「ジャワ」において「インドネシア」が成立する過程にとって、それぞれに重要な役割を果たしてきた。そこで認められるのは、ジャワ語圏の世界が文化的閉塞状況の極点にまで達していたがゆえに、何らかの新しい「世界」が外からもたらされさえすればその「世界」に激しく反応する状態にあったこと、そして、その新しい「世界」とはナショナリズムが「上から」鼓吹し領導する「時代精神」であったばかりでなく、それに先行してひそやかに進行するアモルフな文化現象であった、ということである。こうしてみると、19世紀は「ヤミ」の彼方にあるのでは決してなく、やがて「インドネシア」の統合力として機能する文化現象が成立した時代であり、従って、19世紀と20世紀は「ヤミ」と「ヒカリ」の二項対立・二つの時代の断絶としてでなく、一つの連続した社会過程においてとらえることができるであろう。

本稿の趣旨はこの過程の見取図を描くことであり、それぞれの過程を追究すること、また、ジャワ以外について「インドネシア」が成立する過程を同様の視角から究めることは、今後の課題である。

注

- 1) 本稿は「インドネシアの政治と文化」に関心をもつ筆者がこの数年の間に発表したいいくつかの論考を再考・再検討しながら再構成したものである。とくに本稿に関連するのは[土屋 1982a; 1982b; 1983a; 1983b; 1984a; 1984b]である。またこれらの論考の多くは、1981年以来東南アジア研究センターの社会系が主催してきている「東南アジアシンポジウム」で発表したものがその基礎をなしている。これらのシンポジウムは他にかえがたい知的模索の場を筆者に与えてくれた。
- あわせてまた近年世界の各地で公刊された作品のいくつかが本稿のなるに当って筆者に知的刺激を与えた。その主なものは、[Anderson 1979; 1982; 1983], [Briton de Nijs 1973], [Kornhauser 1978], [Pramoedya A. T. 1980a; 1980b; 1982], [Salmon 1981], [Taylor 1983] である。
- 2) この用語は O. W. Wolters による [Wolters 1982:38-40] が、彼はこの概念の基礎を17世紀初めのマカッサルの王の次の言葉に求めている。
 God has made the earth and the seas, has divided the earth among mankind, and given the sea in common. It is a thing unheard of that anyone should be forbidden to sail the seas.
- 3) ジャワの王権の自己完結的な体系についてはこれまで数多くの議論がなされているが、さし当り [Schrieke 1957], [Geertz 1968], [Murtono 1968], [Anderson 1972], [土屋 1982a] 等を参照。
- 4) ギヤンティ条約とその成立前後の政治状況については [Soekanto 1952], [Ricklefs 1974] に詳しい。
- 5) 19世紀ジャワ文化の中から、この『バンゴン・トボの書』とスラカルタ王家の「最後の宮廷詩人」であったロンゴワルシトの作品をとりあげて、文芸の伝統の解体という観点からすぐれた解説をしたものとして Anthony Day の学位論文がある [Anthony Day 1981]。
 本稿中の adoh, および oneng の語は, dolan「外へ出たい」という語とともに Anthony Day が彼の学位論文のなかで『バンゴン・トボの書』の世界を作り上げているキーワードとして示した語である。
- 6) この競合の状況を示すのは「争そう」と「比べる」という二重の意味をもつ tanding というジャワ語である [A. Day 1981: 87]。
- 7) Selo Soemardjan は、王宮が言語表現の様式性とこれにともなう所作の厳密性において、そこへ足をふみ入れたジャワ人に恐怖感をもたらしことを指摘し [Selo Soemardjan 1962: 25], J. Siegel はジャワ人自身がしばしば「ジャワ語(すなわちクロモのジャワ語)がいかにもつかしいか」ということをなげくの耳にしている [Siegel 1982]。
- 8) ジャワ語についてのこのような議論として [Pigeaud 1967], [Soepomo 1968; 1969], [Anderson 1982] を参照。
- 9) このような状況をきわめてよく伝えるものとして Kartini の書簡集 [Kartini 1911] と Pramoedya の歴史小説 [Pramoedya 1980a 1980b] がある。
- 10) 交通網の拡大とこれにともなう人の移動を示す一つの標識として「オランダ領東インド国営鉄道延長キロ数」と「ジャワ島の旅客延べ数」の概数を示す。以下は Reitsma [1925: 80, 178] をもとに作成したものである。

オランダ領東インド国営鉄道延長キロ数

年次	km	年次	km	年次	km
1878	20	1894	1150	1910	2100
1882	300	1898	1700	1914	2550
1886	650	1902	1900	1918	3600
1890	900	1906	2100	1922	3950

ジャワ島の旅客延べ数

年次	延べ数(万人)	年次	延べ数(万人)
1878	3	1902	1400
1882	150	1906	1800
1886	350	1910	2700
1890	600	1914	4000
1894	550	1918	5150
1898	750	1922	6300

なお郵便・電信網の成立と展開については、[Departemen Perhubungan1980] に詳しい。

- 11) 以下の VOC 社会についての記述は主として Taylor [Taylor 1983] による。
- 12) 1870 年以降 1910 年代初め（すなわちスエズ運河の開通から第一次世界大戦の勃発まで）の時代を「テンボ・ドゥル Tempa Doeloe」（「古きよき時代」）という語で表現して、その時代相を写真集として編んだ Briton de Nijs [Briton de Nijs 1973] の書はこの時代の社会と風俗をいきいきと伝えている。それは一言でいえば植民地国家の形成によってもたらされた「秩序と安寧」の時代であった。「テンボ・ドゥル」とは植民地時代へのノスタルジアを含む語として近年インドネシアでもしばしば用いられるようになっている。典型的な例は、後に述べるクロンチョン音楽のカセット集の表題として用いられる例である。
- 13) Van der Veur の推計によれば [Van der Veur 1955 : 26], ジャワ在住のユーレシアンは 1815 年当時で 1750 人, 1854 年当時で 1 万 4000 人, 1860 年当時で 4 万 4000 人, 1905 年当時で 9 万 5000 人であり, 1930 年当時には 24 万人に達していたという。
- 14) このようなクリシェとして表現された風景が文章表現のうちに定着し, そこに「ジャワの風景」(「うるわしのジャワ」)と「(インドネシアの) 風景」(「うるわしの祖国」)という心象が同時に成立している見事な例は, カルティニの『書簡集』に認められる。これについては土屋 [土屋 1984b] を参照。
- 15) クロンチョン音楽についてはさし当り, Manusama [1919], B. Buys [1921], Kongko [1955], Da França [1970], B. Nieuwenhuys [1973], Kornhauser [1978], Gereja Tugu [1984] などを参照。
- 16) クロンチョンは, 当初「若い娘をかどわかすもの」で風俗をみだすものであるという警戒心 [Armijn Pane 1953 : 23] を一般の社会に生み出したようである。たとえば, Kongko [1955] は夜になると村から村へクロンチョンの愛の歌をひき語りながら巡回する一団についての思い出を記している。それが町や村の少女の心を強くひきつけたのである。
- 17) 例えば白石 [1984] を参照。
- 18) 彼の名は, ジャカルタ芸術センター (Taman Ismail Marzuki) の名称として用いられている。今日なお愛唱される多くのクロンチョンが彼の作曲による。Rayuan Pulau Kelapa (1944), Halo Halo Bandung (1945), Gugur Bunga (1949), Indonesia Pusaka (1947), Oh Angin Sampaikan Salamku (1947) など。
- 19) わが国でも愛唱されている Bengawan Solo (1940) をはじめ, Saputangan (1942), Jembatan Merah (1943) などを作曲した。
- 20) 国歌「インドネシア・ラヤ」(1928 年に Wage Rudolf Supratman によって作詞・作曲) を代表とするナショナリズムの過程で生れた民族歌, 行進曲等がインドネシア全域で受容されていく過程もしくは政府がそれを普及していく過程と, クロンチョンが広がる過程は別の社会過程であるが, 前者の過程に先行してクロンチョンが各地に浸透していたことは, 前者の普及・受容にとって一つの重要な与件であったと思われる。
- 21) 以下の記述は主として Salmon [1981] による。
- 22) これらの作品はすぐれた解説とともに Pramoedya によって「テンボ・ドゥル」の作品集として編まれている [Pramoedya 1982]。
- 23) オリジナル版と 1930 年代の映画化された『ダシマ物語』と 1960 年代の三つの版を比べると,

- このことは明瞭である。それぞれ, [G. Francis 1895], [Palindih 1930?], [Ardan 1965].
- 24) 押川典昭氏の御教示による。
- 25) H. Kommer の *Tjerita Nji Paina* は Pramoedya [1980b] の中のエピソードとしてほとんどそのままの形で用いられている [Pramoedya 1980b: 125-152]。また, Pramoedya の全編を通して重要な登場人物の一人である Nyai Ontosoroh と H. Kommer の *Tjerita Kong Hong Nio*, 1900 の女主人公との間にはあきらかな共通性 (性格と状況設定) がうかがえる。

参考文献

- Adjiwongsokoesoemo, S. 1972 (1979). Nglacak Sejarah Perkembangan Seni Ludruk. In *Javanese Literature Since Independence*, edited by J. J. Ras. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Anderson, Benedict. 1972. The Idea of Power in Javanese Culture. In *Culture and Politics in Indonesia*, edited by Claire Holt. Ithaca: Cornell U. P.
- . 1979. A Time of Darkness and a Time of Light: Transposition in Early Indonesian Nationalist Thought. In *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, edited by Anthony Reid and David Marr. Singapore-Kuala Lumpur-Hong Kong: Heinemann Educational Books.
- . 1982. Politik Bahasa dan Kebudayaan Jawa. *Prisma*. Vol. 11, No. 11. Jakarta.
- . 1983. *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Ardan, S. M. 1965. *Njai Dasima*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Armijn Pane. 1953. *Produksi Film, Tjerita di Indonesia, Perkembangannya sebagai Alat Masjarakat*. Jakarta: Badan Musyawarah Kebudayaan Nasional.
- Breton de Nijs, E. 1973. *Tempo Doeloe, Fotografische Documenten uit het Oude Indie, 1870-1914*. Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- Buys, Brandts J. S. 1921. De Ontwikkelingsmogelijkheden van de muziek op Java. *Jawa*. Vol. 1.
- Day, Anthony. 1981. Meanings of Change in the Poetry of Nineteenth-Century Java. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Day, Clive. 1904 (1966). *The Dutch in Java*. Kuala Lumpur: Oxford U. P.
- Departemen Perhubungan, Direktorat Jenderal Pos dan Telekomunikasi. (ed.) 1980. *Sejarah Pos dan Telekomunikasi di Indonesia*. Vols. 1-5. Jakarta: Dep. Pos dan Telekomunikasi.
- Dipodiningrat, Asti. 1972 (1979). Sejaraha Ketoprak ing Ngayogyakarta. In *Javanese Literature since Independence*, edited by J. J. Ras. The Hague: Martinus Nijhoff.
- França, Antonio Pinto Da. 1970. *Portuguese Influence in Indonesia*. Jakarta: Gunung Agung.
- Francis G. 1895. *Tjerita Njai Dasima*. In *Tempo Doeloe*, edited by Pramoedya Ananta Toer. Jakarta: Hasta Mitra (1982).
- Furnivall J. S. 1939 (1967). *Netherlands India, A Study of Plural Economy*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Geertz, Clifford. 1968. *Islam Observed, Religious Development in Morocco and Indonesia*. New Haven: Yale U. P.
- Geertz, Hildred. 1971. *The Javanese Family, A Study of Kinship and Socialization*. Glencoe: The Free Press.
- Gereja Tugu. (ed.) 1984. *Sejarah Tugu di Wilayah DKI Jaya Jakarta Utara*. Jakarta: Gereja Tugu. (mimeograph).
- Heine-Geldern, Robert. 1942 (1956). *Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia*. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program Data Paper No. 18.

- Holt, Claire. 1967. *Art in Indonesia: Continuities and Change*. Ithaca ; London : Cornell U. P.
- Kartini, R. A. 1911. *Door Duisternis tot Licht*, compiled by J. H. Abendanon. Amsterdam: Gé Nabrink & Zn.
- Kementerian Penerangan, Jawatan Radio Republik Indonesia. (ed.) 1953. *Sejarah Radio di Indonesia*. Jakarta: Kementerian Penerangan.
- Kongko. 1955. Kroncong Jakarta. *Mingguan Nasional*. No. 10-12. Jakarta.
- Kornhauser, Bronia. 1978. In Defence of Kroncong. In *Studies in Indonesian Music*, edited by Margaret J. Kartomi. Center of Southeast Asian Studies, Monash University.
- Kristanto, J. B. 1977 (1983). Srimulat: Kesenian Kota. In *Seni Dalam Masyarakat Indonesia*, edited by Edi Sedyawati and Sapardi Djoko Damono. Jakarta: PT Gramedia.
- Manusama, A. Th. 1919. *Krontjong als muziekinstrument, als melodie en als gezang*. Batavia: G. Kolff.
- Moertono, Soemarsaid. 1968. *State and Statecraft in Old Java, A Study of Later Mataram Period, 16th to 19th Century*. Cornell University Monograph.
- Nagazumi, Akira. 1972. *The Dawn of Indonesian Nationalism, The Early Years of the Budi Utomo, 1908-1918*. Tokyo: Institute of Developing Economies.
- Nieuwenhuys, Rob. 1972. *Oost-Indische Spiegel, Wat Nederlandse Schrijvers en Dichters over Indonesië hebben geschreven, vanaf de eerste jaren der Compagnie tot op Heden*. Amsterdam: Em. Querido's Uitgeverij B. V.
- O'Malley, Willy. 1977. Indonesia in the Great Depression: A Study of East Sumatra and Jogjakarta in the 1930's. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Palindih, Roestam S. 1930 (?). *Dasima, Kissah Lama Menurunkan Langgam Baru*. Yogyakarta: Kolff-Buning.
- Pigeaud, Th. 1967. *Literature of Java*. Vols. 1-4. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Pramoedya Ananta Toer. 1980a. *Bumi Manusia*. Jakarta: Hasta Mitra.
- . 1980b. *Anak Semua Bangsa*. Jakarta: Hasta Mitra.
- . (ed.) 1982. *Tempo Doeloe, Antologi Sastra Pra-Indonesia*. Jakarta: Hasta Mitra.
- Reitsma, S. A., (ed.) 1925. *Gedenkboek der Staats- Spoor- en Tramwegen in Nederlandsch-Indië*. Weltevreden: Topografische Inrichting.
- Ricklefs, M. C. 1974. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi, 1749-1792, A History of the Division of Java*. London: Oxford U. P.
- Salmon, Claudine. 1981. *Literature in Malay by the Chinese of Indonesia, A Provisional Annotated Bibliography*. Paris: Editions de la Maison des Sciences de l'Homme.
- Schrieke, B. 1955 (Part I); 1957 (Part II). *Indonesian Sociological Studies*. The Hague: Van Hoeve.
- Selo Soemardjan. 1962. *Social Change in Jogjakarta*. Ithaca : Cornell U. P.
- 白石 隆. 1984. 「進歩と自由——マス・マルコ・カルトディクロモの〈旅〉から」『東南アジアの政治と文化』(土屋健治・白石隆編) 東京大学出版会.
- Siegel, J. 1982. Functions of the Javanese in Surakarta. Ithaca (mimeograph).
- Smail, John. 1971. Indonesia : Social Change and the Emergence of Nationalism. In *In Search of Southeast Asia: A Modern History*, edited by David Joel Steinberg. Oxford U. P.
- Soekanto. 1952. *Sekitar Jogjakarta, 1755-1825 (Perdjandjian Gijanti Perang Diponegara)*. Jakarta: Mahabarata.
- Soepomo, P. 1968. Javanese Speech Levels. *Indonesia*. 6.
- . 1969. Wordlist of Javanese Non-Ngoko Vocabularies. *Indonesia*. 7.

- Sutherland, H. 1969. *The Making of a Bureaucratic Elite*. Singapore: Heineman Educational Books.
- Taylor, Jean Gelman. 1983. *The Social World of Batavia, European and Eurasian in Dutch Java*. The University of Wisconsin Press.
- 土屋健治. 1971. 「サミン運動とインドネシア民族主義」『東南アジア研究』9巻2号.
- . 1982 a. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開——』東京：創文社.
- . 1982 b. 「植民地政府文書とインドネシア民族主義運動」『東南アジア研究』19巻4号.
- . 1983 a. 「ジョクジャカルタ——中部ジャワにおける〈みやこ〉の成立と展開——」『東南アジア研究』21巻1号.
- . 1983 b. 「インドネシアにおける政治と言語」『国際政治』74号.
- . 1984 a. 「19世紀ジャワ文化論序説——ジャワ学とロンゴワルシトの時代——」『東南アジアの政治と文化』（土屋健治・白石隆編）東京大学出版会.
- . 1984 b. 「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』22巻1号.
- Van der Veur, Paul W. 1955. Introduction to a Socio-political Study of the Eurasians of Indonesia. Ph. D. Dissertation. Cornell University.
- Wolters, O. W. 1982. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

（土屋 健治）

第Ⅳ部 地域経済と発展

アジア経済発展の特色

I アジア的停滯からの「離陸」

アジア的停滯 Asian Stagnation は、東洋的専制 Oriental Despotism と並んで、アジアの経済と政治の特性であるかの如く言われてきた。これを経済についてみても、実際 1960 年代の初め頃まで、日本以外のアジア諸国には発展・興隆の兆は殆どみられなかった。例えば、1960年のアジア各国の貯蓄率はマイナスか数パーセントであって、¹⁾ 当時東アジアを歴訪した経済学者で、今日の新興工業国の前途を楽観した人は殆どなかった。²⁾ 政治についてみても、1960年の初めにおいては、韓国はなお李承晩政権下にあり、台湾はなお本土への軍事的対決に彩られ、香港は本土から流入する避難民の処理に迫われ、ベトナムは独立戦の最中にあり、タイの政治は安定していたが、街並は殆ど戦前と変わらず、ようやくバンコクに第一ホテルが戦後初めて建ったのが 1958 年、マレーシアに「5・13 事件」が起ってマレー人と華人との対決が表面化するのが 1969 年、シンガポールが独立するのが 1965 年である。インドネシアはスカルノ政権の末期で、殆ど国内治安の維持がむづかしく、天文学的インフレを経験していて、65 年クーデターの直前にあった。

60 年代も終りに近づくと、こうした混乱は一国また一国と解決していき、やがて見事な経済発展への「離陸」が完成した。その国別状況は、表 1 の如くである。

即ち、東アジアおよび東南アジア諸国（以下一括して「東アジア」と略称する）は、65 年以後 20 年近く皆 7% を越す高成長を持続したから、すべての国がこの 20 年間に実質国内総生産を 4 倍以上としたのである。1 人当たり 100 ドルにあった国ですら 400 ドル（85 年現在、国連が低所得国と認定する所得水準）を越える

表1 アジア諸国の成長率：60年代および65～83年

	人 口 (100 万) 83年央	GNP b. \$	1人当り GNP \$ (83 年)	60 年代 成長 率 (%)			GDP 成長率%	
				人 口	GNP	1人当り GNP	65 ~ 73	74 ~ 83
日 本	119.3	1,207	10,120	1.0	10.6	9.6	9.8	4.3
中 国	1,019.1	306	300	1.8	1.8	0	7.4	6.0
台 湾	18.6	49	2,612	2.5	9.2	6.7	10.0	8.5
韓 国	40.0	80	2,010	2.1	6.4	4.3	10.0	7.3
(北 朝 鮮)	19.2			2.5	6.0	3.5	—	—
香 港	5.3	32	6,000	2.3	8.0	5.7	7.9	9.3
フ ィ リ ピ ン	52.1	40	760	3.0	5.9	2.9	5.4	5.4
タ イ	49.2	40	820	3.1	6.2	3.1	7.8	6.9
マ レ ー シ ア	14.9	28	1,860	3.1	6.2	3.1	6.7	7.3
シ ン ガ ポ ー ル	2.5	17	6,620	2.4	7.6	5.2	13.0	8.2
イ ン ド ネ シ ア	155.7	87	560	2.0	3.0	1.0	8.1	7.0
(南 ベ ト ナ ム)	58.5			2.6	3.6	1.0		
(北 ベ ト ナ ム)	—			2.8	6.0	3.2		
ラ オ ス	4.0			2.5	4.5	2.0		
カ ン ボ ジ ア	7.0			2.5	2.5	0	— 2.7	
ビ ル マ	35.5	6.4	180	2.4	4.0	1.6	2.9	6.0
バ ン グ ラ デ シ ュ	95.5	12.4	130	2.5	3.3	1.8	—	5.8
ネ パ ー ル	15.7	2.5	160				2.2	2.7
イ ン ド	733.2	190.6	260				3.9	4.0
ス リ ラ ン カ	15.4	5.1	330				4.2	5.2
パ キ ス タ ン	89.7	35.0	390				5.4	5.6

(資料) 世界銀行, World Development Report, 1985; アジア開発銀行, Key Indicators of Developing Member Countries of ADB, April 1984 および各国統計年鑑.

訳で、東アジアには中国を除き——大国が低所得国と国連で認定されるのには特別扱いされる——低所得国は無くなった。

しかも表1の示す如く、74年以後は現在そのすべてが400ドル以下の水準にある南アジア諸国ですら成長率を高めつつあり、今や「離陸」期を迎えようとしているかに見える。³⁾

これを、一時は高成長を謳歌するかに見えたラテン・アメリカ諸国やアフリカ諸国の現在の凋落難航ぶりと対比すると、東アジア諸国が二つのオイル危機を乗り切って高成長を持続した事は、実に見事である。いま特に、ラテン・アメリカ諸国との対比を国内総生産と消費者物価指数の動きで示したものが、表2と表3である。この2表から、ラテン・アメリカ諸国と東アジア諸国の成長

表2 実質成長率のアジアとラテン・アメリカの比較 1970～82年

	GDP 年 平 均 成 長 率 %					1人当り GNP	人 口
	1970—73	1974—75	1976—78	1979—80	1981—82	1983	mid—83
ラテン・アメリカ							
アルゼンチン	2.5	2.8	7.5	4.3	-6.0	2,070	29.6
ブラジル	11.7	7.6	6.6	7.3	-1.7	1,880	129.7
チリ	1.9	-2.5	7.2	7.9	-2.6	1,870	11.7
コロンビア	6.8	4.9	6.1	4.5	3.0	1,430	27.5
エクアドル	12.9	6.0	7.4	4.9	2.9	1,420	8.2
メキシコ	7.0	5.9	5.3	8.7	4.5	2,240	75.0
ペルー	6.1	5.1	0.0	3.5	2.3	1,040	51.0
ベネズエラ	5.3	6.0	6.1	-0.2	0.0	3,840	17.3
東アジア							
インドネシア	8.6	6.3	7.5	7.5	6.3	560	155.7
韓国	9.6	7.6	12.3	0.1	6.0	2,010	40.0
マレーシア	8.7	4.6	8.7	8.6	5.2	1,860	14.9
フィリピン	6.2	6.1	6.4	6.9	3.2	760	52.1
台湾	11.6	3.8	12.4	7.3	4.7	2,612	18.6
タイ	6.3	6.3	13.0	5.9	6.3	820	49.2

(資料) アジア開発銀行、前掲書および各国統計年鑑。

表3 消費者物価指数インフレのアジアとラテン・アメリカの比較 (%)

	1970—73	1974—75	1976—78	1979—80	1981—82
ラテン・アメリカ	20.3	35.7	48.0	51.3	72.7
アルゼンチン	42.2	102.9	265.0	130.1	145.6
ブラジル	17.9	28.2	41.5	67.7	95.6
チリ	120.9	440.0	114.6	34.2	17.2
コロンビア	12.3	23.6	23.7	26.6	26.5
エクアドル	8.6	19.3	11.8	11.7	16.4
メキシコ	6.8	19.4	20.7	22.3	60.7
ペルー	7.1	20.2	43.1	63.0	68.8
ベネズエラ	3.2	9.2	7.5	17.0	10.0
東アジア	8.4	19.3	2.9	8.6	9.0
インドネシア	13.5	29.7	13.0	22.0	8.2
韓国	11.1	24.8	13.3	27.9	10.8
マレーシア	4.3	11.0	4.1	6.1	6.9
フィリピン	13.3	20.8	7.2	19.3	11.4
台湾	4.4	26.3	4.9	17.3	7.0
タイ	5.2	14.8	6.6	15.6	8.7
先進工業国	6.8	12.2	8.0	10.5	

(資料) 表2に同じ。

表4 世界の地域別1人当り総生産の推移, 1965~84年

	GNP 1980 (10億 ドル)	人 口 1980 (100万)	1人当り GNP 1980 (ドル)	1人当り所得の年平均成長率 (%)					
				65—73	73—80	1981	1982	1983	1984
開 発 途 上 国	2,059	3,119	660	4.1	3.3	0.8	-0.7	-0.1	2.1
低 所 得 国	547	2,098	260	3.0	3.1	2.0	2.8	5.2	4.7
ア ジ ア	495	1,901	260	3.2	3.5	2.5	3.4	6.0	5.3
中 国	284	980	290	4.9	4.5	1.6	5.8	7.6	7.7
イ ン ド	162	687	240	1.7	1.9	3.5	0.4	4.2	2.0
ア フ リ カ	52	197	270	1.3	0.0	-1.7	-2.6	-2.6	1.5
中所得石油輸出国	962	579	1,660	4.6	3.1	-0.8	-2.0	-1.6	1.1
東アジア・太平洋	212	162	1,310	5.6	5.7	3.7	1.9	4.5	3.4
中東・北アフリカ	25	31	830	3.5	4.3	-2.5	2.6	0.5	-1.3
サハラ以南アフリカ	26	33	780	2.0	0.5	4.1	-4.8	-5.4	-5.4
南ヨーロッパ	214	91	2,350	5.4	2.9	0.2	0.3	-0.5	6.2
ラテン・アメリカと カリブ	409	234	1,750	4.5	2.9	-4.1	-4.8	-4.5	1.1
中所得石油輸出国	550	442	1,240	4.6	3.1	1.5	-2.3	-3.6	0.1
高所得石油輸出国	229	16	14,050	4.1	6.2	-1.1	-7.8	-14.1	-6.4
工業先進市場経済国	7,477	714	10,480	3.7	2.1	0.7	-1.0	1.5	4.3

(資料) 世界銀行, World Development Report, 1985.

について、次の2点の差異が明らかである。

(1) 東アジアもラテン・アメリカも、70年代はほぼ同程度の高成長を達成したが、70年代の終り頃から、即ち第2次オイル・ショックとそれに続く世界不況の影響への対処の仕方において、両者に著しい差があり、東アジアが速やかに相当程度の成長率を回復したのに対して、ラテン・アメリカ諸国は全く停滞ないし逆に減退を経験するに至った。⁴⁾

(2) 70年代の高成長は、両地域において二桁のインフレを伴うことが多かったが、アジアでは75年以降はほぼ一桁のインフレに収縮したのに反し、ラテン・アメリカではチリとアルゼンチンは三桁のインフレを示し、全体として70年代後半以降も収束の兆は全くない。

このようなアジアの成長達成の良さは、近年におけるアフリカ諸国の飢餓やラテン・アメリカ諸国を中心とする累積債務危機と比較する時、特に信じられぬ位である。この状況を世界全体について示すものが、表4である。そこに見られる対照は、あまりにも極端である。低所得国に属するアジア諸国（中国お

よび南アジア諸国)も中所得国に属する東アジア諸国も、着実に1人当り国民総生産を増加させているのに対し、アフリカの低所得国は73年以降、サハラ以南のアフリカの中所得国は82年以降、かなりの減退を示しているし、またラテン・アメリカおよびカリブ海諸国も81年以降マイナス成長に転じてしまっている。石油輸出をする中所得国ですら、近年は石油価格の低落に伴い、著しく下落し始めている。なぜこのような差が生じたのか。そのような恒常的成長をアジア諸国とくに東アジア諸国が示す理由は何か、その発展の型と過程と機構に見られる特色は何か、その主要な点を以下に論じたい。⁵⁾

II 経済発展のアジア的特色

1 高い資本蓄積率と上昇する貯蓄率

アジア発展の鍵をにぎる要因を列挙して、その実態と問題点を主として東アジア諸国を中心に論じる。

東アジア諸国の国内総資本形成の国民総生産に対する比率は、65年頃の20%以下から80年代初めの30%近くへと上昇し、高い資本蓄積率を維持・向上させてきた。これに対し、南アジアは、70年代終りになってからこの資本蓄積率を上昇させ始めた。そこには十数年のおくれが見られる。

他方貯蓄率、即ち国民総貯蓄の国民総生産に対する比率は、60年代後半の16%位から80年代初めの20数%へと上昇した。この状況は、表5によって明瞭に看取できる。このように資本蓄積率と貯蓄率が、共に1人当り国民総生産の上昇に伴って約20年間上昇しつづけたという事が、アジア経済の第一の特色である。⁶⁾

実は、同様の特色は日本経済の高成長期にも見られた。日本の国内資本形成対国民総生産に対する比率は、戦前においては15%を越えることはなかったが、⁷⁾戦後53年の14.2%から着実に上昇をつづけ65年前後に約32%に達し、それを頂点としてやや下降し現在28%位を保持している。貯蓄率についても、60年代中頃に33%に達し、その後やや下降して30%位を推移している。アジ

表5 資本蓄積率と貯蓄率の推移, 1965~83年

	資 本 蓄 積 率			貯 蓄 率			資 源 ギ ャ ッ プ		
	65 ~ 72	73 ~ 78	79 ~ 83	65 ~ 72	73 ~ 78	79 ~ 83	65 ~ 72	73 ~ 78	79 ~ 83
韓 国	24.1	29.0	30.0	14.9	24.9	23.7	-9.2	-4.1	-6.3
台 湾*	26.2	30.6	32.4	23.1	29.3	37.0	-3.1	1.3	4.6
フィリピン	20.9	28.6	29.6	17.1	23.9	23.3	-3.8	-4.7	-6.3
タイ	23.8	25.4	25.3	21.3	23.6	20.5	-2.5	-1.8	-4.8
マレーシア	19.6	25.7	33.4	20.8	27.2	26.3	1.2	1.5	-7.1
インドネシア	12.6	20.6	23.0	6.9	18.8	20.1	-5.7	-1.8	-2.9
シンガポール*	36.7	34.9	40.3	28.6	32.8	35.6	-8.1	-2.1	-4.7
インド	18.3	21.7	24.6	13.4	19.2	21.0	-4.9	-2.5	-3.6
パキスタン	16.3	15.9	15.8	10.2	10.0	12.1	-6.1	-5.9	-3.7
スリランカ	16.1	16.2	29.9	11.3	11.9	10.9	-4.8	-4.3	-19.0
アルゼンチン	20.4	24.6	20.5	20.3	26.2	17.9	-0.1	1.6	-2.6
ブラジル	25.8	28.1	22.5	24.0	24.0	17.6	-0.8	-4.1	-4.9
チリ	15.3	15.3	17.2	13.0	11.9	7.0	-2.3	-3.4	-10.2
コロンビア	19.0	18.8	20.0	15.4	19.1	17.2	-3.6	-0.3	-2.8
エクアドル	18.6	26.4	24.2	11.3	20.4	20.5	-7.3	-6.0	-3.7
メキシコ	21.3	23.4	26.1	19.2	20.2	24.2	-2.1	-3.2	-1.9
ペルー	16.7	18.0	17.0	15.2	11.4	13.5	-1.5	-6.6	-3.5
ベネズエラ	29.1	35.4	26.2	29.8	36.1	29.3	0.7	0.7	3.1

(資料) 世界銀行: World Development Report, 1985; アジア開発銀行: Key Indicators of Developing Member Countries of ADB, vol. XV, April 1984.

注 台湾とシンガポールの数字は、1970、1975、1982年の値で平均値でない。

ア諸国も、これと似た動きを示すかのように見える。ただシンガポールを除き,⁸⁾ 二つの比率のいずれにおいても数値として日本を下回することは、表5を見れば分る。

この動きは、決して高成長に当然ともなうものではない。例えば、ラテン・アメリカ諸国の同様の推移を見ると、資本蓄積率も貯蓄率も、決して1人当り所得の向上と共に上昇してはいない。特に後者は、殆どすべての国において20数%のところまで頭打ちとなるか、ないし下降に転じている。アジアにおいてはフィリピン以外には、そのような動きを示す国はない。⁹⁾

ただアジアにおいても、貯蓄率の上昇は日本ほど着実顕著な国は少ない。シンガポールと台湾のみは、日本以上に36~37%の高貯蓄率を実現しているが、これは両国が貯蓄増大のための特別な政策をとったことによる「強制貯蓄」の部分が大きい。¹⁰⁾ 他の国は、マレーシアの27%を頂点として、それ以下のと

ところで頭打ちとなっている。1人当り所得が日本の十数年前よりなお低い水準にあることを考えると、これらの国民の本来の貯蓄性向が日本より低いのかもしれない。従って台湾以外は、その高い資本蓄積率を外資の導入によってまかなわねばならなかった。その資源ギャップ resource-gap の状況は、表5によって看取できる。その外資依存度は、ラテン・アメリカ諸国とあまり変わらないことは注意すべき点である。

2 資本・産出比率の緩徐な上昇

たとえ資本蓄積率が高くとも、その資本が有効且つ効率よく活用されるのであれば、国内総生産の成長率は高まらない。いま仮に「限界資本係数」ないし「追加資本産出比率」Incremental Capital Output Ratio, ICOR を先の表1と表5の成長率で蓄積率を割って機械的に計算すると、それは65～73年および74～83年平均の限界資本係数を示すと考えてよいであろう。ただ74～83年の期間は、世界不況の時期を含み、多くの国では債務返済のための緊縮政策が取られた時期であるから、このようにして計算した係数は著しく大きくなり、正常な稼働率の下での資本対産出高の比を反映しない危険性がある。この事に十分注意しながらも、計算の期間が約十年にまたがることを考えると、表6の示す資本産出比（限界資本係数）は、資本が効率よく活用されたかの目安をほぼ示すものと考えてよいであろう。

この限界資本係数が、1人当り国内総生産の上昇と共に高まることは、早くから多くの低開発国について知られていた。それは農業および古い産業の比重が下り、近代工業の発達やサービス産業の効率化が進むにつれて資本産出比率が高まるからである。各国の計画立案者は、この事をよく承知していた。例えば、台湾の第4次四カ年計画及び韓国の計画立案者が予測していた限界資本係数は、下記の如くであった。¹¹⁾

台	湾	韓	国
64 (実際)	2.74	63 (実際)	1.2
65 (計画)	2.69		
66 (計画)	2.87	70 (予測)	2.8

表6 限界資本係数の国際比較, 1965~83年

		1965~73			1974~83		
		成長率	蓄積率	資本産出比	成長率	蓄積率	資本産出比
日	本	9.8	30.0	3.1	4.3	22.7	5.2
韓	国	10.0	24.1	2.4	7.3	29.5	4.0
台	湾	10.0	26.2	2.6	8.5	31.5	3.7
フ	ィ	5.4	20.9	3.9	5.4	29.1	5.4
タ	イ	7.8	23.8	3.1	6.9	25.4	3.7
マ	レ	6.7	19.6	2.9	7.3	29.1	4.0
イ	ン	8.1	12.6	1.6	7.0	21.8	3.1
シ	ン	13.0	36.7	2.8	8.2	37.6	4.6
ン	ガ	3.9	18.3	4.7	4.0	23.2	5.8
パ	キ	5.4	16.3	3.0	5.6	15.9	2.8
ス	リ	4.2	16.1	3.8	5.2	23.1	4.4
ア	ル	4.3	20.4	4.7	0.4	22.6	56.4
ブ	ラ	9.8	25.8	2.6	4.8	25.3	5.3
チ	リ	3.4	15.3	4.5	2.9	16.3	5.6
コ	ロ	6.4	19.0	3.0	3.9	19.4	5.0
メ	キ	7.9	21.3	2.7	5.6	24.7	4.4
ペ	ル	3.5	16.7	4.8	1.8	17.5	9.7
ベ	ネ	5.1	29.1	5.7	2.5	25.8	10.3

(資料) 世界銀行, World Development Report, 1985 より計算.

67 (計画) 2.10

68 (計画) 3.13 75~80 (予測) 3.0

これを表6の実際の値と比較してみると, よく予測していたと言わべきであろう。

東アジア諸国の資本係数も, 事実すべての国において上昇を示した。最も緩徐な上昇に留まったのは台湾である。インドネシアもタイも1人当り所得水準が低いことを考えると, 3.1および3.7という係数は, かなり高い。韓国が台湾より低い所得水準で, はやくも台湾より資本係数が高くなっているのは, その積極的重化学工業化政策の結果である。マレーシア, シンガポールの高いのは, その工業化推進政策と1人当り所得水準の高さよりして, 資本集約的産業へ重点を移しつつあることの結果で特に問題はない。フィリピンのみがタイと同程度の所得水準にありながら, 日本以上の資本係数になっているのは, その資本の利用配分が不適切な結果であろう。

以上のみを見れば, 東アジア諸国はそれでもなお資本集約的の方向に行きす

ぎており、もっと台湾の如き行き方が望ましいとの議論も成立つ。しかし、これを南アジア諸国およびラテン・アメリカ諸国と比較してみると、全体として資本が有効適切に利用されている事を認めてよいであろう。南アジアの優等生はパキスタンであるが、スリランカも同様である。インドは特に資本係数は終始一貫して高い。恐らくこれは同国における公共部門の政府関連企業の能率の悪さや巨額の基盤投資の必要性などが関係しているであろう。

ラテン・アメリカと対比すれば、アジア諸国の資本効率の良さは一目瞭然である。メキシコのみはフィリピンよりましであるが、他はすべてフィリピン並か、それよりも非能率である。アルゼンチン、ペルー、ベネズエラは、いずれも債務返済のため緊縮政策をとっている国であるが、仮にそうでなくて、65～73年の成長率を保持していたと想定しても、資本係数は、5.3, 5.0, 5.1であって、他の諸国並である。即ち、ラテン・アメリカは、アジアで最悪のフィリピン並か、それ以上に資本を無駄にしているのである。

3 工業化と技術進歩の速度が速い

アジア諸国が工業化に成功し、新技術の導入によって生産力を著しく向上させていることは言うまでもないが、その国際比較を可能にするため、次のような簡便法を工夫する。

コブ・ダグラス型の生産関数： $Y = AK^\alpha L^{(1-\alpha)}$ を前提にすれば、 $\Delta Y/Y = (\Delta A/A) + \alpha(\Delta K/K) + (1-\alpha)\Delta L/L$ が得られる。ここで Y は産出高、 K は資本、 L は労働、 A は技術水準を示す指標とする。もし $(\Delta A/A) = 0$ ならば、この式より Y , K , L の観察値から α が一点計測できる。

多くの国の近代的経済成長の過程で見られる特色の一つは、雇用労働力及び資本量の成長率を上回って産出高が成長することが多い事である。この余剰ないし残余の部分を労働の質の向上ないし教育資本の増大によって説明するか、技術進歩によって説明するかの詳細にはここでは立入らない。もし上記の計測で A も α も一定ならば、この事を排除する。従って

$$\Delta Y/Y = \alpha \Delta K/K + (1 - \alpha) \Delta L/L$$

$$\therefore \alpha = (\Delta Y/Y - \Delta L/L) / (\Delta K/K - \Delta L/L)$$

として計算すると、 $\Delta A/A > 0$ であるとき、

$$\alpha + \frac{\Delta A}{A} / \left(\frac{\Delta K}{K} - \frac{\Delta L}{L} \right)$$

を誤って α として計算してしまうことになる。そうすれば α は過大となり、 $0 < \alpha < 1$ という条件を満たさなくなるかも知れない。従って、以下の計測では $\Delta A = 0$ を前提にして α を推定するが、 $\alpha > 1$ が、1に近づく時は注意ぶかく解釈を加えることにする。周知のごとく、

$$\text{資本の限界生産力} = \alpha \frac{Y}{K}$$

$$\text{労働の限界生産力} = (1 - \alpha) \frac{Y}{L}$$

である。但し実際の計測ではデータの制約上、 Y/K については、表6の限界資本係数の逆数を代用し、 $\Delta K/K$ には、各国の65～73年および74～83年の粗投資成長率をもって代用し、 Y/L には1人当りGNPを労働力化率（この計算では生産年齢人口比）をもって代用する。そしてその計算を65～73年と74～83年の両期間に分けて行い、その間の東アジア諸国の資本と労働の生産力向上の跡をたどり、且つ南アジアおよびラテン・アメリカ諸国と比較したものが表7である。

この表から直ちに読みとれる興味ぶかい事実は次の如くである。

(1) 資本の限界生産力において、東アジアは明らかに南アジアよりも高いが、65～73年の平均ではラテン・アメリカより高いとは言えない。

(2) 東アジアにおいては、オイル・ショック以後、資本の限界生産力のかなりの低下が見られる。唯一の例外国は台湾である。

(3) ラテン・アメリカは、成長率の急低下のため信頼できる計測ができないが、限られた資料の示す限り、資本の限界生産力は急減した。83年においては、東アジアの資本の限界生産力よりも低くなっていると思われる。

(4) 労働の限界生産力は、東アジアでは顕著な上昇を示したが、その上昇率は1人当り国民総生産の成長率に及ばない。それは国民総生産の増大が、資本や労働の生産力の上昇によるだけではなく、投下資本量及び投入労働量の増大によってもたらされた事を示す。人口の増加を上回って投入労働量が増加する

表7 資本と労働の限界生産力,

		資本増加率		労働力増加率		資本分配率; α		資本限界生産力	
		65~73	74~83	65~73	74~83	65~73	74~83	65~73	74~83
日	本	14.1	3.1	1.7	1.1	0.65	1.6*	0.20	*
韓	国	19.7	9.1	2.9	2.7	0.42	0.72	0.18	0.18
台	湾	15.6	8.1	4.0	3.0	0.47	0.92	0.18	0.25
フ	ィ	4.4	7.3	2.1	3.1	1.43*	0.5	*	0.09
タ	イ	7.6	6.2	2.4	3.1	1.04*	1.22*	*	*
マ	レー	9.1	11.9	2.9	3.2	0.61	0.47	0.21	0.12
イ	ンド	17.5	12.3	1.9	2.3	0.40	0.47	0.25	0.15
シ	ンガ	22.7	9.2	3.4	2.3	0.49	0.59	0.17	0.13
イ	ン	9.6	4.4	1.8	2.1	0.27	0.83	0.057	0.143
パ	キ	0.4	4.9	2.3	3.2	-1.63*	1.25*	*	*
ス	リ	7.9	15.7	2.0	2.1	0.37	0.23	0.097	0.052
ア	ル	6.7	-2.0	1.4	1.0	0.55	0.9*	0.115	0.016*
ブ	ラ	11.3	2.5	2.5	3.1	0.83	-2.8*	0.315	*
チ	リ	0	-0.3	1.3	2.6	-1.6*	-0.83*	*	*
コ	ロ	6.7	6.0	3.1	2.8	0.92*	0.28	0.310*	0.063
メ	キ	8.4	4.5	3.1	3.1	0.91*	0.96*	0.338	0.206*
ベ	ル	-2.6	-2.7	2.4	2.9	-0.22*	0.20*	*	*
ペ	ネ	9.0	2.5	3.7	4.1	0.27	0*	0.128	*

表8 技術進歩の著しい国における

	GDP	農	業	工	業	製	造	業	サ	ー	ビ	ス
日	4.3	-1.6		5.5					3.3	(74~83)		
韓	7.3	1.5		11.2		11.8			6.9	(74~83)		
台	8.5	2.5		13.0		13.5			3.9	(76~80)		
フ	5.4	4.1		7.4		8.5			4.8	(65~73)		
タ	7.8	5.2		9.0		11.4			9.1	(65~73)		
イ	6.9	3.8		9.0		8.9			7.6	(74~83)		
イ	4.0	2.2		4.3		4.2			6.1	(74~83)		

のは、生産年齢人口の割合が増すことと労働力化率が高まること（婦人労働の増加など）による。アジア諸国の殆どすべてでこれが見られる事は、表7の労働力増加率と各国の人口増加率を対比して見れば明らかである。

更に上記の簡単な計算で、不変と前提した仮定があてはまらず、技術進歩が著しかったと思われる国および時期は、とくに日本（74~83年）、韓国（74~83年）台湾（74~83年）、フィリピン（65~73年）タイ（65~83年）、インド（74~

1965～73 年, 1974～83 年

(* は不適当な値)

1 人当り GNP		平均成長率	生産年齢人口比		(1- α)/労働力化率		労働限界生産力	
65	83	65～83	65	83	65	83	65	83
4,352	10,120	4.8	.68	.68	0.956	*	4,160	*
626	2,010	6.7	.54	.59	1.074	0.475	672	955
735	2,612	7.3	.51	.59	1.039	0.424	764	1,107
454	760	2.9	.52	.56	*	0.893	*	679
384	820	4.3	.51	.59	*	*	*	*
842	1,860	4.5	.50	.58	1.220	0.913	1,027	1,700
233	560	5.0	.54	.56	1.111	0.946	259	530
1,713	6,620	7.8	.54	.67	0.944	0.611	1,618	4,051
199	260	1.5	.54	.57	1.352	0.298	269	78
250	390	2.5	.50	.53	*	*	*	*
197	330	2.9	.55	.60	1.145	1.267	226	418
1,892	2,070	0.5	.64	.61	0.703	*	1,330	
781	1,880	5.0	.54	.59	0.315	*	245	*
1,904	1,870	0.1	.56	.63	*	*	*	*
811	1,430	3.2	.50	.59	*	1.143	*	1,634
1,271	2,240	3.2	.50	.53	*	*	*	*
1,021	1,040	0.1	.52	.56	*	*	*	*
2,937	3,840	1.5	.50	.56	1.46	*	4,288	*

技術進歩率, 1965～83 年

技術進歩率	α'	資本限界生産力		労働限界生産力	
		65～73	74～83	65	83
2.3%	0.47	0.15	0.09	3,328	7,888
3.1%	0.24	0.10	0.06	881	2,589
4.1%	0.45	0.23	0.12	793	2,435
4.5%	0.53	0.14	0.10	410	638
1.4%	0.76	0.26	0.21	181	334
1.8%	0.04	0.009	0.007	354	438

83 年) である。¹²⁾

これらの国の成長率の産業別内訳を見ると、資本投入の中心対象であった工業部門とサービス部門の成長が著しく、GDP の成長率を上回っている。表 7 の α の計測がおかしかったのは、この部門における技術進歩を考慮しなかったからである。また農業における「緑の革命」の効果もある。これらを考慮して $\Delta A/A$ を計測する簡便法は無い。しかし 2 期間の α を一定と仮定し、中立

的技術進歩のみを仮定して、 $\Delta A/A = g$ なら、 $(\Delta Y/Y - \Delta L/L)$ と $(\Delta K/K - \Delta L/L)$ の2期間の値から g および α を計測できる、その数値を前掲の表8に提示する。¹³⁾

これによって見ると資本分配率 α を2期間一定と想定すると、技術進歩率がかなり高くなることが分る。そしてフィリピンについても83年までは順調な技術進歩率を示していることが判明する

以上の議論により東アジア諸国が南アジアやラテン・アメリカより遙かに高い技術進歩率および生産力の上昇を達成した事は明らかである。

4 輸出主導型工業化の好循環の成立

輸出伸張—外貨獲得—資本財輸入—輸出指向型工業への投資増—輸出伸張という好循環こそが、アジア新興工業国のダイナミズムを支えたメカニズムであった事は、多くの人が指摘している。しかしこの事情は、東アジアをとってみても新興工業国4カ国と他のアセアン4カ国では異なっているし、南アジア諸国についても事情が異なる。それを一表に示したものが表9である。¹⁴⁾

日本、韓国、台湾、香港およびシンガポールは、輸出の伸び率が工業の付価値の伸び率を大幅に上回っていて、輸出主導型工業化が進行した事は明らかであるが、¹⁵⁾ 他のアセアン4カ国および南アジアはそうではない。それらの国は、まだ一次産品（農林水産業産品および石油・天然ガスその他の鉱産物）の生産および輸出の比重が高いからである。

東アジアの「4人組」が、工業化の段階を高めつつあることは、みな一様に機械・輸送機械の輸入の比重を高め、その他の製造工業品の輸入の比重を低めていっているところから看取できる。¹⁶⁾

アセアン4カ国は、74年以降も主として一次産品の輸出増により成長した。インドネシアとマレーシアの急成長は石油価格の急上昇によるが、タイやフィリピンも農産物価格の上昇によって幸運にも輸出額の増加をみた。しかし砂糖や椰子油や木材価格の上下によってフィリピンやインドネシアの輸出額が恩恵と損失をうけた幅の大きさは、表10から十分に理解できる。

表9 工業化と輸出・輸入の構造変化, 1965～83年

	製造工業付加価値 (100万ドル)				輸 出 伸 び 率 (%)		輸 入 伸 び 率 (%)		一次産品輸出の 割合 (%)		機械・輸送機械 輸入の割合 (%)		他製造工業品輸 入の割合 (%)	
	1970	82	倍 率	年 率 (%)	65～73	74～83	65～73	74～83	65	82	65	82	65	82
日 本	75,800	106,356	1.40	2.9	14.7	7.4	14.9	1.3	8	3	9	6	11	15
韓 国	2,368	11,492	4.85	14.1	31.7	14.8	22.4	7.5	40	8	13	23	38	20
台 湾	1,242	4,325	3.48	10.9	26.0	10.2	19.1	5.2		11		28		27
香 港	1,914	3,679	1.92	5.6	11.7	10.3	10.5	12.0	13	8	13	22	46	52
シンガポール	827	2,436	2.95	9.3	11.0	14.1	9.8	12.5	63	43	14	28	30	26
マレーシア	1,022	3,287	3.22	10.3	8.0	4.9	4.4	7.3	94	77	22	40	32	29
タ イ	1,675	4,837	2.89	9.2	6.9	9.0	4.4	3.3	95	71	31	24	49	33
フィリピン	2,659	5,510	2.07	6.1	4.2	7.5	3.1	1.3	95	50	33	22	30	38
インドネシア	1,517	6,072	4.00	12.3	11.1	1.4	13.9	9.8	96	96	39	38	50	29
イ ン ド	10,232	16,210	1.58	4.0	2.3	4.9	-5.7	2.8	51	40	37	18	22	28
パキスタン	1,492	2,967	2.00	6.0	3.7	8.1	-2.9	5.7	64	40	38	23	34	26
スリランカ	556	748	1.35	2.5	-4.7	2.6	-3.2	4.7	99	73	12	24	34	30

表10 一次産品価格の動き, 1970～83年

(米ドル時価)

	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983
食糧														
小麦 \$/MT	56.9	62.3	69.1	136.6	178.0	138.4	122.7	98.7	124.9	155.2	168.3	154.6	132.6	136.9
米 \$/MT	144.0	129.0	147.1	350.0	542.0	363.1	254.5	272.2	367.4	334.2	433.7	482.8	292.9	277.5
とうもろこし \$/MT	58.4	58.4	56.0	98.0	132.1	119.6	112.4	95.3	100.7	115.5	125.3	130.8	109.3	135.4
砂糖 c/KG	8.1	9.9	16.0	20.8	65.4	45.0	25.5	17.9	17.2	21.3	63.2	37.4	18.6	18.8
茶 c/KG	109.6	105.4	105.2	105.8	140.2	138.5	153.6	269.0	218.9	215.5	223.1	201.7	193.2	221.2
コブラ \$/MT	225.0	189.0	141.0	353.0	661.9	256.3	275.1	402.3	470.4	672.5	453.8	378.9	314.2	481.3
椰子油 \$/MT	260.0	261.0	217.0	378.0	669.0	434.2	406.7	530.0	600.2	653.7	583.3	570.7	445.1	483.8
他農産物														
棉花 c/KG	67.7	78.3	82.7	139.1	145.9	123.2	174.7	162.9	160.7	170.7	206.2	187.1	160.6	186.2
ジュート \$/MT	274.0	286.0	299.0	289.0	353.0	370.9	295.6	320.9	434.7	387.4	308.0	274.9	284.7	292.0
ゴム c/KG	45.3	39.9	40.3	78.7	86.6	65.9	87.3	91.7	110.7	142.4	162.4	125.2	100.2	123.5
木材(ラワン) \$/CM	37.2	38.0	37.6	65.6	78.6	66.0	86.0	90.6	77.0	160.2	192.9	144.5	145.2	137.1
木材(サペリ) \$/CM	43.0	44.5	52.5	133.6	120.5	140.0	155.0	159.0	162.6	211.5	251.7	212.8	175.9	159.7
鉱産物														
銅 c/KG	141.3	108.0	107.1	178.6	205.9	123.5	140.1	130.9	136.5	198.5	218.2	174.2	148.0	160.8
錫 c/KG	368.0	351.0	377.0	483.0	820.0	686.2	758.2	1076.2	1290.8	1545.8	1677.5	1415.9	1282.6	1304.6
鉛 c/KG	30.4	25.4	30.2	43.0	59.3	41.7	44.6	61.8	66.2	120.8	90.6	72.7	54.6	42.7
石油 \$/BBL	1.3	1.7	1.9	2.7	9.8	10.9	11.7	12.8	12.9	17.0	30.5	34.3	33.2	29.3

しかし大勢として、これらの国も工業化を進めていきつつある事は、一次産品輸出の比重が下がり、その他製造工業品の輸入の比重が下がって行きつつあることから明らかである。そこでは74～83年の間に輸入代替の工業化が進んでいるのである。事実、アセアン4カ国の工業品輸出の割合は、65年から82年の間に、マレーシア6%—23%、タイ4%—29%、フィリピン6%—49%、インドネシア0%—4%へと増加した。インドも49%—60%、スリランカも1%—27%、パキスタンも36%—60%と工業品の輸出が始まっていて、いずれも東アジア新興工業国の跡を追っている。中国の82年の輸出のうち工業品の占める割合は55%であって、そこにも工業化の急進展のあることが分る。

このように国ごとに差はあるものの、アジア各国は輸出指向型工業化の好循環の軌道に乗ったか、これから乗ろうと努力中であると言える。

この輸出主導型工業化を可能にするための必須条件の一つは、為替の交換比率が過大評価されないということである。この点アジアで過大評価が長く続いたと思われる国は、韓国とフィリピンであり、過小評価の傾向にあったと思われるのは、台湾とタイである。しかしその動きは、近年の債務累積の影響でかなり一変した。¹⁷⁾ 韓国、フィリピンの場合、外資導入でこの不利を補ったと言える。アジア諸国が国際収支の赤字をいかに補填したかの実態はわかりにくい、その概要を推計したものが表11である。

この表のなかの直接投資として、その中心であった日本とアメリカの直接投資、なにかんづく合弁企業の進出が、各国の工業化に果たした役割は特に重大であった。¹⁸⁾

5 健全なる財政金融政策

アジア諸国の財政政策が、必らずしも健全財政でなかったことは、表12が示すごとくであるが、しかしこれをラテン・アメリカ諸国の財政赤字の対GNP比と比較すれば、少しは健全であったというべきであろう(表13参照)。しかし問題は、収支バランスよりも、むしろその使途の健全さにあったと思われる。今アジア諸国とラテン・アメリカのブラジルとメキシコを取って、財政支出の

表11 国際収支差と外資導入の推移

(100万米ドル)

	直接投資純額				長期資本純借入				短期資本純借入			
	70	75	80	81	70	75	80	81	70	75	80	81
ピルマ					1	40	352	—	3	8	—0	—
台湾	61	34	119	101	14	328	913	1,092	98	422	1,152	3,515
香港	83	476	184	133	207	567	1,924	1,991	3	—1,889	—821	—234
インドネシア		62	96	105	463	1,116	1,714	2,633	224	680	1,945	—82
韓国	94	349	876	1,317	2	105	97	171	—6	—66	416	190
マレーシア	—28	125	42	404	133	357	1,032	1,332	76	102	784	—19
フィリピン	93	611	1,669	1,797	—	58	—106	125	—	—89	136	614
シンガポール	43	86	187	288	67	169	1,824	2,020	54	215	—63	125
タイ					584	943	—	—	—	12	—	—

表12 政府財政収支の推移, 1971~82年

(%)

	政府支出/GDP			政府税収/GDP			財政収支/GNP	
	1971~75	76~80	82	71~75	76~80	82	72	82
ピルマ	15.8	13.7	17.1	9.3	12.6	38.2	—	0.7
台湾	19.4	22.9	28.2	15.6	17.8	25.6	—	2.6
香港	15.3	16.7	20.4	9.8	10.8	12.4	—	—
インドネシア	18.7	24.6	23.5	14.8	19.8	22.2	—2.6	—2.1
韓国	18.6	18.9	19.5	12.7	16.0	19.1	—3.9	—3.2
マレーシア	27.6	33.9	41.0	18.7	22.1	29.2	—9.8	—15.9
フィリピン	13.1	14.2	12.2	10.2	11.4	11.2	—2.0	—4.3
シンガポール	24.4	29.6	22.6	15.8	17.4	28.5	1.3	2.7
タイ	15.4	16.9	19.9	12.1	12.7	13.9	—4.3	—5.9
インド	13.3	16.1	15.1	7.8	7.9	13.6	—	—6.6
パキスタン	22.3	24.1	16.1	9.4	10.8	14.6	—	—4.5
スリランカ	25.9	35.9	34.4	16.2	24.7	17.2	—	—14.4

(資料) 表11: 各国の統計資料, その他より推計. 表12: 各国統計年鑑

表 13 ラテン・アメリカ諸国の財政赤字対 GNP 比

(%)

国 名	72年	82年	国 名	72年	82年
コロンビア	—	−4.8	アルゼンチン	−3.4	−7.4
チリ	−9.8	15.9	メキシコ	−3.1	−16.3
ブラジル	−0.4	−2.7	ペネズエラ	−0.3	−5.4

表 14 財政支出の使途別内訳, 1972 年, 1982 年

(%)

	防 衛		教 育		衛 生		福 利 厚 生		経 済 助 成		そ の 他	
	72	82	72	82	72	82	72	82	72	82	72	82
韓 国	25.8	31.3	15.9	19.5	1.2	1.4	5.8	10.5	25.6	13.3	18.1	19.5
シンガポール	35.3	22.9	15.7	19.2	7.8	6.4	3.9	8.2	9.9	14.2	27.3	29.1
インドネシア	—	13.9	—	8.4	—	2.5	—	1.1	—	31.3	—	42.8
フィリピン	10.9	13.6	16.3	16.0	3.2	5.3	4.3	4.2	17.6	53.7	47.7	7.2
マレーシア	18.5	15.1	23.4	15.9	6.8	4.4	4.4	10.5	14.2	29.0	32.7	25.2
タイ	20.2	20.6	19.9	20.7	3.7	5.0	7.0	4.9	25.7	22.2	23.5	26.5
インド	—	20.2	—	1.9	—	2.2	—	4.3	—	24.3	—	47.1
ブラジル	8.3	4.3	6.8	4.6	6.4	7.8	36.0	35.6	24.6	21.9	17.8	21.8
メキシコ	4.2	1.6	16.6	13.1	5.1	1.3	24.9	12.9	34.3	24.9	15.0	46.2

(資料) 世界銀行, World Development Report, 1985.

注: 台湾を除いたのは, 防衛費が公表されていないためである。他の構成比は韓国に似る。

表 15 社会発展の指標

	識 字 率		新聞購読率 (1000人当り)		初 等 教 育 率 就 学 率		中 等 教 育 率 就 学 率		高 等 教 育 率 就 学 率		1人1日当り摂取カロ リー、必要量への比	
	70	80	70	80	65	82	65	82	65	82	全 量 (82)	%
ビ ル マ		66	9	10	71	84	15	20	1	4	2,483	115
台 湾	85	90	—	—	98	100	—	—	—	—	—	—
香 港	77	90	498	309	103	105	45	66	10	11	2,774	121
イ シ ド ネ シ ア	57	62	—	28	72	120	7	16	—	2	2,393	111
韓 国	88	93	136	173	101	100	35	89	6	24	2,936	125
マ レ ー シ ア	58	60	75	174	90	92	28	49	2	5	2,688	120
フ ィ リ ピ ン	83	75	14	21	113	106	41	64	19	27	2,393	106
シ ン ガ ポ ー ル	72	84	200	255	105	108	45	66	10	11	2,954	128
タ イ	79	86	20	40	78	96	14	29	2	22	2,296	103
イ ン ド	33	36	16	20	74	79	27	30	5	9	2,047	93
パ キ ス タ ン	21	24	—	14	40	44	4	20	—	1	2,277	99
ス リ ラ ン カ	78	85	20	27	93	103	35	54	2	4	2,393	107

注：初、中等教育の就学率は就学年齢人口に対する割合、100を超えるのは高年齢者の就学による。高等教育の就学率は20～24歳人口に対する割合、従ってこの数字の国際比較は要注意。

表 16 所得水準と出生率の相関

国 名	1人当りGDP 1983年	出 産 率 1983年	予 想 出 産 率 2000年	国 名	1人当りGDP 1983年	出 産 率 1983年	予 想 出 産 率 2000年
日 本	10,120	1.7	1.9	フィリピン	760	4.2	2.7
シンガポール	6,620	1.7	1.9	インドネシア	560	4.3	2.8
香 港	6,000	1.8	2.0	パキスタン	390	5.8	4.2
韓 国	2,010	2.7	2.1	スリランカ	330	3.4	2.3
マレーシア	1,870	3.7	2.4	イ ン ド	260	4.8	2.9
タ イ	820	3.4	2.2	ビ ル マ	180	5.3	3.6

使途の内訳を対比すると、表 14 のごとくである。

これによってアジア諸国は、概して重い防衛費の負担にもかかわらず、教育や経済活動の助成に力を注いでいる事が分る。これに反してラテン・アメリカ諸国は、防衛費は取るに足りない状況でありながら、福利厚生と人件費（その他に含まれる）にさいてしまっている。この状況は、アジアではインドネシアとフィリピンに見られ、また近年のマレーシアにその兆がある。この差は、アジア各国の間にも財政の健全な国（韓国、シンガポール、タイ）と不健全な国（インドネシア、フィリピン）とやや不安なマレーシアに分れることを示す。¹⁹⁾

6 人口増加率の通減と労働の質の向上

東アジア諸国が教育に力を注ぎ、従って国民の能力が着実に向上している事は疑えない。表 15 に示す如く、今や東アジアの国民の大半は活字を通じて知識を吸収できる。またかなりの中堅労働力となり得る中等教育終了者と指導層を生み出す基盤ができつつある事は明らかである。しかも食糧によるカロリー摂取量は、すべての国で、平均して必要量を上回っているから、分配よろしきを得れば、人間としての基本的必要カロリーを殆どの国民に与え得る状況に達している。

しかも東アジア諸国は、日本を先頭に着実に人口移行を完成しつつあるやに見える。表 16 は、国連資料によって 1 人当り所得と出産率の間に負の相関があることを示している。また表 15 の識字率と対照すると、それとの間にも負の相関があるように見える。南アジアは、この点東アジアほど明瞭でないが、同様の趨勢をたどるように思われる。

これらの事情は、東アジアの国民が労働者ないし経営者として、教育と訓練をうける機会を拡大し、ますますその質を良くしていくことを物語る。このように安定した恵まれた環境は、他地域には見出すことが難しい。

7 所得分配の平等と社会的安定

アジア諸国の所得分配が、他地域のそれと比較して、より平等であることは、

表17 所得分配の国際比較

国名	調査年	下位20%	上位20%	上位10%	不平等度
日本	(79)	8.7	37.5	22.4	5.1
韓国	(76)	5.7	45.3	27.5	9.6
台湾	(79)	8.6	37.5	22.0	4.4
香港	(80)	5.4	47.0	31.3	11.6
シンガポール	(75)	5.4	48.9	28.7	10.6
マレーシア	(73)	3.5	56.1	39.8	22.7
タイ	(76)	5.6	49.8	34.1	12.2
フィリピン	(71)	5.2	54.0	38.5	14.8
インドネシア	(76)	6.6	49.4	34.0	10.3
インド	(76)	7.0	49.4	33.6	9.6
スリランカ	(70)	7.5	43.4	28.2	7.5
ペルー	(72)	1.9	61.0	42.9	45.2
ブラジル	(72)	2.0	66.6	50.9	50.9
アルゼンチン	(70)	4.4	51.4	34.8	15.8
メキシコ	(77)	2.9	57.7	40.6	28.0

(資料) 世界銀行, World Development Report, 1985 および各国の研究, シンガポールは, Lee Sheng Yi, "Income Distribution, Taxation and Social Benefits of Singapore," July, 1977, Institute of Economics and Business Studies, Nanyang University Occasional Paper No. 21. 及び V. V. Bhanoji Rao and M. K. Ramakrishnan, *Income Inequality in Singapore*, Singapore Univ. Press, 1980.

不十分な資料からではあるが、大体誤りないように思われる。表17は、家計の可処分所得の分配を「上位10%と20%および下位20%の家計が全所得の何%を占めるか」で国際比較したものである。調査年度が異なるが、地域別較差の大局を見るには差支えないであろう。アジア諸国の所得分配では上位所得層10%の占める割合が30%台であるのに対し、ラテン・アメリカ諸国は40~50%であり（アルゼンチンのみは、東アジア並み）、また下位20%の家計の所得が占める割合においても、アジアは3.5~6.6%であるのに対し、ラテン・アメリカは、アルゼンチン以外は1.9~2.9%で、明白な差がある。しかしアジアにおいてもフィリピンとマレーシアは他の国よりも、はっきりと不平等である。前者は、土地所有や産業組織において中南米諸国に類似し、後者はマレー系と中国系・インド系国民との間の所得較差の著しい事情を反映しているであろう。

いま上位10%の金持の平均所得が、下位20%の貧困層の平均所得の何%になるかを「不平等度」を示す指標として示したものが最後の欄であるが、日本

の5.1は例外的に低い、ラテン、アメリカが極端に高いことが明白である。アジアでも社会不安の高いフィリピンや69年暴動を経験したマレーシアに社会不安のたえないのは、この所得不平等と関連していると思われる。²⁰⁾

8 社会的・政治的制度の整備——むすび

クズネッツもロストウも、その他多くの先学と共に、近代的経済成長や離陸のためには、上述した経済的諸条件と共に社会的政治的諸制度の枠組と、それを運営する考え方や行動様式ができ上がっていかなばならぬことを指摘した。アジア諸国において、それが難航しながらも整備されている事は明らかである。この点もアジア経済発展の特色として指摘せねばならないが、それらの点を論じることは、他に適任者があろうし、また私としては次の機会にゆずりたい。

注

- 1) いま最も高成長、高貯蓄率を示すシンガポールと台湾について、離陸期に入る前の状況を示すと下表の如くである（資料：Samuel P. S. Ho, *Economic Development of Taiwan, 1860—1970*, Yale University Press, 1978; Shirley W. Y. Kuo, *Economic Development of Taiwan*）。

年次	シンガポール		年次	台湾	
	GDCF/GNP	GDS/GNP		NDCF/NNP	NDS/NNP
60	11.2	-2.6	51	10.9	5.3
61	11.4	-2.3	55	10.2	4.9
62	15.3	5.8	60	17.0	7.6
65	21.2	11.2	65	20.4	16.5
70	36.2	32.9	70		

- 2) 1960年頃アジアを旅した Rosenstein-Rodan 教授や J. Robinson 夫人らは、いずれもフィリピンや中国の将来を明るく見てはいたが、韓国やマレーシアの将来を楽観していなかった。
- 3) 「離陸」Take-Off という言葉は、W. W. Rostow によって、国民経済が自立的に恒常的成長路にのるための条件をととのえる時期として定義されたが、そのような時期が短期間に集中して整備されることを強調して「離陸」と命名した。離陸の三条件は、次の如くである。
1. 純国民生産物 NNP の 5% 以下の水準から 10% 以上へと、生産的な純国内資本形成 NDCF に再投入されること。
 2. いずれか一つまたは数個の本格的な製造工業部門が急成長すること。
 3. そうした近代的成長を支えていくに足るだけの政治的、社会的、制度的枠組が整えられているか、急速に整えられること。

このロストウの議論に対しては、サイモン・クズネッツの経済発展段階説の歴史研究への応用についての警めがあり、またガーシンクロンの歴史上の事実に基づく反論があり、反論の方がほぼ受入れられたと思われる。西欧諸国の経済成長の歴史にはロストウのいう工業化のための前提

条件 pre-conditions をみたさないままで工業化した国もあるという。また、条件2は部門について条件で、そこではむしろ技術革新が重要というハーシュマン、フィッシュロー等の指摘もある。

しかし、以下に論じる如く、アジア諸国の戦後の発展史のなかでは、そのような離陸期を特定することが、上記の三条件を考慮しても可能であるように思われる。ただしこの事は、私自身が彼の一種の経済発展段階説に賛成をするという意味ではない。ただ離陸期という議論の有用性のみを認めるのである。W. W. Rostow, *The Stages of Economic Growth*, Cambridge University Press, London, 1960; *The Economics of Take-Off Into Sustained Growth*, London, 1963; Simon Kuznets, "Notes on Stages of Economic Growth as a System Determinant," in Alexander Eckstein(ed.), *Comparison of Economic Systems*, Berkeley, 1971; Alexander GershenKron, *Economic Backwardness in Historical Perspective*, Harvard University Press, Cambridge, 1962; Albert Fishlow, "Empty Economic Stages?" *Economic Journal*, March, 1965.

- 4) アジア諸国のオイル・ショックへの対処については、S. Naya, D. H. Kim and W. James, "External Shocks and Policy Responses : The Asian Experience," *Asian Development Review*, vol. 2, no. 1, 1984.
- 5) アジア経済の発展を見る視点として、もう少し広く社会政治文化をふくめて「文化変容」としての考察があり得る。しばしば「アジアの発展は、儒教圏ということと関係している」とか、「適正な経済規模であった」といった議論が行われる。たしかに本章での議論の内容は、経済分析としての細部を別としていえば、人類学者が「文化適応」cultural adaptation とか「文化変容」cultural change として論じたことと密接に関連しているし、また経済史家が「離陸」をめぐって行った「歴史における一般性と特殊性」の議論とも関係する。

文化変容は次のような問題を扱うという。(1)文化変容の変化率や型を変動させる内的外的要因は何か、(2)文化変容のたどる過程はどんなものか、(3)そうした文化変容を研究するモデルと方法にはいかなる道具を利用するのがよいか、(4)文化変容という概念と文化の伝播・進化・革新・蓄積・伝統といった観念とは、どう関係するか。

これらの変化をもたらす要因については、労働エネルギーの量を強調するマルキシストの考え(White)、生態環境への適応を重視する考え(Steward, Wittfogel, Woodbury)、宗教倫理(Weber)や文化の類型や伝承(Opler, Herskovits)が重要と考える学者もあり、Geertzのごとく本来の社会と文化のなかに変化を誘発するような緊張や不調和が内在するか否かに注目したり、社会組織は言語や心理とは別に独立して変化すると考える学者(Murdock)もあるという。

これらと比較して言えば、経済学者の主流の考えは、これらすべての要因に注意を払いながらも、主として生産と消費に関する経済現象が、順調な環境の下においては、他の社会・文化現象と半独立して進行するとするのである。但し技術・企業組織・政府活動・大企業大銀行の活動は特別扱いする。そしてもっぱら経済成長の過程ないしメカニズムに分析考察の力点を置く。非主流であるマルキシスト(Baran, Gurley)や従属論者(Dos Santos, Frank, Amin)は、主としてラテン・アメリカとアフリカを対象として経済的および非経済的要因が経済発展の阻害要因として働く場合を考察する。しかしまたそれへの批判も多い(O'Brien, Leys)。

これらについての主要な参考文献は次の如くである。

- Barneu, Homer G. 1953, *Innovation: The Basis of Cultural Change*, New York, McGraw-Hill.
- Geertz, Clifford 1957, "Ritual and Social Change, A Javanese Example," *American Anthropologist* New Series 59: 32—54.
- Murdock, George P. 1949, *Social Structure*, New York, Macmillan.
- Opler, Morris E. 1945, "Themes as Dynamic Forces in Culture," *American Journal of Sociology* 51: 198—206.
- Steward, Julian H. 1955, *Theory of Culture Change : the Methodology of Multilinear*

- Evolution*. Urbana, Univ. of Illinois Press.
- Herskovits, Melville J. 1955, *Cultural Anthropology*, New York, Knopf.
- Weber, Max 1922, *The Sociology of Religion*, Boston, Beacon.
- White, Leslie 1949, *The Science of Culture, A Study of Man and Civilization*, New York, Farrar, Straus.
- Wittfogel, Karl A. 1957, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, New Haven, Conn. Yale Univ. Press.
- Woodbury, Angus M. 1954, *Principles of General Ecology*, New York. Blakiston.
- Baran, Paul "Dependence and Underdevelopment in the New World and the Old," *Social and Economic Studies*, March 1973.
- Gurley, John G., "Economic Development: A Marxist View," in K. P. Jameson and C. K. Wilber (eds.), *Directions in Economic Development*, Notre Dame, Indiana, Univ. of Notre Dame Press, 1979.
- Santos, T. Dos, "The Structure of Dependence," *American Economic Review*, May, 1970.
- Frank, A. G. 1970, *Lumpenbourgeoisie: Lumpen Development, Dependence, Class and Politics in Latin America*, New York, Monthly Review Press, 1972.
- Amin, Samir 1976, *Unequal Development*, New York, Monthly Review Press.
- O'Brien, P. J., "A Critique of Latin American Theories of Dependency," in I. Oxarft et al (eds.), *Beyond the Sociology of Development*, 1975.
- Lall, Sanjaya, "Is Dependence a Useful concept in Analysing Underdevelopment?" *World Development*, Nov./Dec., 1975.
- Leys Colin, "Underdevelopment and Dependency: Critical Notes," *Journal of Contemporary Asia*, 1977.
- 6) この点について比較的早く注目したのは、篠原三代平教授であった。「経済大国の盛衰」東洋経済新報社 1984 年、また篠原三代平・長谷山崇彦・柳原透編「2000 年のアジア」有斐閣 1984 年参照。
- 7) 大川一司・速水佑次郎「日本経済の長期成長」日本経済新聞社 1983 年の引用する貯蓄率は、1887 年より 1939 年までの間最高 14.7 % である。
- 8) シンガポールの貯蓄率として、世銀報告は 42 % (83 年) と報告する。しかしこれはシンガポール政府およびアジア開銀の報告と矛盾している。このいずれによっても 82 年の値も 83 年の値も名目で 38 %, 実質で 37 % である。しかしこれは日本の過去最高値 34 % (76 年) を上回る。
- 9) フィリピンの貯蓄率は、70 年 19 %, 75 年 22.3 %, 80 年 27 % と上昇したが、それ以後下降に転じ、82 年 26.7 % である。
- 10) シンガポールでは中央俸約基金 Central Provident Fund を設け、雇用されている人が給与賃銀の 25 % (最高額月額 1500 S\$) を供託すると会社もしくは政府がこれと同額を同基金に追加供与してその個人の収入になり、将来年金として引出せたり、借入れたりできる。これが巨額なのである。これだけでもって個人貯蓄率が 33 % になる。長期的には、この貯蓄率は過大となるであろう。
- 台湾の場合、貯蓄率を高めているのは政府貯蓄が大きいことである。それは近年全貯蓄の 3 分の 1 前後に達し、民間貯蓄は 50 % 位である。個人可処分所得に対する個人貯蓄の割合は近年約 20 % であって、大体わが国と同水準にある。詳しくは、*Taiwan Statistical Data Book*, Council for Economic Planning and Development, Executive Yuan Republic of China を見よ。
- 11) これは A. Gosh, *Development Planning in South-East Asia*, Rotterdam University Press, 1974 による。同書は、インド、セイロン、韓国、台湾、マレーシアについて、資本係数のモデルによる計測を試みている。
- 12) 他地域の生産関数の吟味は本論文ではしないが、例えばパキスタンの成長の如きは、もっぱら労働投入量の増大によって行われたと思われる。農業やサービス部門では、それは可能である。

そのような時、資本のみならず、労働力も投入成長率が過小評価になりやすい、潜在失業者の投入による部分は数字にでないからである、このため労働の限界生産力は過大に出ていると思われる。

- 13) いま $\Delta Y/Y - \Delta L/L = B$, $\Delta K/K - \Delta L/L = C$ とすれば, g と α は, $B_1 = g + \alpha C_1$, $B_2 = g + \alpha C_2$ という連立方程式を解いて得られる。 $g = (B_1 C_2 - C_1 B_2) / (C_2 - C_1)$, $\alpha = (B_2 - B_1) / (C_2 - C_1)$ 。
- 14) この種の計算において、注意しなければならない事は、香港およびシンガポールの中継貿易とシンガポールの石油精製である。中継貿易は香港の統計においては輸出入とも別掲され、シンガポールの統計では輸出についてのみに別掲されている。シンガポールの輸出入の最大の品目は石油および石油製品である。これは本来のシンガポールの工業化とは言いにくく、やや中継貿易に似たところがある。なぜならば、他の国内産業との連関性が乏しいからである、いま仮にシンガポールの石油輸入の割合 82 年の 34 % を香港の 8 % と同一（国内用）として、他の輸入の比重を再計算すると、食糧 10.8 %, 石油 8 %, 他の一次産品 5.4 %, 機械 37.8 %, その他工業品 35.1 % となる。またシンガポールの貿易統計からは、インドネシアとの輸出入が除かれている。それは総計にも入っていない。国民所得統計の方は輸出入の総額のみで公表されている。
- 15) 台湾と韓国との差は、食糧輸入が占める割合が、82 年台湾 8 %, 韓国 12 % であることで、農業基盤の強弱の差が大きい。
- 16) シンガポールは例外であるが、先に論じた如く石油精製の急増によるもので、それを調整すれば他国と同様である。
- 17) 有効為替交換率 Effective Exchange Rate を 50~83 年くらいにわたって計算せねばならないが、その概要は篠原等編「2000 年のアジア」前掲書 pp. 9~12 参照。
- 18) その点については、S. Sekiguchi, "Japanese Direct Investment in Asia," 参照。また、S. Sekiguchi, "Japanese Direct Investment in Europe," in L. Tsoukalis & M. White (eds.), *Japan and Western Europe*, New York, St. Martin's Press, 1982; 小島清「日本の海外直接投資」文真堂 1985 年をも参照。
- 19) 金融政策については、S. Ichimura & M. Ezaki, "Economic Growth, Interdependence and Rivalry in East Asia," CSEAS Discussion Paper No. 105, 1985 および R. I. McKinnon, "Pacific Growth and Financial Interdependence: An Overview of Bank Regulation and Monetary Control," Pacific Economic Papers, No. 117, Australian National Univ. December, 1984.
- 20) この分配を示す指標において、おそらくインドネシアとフィリピンと香港とは過小評価されていると思われるが、今はこの点を詳論しない。

(市村 真一)

農村の変容

——東北タイの一農村の事例——

はじめに

この小稿で事例とする東北タイの一農村とは、コンケン市の東南約 15km に位置するドンデーン村である。行政的にはコンケン県（チャングワット・コンケン）、ムアング郡（アムパー・ムアング）、ドンハン行政区（タムボン・ドンハン）、ドンデーン村（ムバーン・ドンデーン¹⁾）のことである。この村は、1964—65年に水野浩一氏によって調査された。調査の結果は、水野 [1981] などを初めとする著書、論文によって知られている。1981—83年にかけてドンデーン村の再調査が行なわれた。この調査は、自然科学者を含む学際的チームによって行なわれた。その成果の一部は公表されている。主なものは、Fukui *et al.* [1983], Fukui *et al.* [1985] それに『東南アジア研究』23 巻 3 号に特集された諸論文などである。しかし、未だ分析されていないデータが多くある。調査全体の成果をまとめるには、さらに時間を要すると予想される。

本稿では、水野調査と今回調査のチームメンバーによって集められ、これまでに整理された限りの資料によって、村の何が、いかように変化したのか、あるいは、変化しなかったのかを論ずる。

I 地域と村の概要

通常、タイ国は四つの地域に分けられる。東北部は、面積的にも、人口的にも全国のおよそ 3 分の 1 にあたる。しかし、その地域総生産（GRP）は、国民総生産の 14.1 % しかない。1982 年の 1 人当りの GRP は、2658 バーツ（1 バーツは約 10 円）で、全国平均を 100 としたとき 40 にしかない [Thailand

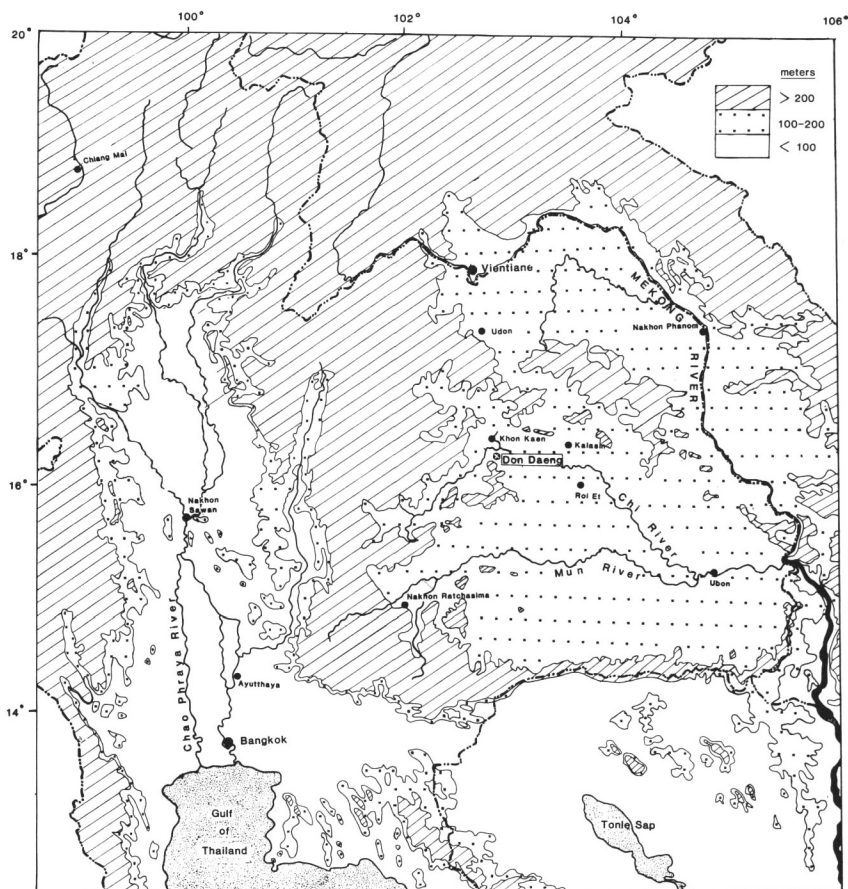


図1 コラート高原とその周辺 ([Fukui *et al.*, 1983 : Fig. I-1] より)

1984]。東北部は、タイ国の最貧地域である。

東北部は、コラート高原と呼ばれる標高 100—200m の緩やかな起伏をもつ高原上にある。西と南は、それぞれタイ中央平野とカンボジアとを隔てる低い山脈によって区切られる。北と東は、メコン河によってラオスと隔てられる(図1)。地域内に発するメコン河の支流は、集水面積が小さく、灌漑水源に乏しい。水田のほとんどは天水田である。土壌は、砂岩を母材とし、極めて養分

に乏しい。年降雨量は、1000—2000mmで、西に向かって減少する。これらの自然条件によって、極めて低収、不安定な稲作が行なわれている。

コラート高原上には、種々の民族による古い遺跡が残っている。しかし、今日の東北部なかんづくその中心をなすメコン河の一支流であるチー川流域を占拠しているのは、ラーオ系タイ人である。彼らがメコン河を越え、この地に最初の政治的拠点をもったのは、たかだか18世紀の後半であった [Keyes 1976], [Ishii, Ch. 1 (1) in Fukui *et al.* 1985]。その後、タイ中央政府のこの地に対する政治的、文化的、経済的影響は徐々に強まり、もとから親和性のあったこともあって、今日ではタイ国の重要な一地方となっている。

コンケンとは、チー川上流域に位置する県の名であり、同時にその県庁所在地の市の名称でもある。バンコクとは 1933 年に鉄道で、1960 年代の初期に全天候舗装道路によって結ばれた。距離はおよそ 450 km である。1962 年にコンケン市を全東部の中心とする政府決定がなされたが、それまでは東北 15 県の中でも目立たない小県の県庁所在地に過ぎなかった。この決定以来、地域内最初の大学を初めとする政府機関が集中的に置かれ、急速に発展した。最近 10 年間の市人口の増加率は、年平均 7.56 % で、1982 年の人口は 10 万人を超えている [Tsujii, Ch. 2 (2) in Fukui *et al.* 1985]。

コンケン市から幹線道路を 10 km ほど南下し、チー川を渡るとタープラの町がある。町にはコカコーラ工場や東北地域農業センターなどがあり、コンケン市の延長となっている。ここから東へ隣県のマハーサラカムへ向かう舗装道路が分岐する。この道をおよそ 5 km ほど行き、サワン村で未舗装路を北へとる。2 km 足らずでドンデーン村に達する。村からコンケン市に出るには、ドンデーン村あるいは隣村から市へ直行するピックアップ改造簡易バスか、サワン村まで歩き路線バスに乗る。往復 10 バーツである。

ドンデーン村の集落は、その南部に続く丘陵が東西に流れるチー川の氾濫原に臨む端に位置する。塊村であるが、同じ地形的位置に集落が多いので、塊村同士が互いに近接して並んでいる。村の水田は、主に集落の北に広がる低地にあり、畑地は南に続く丘陵に分布する。水田はすべて天水田である上、洪水害

を受けやすく、この村の稲作を一層不安定なものにしている。水田のある低地の中ほどにチー川の旧流路とみられるサン川が残っている。流れはないが、乾季の末近くまで水を湛える。その兩岸の急斜面が菜園となっており、そこで栽培されるトゥガラシなどの野菜が重要な現金収入源となっている。

II 調査データが示す村の変容

1 人 口

ドンデーン村は、およそ 120 年ほど前に、東方約 100 km のローイエット県デーン村あるいはムモン村からの移住者集団によって最初に拓かれたといわれている。その後、同じく東方のマハーサラカム県からも移住者があった [Kaida, Ch. 2 (1) in Fukui *et al.* 1985]。1912 年に村で大火事があったが、このときの戸数はおよそ 50 戸で、火事を機会に 10 戸ほどが分かれて派生村ができた。1925 年頃までは、移入者が多かったようであるが、1940 年代になると逆に移出者が増加した。移出者の多くは、チー川上流など主に西方に向かい、新たな土地を開拓した [林 1985]。

水野調査によれば、1964 年の村の人口は 810 人、世帯数は 132 戸であった [水野 1981 : 39]。口羽らが行なった 1981 年の全戸調査では、それぞれ 901 人、176 戸であった [Kuchiba *et al.*, Tables V-2 and V-4 in Fukui *et al.* 1983]。17 年間に人口数で 11 %、世帯数で 33 % の増加である。この間の人口増加率は、年平均 0.65 % に過ぎない。

1982 年後半に在村していた 235 人の結婚経験女性は、865 人の子供を生んでいる。この 865 人の子供を母集団として推定された平均寿命は、過去 30 年間に少なくとも 10 歳延びた。一方、235 人の女性の出産率は、ようやく 5～6 年前から低下を始めた。したがって、移出がなければ急激な人口増加があったはずである [福井 1985]。

1981 年の全戸調査の結果 [Kuchiba *et al.*, Tables V-51 to V-55 in Fukui *et al.* 1983] によれば、その年に在村していた 176 人の世帯主は、641 人の生存し

ている子供をもち、その中の190人、30%が離村していた。全離村者中の男女の比は、およそ100:70で男が多い。また、男女合わせた既婚/未婚比は、およそ100:50で既婚者が多い。既婚未婚の別と性別とによって移住先、職種ともまったく異なった様相を呈する。それらを検討すると、ドンデーン村からの離村には次のような特徴が認められる〔福井1985〕。第一は、開拓地への移住による離村である。既婚離村者の約30%が、これに該当する。第二は、近隣村間にみられる婚出婚入による人口移動である。この形による移動は、村の諸条件が同じであれば相殺し合うはずである。分析不十分のためこの点に関しては断定的なことはいえないが、注目すべき傾向は、ドンデーン村への婚入に関しては妻方居住の原則が認められるのに対し〔Kuchiba *et al.*, Table V-7 and V-8 in Fukui *et al.* 1983〕、婚出にあっては男女比がほぼ1で、この原則が当てはまりそうにないことである。第三は、非農就業男性の居住地である。彼らは近在の町から首都圏までに分散している。首都圏あるいは発展のめざましいコンケン市周辺に必ずしも限定されていない。第四は、女性移住の多さである。開拓地移住者にあっても女性の比率は高い。非農就業女性は、コンケン市で就業する独身女性にほぼ限られるが、それ以外に主婦として各地に分散している。出生率を決定するのが女性人口であることを考慮するとき、このような女性の移出が村人口の抑制にかなり貢献していると考えられる。

2 土地利用

農地は、水田（ナー）、畑地（ライ、面積の単位であるライと同じ）、園地（スアン）に三分される。タイ国の一般と同じである。1981年におけるドンデーン村民の所有地についてみれば、3者の比は100:19:6で、その合計は2770ライ（1ライは0.16 ha）である。

ドンデーン村の水田の多くが分布するチー河の氾濫原は、10幾つかの浅い皿状の地形単位に分かれる。この地形単位は、ノーングと呼ばれ、それぞれに固有の名が与えられている。開村以来つぎつぎと移住してきた農民たちは、その出身地グループ毎にいずれかのノーングを占拠していった。開田はノーングの

表1 水田所有、耕作面積の変化、1964—81年

	1964年*	1981年**
全人口 (人)	810	901
全世帯 (戸)	132	176
所有面積 (ライ)	2,022	2,199
所有世帯 (戸)	103	140
1戸当り所有面積 (ライ)	19.6	15.7
耕作面積 (ライ)	1,955	2,263
耕作世帯 (戸)	119	130
1戸当り耕作面積 (ライ)	16.4	17.4
所有面積/全人口 (ライ/人)	2.50	2.44
耕作面積/全人口 (ライ/人)	2.41	2.51

* [水野 1981: 82]

** [Kuchiba *et al.*, Tables V-27 and V-28 in Fukui *et al.* 1983]

底部から始まり、皿の縁に向かった。開田が縁まで達していなくとも、底部から縁までの高度の異なる細長い一続きの地片毎に慣習法的所有権が確立されていた。村の古老によると、現在水田となっている土地のほぼ全部について所有権が確立されたのは、1925年前後である。当時の所有者として52人の名前が知られている。彼らは、所有地のおよそ半分をすでに開田していた [Kaida, Ch. 2 (1) in Fukui *et al.* 1985].

残りの半分が開田され、水田面積が今日のそれとほぼ等しくなったのは、かなり短期間の間の出来事であったようである。すなわち、1939年頃、所有地を役所に届けることが義務づけられるようになり (ポートー6)、それを機に一気に開田が進捗したといわれる [ibid.]. 1950年代初めの航空写真は、当時の水田区画が今日とほとんど変わらないことを示している。

水田の所有、耕作状況を1964年と1981年とで比較したものを表1に示す。所有、耕作面積ともに増加しているのは、隣接村民からの購入、貸借によるものである。1戸当りの所有面積は、約20ライから16ライへ20%近くも縮小し、一見、細分化が進んでいるように見える。しかし、これは人口を上回って世帯数が増加したことによっているもので、通常の意味における細分化とは異なると考える。ちなみに人口1人当りの面積は、この17年間にほとんど変化がなく、およそ2.5ライであった。

表2 畑地所有, 耕作面積の変化, 1964—81年

	1964年*	1981年**
所有面積 (ライ)	462	423
所有世帯 (戸)	88	70
1戸当り所有面積 (ライ)	5.2	6.1
耕作面積 (ライ)	497	431
耕作世帯 (戸)	124	71
1戸当り耕作面積 (ライ)	4.0	6.1

* [水野 1981: 82]

** [Kuchiba *et al.*, Tables V-31 and V-32 in Fukui *et al.* 1983]

水田になりえない高みの土地は, 商品作物としての畑作物が栽培されるようになるまでは放牧地としての意味しかなかった。このような土地に対する個人の所有権は慣習法的にも存在しなかった。第2次大戦前後に棉が栽培されるようになったが, 焼畑形式の栽培であったため土地を連続的に使用することがなく, 所有権は発生しなかった。所有権が認められるようになったのは, ケナフの栽培が始まってからである。丁度この頃, 所有権の自己申請制から簡易登記制(ソーコー1)に変わったことが, 畑地に関する所有権の確立を促進した [ibid.]。

表2に, 1964年と1981年における畑地の所有, 耕作状況を示す。1964年にはケナフが主たる畑作物であり, 1981年にはすっかりキャサバに置き換わっている。前者は, 集約的な作物で, 面積当りの収入も相対的に大きかった。後者は, 粗放な栽培によるもので, 大きな面積を経営するほど有利である。このような作物栽培の性格の違いが表の数字に表われている。すなわち, 所有者, 耕作者数が減少し, 1戸当りの所有および耕作面積が増加した。

園地は, 果樹園と菜園とからなる。果樹園は, 集落に続く丘陵地上にある。パンレイシ, マンゴーなどが植えられているが, さほど重要ではない。私有地である。経済的に顕著なのは菜園である。菜園は, 一部を除いてサン川沿いの公共用地にある。公共用地ではあるが, 小区画毎の個人の使用权は極めて明確である。使用权の売買, 相続も行なわれる。日常的には, 所有しているのと変わらない。私有と公共地の耕作権を合わせて所有とすれば, 1981年における園地の所有面積, 耕作面積は, それぞれ 142 ライ, 129 ライ, 所有者数, 耕作

者数は、104戸、125戸、1戸当り所有面積、耕作面積は、1.36ライ、1.03ライであった。水野調査時の耕作者数は80戸あまりと考えられ、この17年間に耕作者数が大幅に増加したことが明らかである。これは、過去10年の間に菜園の産物が換金作物となったためである。なお、上に述べた1戸当り面積は、果樹園を含んでいる。菜園だけに限定すれば、1戸当りの面積は、さらに小さい。

1964年には、200頭の水牛、63頭の肉牛、17頭の競争馬が飼われていた〔水野 1981: 54〕。1981年の全戸調査によれば、それらは、それぞれ273、62、37頭になっていた〔Kuchiba *et al.*, Table V-43 in Fukui *et al.* 1983〕。これら大家畜の飼糧は、すべて村域内で調達される。すなわち、収穫跡地、作付けのない耕地、湖沼の周辺、路傍、荒蕪地に放牧され、また、稲作期間中には、畦畔の草を刈ってきてやらねばならない。耕地の拡大に伴って、飼糧獲得は困難になりつつあり、草の量が飼育可能頭数を制限している〔Yano, Ch. 7 (2) in Fukui *et al.* 1985〕。

3 交通・通信

東北部は、通信運輸の近代化が遅れ、また、その民族構成からも、中央タイの人々にとって長く知られざる地域であった〔Ishii, Ch. 1 (1) in Fukui *et al.* 1985〕。しかし、フランス植民地勢力の台頭とともに、それに対抗すべくタイ政府の関心が向けられるようになった。そのひとつが1900年完成のバンコク＝ナコンラーチャシーマ間 264km の鉄道敷設である。1929年には、それはウボンに達した。しかし、ナコンラーチャシーマから北方への延長は遅れ、コンケンには1933年、メコン河沿いのノングカイはやっと1955年になって結ばれた〔Donner 1978: 172-173〕。また、全天候舗装道路（フレンドシップ路）がコンケンにまで延長されたのは1963年、水野氏がドンデーン村の調査を始めた前年であった。

1955年にドンデーン村から村の南を走るターブラ・マハーサラカム道路（208号線）への枝線ができた。それまでは村人がコンケン市に出るには、徒歩で北に向かい、チー川を渡し船で渡った。枝道路は、その後、1966、1981年に改修

されたが、現在でも未舗装である [Kaida, Ch. 2 (1) in Fukui *et al.* 1985]. この道を通してターブラ、コンケン市へ直行するミニバスが、1975年以来1日2往復、1978年以来4往復するようになった。

村の電化は、1976年であった。1964年には全世帯の21.1%にラジオがすでに普及していたが、1980年には72.7%に増加している。1980年におけるテレビの普及率は、12.2%で、多くは村の雑貨屋や食べ物屋にある [Kuchiba *et al.*, Table V-86 in Fukui *et al.* 1983]. したがって、実際の視聴者率はもっと高い。

4 自給的経済

村の経済構造は、自給自足的なものから市場経済的なものへと変化しつつある。しかし、今日でも自給的要素はかなり強く残っている。その最たるものは、米生産である。村が貨幣経済を経験してから久しいにもかかわらず、依然として米が商品作物化していないのがドンデー村の経済の最大の特徴である。もっとも、穫れた米をまったく売らないというのは、厳密には正しくない。緊急に現金が必要な場合、米倉に十分な蓄えがある場合には売ることもある。東北タイの北半分はモチ米圏であり、ドンデー村で栽培される米のほとんどはモチ品種である。モチ品種はウルチ品種より安いので、もし販売を当初からの目的とするならばウルチ品種を栽培することが考えられる。東北部内でも米の商品化が進んだ村ではウルチ品種の作付け割合が大きい。しかしながら、ドンデー村では豊作年の翌年あるいは余裕のある農家で、ウルチ米の作付け割合が大きくなる傾向は確認できなかった。

自給的要素が稲作だけに限定されるとは限らない。多くの活動が現物と現金の両方を目的とする。水牛の飼育は一部は現金収入のためであるが、役畜の自家調達でもある [Yano, Ch. 7 (2) in Fukui *et al.* 1985]. 野菜は70%以上の世帯が栽培しており、今日では重要な現金収入源のひとつとなっているが、そのすべてが換金されるわけではない。世帯によっては、もっぱら自家消費用の野菜しか作っていないこともある [Fukui and Anukul, Chap. IV (5) in Fukui *et*

al. 1983]. 魚獲りや、日常の道具類、衣類、敷物などを作る手仕事も重要である [小池ら 1965]. 獲れた魚の一部、手仕事の産物の一部は換金される。野性の植物、昆虫を含む小動物なども盛んに採集、捕獲される。日常のおかずに占めるこれらの重要性は、未だ大きい [野間 1982]. これらのうちの商品価値の高い動植物は換金される。養蚕も行なわれているが、自らの衣類を作るためでもある。棉を栽培して自家用に衣類を作ることは、今ではほとんどみられないが、綿を買ってきて紡ぎ、織ることは今日でもみられる。建築材料は購入が多くなっているが、ときに農地に残る木を倒し、板に挽く。村外から専門の大工を雇うことはほとんどない。

5 換金作物の普及

農業による現金獲得は、第2次大戦前後の棉の栽培に始まった。原綿輸入の激減による一時的な異常高値によって触発されたものである [Ingram 1971: 121]. この棉ブームは、ドンデーン村にも及んだが、終戦とともに去った。

次いで栽培されたものはケナフである。ケナフの需要増は、当時の東パキスタンにおけるジュートの輸出不振に負うところが大きい。ジュート代替物としてのケナフ市場が出現した。ドンデーン村におけるケナフは、棉の焼畑跡地に植えられた。ケナフは、収穫後に水漬して繊維を分離しなければならないので、多量の水を必要とする。その時期は、稲の収穫期と重なる。稲刈りが終わってからだと水が豊富ではない。このようなわけでケナフ栽培には大きな季節的労働のピークがある。その外に除草の手間も大きい。ため1世帯当りの栽培面積は小さくならざるをえない。水野氏がドンデーン村を調査した1960年代の中頃は、丁度ケナフ栽培の時代であった。同氏は、世帯当り4ライを超えるケナフ栽培は困難であり、また、わずか数年の間に価格が3分の1～4分の1にも低下したことを報告している [水野 1981: 51]. この頃のケナフの価格低下は、統計によっても示されている。1958—60年に1ライ当りの価値（平均収量にパソコクの卸売り価格を乗じたもの）が1531パーツであったものが、1965—67年には569パーツにまで下がった [Ingram 1971: Table XXVIII].

全国のケナフ栽培面積（そのほとんどが東北部にある）は、1950年代初期に数万ライに過ぎなかったものが、1960年代初期には100万ライを超え、1970年代にはいると250万ライを超えた。しかし、1976/77年には100万ライ程度に減少し、その後再び増加に転じている。そして、同時に全生産量に対する輸出量の割合が小さくなった [Thailand 1979]。これは、もっぱら繊維材料として輸出用であったケナフが、パルプ材料として国内で使用されるようになったためと思われる。パルプ材料としてのケナフは、繊維の分離を必要とせず、したがって、生産者に帰する付加価値が小さい。このため畑地面積の限られたドンデーン村では、今日ではほとんど栽培されていない。

もっとも最近の畑作物はキャサバである。これは家畜飼糧として EC、ヨーロッパ共同市場向けに輸出される。EC は、域内農業の保護のため種々の輸入規制を決めているが、根菜類の輸入については規制が緩かった。この隙をついてタイのキャサバ輸出が急速に伸びたものである。1978年には600万トンを超える量が輸出された [Thailand 1979]。このため EC 内の飼糧生産にかなりの影響をおよぼすこととなり、EC はタイ国に対して自主規制を強要してきている。事実、1978年以降は輸出量は減少してきている。

一方、トウガラシを始めとする野菜は国内市場向けであり、コンケン市の発展とともに着実に需要が増加している。しかし、それらが換金作物として盛んに栽培されるようになったのは、せいぜいここ10年以内のことである。1960年代半ばには、「野菜のうちでもキュウリと長英豆はよく売れるので、好んで栽培され」ていたが、「野菜の栽培は、販売を目的とするよりは、自給自足のためであり、消費量以上に余剰があれば売れる程度であるにすぎな」かった [水野 1981 : 51]。今日ドンデーン村の菜園の主産物であるトウガラシは、その後、チー川左岸、コンケン市東方のある村から伝えられたといわれる。それは従来のもより小さくて辛みのきつい品種であった。村の女達が自らコンケンやタープラの市場で小売することを知ったのも、同じ村の影響であるといわれている。

6 農外就業

農閑期あるいは凶作年に収穫によって現金収入をうることは、この村でも古くからあった。しかし、地方都市が未発達で交通事情が悪かった頃の出稼ぎは、数カ月以上にわたって遠方へ出掛けるものであった。中央平野の稲作労働者として東北部から多数が季節的に移動したことはよく知られているが、これを自ら経験した村の生存者はいない。もうひとつ前の世代であったという。父親が長い旅から米袋を担いで帰ってきたのを覚えている老人が多い。彼らはナコンラーチャシーマまでは徒歩であったという。生存している老人の中には、南タイの鉱山で働いたり、博労となって各地を旅した者がいる。

1964—65年には、「農閑期には村の女達50—60名がタープラのケナフ選別工場に働きにでる。(中略) 農業賃金労働者は2—3例あるのみである。(中略) 俸給生活者としての先生2名を除くと、この村で給料を受けているのは村長、区医、小学校の小使いの3名である」と、水野は書いている〔水野 1981: 58〕。1981年には、176名の世帯主のうち、13名がタープラの農業センターで、5名がコココーラ工場で働いている。その外に11名が何らかの給与を受けている〔Kuchiba *et al.*, Ch. V in Fukui *et al.* 1983〕。

7 農家経営調査

以上に述べた村の経済構造の変化を、水野調査と今回調査の農家経営調査データで比較すると、表3のようになる。

1964年には村全体の粗所得の67.4%は農業からのものであったが、1980年には45.7%に低下している。その分だけ農外所得が増加した。村経済の規模自体も大きくなっている。それは15年間に年平均6.59%で成長した。この成長には、農業部門の成長(年率3.86%)よりも農外部門のそれ(年率10.29%)がより大きく貢献している。先述の通り、この期間の人口増加率は低かったもので、1人当りの粗所得も年平均5.84%で増加した。

表3 粗所得の変化, 1964—80年

	1964 (%)*	1980 (%)	平均年増加率 (%)**
農業粗所得***	371,078 (67.4)	2,359,022 (45.7)	3.86
農外粗所得	179,215 (32.6)	2,802,225 (54.3)	10.29
合計粗所得	550,292 (100)	5,161,247 (100)	6.59
全人口 (人)	810	901	0.65
1人当り粗所得	679	5,728	5.84

* 水野による93戸の調査世帯の合計値 [水野 1981: 60] を全戸数132戸に拡大して求めた。

** 期間中の全国卸売り物価指数が3.6倍 [Tsuji, Ch.2(2) in Fukui *et al.* 1985] となっていることに基づいて計算した。

*** 米生産による粗所得は、1964年については1961—64年の、1980年については1978—83年の平均年粗生産量に価格 (1964年7.5バーツ, 1980年25バーツ/kg) を乗じて推定した。

8 農地所有と配分

1964年における村の農地の自小作別構成は、自作地 92.4%, 小作地 7.6% であり、自小作別農家構成は、下記の通りであった [水野 1981: 表12, 13]。

自作・貸出	4.0%
自作	65.9%
自小作	6.3%
小自作	2.4%
小作	0.8%
その他	20.6%

面積的には自作地が圧倒的に多いのに自作農が大多数を占めないのは、「その他」とされた戸数が多いためである。「これらの世帯は原則として土地を所有せず、ふつう妻の両親が所持する田・畑で働き生計をたてている。そういった意味において経済的に親の家族に依存する半独立的な家族であり、親族共同体の一部として農業に従事している世帯である」 [同上書: 84]。また、これらの世帯は、「子供夫婦が親の家から完全に分離・独立して自作農へと成長する過程においてみられる」 [同上書: 75] ものである。

1981年における小作地率は次のようであった [Kuchiba *et al.*, Table V-39 in Fukui *et al.* 1983]。

水田	42.2%
畑地	32.5%
園地	6.1%

水野調査時と比べて、極めて顕著な増加が示されている。これらの小作地は、

127 件の地主 = 小作関係によって耕作されている。このうちの 84 件は、親子きょうだいの間の貸借であり、より関係の遠い親戚間が 18 件、隣人間が 25 件である。また、小作料は、77 件が無料、42 件が刈分、8 件が定額である。親子きょうだい間は無料が原則で、通常、親戚間が刈分、隣人間は刈分あるいは定額小作である。そして、定額小作は、畑地にのみみられるのが特徴である [ibid.: Tables V-40 to V-42].

66 戸のサンプル世帯についての詳しい分析によれば [宮崎 1984]、刈分小作の小作料率には、33 % から 50 % までの幅があり、地主 = 小作間の関係の疎密を反映している。すなわち、親戚間が低く、隣人間が高い。また、全体として、その率は低下の傾向にある。

水野調査時と同様に、今日でも家族周期のある段階にみられる親子世帯間の共同耕作がある。このような共同耕作の当事者間の労働、資本、土地の提供の比率および生産物の分配率にはさまざまな変異がみられる [Funahashi, Ch. 9 (1) in Fukui *et al.* 1985]。生産物の分配率がまったく定められておらず必要に応じて消費する場合、すなわち、具体的には米倉を共にする場合には、その関係は「ヘットナムカン、キンナムカン (共働・共食)」と呼ばれる。この語は、親族間の相互扶助の規範としても使われる。このような場合、経済的に独立した複数世帯間の共同耕作というよりは、当事者世帯を一つの家計単位とみなした方が適切である。生産物の分配率が一定率に定められ、両親の高齢化などのために労働の寄与が片方に偏ってくると、その関係は刈分小作に近くなる。

以上にあげた無料貸借、種々の小作料率の刈分小作、定額小作、それに親子間の共同耕作といった慣行制度によって農地、労働、生産物が再分配されている。その結果、1 人当りの米所得には農地所有による差があまりない [宮崎 1984 : 59-60]。これらの慣行制度は、生存に必要な最低限の食糧が各自に確保されるように機能していると考えられる。

Ⅲ データが意味するもの

前節に述べたドンデーン村の変容あるいは不変容を示すデータは、以下の三つに要約されよう。すなわち、第一は、稲作を主とする自給経済が存続していることである。第二は、人口増加率が極めて低いことである。そして、第三点は、主に農外収入の増加による生活水準の向上である。

自給経済の存続は、土地条件が劣悪なため稲作の生産性が限界地的であることと、現金収入源が依然として不安定であることによると考えられる。そして、このような理由で存続している自給経済が、村の人口扶養力を基本的には制限しているので、低い人口増加率が結果していると考ええる。

1 米生産性

アジア稲作圏は、温暖多雨なモンスーン気候と山の多い地形の重なった地域に成立している。山と山との間に発達した沖積平野は集水面積が大きく、そこからの流れを制御できれば、平野が直接受ける雨量以上の水を利用できる。この利点を生かしたのが水田農業である。ところが稲作圏の中にあっても、高原や大きな平野の周辺を形作る段丘などでは、集水面積が小さく、天水依存度が大きい。溜池などで域内の降雨を貯水するか、流域を越えた取水が必要である[Fukui, Ch. 1 (4) in Fukui *et al.* 1983]。前者の大型のものはコラート高原上にもいくつかあるが、地形的に適地が少ないので今後の増加は望めない。小さな溜池では生活用水にしかない。後者の方法は、巨大な土木工事を必要とする。コラート高原の場合、それはメコン本流を塞止めるパモンダム計画である。この巨大プロジェクトの実現は近い将来には期待できそうにないし、また、たとえ実現してもコラート高原の水田のおよそ3分の1を潤すに過ぎない。

このようにコラート高原の地形条件は、天水稲作を余儀なくさせる。この高原では、技術、資本、組織力の不足によって灌漑が不可能なのではない。地形条件が本来的に灌漑を拒む。

灌漑がなくとも十分な降雨量に恵まれれば稲作は安定する。しかし、コラート高原の降雨量、とくにドンデーン村を含む西南部のそれは、天水稲作を行なうには限界に近いほど少ない。その結果、稲作は極端に不安定である。

天水依存水田で年間何カ月の継続した湛水状態が期待されるかを、熱帯アジア各地の月別気温と降雨量とに基づいて試算した例がある [Kawaguchi and Kyuma 1977]。試算のために仮定した条件は、土壌の最大容水量が100mm、畦畔によって地表に貯水される量が200 mm、地下浸透による損失が月100 mmである。これらの仮定の下にソーンスウェイトの方法に準じて試算を行なった結果によると、125 個所の測候所は九つの気候区に分類され、コラート高原は、V区に属する。この区に分類された32 個所の中の25 個所では連続湛水期間は2 カ月かそれ以下である。

天水稲作にとって少なくとも120 mmの月雨量が必要であると仮定し、5年のうち4年はその月間雨量がえられる月を計算すると、コンケン県を含むコラート高原西部では9月1カ月しかない。この条件を満たす月数が4カ月あるのは、メコン本流沿いの諸県にかぎられる [Hoshikawa, Ch. III (1) in Fukui *et al.* 1983]。

タイ国の県別米生産量の経年変動は、五つの県で変動係数が30 %を超える。このうちの4県はコラート高原の西南部にある [内田ら1981]。熱帯アジア全体において県別米生産量の変動係数が25%を超える生産不安定地域は、スリランカのドライゾーン、インドのデカン高原、ビルマのドライゾーンの中央部、それにタイのコラート高原である [Fukui 1982]。

水野がドンデーン村で聴き取った村全体の籾生産量は、1961年123 トン、1962年44トン、1963年46トン、1964年8トンであった [水野1981: 48]。今回調査時のそれは、1978年30トン、1979年53 トン、1980年34 トン、1981年256 トン、1982年90 トン、1982年約500 トンであった [Kohno and Kaida, Ch. 8 (3) in Fukui *et al.* 1985]。不作年がたびたびあるというよりも、ときどき豊作があるといった方が適切な表現であろう。

コラート高原の大部分は、砂岩風化物を母材とする土壤に覆われている。作

物の養分含量は少なく、稲作にとっての物理性もよくない。湛水条件下の土壌粒子の沈降が早く、代掻き直後でないでと挿秧が困難である。このような土壌の性質は、降雨に恵まれた年にあっても、単位面積当りの低収量を結果し、季節的な労働のピークとくに植付け時のそれを大きくする。

雨季初期の降雨は、間欠的にやってくる。まとまった降雨がある度に田植えが進行する。これを数回繰り返して、全部の田の植付けが終了する。すなわち、田植え時の労働ピークは、日単位で細かくみれば、降雨に同調した波状である [Miyagawa and Kuroda, Ch. 7 (1) in Fukui *et al.* 1985]。稲作における労働集中のピークが大きいことはよく知られているが、天水稲作における植付け時のピークがとくに大きいのはこのためである。また、コラート高原の土壌は、粘土含量が低いものが多いため、代掻き直後でないでと移植できない。田植え時の家族内の労働分配にみられるように、田植え当日には男手が代掻き、女手が田植えに従事する [小池ら 1985]。このことは、ピークをさらに大きなものにする。

灌漑を困難にする地形条件、極端な収穫不安定を結果する降雨条件、低収と大きな労働ピークをもたらす土壌条件とによって、集約化は阻まれ、余剰生産は困難となる。家族労働の許す限りの土地を耕作しても、低収と不安定性とによって、恒常的な余剰生産を生み出すことができない。これを稲作の限界地性と呼ぶこととする。

コラート高原の稲作が不安定性をもって特徴とする限り、稲作農民の生活も不安定となる。とくに現金獲得部門が小さかったかつての村生活は、ときに棄村を余儀なくさせるほど厳しいものであったといわれる。しかし、この不安定性自体を改善することはできなくとも、生活への影響を最小限にする手段が存在する。それは、耕地面積を最大限にし、豊作年の収穫を備蓄することである。その結果、「一年の豊作があれば三年は穫れなくてもよい」といった稲作が行なわれる。

2 自給稲作の存続

稲作以外の収入源が十分に確保されれば、米は上述の理由で換金作物とはな

らないにしても、消費米流通に支障のない今日、自給稲作は消滅してもよさそうである。現在、ドンデーン村における米生産による所得は、世帯所得源の1割にも満たない [Tsuji, Chap. 2 (2) in Fukui *et al.* 1985]。これに比べれば、稲作に投入される労働の量や村人一般の水田に対する価値観は、不釣り合いに大きい。これは農業、非農業を問わず現金収入源の安定性に対する不信感によるものと考えられる。

ドンデーン村の畑地でこれまでに栽培された作物のすべてが、短期間しか継続しない一種のブームに乗ったものであることは、既述の通りである。菜園での換金作物の栽培とその販売は、畑作物に比べてより堅実であり、土地消費型でないだけに将来も有望である。しかし、このように高度に商品化した野菜栽培が村に導入されてからの日が浅い。

一方、農外収入は増加の一途を辿っている。以前に比べればその定期性が増したとはいえ、中高年者にとって、村内自営業を除いては依然として安定収入源とはいえない。より有利な農外収入を望み、かつ、その能力のある者にとって、在村を続けることは必ずしも得策ではない。

以上の二つの理由すなわち稲作の限界地性と現金収入の不安定性とによって、もっぱら自給米生産を目的とする稲作が商品化もせず、かといって消滅もせず、存続していると考ええる。

稲作が伝統的な形のままで存続していることは、先に述べたような稲作における農地、労働、収穫の配分をめぐる諸慣行を温存させている。小作地率が過去17年間に顕著に増大したのは事実である。しかし、その内容を検討すれば、親族間の相互扶助を目的とした無償貸与、関係の疎密を反映した刈分小作が依然として根強く残っていることが分かる。小作地率の増加は、単なる階層分化以外の原因によると考えられる。

既述のように水野調査時と今回調査時との間には、土地に対する人口圧力にほとんど変化がなかった。また、土地消費型でない野菜作の盛行を除いては、農業部門の基本的な構造は不変であった。にもかかわらず、小作地の割合が大幅に増加した。この現象は、人口増加や農業内部の変化によるものではなく、

表4 人口の年齢構成の変化, 1964—82年

年齢階級	1964(%)*	1982(%)**	増 減 (人)
0—4	140(17.3)	84(9.3)	-56
5—9	122(15.1)	95(10.6)	-27
10—14	113(14.0)	115(12.8)	+2
15—19	92(11.4)	117(13.0)	+25
20—24	54(6.7)	71(7.9)	+17
25—29	54(6.7)	83(9.2)	+29
30—34	45(5.6)	73(8.1)	+28
35—39	50(6.2)	53(5.9)	+3
40—44	34(4.2)	39(4.3)	+5
45—49	25(3.1)	39(4.3)	+14
50—54	29(3.6)	51(5.7)	+22
55—59	26(3.2)	28(3.1)	+2
60—89	26(3.2)	52(5.8)	+26
計	810(100)	900(100)	+173-83=+90

* [水野1981: 39]

** [Fukui, Ch. 3 in Fukui *et al.* 1985]

人口の年齢構成の変化によるものと考えられる。

表4に、1964年と1982年末の村人口の年齢構成を比較し示した。10歳未満の絶対数、割合ともに、1964年で高く1982年で低い。15—34歳の年齢層の絶対数と割合は、その逆になっている。前者が近年の出生率の低下によるものであることは、既述の通りである。後者は出生率低下以前の世代であり、1982年には一種の団塊の世代となっている。この団塊の世代に属する者の多くは、結婚後間もない世帯主である。人口増加率を上回る世帯数の増加率は、このような人口構成の変化による。

この団塊の世代の世帯主は、通常は未だ農地を相続していない。両親の世帯とともに共同耕作を行なうか、その農地を無償借用あるいは刈分小作するのが普通である。いずれにせよ、完全には経済的に独立していない。このような半独立的世帯の絶対数の増加が、小作地率の増大となって現われていると思われる。

3 人口扶養力

水田面積あるいは米生産量と人口との関係に関する分析は、いまだ完成して

いない [Fukui, Ch. 3 in Fukui *et al.* 1985]. しかし、村全体の傾向として、1940年頃を境として人口の移入が移出に転換し、その時期が村内開田可能性の消滅とほぼ同じであることは、先述の通りである。コンケン東方のドンダボン村での調査 [Lefferts 1974] によると、この村でもほぼ同じ時期に同じ現象があったとされる。そして、それ以降は村人口が停滞期に入ったとされる。

水野調査時以前のドンデーン村の人口動態は不詳であるが、おそらく同氏の調査の相当以前から人口増加率は低く保たれていたと想像される。同氏は、1956年から1964年の間に18戸115人が全戸転出の形で移出し、米の不作年にその数がとくに多いことを報告している [水野 1981: 表1]。今回調査の一環として、ドンデーン村からの移出者が多いウドンタニ県の開拓村を訪問したが、移出者達が移出の理由としてあげるのは、不十分な米生産である [林 1985]。

水野調査時以降のドンデーン村の人口動態については既述の通りである。すなわち、この間の増加率は0.65%に過ぎず、1人当りの水田面積は、ほぼ2.5ライで一定に保たれた。同じ期間に農外収入の機会が増え、平均5.84%という高い年率で1人当り粗所得が成長したにもかかわらず人口が停滞していたことは、米生産量の増加、そして、稲作の集約化がない限りにおいて水田面積が、村の人口扶養力を決定していたものと考えざるをえない。

村の古老達によると、かつての生活は非常に難儀なものであったという。米が枯渇してくると水増ししたおかゆをすすり、野性の救荒食をもって飢えを凌いだ。ときには牛車をつらねて遠くナコンラーチャシーマ県までさまよい歩き、一握りを単位に米を求めた。村人が遠出をするときには、その目的などによって色々な縁起を担ぐが、米を求めに遠出するときのための特別の縁起がある [林 1985]。このことは、そのような遠出がけっして稀なことではなかったことを物語る。東北タイを舞台にした小説「東北タイの子」[カンブーン・ブンタウィー 1976] に描かれた旱魃による凶作と放浪の旅のありさまは、ドンデーン村民にとっても他人事ではなかった。

このように生活が難儀であった主な理由は、米の不作時に現金収入がなかったことであるといわれる。この点において、現金収入の増加が歓迎されている。

1964年に、93戸のサンプル農家の家計において、米の購入費が36%を占めていた〔水野 1981：表9〕。1980—81年の家計支出の項目のうちで食糧費がもっとも多額であったのは73.3%，2番目に多かったのが21.0%の世帯であった〔Kuchiba *et al.*, Table V-71 in Fukui *et al.* 1983〕。1980—81年に収穫されたトウガラシの約半分は、米と物々交換された〔Fukui and Anukul, Ch. IV (5) in Fukui *et al.* 1983〕。

以上のように米以外の収入によってかなりの量の米を購入している。したがって、現金収入が村の人口扶養力を大きくしていることが一応は考えられる。しかし、先に示したデータは、それを示唆していない。現金収入による米の購入は、飢えと栄養失調、それにかつてのような米を求めての放浪の旅をなくしただけであって、人口扶養力の増大には積極的に貢献するには至っていないものと思われる。

4 農外就業による所得水準の向上

村の所得水準の急速な改善が農外所得の増大に負うものであり、それはコンケン市などの発展と交通機関の発達によることは先に述べた。しかしながら、所得水準の改善には、在村人口の停滞も与えていると思われる。すなわち、村経済の拡大が人口増によって相殺され、1人当りの所得の増加を目立たないものにしてしまうことがなかったのではないかと思われる。

タイ政府による1974—76年人口変動調査によると、東北部の自然人口増加率は、年率3.38%であった〔小林 1984：132〕。今、過去16年間にドンデーン村で人口の移動がまったくなく、在村人口がこの率で増加したと仮定すると、1981年の村人口は約1379人となるはずで、同年の実際の数より478人多い。これだけの余分の人口を抱えて、なお上述の1人当り所得の向上が可能であったかどうかは、極めて疑問である。

おわりに

農業のある面では商業化が進行し、農外就業も増大している一方で、もっぱら自給米生産を目的とする伝統的稲作が残っている。前者による所得水準の向上にもかかわらず、後者が村の人口扶養力を決定している。このような一見奇異ともいえる状態の基本的な原因は、つまるところ「余剰を生じえない稲作」にもとめられる。扶養力を超えた人口は、村外に活路を見出さねばならない。その手段は、伝統的には開拓移民である。それは、今日でも意味を失っていない。

ドンデーン村人の、そして広く東北タイ、コラート高原に住むラーオ系タイ人の基本的特徴は、開拓移住稲作民であるといえよう。ここに「開拓移住」というのは、焼畑耕作民のように新たな耕地を求めて他の場所へ移動するという意味ではない。彼らの伝統的生業はあくまで水田稲作であり、したがって、定着的である。しかし、村の人口が増加したとき、農業を集約化させて村の人口扶養力を向上させるのではなく、村外の未墾地の開拓によって耕地面積を増大させ、食糧を確保する。この開拓移住は、普通、近親関係にある数家族を中心とし、それに近隣の一部がくわわる形で行なわれる。これを「ハーナーディー（良い田を求める）」と呼ぶ。ハーナーディーこそが、ラーオタイ系社会の基本的性格を理解する鍵であると考ええる。

ドンデーン村自体が、かつて移住民によって形成されたことは既述した。ドンデーン村周辺の30カ村の中で200年を超えて同じ村域を維持している古い村は四つしかなく、100—200年前の成立とされるものが9カ村、残りは100年以下の歴史しかもない [Maekawa and Koike, Ch. 2 (3) in Fukui *et al.* 1985]。コンケン市の東10 kmにあるドングボング村は、1922年に8家族しかいなかったが、その年マハーサラカムから29家族、167人が移住してきて今日の村の基礎ができた [Lefferts 1974]。

コラート高原におけるタイラーオ系住民による開田が、何時頃からハーナー

ディーと呼ばれる自発的移住に主としてよるようになったのかは明らかでない。記録に残るメコン河を越えてのラーオ人のチー川流域への移住は18世紀後半に始まるが、それらは王族などの指導者を戴く屯田の移住であった。1826年のタイ・ラーオ戦争以後は、バンコク政権の意図的な移住政策によってメコン左岸からコラート高原へかなりのラーオ人が移動させられた [Ishii, Ch. 1 (1) in Fukui *et al.* 1985], [Keyes 1976].

チー川流域の開拓は下流から上流へと広がったと思われる。ドンデーン村の場合、ローイエット、マハーサラカム県の祖先村を特定できる。それらの祖先村を訪問したが、そのさらに祖先がどこからきたかは漠然としている。一方、ドンデーン村からの移出は、既述の通り1940年代からである。彼らはチー川のさらに上流へ向かった。ドンデーン村からの移出民の居住する開拓村では移入が続行しており、移出はまだない。コンケンの東方のドングボング村でも、村の創始者グループの出身地（マハーサラカム）が明確であり、ドンデーン村とはほぼ同じ時期に移入から移出に転じた [Lefferts 1974]。チー川流域では丁度コンケン周辺の村で、移入がいまだ村人の記憶に明確にある一方、移出が今日的意味を失っていない。

注

- 1) タイ文字のカタカナ表記は、タイ字綴りよりも日常的な発音を重視した。また、長音、撥音は、あまりにも不自然にならない限り省略した。語尾の ng 音は、ンと表記することを原則とするが、ドンデーン村の場合は、繁雑さを避けるためドンデーンとした。外にも、メコン河のように慣用されている場合にもグを省略した。

参考文献

- Donner, Wolf. 1982. *The Five Faces of Thailand: An Economic Geography*. St. Lucia: University of Queensland Press.
- Fukui, H. 1982. Variability of Rice Production in Tropical Asia. In *Drought Resistance in Crops with Emphasis on Rice*. Los Banos: International Rice Research Institute.
- Fukui, H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. 1983. *An Interim Report/ A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand*. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Fukui, H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. 1985. *The Second Interim Report/A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand*. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- 福井捷朗. 1985. 「東北タイ・ドンデーン村：人口動態(1)」『東南アジア研究』23(3).

- 林 行夫. 1985. 「東北タイ・ドンデーン村：開拓村（ウドンタニ県北モー村）訪問記」『東南アジア研究』23(3).
- Ingram, James C. 1971. *Economic Change in Thailand: 1850-1970*. Stanford: Stanford University Press.
- カンブーン・ブンタヴィー. 1976. 『ルーク・イサーン』バンコク：パナキット. (『東北タイの子』星野竜夫（訳）. 東京：井村文化社. 1980.)
- Kawaguchi, K; and Kyuma, K. 1977. *Paddy Soils in Tropical Asia: Their Material Nature and Fertility*. Honolulu: The University Press of Hawaii (Monographs of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University).
- Keyes, Charles F. 1976. In Search of Land: Village Formation in the Central Chi River Valley, Northeastern Thailand. *Contributions to Asian Studies IX*.
- 小林和正. 1984. 『東南アジアの人口』東京：創文社（東南アジア研究叢書 19）.
- 小池聡；須羽新二；野間晴雄. 1985. 「東北タイ・ドンデーン村：生活行動記録（第1報）」『東南アジア研究』23(3).
- Lefferts, Horace Leedom, Jr. 1974. *Baan Dong Phong: Land Tenure and Social Organization in a Northeast Thai Village*. A thesis. Department of Anthropology, University of Colorado.
- 宮崎 猛. 1984. 「東北タイ農村における農地貸借と農業共同経営に関する経済分析」『アジア経済』25(11): 46—60.
- 水野浩一. 1981. 『タイ農村の社会組織』東京：創文社（東南アジア研究叢書16）.
- 野間晴雄. 1982. 「東北タイ農村の食生活と食事文化」『奈良大学紀要』11: 57—91.
- Thailand, Office of Agricultural Economics. 1979. *Agricultural Statistics of Thailand: Crop Year 1978/79*. Bangkok: Ministry of Agriculture and Co-operatives (Agricultural Statistics No. 108).
- Thailand, Bank of. 1984. *Gross Regional and Provincial Product, 1978—1982*. Bangkok.
- 内田晴夫；福井捷朗；小林慎太郎；丸山利輔. 1981. 「タイ国における水稻生産量の変動に関与する自然的要因の分析」『農業土木学会誌』49(5): 389—396.

(福井 捷朗)

東南アジア世界の構造と変容

東南アジア研究叢書 20

昭和 61 年 3 月 25 日印刷発行

編 者 石 井 米 雄

発 行 東 南 ア ジ ア
研 究 叢 書 出 版 会

印 刷 株式会社 創 文 社

〒102 東京都千代田区一番町17番地 3 号